

資 料

日本における化学史文献：日本篇

吉 本 秀 之 (編)

1. 凡 例

基本的には、大野誠「日本における化学史文献：世界篇」『化学史研究』第33巻第4号(2006)：193-253に倣った。すなわち、次のようにした。

(1) 同一項目の文献は、刊行年の古い順に配列した。

(2) 文献の表記方式は、次の通りとした。

本の場合：著者名『著作の題名』出版社(刊行年)。

論文の場合：著者名「論文の題名」『雑誌名』巻・号数(刊行年)：掲載頁。

2. 典 拠

書誌情報の典拠としては、国立情報学研究所のサイト(<http://www.nii.ac.jp/>)によった。

(1) 著作については、国立情報学研究所全国大学図書館検索サービス(<http://webcat.nii.ac.jp/>)によった。

(2) 論文については、国立情報学研究所のCiNii(<http://ci.nii.ac.jp/>)によった。

国立情報学研究所の情報に疑義がある場合には、現物を確認した。

3. 収録範囲

世界の研究文献を考えたとき、日本の化学史に関する日本語の文献は、完全に1次的でありえる。「日本における化学史文献：世界篇」よりも幅広く採録した。

ただし、当初は、学位論文と科研費等による研究成果報告書まで採録することを目論んだが、途中で一部を除き本格的に検索・調査することを断念した。次の機会に期したい。

目 次

A. 全般にわたるもの

日本科学・技術・産業史 叢書, 講座, シリーズ	
日本科学史 通史/全般	212
日本技術史・産業史 通史/全般	214
日本化学史 一般的	218
無機化学	
有機化学	
分析化学	
物理化学	
地球化学	
高分子化学	
コロイド・界面化学	
生化学	
農芸化学	
医学関係	
薬/薬学	
原子論・分子論	
化学親和力	
鉱業・鉱山	231
鉄と製鉄の歴史	
陶磁器/窯業	
酒	240
醬油	
塩	
アルカリ	
硝石	
火薬	
砂糖	
サラシ粉	
セメント	
硫酸	
藍	
ソーダ	
その他化学物質	

B. 時代別

西洋との接触前	249	桜井錠二	
鍊金術/錬丹術		桜田一郎	
『大同類聚方』		鮫島実三郎	
西洋との接触後	251	柴田承桂	
江戸時代		柴田雄次	
蘭学/洋学史		鈴木梅太郎	
ルイス・デ・アルメイダ		高松豊吉	
エイクマン		高峰譲吉	
シーボルト		田丸節郎	
ツェンペリー (Thunberg)		手島精一	
ハラタマ (Gratama)		長井長義	
ボードウィン (Bauduin)		長与専斎	
ホルトルマン		仁田勇	
ポンペ		野口遵	
スロイス (Sluys)		野副鉄男	
宇田川榕菴		福井謙一	
川本幸民		福原有信	
上野彦馬		真島利行	
坪井信道		水島三一郎	
舎密開宗		湯浅年子	
舎密便覧		組織・制度	303
カステレイン		大学・研究機関史	
本草/自然誌/博物学		舎密局	
明治以降	280	理化学研究所	
蕃書調所		科学技術教育	
お雇い外国人		植民地科学	308
グリフィス		京城帝国大学	
コルショルト		台北帝国大学	
ダイヴァース		旅順工科大学	
ワグネル		満鉄	
日本人化学者	284	大陸科学院	
池田菊苗		上海自然科学研究所	
伊藤圭介		戦争と科学	313
岡田家武		公害・環境問題	
小川正孝		社史	322
木村健二郎		文学と科学/芸術	
久原躬弦		夏目漱石	
黒田チカ		宮沢賢治	

A. 全般にわたるもの

日本科学・技術・産業史 叢書，講座，シリーズ

文部省編『文部省百科全書』1-[1]-23-[4]，文部省，1874-1884；青史社，1983-1986，92冊。

（『百工應用化學篇』牧山耕平譯，上下（1873）；『化學篇』小林義直譯，上下（1875）；『鑛物篇』鈴木良輔譯（1876）；『地質學』柴田承桂譯（1876）；『金類及鍊金術』錦織精之進譯（1876）；『陶磁工篇』錦織精之進譯（1877）；『百科全書教導説 上下』箕作麟祥〔訳〕（1879））

『化學工業全書』丸善：南江堂，1895～1928。

（第1冊：沃度，沃度加里及其他沃度製品；臭素及臭素鹽類；硝石及亞硝酸加；黃色血鹵鹽及爾餘ノ藏化合物/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1895）；第2冊：脂肪及脂肪油附蠟類；「ステアリン」酸及他ノ脂肪酸類；西洋蠟燭；偲里設林/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1895）；第3冊：染色法：染色法總論，纖維，精練法，漂白法，媒染劑，色素，浸染法，捺染法，配色法/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1895）；第4冊：石鹼；揮發油類（香油類）；樟腦（附）龍腦，艾片及樟腦油；薄荷油及薄荷腦/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1895）；第5冊：石油：石油ノ歴史，現存，性質，採取，運搬，種別，燈油，輕油，揮発油，器械油，石蠟ノ製造法，試験法及用途/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂。第2版（1900）；第6冊：クロール石炭：抱水クロラール，クロロフォルム：クロール酸カリウム，炭酸カリウム，重炭酸カリウム：苛性カリ：重クローム酸カリウム等/高松豊吉〔ほか〕編纂（1896）；第7冊：仮漆：樹脂油：顔料：塗料/高松豊吉〔ほか〕編纂（1897）；第8冊：燃料及築窯法/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1898）；第9冊：乳業産物：乳ノ性状・成分及検査法，乳ノ缺點及改良法，乳ノ搾取・販賣・運搬，牛酪・乾酪・煉乳（附）・蛋白製營養品/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1901）；第10冊：醱酵總論/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1903）；第11冊：酒精製造法：蒸餾飲料及リキュール酒：葡萄酒製造法/高松豊吉〔ほか〕編纂（1910）；第12冊：清酒醸造新論/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1927）；第13冊：砂糖製造法：澱粉製造法/高松豊吉〔ほか〕編纂（1906）；第14冊：香料總論；天然香料；人工香料；調香術/高松豊吉〔ほか〕編纂（1910）；第15冊：製紙術/高松豊吉〔ほか〕編纂（1912）；第16冊：木材乾留工業/高松豊吉〔ほか〕編纂（1916）；第17冊：石炭瓦斯/高松豊吉〔ほか〕編纂；製造編・供給編・応用編・副生物編（1916）；第18冊：コロイド化學/高松豊吉〔ほか〕編纂（1917）；第19冊：電氣化學/高松豊吉〔ほか〕編纂（1922）；第20-21冊：硫酸製造法/松井元太郎編；上巻，下巻。（1925）；第22冊：有機性藥品製造法/高松豊吉〔ほか〕編纂（1926）；第23冊：麥酒醸造新論/高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂（1928））

日本工學會；啓明會『明治工業史』工学会（1925-31）；復刻：学術文献普及会（1968-69）；原書房（1994）；龍溪書舎（1994）（明治後期産業発達史資料第220-235巻）。

（電氣篇，土木篇，造船篇，火兵・鉄鋼篇，建築篇，鉱業篇，鉄道篇，機械・地学篇，化学工業篇，序篇・索引）

三枝博音編『日本科學古典全書』第1巻-第15巻，朝日新聞社（1942-1949）。

（第1巻：第1部 科學思想篇 科學思想；第6巻：第2部 諸科學篇 理學；第8巻：第2部 諸科學篇 醫學・植物；第9-10巻：第3部 産業技術篇 採鑛冶金1-2；第11巻：第3部 産業技術篇 農業・製造業・漁業；第12巻：第3部 産業技術篇 海上交通；第13巻：第3部 産業技術篇 冶金・農業・製造業；第14-15巻：第2部 諸科學篇 本草上-下）

復刻，朝日新聞社（1978）。

日本学士院明治前日本科学史刊行会編『明治前日本科学史』26冊，日本学術振興会（1954-73）。

『明治前日本数学史』第1巻-第5巻，岩波書店（1954-1960）。

『明治前日本天文学史』日本学術振興会（1960）；新訂復刻版，野間科学医学研究資料館，井上書店（発売），臨川書店（発売）（1979）。

『明治前日本物理化学史』日本学術振興会（1964）。

『明治前日本生物学史』第1巻-第2巻，日本学術振興会（1960）；新訂版，野間科学医学研究資料館，井上書店（発売），臨川書店（発売）（1980）。

『明治前日本人類学・先史学史—アイヌ民族史の研究（黎明期）』日本学術振興会（1971）。

『明治前日本医学史』第1巻-第5巻，日本学術振興会（1955-64）；増訂復刻版，日本古医学資料センター，井上書店（発売）（1978）。

『明治前日本薬物学史』第1巻-第2巻，日本学術振興会（1957-58）；増訂復刻版，日本古医学資料センター，井上書店（発売）（1978）。

『明治前日本土木史』日本学術振興会（1956）。

『明治前日本建築技術史』日本学術振興会（1961）。

『明治前日本機械技術史』日本学術振興会（1961）。

『明治前日本鉱業技術発達史』日本学術振興会（1958）。

『明治前日本農業技術史』日本学術振興会（1964）。

『明治前日本林業技術発達史』日本学術振興会（1959）。

『明治前日本漁業技術史』日本学術振興会（1959）。

『明治前日本蚕業技術史』日本学術振興会（1960）。

『明治前日本造兵史』日本学術振興会（1960）。

『明治前日本応用化学史』日本学術振興会（1963）。

『明治前日本科学史総説・年表』日本学術振興会，丸善（発売）（1968）。

明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料』明治文献資料刊行会（1959-1976？）。

（別冊（68）2-3 鉱山発達史 巻1，巻2；別冊（91）3 鉱・鉱石・鉄及鋼・銅・鉄及鋼製品・機械類ニ関スル調査（鉄道省）大正十五年；石炭・煉瓦・セメントニ関スル調査（鉄道省）大正十五年；別冊（96）1 塩・砂糖・醬油・味噌ニ関スル調査（鉄道省運輸局）大正十五年；別冊（91）2 石炭・骸炭・石油ニ関スル調査；別冊（71）4 石炭調査概要；別冊（70）1-3 筑豊炭鉱誌/高野江基太郎著 巻1，巻2，巻3；別冊（104）2-3 甜菜砂糖製造法/吉田五十穂訳 巻1，巻2；別冊（104）4 甜菜糖業ト朝鮮（拓殖局）明治四十三年；台湾の糖業（台湾総督府殖産局）昭和五年；別冊（102）2-3 灘酒沿革誌/神戸税務監督局編 巻1，巻2；別冊（102）4 灘酒史/菅谷秋水編；別冊（103）2-3 日本酒改良実業問答/徳野嘉七編 巻1，巻2；別冊（69）3-4 日本炭鉱誌 巻1，巻2；別冊（83）4-（87）2 本邦鉱業一斑/農商務省鉱山局編；明治39年（1）-明治44年（3）；別冊（73）4-（81）2 本邦鉱業の趨勢/農商務省鉱山局編；明治39年-大正15年（昭和元年）；別冊（87）3-（90）3 本邦重要鉱山要覧/農商務省礦山局編纂；大正2年（1）-大正14-15年（5）；別冊（74）1 明治四十年本邦鉱業ノ趨勢/農商務省礦山局編；ほか。全部で約830冊）

通商産業省編『商工政策史』第1・2巻-第24巻，商工政策史刊行会（1961-85）。

（第1・2巻：総説；第4巻：重要調査会；第13巻：工業技術；第15・16巻：繊維工業；第17巻：鉄鋼業；第20・21巻：化学工業；第22・23巻：鉱業 ほか）

現代日本産業発達史研究会『現代日本産業発達史』現代日本産業発達史研究会（1963-68）。

(2 石油；3 電力；4 鉄鋼/飯田賢一・大橋周治・黒岩俊郎編；11 繊維；12 紙・パルプ；13 化学工業/渡部徳二編；18 食品)

日本科学史学会編『日本科学技術史大系』編集要綱1冊＋全25巻＋別巻1冊，第一法規出版（1963-1972）。
 (第1巻-第5巻：通史；第6巻：思想；第7巻：国際；第8巻-第10巻：教育；第11巻：自然；第12巻：数理科学；第13巻：物理科学；第14巻：地球宇宙科学；第15巻：生物科学；第16巻：土木技術；第17巻：建築技術；第18巻：機械技術；第19巻：電気技術；第20巻：採鉱冶金技術；第21巻：化学技術；第22-23巻：農学；第24-25巻：医学)

『近世科学思想』上，下，岩波書店（1971-72）（日本思想大系；62-63）。

上巻（古島敏雄，安芸皎一校注）：宮崎安貞『百姓伝記(抄)』『農業全書(抄)』；大蔵永常『綿圃要務』；田村二左衛門吉茂『農業自得(抄)』；中村直三『伊勢錦』；中村直三『ちわら早稲』；中村直三『稲種選法』；中村直三『稲田収量実験表』；前島兵左衛門『前島家農事日記』；『御本丸様書上』；『御普請一件』；『丑春川除御普請御仕様帳』；『未之川除御普請御仕様帳』；『丑之春御普請御仕様帳』；『戌秋追急水留御普請出来形帳』；『川通御普請所御願付留帳』；『龍王村地内御普請仕末書』

下巻（広瀬秀雄，中山茂，大塚敬節校注）：小林謙貞『二儀略説』；渋川春海『天文瓊統 卷之一』；間重富，高橋至時『星学手簡(抄)』；吉益東洞『薬徴』；吉益東洞『医事或問』；後藤良山『師説筆記』

『洋學』上，下，岩波書店（1972-1976）（日本思想大系；64-65）。

上巻（沼田次郎，松村明，佐藤昌介校注）：青木昆陽『和蘭話訳』；青木昆陽『和蘭文訳』；青木昆陽『和蘭文字略考』；前野良沢『和蘭訳文略』；前野良沢『和蘭訳筌』；前野良沢『管蠡秘言』；杉田玄白『和蘭医事問答』；杉田玄白『狂医之言』；杉田玄白『形影夜話』；杉田玄白『野叟独語』；大槻玄沢『蘭学階梯』；大槻玄沢『蘭訳梯航』；大槻玄沢『捕影問答』；司馬江漢『和蘭天説』；司馬江漢『西洋画談』；司馬江漢『和蘭通舶』

下巻（広瀬秀雄，中山茂，小川鼎三校注）：『求力法論』；『理学入式遠西観象図説』；『ラランデ曆書管見(抄)』；『解体新書』；『遁花秘訣』

『江戸科学古典叢書』1-46巻，恒和出版（1976-83）。

『佐州金銀採製全図；先大津阿川村山砂鉄洗取之図；鼓銅図録』

大槻清準『鯨史稿』

多賀谷環中仙（川枝豊信画）『機訓蒙鑑草，3巻』；細川半蔵頼直『機巧図彙，3巻』

大蔵永常『農具便利論』；『たはらかさね耕作絵巻(抄)』

木崎盛標，丹羽桃溪『紙漉大概』；国東治兵衛『紙漉重宝記』；木村青竹『紙譜』

『七十一番職人歌合；職人尽絵；彩画職人部類』

『泰西七金訳説(抄)；鉄煩鑄鑑図；橋野高炉絵巻』

『土木工要録(付録)』

村井昌弘『量地指南』

島田道恒『町見弁疑』；甲斐駒蔵『量地図説』；中田為知『量地幼学指南』

堀口多狹『エレキテル全書』；橋本宗吉『阿蘭陀始制エレキテル究理原』 川本幸民『遠西奇器述』；山本鍊三郎『和蘭奇器』

平野元亮『硝石製煉法』；佐藤信淵『硝石製造弁』；伊藤圭介『硝石篇』

上垣守国『養蚕秘録』

成田重兵衛『蚕飼絹篩大成』

大関増業『機織彙編』；『木棉製作弁』
 小林源蔵『隅矩雛形』；平内延臣『矩術新書』
 後藤梨春『紅毛談』；大槻玄沢『蘭説弁惑』
 『備後国豊表蘭農業之図』；琉球蘭作織法（農家益三篇）；近江国蒲生郡豊表図説』
 『太極地震記』；服部保徳『安政見聞録』；宇田川興斎『地震預防説』；小田東壑『防火策図解』
 『福田理軒西算速知』；柳河春三『洋算用法』
 服部範忠『薬圃図纂』；金太『草木奇品家雅見』
 津軽采女正『河羨録』；法眼明逸『通機図解』；中西敬房『民用晴雨便覧』
 伊藤景治『大匠雛形』；数寄屋工法集』
 宇田川榕菴『植学啓原』；韋廉臣輯訳；李善蘭筆述『植物学』
 『水銀系薬物製法書九篇』
 橋本宗吉『三法方典』
 広川獬『蘭療方』；蘭療薬解』
 小原良貴（小原良直編）『桃洞遺筆』
 『内服同功』；済生備考』
 小石元瑞『究理堂備用方府』；柘植君績『究理堂備用製薬帳秘』
 『森島中良紅毛雑話』；大槻磐水『蘭畹摘芳』
 大槻玄沢『六物新志・稿』；木村遜斎『一角纂考・稿』
 井口常範『天文図解』
 『斯魯斯動物学』；『田中芳男動物学』
 鈴木重春『大匠手鑑』；西村権右衛門『秘伝書図解』；『大工規矩尺集』
 『石巻鑄銭場作業工程絵図』；佐野英山編『鑄貨図録』
 福田理軒『測量集成』
 山路彰常，中西邦孚編『遠鏡図説』；広瀬周伯『三才窺管』；『写真鏡図説』
 『職人尽絵詞』；『人倫重宝記』
 井上新七選『蒔絵為井童草』；春川甫政『蒔絵大全』
 栗本丹州『千蟲譜』
 『大小御鉄炮張立製作』；石火矢鑄方伝；気砲記；粉砲考；秘牀図』
 棟居保春『中島流砲術管闡録』
 『博物学短篇集』上
 『博物学短篇集』下
 ヘルダム『軍艦図解』；水蒸船説略』

『技術の社会史』有斐閣（1982-90）.

（第1巻古代・中世の技術と社会；第2巻在来技術の発展と近世社会；第3巻西欧技術の移入と明治社会；第4巻重工業化の展開と矛盾；第5巻工業社会への変貌と技術；第6巻技術革新と現代社会；別巻データ・ガイドブック）

『講座・日本技術の社会史』日本評論社（1983-1986）.

（第1巻 農業・農産加工/永原慶二ほか；第2巻 塩業・漁業/網野善彦ほか；第3巻 紡織/永原慶二ほか；第4巻 窯業/田辺昭三ほか；第5巻 採鉱と冶金/山口啓二ほか；第6巻 土木/山口啓二ほか；第7巻

建築/玉井哲雄ほか；第8巻 交通・運輸/吉田孝ほか）

『産業の昭和社會史』日本經濟評論社（1986-93）。

（1 医薬品/長谷川古；2 商社/島田克美；3 石油/岡部彰；4 家電/青山芳之；5 住宅/本間義人；6 農協/石見尚；7 デパート・スーパー/小山周三，外川洋子；8 鉄道/原田勝正；9 銀行/後藤新一；10 証券/小林和子；11 自動車/大島卓，山岡茂樹；12 土木/玉城素編）

『日本の技術 100 年：ビジュアル版』筑摩書房（1987-89）。

（1 資源/山口梅太郎編。エネルギー/関根泰次，都甲泰正編；2 製鉄/飯田賢一編。金属/後藤佐吉編；3 造船/佐久間武編。鉄道/小野純朗編；4 航空機/中口博編。自動車/井口雅一編。；5 通信/白根禮吉編。放送/和久井孝太郎編；6 建築/村松貞次郎編。土木/高橋裕編；7 機械エレクトロニクス/石井威望，中山秀太郎編）

日本産業技術史学会監修『日本の技術』第一法規出版（1988-94）。

（1 産業技術を描く/吉田光邦；2 鉄の 100 年八幡製鉄所/飯田賢一；3 日本酒/柚木学；4 漢方薬/赤堀昭；5 ロータリーエンジン/山岡茂樹；6 家飾具の歴史/宮内愼；7 木工具の歴史/日野永一；8 大阪砲兵工廠/三宅宏司；9 日本の産業技術映画/吉原順平；10 ビールの 100 年/遠藤一夫；11 オートバイの王国/出水力；12 水車：先人の技術遺産/末尾至行）

龍溪書舎『明治後期産業発達史資料』復刻版，龍溪書舎（1988-）。

（第 1 期：第 1-42 巻 銀行・財務篇（1）；第 2 期：第 43-52 巻 府県産業篇（1），第 53-61 巻 鉱工業一班篇（1），第 62-79 巻 拓殖産業篇（1），第 80-87 巻 外国事情篇（1）；第 3 期：第 88-105 巻 農林水産一班篇（1），第 106-117 巻 府県産業篇（2），第 118-127 巻 拓殖産業篇（2）；第 4 期：第 140-159 巻（銀行・財務改め）財政・金融篇（2），第 160-171 巻 農林水産一班篇（2），第 172-180 巻 鉱工業一班篇（2），第 181-191 巻 府県産業篇（3）；第 5 期：第 192-200 巻 経済・社会一班篇（1），第 201-209 巻 農林水産一班篇（3），第 210-219 巻 府県産業篇（4），第 220-236 巻 鉱工業一班篇（3），第 237-249 巻 外国事情篇（含植民地資料）（3）；第 6 期：第 250-259 巻 経済・社会一班篇（2），第 260-267 巻 財政・金融篇（3），第 268-280 巻 農林水産一班篇（4），第 281-290 巻 府県産業篇（5），第 291-309 巻 外国事情篇（含植民地資料）（4）；第 7 期：第 310-322 巻 財政・金融論（4），第 323-396 巻 農林水産一班篇（5）；第 8 期：第 397-406 巻 鉱工業一班篇（5），第 407-421 巻 外国事情篇（含植民地資料）（5）；第 9 期：第 422-435 巻 財政・金融編（5），第 436-445 巻 農林水産一班篇（7），第 446-461 巻 鉱工業一班篇（6），第 462-480 巻 府県産業篇（8），第 481-490 巻 外国事情篇（含旧植民地資料）（9）；第 10 期：第 491-503 巻 農林水産一班篇（8），第 504-520 巻 鉱工業一班篇（7），第 521-538 巻 外国事情篇（含旧植民地資料）（7），第 539-562 巻 経済・社会一班篇（4）；第 11 期：第 563-573 巻 財政・金融編（6），第 574-589 巻 鉱工業一班篇（8），第 590-610 巻 外国事情篇（含旧植民地資料）（8）；第 13 期：第 611-625 巻 経済・社会一班篇（5），第 685-694 巻 農林水産一班篇（9），第 710-729 巻 外国事情篇（含旧植民地資料）（10），第 730-750 巻 経済・社会一班篇（7））

『叢書 近代日本の技術と社会』平凡社（1990-）。

（1 稲作の技術と理論/岡光夫ほか責任編集；2 たたらから近代製鉄へ/岡田廣吉責任編集；4 川を制した近代技術/大熊孝責任編集）

中山茂；後藤邦夫；吉岡齊責任編集『通史・日本の科学技術』全 5 巻，学陽書房（1995-1999）。

（第 1 巻：占領期 1945-1952；第 2 巻：自立期 1952-1959；第 3 巻：高度成長期 1960-1969；第 4 巻：転形期 1970-1979；別巻：総索引 年表。第 5 巻 1. 2：国際期 1980-1995；“別巻：[増補]”：“総索引”の

対象に5巻を追加,「年表」に1980以降を増補)

日本科学史 通史/全般

- 明治史講座刊行会, 中瀬古六郎ほか著『明治科学史』日本文學社, 大阪寶文館(發賣)(1931).
 寺島樞史『日本科學發達史』啓文社(1937).
 富成喜馬平『日本科學史要』弘文堂書房(1939).
 伊藤至郎『日本科學史』伊藤書店(1941).
 内山孝一著; 興亞教學研究會編『日本科學史への反省: 日本醫學の樹立』目黒書店(1941).
 田制佐重『日本科學史夜話』日新書院(1941).
 田制佐重『日本科學史物語』啓文社(1942).
 富成喜馬平『日本科學史要』4版, 弘文堂書房(1942).
 『日本科學史』雄山閣(1942)(新講大日本史; 第19卷).
 寺島樞史『日本科学史年表—世界対照』霞ヶ関書房(1942).
 小泉丹『日本科學史私攷』岩波書店(1943).
 山本成之助『日本科學史』肇書房(1944).
 瑞穂出版株式会社編輯部編『明治初期科学史』瑞穂出版(1947).
 吉岡修一郎, 井上忠『日本科學史夜話』大八洲出版(1948).
 湯浅光朝『解説科学文化史年表』中央公論社(1950; 増補版1960).
 吉田光邦『日本科學史』朝倉書店(1955).
 根本曾代子『明治維新期の日本薬界展望』南山堂(1958).
 黒岩俊郎「本多光太郎と金属学の発達」『中央公論』80(7)(1965.06).
 松原宏遠『科学・明治百年史: エピソードでつづる三代の科学史』講談社ブルーバックス(1966).
 杉本勲編『科学史(体系日本史叢書19)』山川出版社(1967).
 Teruko Moroga, “Chemical Studies on Ancient Japanese Glass Beads: from the Izumi Kyo-zuka (Sutra Mound), Osaka; the Kyo-zuka Old Tomb, Osaka; and the Momotani Old Tomb, Kyoto, and Ancient Chinese Glass Disk (Pi); and Glass Bead,” *Japanese Studies in the History of Science*, 7 (1968): 83-91.
 向坊隆; 岸田純之助編『講座日本の将来7 科学技術と社会』潮出版社(1969).
 山下愛子編『近代日本女性史 科学』鹿島研究所出版(1970).
 藤井清久「明治初期における西洋科学思想の移入: 杉浦重剛の場合」『科学史研究』96巻(1970): 198-206.
 武田楠雄『維新と科学』岩波新書(1972).
 広重徹『科学の社会史: 近代日本の科学体制』中央公論社(1973).
 塚原徳道「元素周期表をめぐる一植田式周期表を中心に」『化学』31(5)(1976.05): 341-349.
 黒岩俊郎(日本歴史学会編)『本多光太郎』吉川弘文館(1977).
 Minoru Tanaka, “The Reception of Soddy’s Idea of Isotope and the Development of Radioactivity Studies in Japan,” *Japanese Studies in the History of Science*, 16 (1977): 119-123.
 寺畑喜朔「金沢における幕末から明治初期の科学書について—とくに化学書を中心にして—」『化学史研究』第11号(1979): 18-21.

- 道家達将『日本の科学の夜明け』岩波書店（1979）.
- 奥野久輝『江戸の化学』玉川大学出版部（1980）.
- 中山茂『科学と社会の現代史』岩波現代叢書 NS（1981）.
- 渡部英雄「化学者ロスコーと日本とのかかわり」『英学史研究』14号（1981）：131-142.
- 川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ学術受容の一断面：内田五観と高野長英・佐久間象山』東海大学出版会（1982）.
- 水渡英二「堀場信吉の業績と経歴」『化学史研究』第22号（1983）：19-32.
- 橋本哲太郎・加藤秋男・山岡正和「油脂化学者辻本満丸先生一人となりと研究業績一」『化学史研究』第25号（1983）：140-153.
- 大沢眞澄「イギリス留学時代の市川盛三郎、杉浦重剛の事績」『化学史研究』通巻24号（1983）：vi.
- 稲田信次「羅斯珂氏化学」『科学史研究』23巻（1984）：129-139.
- 立入明「島津製作所創業記念資料館—我国の理化学器械製作事始—」『化学史研究』第33号（1985）：193-200.
- 畑晋「飯盛里安先生の業績とその解説」『化学史研究』第34号（1986）：21-31.
- 永山升三「脂肪酸工業創成期のオートクレーブ」『化学史研究』第34号（1986）：43-45.
- 阿部芳郎「日本の油しめ具とろうしめ具」『化学史研究』第35号（1986）：82-87.
- 吉田光邦『日本科学史』講談社学術文庫（1987）.
- 『近代日本学術用語集成』第1期全7巻（第5巻 化学・植物・鉱物学関係），龍溪書舎（1988）.
- 伊東俊太郎，村上陽一郎共編『日本科学史の射程』培風館（1989）.
- 杉本勲編『近代西洋文明との出会い：黎明期の西南雄藩』思文閣出版（1989）.
- Morris F. Low and Hitoshi Yoshioka, "Buying the 'Peaceful Atom': The Development of Nuclear Power in Japan," *Historia Scientiarum*, **38** (1989) : 29-44.
- 『近代日本学術用語集成』第2期 大正篇 全12巻（第8巻 上：化学語彙（増訂第3版）），復刻版，溪書舎（1990）.
- 紫藤貞昭；矢部一郎編著『近代日本その科学と技術：原典への招待』弘学出版（1990）.
- 板倉聖宣；中村邦光；板倉玲子『日本における科学研究の萌芽と挫折：近世日本科学史の謎解き』仮説社（1990）.
- 廣田鋼蔵・大岩正芳「積極と消極—蘭学書に語源を尋ねて—」『化学史研究』第18巻（1991）：193-196.
- 藤野明『銅の文化史』新潮社（1991）.
- 杉山滋郎『日本の近代科学史』朝倉書店（1994）.
- 鈴木裕子監修，財団法人東京女性財団『先駆者たちの肖像—明日を拓いた女性たち』ドメス出版（1994）.
- 廣田鋼蔵「理学界から工学界にわたる私の触媒研究遍歴」『化学史研究』第21巻（1994）：278-296.
- 八耳俊文「清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録」『化学史研究』第22巻（1995）：312-358.
- 笹本征男『米軍占領下の原爆調査：原爆加害国になった日本』新幹社（1995）.
- Tessa Morris-Suzuki, "The Great Translation: Traditional and Modern Science in Japan's Industrialisation," *Historia Scientiarum*, **5** (1995) : 103-16.
- 都河明子・嘉ノ海咲子『拓く—日本の女性科学者の軌跡』ドメス出版（1996）.
- 大庭脩『漢籍輸入の文化史』研文出版（1997）.

- 吉岡斉『原子力の社会史 その日本的展開』朝日選書 (1999)。
阪上正信「山田延男博士のパーリーでの研究とその科学史的意味」『化学史研究』第 26 卷 (1999) : 152-157。
山田光男「航空研究所と山田延男」『化学史研究』第 26 卷 (1999) : 158-167。
復刻・『舍密』誌研究会『科学と青春の軌跡：焦土に息吹いた三校生の化学クラブ』せせらぎ出版 (1999)。
岩崎允胤「西周と近代的諸学の体系的摂取」『東アジア研究』通号 28 (2000.05) : 77-96。
デイヴィッド・ブラウNSTOON；アイリーン・フランク；猪口孝；市川良一『ジャンル別 20 世紀グローバル年表—〈政治・軍事〉〈科学・技術・医学〉〈社会・経済〉〈芸術・文化〉』東洋書林 (2000)。
中山茂解説；笹本征男訳『日本の科学技術の再編』(GHQ 日本占領史/竹前栄治，中村隆英監修) 日本図書センター (2000)。
佐々木幹郎『すみとも風土記：銅が来た道』NTT 出版 (2001)。
金子務『ジパング江戸科学史散歩』河出書房新社 (2002)。
ボーエン・C・ディーズ (笹本征男訳)『占領軍の科学技術基礎づくり：占領下日本 1945-1952 : the allied occupation and Japan's economic miracle』河出書房新社 (2003)。
日吉芳朗「輪島塗とその伝統技術の科学性」『化学史研究』第 30 卷 (2003) : 125-7。
本康宏史「大野弁吉の写真術と加賀の理化学」『化学史研究』第 30 卷 (2003) : 128-30。
関崎正夫・米田昭二郎「清水誠とマッチ」『化学史研究』第 30 卷 (2003) : 131-4。

日本技術史・産業史 通史/全般

- 『科学及工業最近之進歩』工政会 (1924)。
日本工學會；啓明會『明治工業史』工学会 (1925-31)；復刻：学術文献普及会 (1968-69)；原書房 (1994)；龍溪書舎 (1994) (明治後期産業発達史資料第 220-235 卷)。
(電気篇，土木篇，造船篇，火兵・鉄鋼篇，建築篇，鉱業篇，鉄道篇，機械・地学篇，化学工業篇，序篇・索引)
庄司務『日本曹達工業史』曹達晒粉同業会 (1931)；改訂増補版，曹達晒粉同業会 (1938)。
神長倉眞民『明治産業發生史』ダイヤモンド社 (1936)。
宇野米吉編輯『ナイロン』紡織雑誌社 (1939)。
宇野米吉編輯『大陸と繊維工業：創業三十周年記念出版』紡織雑誌社 (1939)。
小野晃嗣『日本産業發達史の研究』至文堂 (1941)。
東条恒雄『日本技術史話』興亜書房 (1942)。
大久保恒次『日本科学技術史話』ダイヤモンド社 (1943)。
多賀義憲『技術史話雜稿』北光書房 (1943)。
中村幸八『発明五十年史』東京出版 (1944)。
藤田豊『日本科学技術史』明玄書房 (1956)。
『樟脳専売史』[正]，続，日本専売公社 (1956)。
日本繊維協議会編『日本繊維産業史』総論編，各論編，繊維年鑑刊行会 (1958)。
日本二硫化炭素工業史編纂委員会編『日本二硫化炭素工業史』日本硫炭協会 (1958)。
日本長期信用銀行調査部編『カーバイド工業』日本長期信用銀行調査部 (1960)。
『日本の曹達工業 (庄司務著)；日本曹達工業の構造変動と発展の諸条件 (寺田英樹著)』実業報知新聞社出版部 (1962)。

- 朝日新聞社編『日本科学技術史』朝日新聞社（1962）。
- 杉本勲『近世実学史の研究：江戸時代中期における科学・技術学の生成』吉川弘文館（1962）。
- 現代日本産業発達史研究会『現代日本産業発達史』現代日本産業発達史研究会（1963-68）。
- （2 石油；3 電力；4 鉄鋼/飯田賢一・大橋周治・黒岩俊郎編；11 繊維；12 紙・パルプ；13 化学工業/渡部徳二編；18 食品）
- 塩化ビニール協会編『塩化ビニール工業の歩み：塩化ビニール協会 10 周年記念』塩化ビニール協会（1964）。
- 岩崎彌太郎・岩崎彌之助傳記編纂會編『岩崎彌太郎傳』上，下，岩崎彌太郎・岩崎彌之助傳記編纂會（1967）。
- 近藤完一『日本化学工業論』勁草書房（1968）。
- 杉本つとむ（解説）『物類品騭（生活の古典双書 2）』八坂書房（1972）。
- 加藤弁三郎編『日本のアルコールの歴史：その事業と技術』協和醸酵工業（1974）。
- 大矢真一『日本科学史散歩：江戸期の科学者たち』中央公論社（1974）。
- 黒岩俊郎『日本技術論：資源開発利用の技術史的分析』東洋経済新報社（1976）。
- 吉田光邦『日本技術史研究』日本放送出版協会（1977）。
- 吉田光邦『[図説] 技術と日本近代化』日本放送出版協会（1977）。
- 伊東俊太郎ほか編『日本人の技術（講座 比較文化 第 5 卷）』研究社（1977）。
- 科学技術と経済の会編『日本の技術 10 年前・10 年後：科学技術と経済の会創立 10 周年記念論文集』日本ビジネスレポート（1977）。
- 吉田光邦『図説 技術と日本近代化』日本放送出版協会（1977）。
- 吉田光邦『両洋の眼一幕末明治の文化接触一』朝日選書（1978）。
- 酢酸工業会編『日本酢酸業界史』酢酸工業会（1978）。
- 斎藤良輔『昭和玩具文化史』住宅新報社（1978）。
- 飯島孝『日本の化学技術：企業史にみるその構造』工業調査会（1981）。
- 村上陽一郎編『技術思想の変遷』朝倉書店（1981）。
- 杉本勲『近世日本の学術：実学の展開を中心に』法政大学出版局（1982）。
- 黒岩俊郎「日本技術者の系譜（1800 年～1930 年）」『専修経営学論集』通号 38（1984.09）：107-134。
- 黒岩俊郎「日本技術者の系譜-2-（1931 年～現在）」『専修経営学論集』通号 41（1986.02）：229-260。
- 中岡哲郎；石井正；内田星美『近代日本の技術と技術政策』東京大学出版会（1986）。
- 『産業の昭和社會史』日本経済評論社（1986-93）。
- （1 医薬品/長谷川古；2 商社/島田克美；3 石油/岡部彰；4 家電/青山芳之；5 住宅/本間義人；6 農協/石見尚；7 デパート・スーパー/小山周三，外川洋子；8 鉄道/原田勝正；9 銀行/後藤新一；10 証券/小林和子；11 自動車/大島卓，山岡茂樹；12 土木/玉城素編）
- 中山茂編著『日本の技術力一戦後史と展望』朝日新聞社（1986）。
- 久保在久編『大阪砲兵工廠資料集』日本経済評論社（1987）。
- 黒岩俊郎「産業と技術の記録ー比較産業考古学の提唱ー日本の技術移植の特徴と教訓」『金属』57(11)（1987.11）：40-46。
- 黒岩俊郎『現代技術史論』東洋経済新報社（1987）。
- 吉田光邦『工芸の社會史』NHK ブックス（1987）。

- 坂本賢三『先端技術のゆくえ』岩波書店 (1987).
- 吉田光邦『技術史・技術論』放送大学教材 (1989).
- 吉田光邦『日本と中国—技術と近代化』三省堂選書 (1989).
- 大塩武『日室コンツェルンの研究』日本経済評論社 (1989).
- 鎌谷親善『日本近代化学工業の成立』朝倉書店 (1989).
- 飯島孝「わが国のアセチレン法アセトアルデヒド製造技術の発展 (その1・2・3)」『化学史研究』第17巻 (1990): 61-79, 114-125, 151-172.
- 宇田川武久『鉄炮伝来』中公新書 (1990).
- 「海軍火薬廠前史」刊行会編『海軍火薬廠前史: 日本火薬製造株式会社』「海軍火薬廠前史」刊行会 (1990).
- 『叢書 近代日本の技術と社会』平凡社 (1990-).
- (1 稲作の技術と理論/岡光夫ほか責任編集; 2 たたらから近代製鉄へ/岡田廣吉責任編集; 4 川を制した近代技術/大熊孝責任編集)
- 寺田裕「高圧法ポリエチレン—その発見と開発の歴史—」『化学史研究』第18巻 (1991): 221-231.
- 黒岩俊郎「理工系大学での技術史・技術論 (技術史を学ぶ〈教育特集〉)」『金属』61(8) (1991): 24-29.
- 鎌谷親善「明治期日本における化学工業—人造肥料製造業— (その1)・(その2)・(その3)」『化学史研究』第18巻 (1991): 115-136; 第19巻 (1992): 14-35, 73-104.
- 木岡護・広瀬敬治・柏典夫「チーグラ触媒によるポリエチレンの製造法」『化学史研究』第19巻 (1992): 40-49.
- 佐伯康治「合成ゴムの技術とその工業」『化学史研究』第19巻 (1992): 267-281.
- 山崎豊彦「石油天然ガス回収技術研究を顧みて」『化学史研究』第19巻 (1992): 142-143.
- 石川新一郎「新津油田の発見とその盛衰」『化学史研究』第19巻 (1992): 150-151.
- 黒岩俊郎「時代を創った先端技術: 古代から現代まで (〈特集〉技術史と技術哲学)」『日本機械学会誌』95(881) (1992): 248-249.
- 蓄電池工業会年史編纂委員会編纂『蓄電池 50 年のあゆみ: 20 周年記念誌』日本蓄電池工業会 (1992).
- 上出健二『繊維産業発達史概論』日本繊維機械学会 (1993).
- 竹岡敬温・高橋秀行・中岡哲郎編『新技術の導入近代機械工業の発展』同文館出版 (1993).
- 城島俊夫「尿素肥料の開発の歴史」『化学史研究』第20巻 (1993): 161-200.
- 山本為親「放電による天然ガスよりアセチレンの製造とイソオクタンの合成の工業化」『化学史研究』第20巻 (1993): 122-128.
- 黒岩俊郎編『技術の文化史』アグネ (1993).
- 中山茂・吉岡斉『戦後科学技術の社会史』朝日選書 (1994).
- 田中直「石油脱硫技術の歴史をめぐって」『化学史研究』第21巻 (1994): 60-69.
- 太田静行「うま味調味料の歴史」『化学史研究』第21巻 (1994): 186-202.
- 佐藤正弥「ポリ塩化ビニリデンフィルムの社会史」『化学史研究』第21巻 (1994): 234-249.
- 江崎正直・大谷真夫「メタノール合成技術」『化学史研究』第21巻 (1994): 250-277.
- 佐伯康治「企業における研究開発—ポリマー企業を中心に—」『化学史研究』第21巻 (1994): 333-344.
- 『製油録・甘蔗大成・製葛録・唐方渡俣物諸色大略絵図 (日本農書全集 第50巻)』農山漁村文化協会 (1994).

- 中山茂『科学技術の戦後史』岩波新書（1995）。
- 江崎正直「アンモニア合成技術（I）（II）（III）」『化学史研究』第22巻（1995）：15-49；197-225；第23巻（1996）：15-53。
- 上仲博「1-アミノアントラキノン製造法の変遷—日本における無公害型製造法の開発—」『化学史研究』第22巻（1995）：288-299。
- 松本三和夫『船の科学技術革命と産業社会—イギリスと日本の比較社会学—』同文館（1995）。
- 武田晴人編『日本産業発展のダイナミズム』東京大学出版会（1995）。
- 佐藤正弥「国産技術によるポリ塩化ビニリデン樹脂の製造・加工の企業化」『化学史研究』第23巻（1996）：235-250。
- 鈴木淳『明治の機械工業—その生成と展開』ミネルヴァ書房（1996）。
- 飯島孝『技術の黙示録：翼をたため、向きを変えるのだ』技術と人間（1996）。
- 大蔵永常；佐藤信淵（佐藤常雄，徳永光俊，江藤彰彦編）『農稼肥培論；培養秘録』農山漁村文化協会（1996）。
- 佐藤公彦「旭硝子イオン交換膜法食塩電解技術の開発」『化学史研究』第24巻（1997）：148-156。
- 砂川茂「ヨウ素生産の歴史」『化学史研究』第24巻（1997）：281-294。
- 佐藤正弥「塩化ビニリデン技術の二つの系譜」『化学史研究』第24巻（1997）：33-41。
- 麻島昭一・大塩武『昭和電工成立史の研究』日本経済評論社（1997）。
- 山口康助『技術史のなかの日本人』近代文芸社（1997）。
- 化学工学会編『日本の化学産業技術：単位操作からみたその歩みと発展』工業調査会（1997）。
- 大庭成一「日本の写真工業の発展史—感光材料—I；II；III；IV」『化学史研究』第25巻（1998）：1-19；第26巻（1999）：2-9；142-151；第27巻（2000）：65-73。
- 上仲博「住友化学グループにおけるm,p-クレゾールの工業的製造法の開発」『化学史研究』第25巻（1998）：126-138。
- 安部田貞治「日本における新染料開発の歴史」『化学史研究』第25巻（1998）：139-145。
- 馬淵浩一『日本の近代技術はこうして生まれた：産業遺産をヒントに考える』玉川大学出版部（1999）。
- 勢九二五『樟脳と軍艦：岩崎弥太郎伝』鳥影社（2000）。
- 山中信夫「日本における磷酸製造プロセスの変遷」『化学史研究』第27巻（2000）：156-168。
- 簗崎由記「ヨウ素利用の歴史—ヨウ素系殺菌・消毒剤の歴史—」『化学史研究』第27巻（2000）：197-209。
- 岩倉義男「わが研究回想 ポリウレタン系合成繊維ポルランを創る」『化学史研究』第27巻（2000）：42-46（42-46）。
- 上仲博「m,p-クレゾール物語」『化学史研究』第28巻（2001）：215-225。
- 江崎正直「アンモニア合成と工業触媒」『化学史研究』第28巻（2001）：226-237。
- 森田桂「会社の中の開拓研究者—大型新薬はM&Aより強し—」『化学史研究』第28巻（2001）：238-247。
- 鈴木恒夫「戦前の福岡県における化学工業の歴史」『化学史研究』第29巻（2002）：116-118。
- 石井正則「団琢磨と大牟田重化学工業」『化学史研究』第29巻（2002）：119-121。
- 中岡哲郎編『戦後日本の技術形成：模倣か創造か』日本経済評論社（2002）。
- 鈴木恒夫「戦前の福岡県における化学工業の歴史」『化学史研究』第30巻（2003）：218-230。
- 国立科学博物館『江戸大博覧会 モノづくり日本』国立科学博物館展示図録（2003）。
- 産業技術の歩みと未来を考える交流会議『産業技術の歩みと未来を考える交流会議 1993-2003』産業技術の

歩みと未来を考える交流会議 (2003)。

Toru Matsuhashi and Shigeo Sugiyama, “The Technological Development of the Japanese Plastic Industry Shortly after WW II and the Introduction of Western High Technology,” *Historia Scientiarum*, **12** (2003) : 219-232.

上仲博・江崎正直「インジゴ合成技術の歴史」『化学史研究』第 31 卷 (2004) : 195-214.

黒岩俊郎「私と科学史技術史と専修大学などー私と体験・戦後史」『専修大学社会科学研究所月報』**488** (2004.2) : 1-39.

宮本真樹「日本の塩化ビニル樹脂工業の歴史 (1)」『化学史研究』第 31 卷 (2004) : 279-296.

宮本真樹「日本の塩化ビニル工業と技術の歴史 (2)」『化学史研究』第 32 卷 (2005) : 20-31.

宮本真樹「日本における水銀法電解ソーダ工業技術の歴史 (1) (2)」『化学史研究』第 32 卷 (2005) : 235-245 ; 第 33 卷 (2006) : 15-27.

青木隆夫 ; 吉田勲 ; 石川孝織 ; 三輪宗弘 ; 井上雅弘 ; 山田大隆「シンポジウム : 世界から見た日本の炭鉱技術 : 炭鉱保存と技術の継承」『科学史研究』第 45 卷 (2006) : 42-56.

菅原国香 ; 石田純郎 ; 佐藤賢一 ; 中村邦光 ; 瀬戸口明久 ; 安孫子誠也「シンポジウム : 西洋近代科学諸概念・説の受容に際しての日本人の対応・理解度をめぐって」『科学史研究』第 45 卷 (2006) : 173-188.

薩摩のものづくり研究会編『近代日本黎明期における薩摩藩集成館事業の諸技術とその位置付けに関する総合的研究』薩摩のものづくり研究会 (2006)。

宮本真樹「メタノール製造技術の歴史ー海軍法の系譜を中心に」『化学史研究』第 34 卷 (2007) : 19-39.

姫宮利融「西周『百学連環』における「技術」と司馬遷『史記』「貨殖列伝」における「技術」」『稚内北星学園大学紀要』**6** (2006.3) : 1-19.

日本産業技術史学会編『日本産業技術史事典』思文閣出版 (2007)。

日本化学史 一般的

辻新次「吾邦化学の起源」『東京化学会誌』3 卷 (1882) : 64-74.

藤井郷三『化学沿革史』高岡書店 (1905)。

西田博太郎監修 (武藤頼母編纂)『大日本之化学工業』化学工藝社編集部 (1924)。

眞島利行編『日本化学總覧』[第 1 集 第 1 卷] 再版, 日本化学研究會 (1932)。

眞島利行編輯主幹『日本化学總覧』第 1 集 第 1 卷ー總索引 (1877-1940), 日本化学研究會, 技報堂 (1949-)。

山本三郎『日本近代技術史』三笠書房 (1940)。

松原行一 (久保田勉之助編)『イ子子雑纂』河出書房 (1941)。

永海佐一郎『化学の發達史及び私の體驗』内田老鶴圃 (1941)。

柴村羊五『日本化学工業史』栗田書店 (1943)。

武谷琢美『日本化学の黎明』増進堂 (1944)。

大館則貞『一化学者の歩み : 理博永海佐一郎伝』竜行社 (1949)。

第 3 高等学校文化化学部化学班『舍密』No. 1-No. 4 (1949)。

山崎一雄, 江上不二夫編『戦後化学の展望』朝倉書店 (1950)。

中村忠一『日本化学工業史』東洋経済新報社 (1959)。

柴村羊五『日本化学技術史』日刊工業新聞社 (1959)。

Minoru Tanaka, “Hundert Jahre der Chemie in Japan, Studien über den Prozess der Verpflanzung und

- Selbständigkeit der Naturwissenschaften als wesentlicher Teil des Werdegangs modernen Japans (Mitteilung I),” *Japanese Studies in the History of Science*, **3** (1964) : 89-107.
- Yojiro Tsuzuki and Aiko Yamashita, “On the studies of History of Chemistry in Japan,” *Japanese Studies in the History of Science*, **4** (1965) : 41-59.
- Minoru Tanaka, “Hundert Jahre der Chemie in Japan (Mitteilung II) : Die Art und Weise der Selbständigkeit chemischer Forschungen während der Periode 1901-1930,” *Japanese Studies in the History of Science*, **4** (1965) : 162-172.
- Minoru Tanaka, “Einige Probleme der Vorgeschichte der chemie in Japan. Einführung und Aufnahme der modernen Begriffe,” *Japanese Studies in the History of Science*, **6** (1967) : 96-114.
- Minoru Tanaka, “A Note on the Development of Chemistry in Japan,” *Japanese Studies in the History of Science*, **7** (1968) : 61-70.
- Bun-ichi Tamamushi, “Teaching the History of Chemistry in Japan,” *Japanese Studies in the History of Science*, **8** (1969) : 9-16.
- 本田一二『ものがたり化学技術史』科学情報社（1970）.
- 奥村正二『火縄銃から黒船まで一江戸時代技術史一』岩波新書（1970）.
- 芝哲夫「日本の化学を始めた人びと」『月刊教育』第9号（1971）：4.
- 道家達将「日本の化学者の伝統」, 井本稔・大沼正則・道家達将・中川直哉編『化学のすすめ』筑摩書房（1971）：349-477.
- 都築洋次郎『ある化学者の足跡』（非売品）（1973）.
- 都築洋次郎『続 ある化学者の足跡』（非売品）（1973）.
- 渡辺徳二編『戦後日本化学工業史』化学工業日報社（1973）.
- Masanori Onuma and Tatsumasa Doke, “Recent Studies in Japan on the History of Chemistry,” *Japanese Studies in the History of Science*, **12** (1973) : 5-14.
- 芝哲夫「化学語源考」『近畿化学工業界』**2**（1974）：4.
- 菅原国香「明治初期の化学」『化学教育』第22巻第4号（1974）：247-254.
- 渡辺徳二, 林雄二郎編著『日本の化学工業』第4版, 岩波書店（1974）.
- 黒川計『日本における明治以降の土壤肥料考』上巻-補稿, 「日本における明治以降の土壤肥料考」刊行会（1975）.
- Keniti Higasi, “Recent Activities of the Chemical Society of Japan and the Publication of a Source Book in Chemistry,” *Japanese Studies in the History of Science*, **14** (1975) : 1-10.
- 日本化学会編『日本の化学百年史：化学と化学工業の歩み』東京化学同人（1978）.
- 井本稔『日本の化学：100年のあゆみ』化学同人（1978）.
- 小寺熊三郎「我国における分子線による研究の発展」『化学史研究』第7号（1978）：1-8.
- 久保田尚志「小竹無二雄先生の業績リストと経歴」『化学史研究』第7号（1978）：34-45.
- 塚原徳道『明治化学の開拓者』三省堂選書（1978）.
- 塩川久男「明治前半における上水水質分析について」『化学史研究』7号（1978）：20-26.
- 菅原国香「展望：近代日本化学史」『科学史研究』通号129（1979.3）：1-10.
- 植村琢「Urbain と Perrin—フランス留学の思い出—」『化学史研究』第10号（1979）：1-4.
- 坂口正男「明治前日本化学史」『科学史研究』通号130（1979.07）：105-121.

- 下谷政弘『日本化学工業史論：戦前化学企業の多角的展開についての研究』御茶の水書房（1982）。
- 永海佐一郎『永海佐一郎自伝。一 化学の研究に関して、永海佐一郎自伝。二 教育事業に関して 97-98』明治書院（1982）。
- 西川先生記念会編『西川正治先生 人と業績』（非売品）講談社出版サービスセンター（1982）。
- 立花太郎『化学を創ってゆく道すじ』化学同人（1983）。
- 山崎一雄「考古化学」『化学の領域』**37**(9)（1983）：649。
- 菅原国香「三崎嘯輔の化学者としての活動」『科学史研究』通号 149（1984.3）：20-27。
- 菅原国香「明治期における有機元素分析」『化学史研究』第 28 号（1984）：89-96。
- 京大理学部化学・日本の基礎化学研究会『日本の基礎化学の歴史的背景』（非売品）（1984）。
- 芝哲夫「江戸時代の化学実験」『生産と技術』**36**（1984）：2。
- 木下圭三・後藤良造「吉田彦六郎と彼の研究」『化学史研究』第 31 号（1985）：86-94。
- 芝哲夫「江戸時代の化学実験にどんな器具が使われたか」『化学と工業』**38**（1985）：627。
- 立花太郎「歴史のなかの化学と芸術」『化学教育』**34**(3)（1986）：183-184。
- 鈴木明『人物・化学技術史』日刊工業新聞社（1987）
- 菅原国香「「化学」という用語の本邦での出現・使用に関する一考察」『化学史研究』第 38 号（1987）：29-40。
- 日本結晶学会「日本の結晶学」出版編集委員会編『日本の結晶学：その歴史的展望』日本結晶学会（1989）。
- 芝哲夫「適塾と理化学」『化学と教育』**37**(5)（1989）：468-471。
- 宗像英二「研究一特に探究について（体験に基づく見解）」『化学史研究』第 17 卷（1990）：107-113。
- 菅原国香，板倉聖宣「幕末・明治初期における日本語の元素名」『科学史研究』通号 172（1989.12）：193-202，『科学史研究』通号 173（1990.3）：13-20。
- 菅原国香，板倉聖宣「東京化学会における元素名の統一過程」『科学史研究』通号 175（1990.9）：136-149。
- 佐佐木行美；立花太郎「東京帝国大学理学部旧制化学科における卒業研究発表会のプログラム（1916-1953）-1-(資料)」『化学史研究』**18**(1)（1991）：23-32。
- 佐佐木行美；立花太郎「東京帝国大学理学部旧制化学科における卒業研究発表会のプログラム（1916-1953）」『化学史研究』**18**(2)（1991）：85-91。
- 島尾永康「化学大家 358 下村孝太郎」『和光純薬時報』**59**(3)（1991）：2-4。
- 島尾永康「下村孝太郎—その先駆的業績と人物像—」『化学史研究』第 18 卷（1991）：197-210。
- 廣田鋼蔵「触媒研究回顧—1960 年まで—」『化学史研究』第 18 卷（1991）：102-103。
- 高宮信夫「小林久平の酸性白土の発見」『化学史研究』第 18 卷（1991）：109-110。
- 八嶋建明「ゼオライト触媒 30 年」『化学史研究』第 18 卷（1991）：111。
- 尾崎萃「触媒の発見と発展」『化学史研究』第 18 卷（1991）：113。
- 伊丹敬之，伊丹研究室編著『なぜ世界に立ち遅れたのか：日本の化学産業』6 版，NTT 出版（1992）。
- 関口章；桜井英樹「シリリチウムの最近の発展」『化学』**47**(11)（1992）：796-797。
- 立花太郎「液晶研究の初期とその背景および現代化学への寄与」『化学史研究』第 19 卷（1992）：1-13。
- 斎藤喜彦「わが国における錯体の構造研究の歴史」『化学史研究』第 20 卷（1993）：141-160。
- 道修町文書保存会『道修町文書目録』道修町文書保存会（1993）。
- 島尾永康「化学大家 365 小松茂」『和光純薬時報』**61**(4)（1993）：2-4。
- Masanobu Sakanoue, “Yamaoka Nozomu, A 'Humanistic' Historian of Chemistry,” *Historia Scientiar-*

- um, **3** (1993) : 83-94.
- 芝哲夫「百年前の化学 1893 年の化学を顧みて～1907 年の化学を顧みて」『和光純薬時報』**61**(1) (1993) : 2-4 ; **62**(1) (1994) : 2-4 ; **63**(1) (1995) : 2-4 ; **64**(1) (1996) : 2-4 ; **65**(1) (1997) : 2-4 ; **66**(1) (1998) : 2-4 ; **67**(1) (1999) : 2-4 ; **68**(1) (2000) : 2-4 ; **69**(1) (2001) : 2-4 ; **70**(1) (2002) : 2-4 ; **71**(1) (2003) : 25-27 ; **72**(1) (2004) : 29-31 ; **73**(1) (2005) : 24-27 ; **74**(1) (2006) : 29-31 ; **75**(1) (2007) : 29-31.
- 稲本直樹「竹林松二先生を偲んで—東京帝国大学理学部・旧制大阪高等学校時代を中心に—」『化学史研究』第 21 卷 (1994) : 297-298.
- 井畑敏一「竹林松二先生を偲んで」『化学史研究』第 21 卷 (1994) : 299-301.
- 田丸謙二「化学会館展示 Haber と亡父について」『化学史研究』第 21 卷 (1994) : 304-305.
- Togo Tsukahara, “Elimination of Qi by Chemical Specification: Shift of Understanding of Western Theory of Matter in Japan,” *Historia Scientiarum*, **4** (1994) : 1-23.
- 菅原国香, 板倉聖宣「明治初期の化学書, 著訳書と原著者—『化学闡要』『新式化学』『(新式) 化学要理』『科学史研究』通号 196 (1995.12) : 225-233.
- 島尾永康「化学大家 369 近重真澄」『和光純薬時報』**63**(2) (1995) : 2-4.
- 芝哲夫「化学大家 370 宇都宮三郎」『和光純薬時報』**63**(3) (1995) : 2-4.
- 故岩前博氏追悼文集事務局『岩前博さんを偲ぶ』(非売品) (1995).
- 芝哲夫「化学大家 373 松本銑太郎」『和光純薬時報』**64**(3) (1996) : 2-4.
- Yasu Furukawa, “From Chemistry to History: Historians of Chemistry and Their Community in Japan,” *Historia Scientiarum*, **6** (1996) : 87-108.
- 菊池好行「ヴィルヘルム・オストヴァルト遺稿に含まれる日本人化学者関連資料」『化学史研究』第 24 卷 (1997) : 232-248.
- 阪上正信『博覧精思』阪上正信 (1997).
- 芝哲夫「化学大家 376 明石博高」『和光純薬時報』**65**(3) (1997) : 2-4.
- 山田祥一郎「植田龍太郎—わが国の錯体化学研究の先駆者—」『化学史研究』第 25 卷 (1998) : 146-158.
- 坂巻幸雄「戦後放射能探査と日本の地質」『化学史研究』第 25 卷 (1998) : 73-74.
- 芝哲夫「明治の化学者の国際結婚—西川虎之助—」『近畿化学工業界』第 544 号 (1998) : 1-9.
- 田丸謙二「田丸節郎」『化学史研究』第 27 卷 (2000) : 16-22.
- 山口達明「フミン酸の分子構造に関する貴志二郎の先駆的提案」『化学史研究』第 27 卷 (2000) : 218-222.
- 芝哲夫「化学大家 385 三崎嘯輔」『和光純薬時報』**68**(3) (2000) : 2-4.
- 岩倉義男「ポリメチレンジイソシアナートと水との反応：多員環状尿素化合物を創る—わが研究回想—」『化学史研究』第 28 卷 (2001) : 86-90.
- 豊田市郷土資料館編『舎密から化学技術へ：近代技術を拓いた男・宇都宮三郎』豊田市教育委員会 (2001).
- 芝哲夫『生命の化学：なにわの科学の伝統』大阪府 (2001).
- 中南元『農薬原論—農薬の 50 年』北斗出版 (2001).
- 樋口雄「石油探鉱史にみる地質学の役割とその変遷」『地質学史懇話会会報』第 17 号 (2001) : 9-12.
- 朽津耕三「森野米三による分子構造の研究」『化学史研究』第 29 卷 (2002) : 1-15.
- 千田貢「志方益三とポーログラフィー」『化学史研究』第 29 卷 (2002) : 16-30.

- 岩倉義男「わが研究回想 4—その 1—ポリメチレンビスエチレン尿素との出会いから反応性接着剤，開環重合付加反応，反応性高分子開発への途」『化学史研究』第 29 卷（2002）：43-48.
- 芝哲夫「糖語源考」『JSCR Newsletter』vol. 6, no. 1（2002）：10.
- 芝哲夫「化学大家 391 吉田彦六郎」『和光純薬時報』70(3)（2002）：2-4.
- 佐藤和良『私の化学史研究：我が国初期の錯塩研究；東洋産含稀元素鉱石の研究史』佐藤和良（2002）.
- 松中昭一『日本における農薬の歴史』学会出版センター（2002）.
- 吉岡学「榎本武揚は日本地質学史上に如何なる位置を占めるや その一 オランダ留学以前」『地質学史懇話会会報』第 18 号（2002）：19-20.
- 米田昭二郎「阪上正信先生の教育としての化学史観」『化学史研究』第 30 卷（2003）：135-7.
- 芝哲夫「開成所の科学者たち」『学士会会報』第 841 号（2003）：16-34.
- 芝哲夫「化学大家 394 岸本一郎と西川虎之助」『和光純薬時報』71(3)（2003）：25-27.
- 山本明夫「協議会から 日本化学会創立 125 周年記念企画（4）日本の化学の歴史」『化学と教育』51(7)（2003.7）：447-452.
- 山本明夫「協議会から 日本化学会創立 125 周年記念企画（5）日本の化学の歴史—第 2 部 日本の化学と世界の化学」『化学と教育』51(8)（2003.8）：511-516.
- 山本明夫「協議会から 日本化学会創立 125 周年記念企画（6）日本の化学の歴史—第 3 部 化学工業の発展」『化学と教育』51(9)（2003.9）：574-580.
- 佐藤和良『日本における化学研究の歴史（改訂版）』佐藤和良（2003）.
- 山本明夫「化学の夜明け（1）ヨーロッパと日本」『現代化学』394（2004.1）：14-18.
- 山本明夫「化学の夜明け（2）革命の時代」『現代化学』395（2004.2）：49-55.
- 山本明夫「化学の夜明け（3）19 世紀前半の化学者たち」『現代化学』396（2004.3）：38-46.
- 山本明夫「化学の夜明け（4）日は昇る」『現代化学』397（2004.4）：16-23.
- 山本明夫「化学，隕石，北海道：一榎本武揚とウィリアム・クラークを結ぶ糸—その 1；その 2」『化学と工業』58(7)（2005.7）：824-827；58(8)（2005.8）：927-929.
- 芝哲夫「日本の天然物化学の伝統」『不思議な生物現象の化学』（2005）：48-55.
- 山本明夫「化学史，化学技術史と共に考える—研究・教育と科学技術力—」『化学史研究』第 33 卷（2006）：102-3.
- 芝哲夫『日本の化学の開拓者たち』裳華房（2006）.
- 吉原賢二『化学者たちのセレンディピティー：ノーベル賞への道のり』東北大学出版会（2006）.

無機化学

- 高浜二郎『メッキ語源考』鍍金研究所（1957）.
- 山崎一雄「日本における錯体化学の発展（〈特集〉日本の化学と化学工業の近代史）」『化学教育』26(6)（1978）：408-413.
- 山崎一雄「錯体化学の誕生と日本における発展」『化学教育』28(5)（1980）：401-407.
- 和泉修「金属間化合物の歴史と総論」『セラミックス』25(5)（1990）：396-402.
- 金沢孝文ほか『無機工業化学：現状と展望』講談社（1994）.
- 関崎正夫・米田昭二郎『マッチと清水誠』金沢大学薬学部（1996）.
- 杉田清「耐火物技術史物語 耐火物の歴史に学ぶ（I）～（XV）」『耐火物』49(2)（1997）：54-63；49(3)

(1997)：114-123；**49**(5) (1997)：258-267；**49**(6) (1997)：320-328；**49**(7) (1997)：374-384；**49**(8) (1997)：445-453；**49**(9) (1997)：494-498；**49**(10) (1997)：546-556；**49**(12) (1997)：662-670；**50**(1) (1998)：2-10；**50**(2) (1998)：60-64；**50**(3) (1998)：116-121；**50**(5) (1998)：246-257；**50**(6) (1998)：306-315；**50**(8) (1998)：10-420.

寄田栄一「日本の耐火物工業の歴史と展望」『耐火物』**49**(3) (1997)：155-164.

柴田修一「光ファイバー：研究と開発の歴史」『セラミックス』**40**(12) (2005)：980-999.

有機化学

芝哲夫「歴史に学ぶ—明治の日本の化学者たち—」『有機合成化学』**48**(8) (1990)：758-763.

芝哲夫「日本における有機合成化学の歴史—理化学系—」『有機合成化学』**50**(12) (1992)：1070-1073.

「日本における有機合成化学の歴史（有機合成化学協会創立 50 周年記念特集号）—（協会と協会誌の歩み）」『有機合成化学』**50**(12) (1992)：1070-1115.

櫻井英樹「最近の有機ケイ素化学の進歩」『化学と工業』**46**(10) (1993)：1540-1542.

Tetsuo Shiba, “Die organischen Chemie in Japan: entstanden unter dem Einfluss der deutschen Schule”, *Tharandter historische Geste* (1995)：36-41.

櫻井英樹監修『有機ケイ素ポリマーの開発』シーエムシー出版 (1999).

櫻井英樹監修『有機ケイ素ポリマーの新展開』シーエムシー出版 (2002).

野依良治『人生は意図を超えて—ノーベル化学賞への道—』朝日選書 (2002).

野依良治『研究はみずみずしく—ノーベル化学賞の言葉—』名古屋大学出版会 (2002).

読売新聞中部社会部編『オンリーワンに生きる—野依良治教授・ノーベル賞への道—』中央公論新社 (2002).

大嶋幸一郎・北村雅人編『学問と創造 ノーベル賞化学者野依良治博士』化学同人 (2002).

櫻井英樹「研究余録—有機ケイ素化学とともに(1)～(4)」『未来材料』**4**(9) (2004)：52-55；**4**(10) (2004)：56-60；**4**(11) (2004)：66-70；**4**(12) (2004)：64-67.

船山信次『有機化学入門』共立出版 (2004).

櫻井英樹監修『有機ケイ素材料科学の進歩』シーエムシー出版 (2006).

分析化学

日本分析化学会創立十周年記念誌編集委員会編『創立十周年記念誌』日本分析化学会 (1963).

菅原国香「明治初期の分析化学—1870 年代, 1880 年代」『ぶんせき』第 2 号 (1977)：114-118；第 3 号 (1977)：174-177.

菅原国香「明治中期の分析化学：1890 年代」『ぶんせき』第 3 号 (1978)：186-90；第 4 号 (1978)：253-257.

菅原国香「大正前期の分析化学—1910 年代, 後期 1920～1926 年」『ぶんせき』第 11 号 (1979)：810-815；第 12 号 (1979)：891-895.

古谷圭一「大正前期の工業分析化学—いわゆる銑鉄一千万円訴訟事件について—」『化学史研究』第 9 号 (1979)：9-18.

日本分析化学会編『日本分析化学史』東京化学同人 (1981).

不破敬一郎「分析化学の現状と展望」『化学と教育』**35**(1) (1987)：5-8.

物 理 化 学

大幸勇吉「化学者としての予の思い出」『化学の領域』3巻(1949):487-495, 549-555.

片山正夫「一二の思出と感想」『化学の領域』4巻(1950):63-67.

廣田鋼蔵「物理化学の研究から見た日本化学の成長」『化学史研究』第5号(1976):36-43.

川合智「硝酸:物理化学と化学工学の視点から」『化学と教育』47(2)(1999):110-113.

地 球 化 学

山崎一雄「日本の地球化学の一断面」『地球化学』9巻1号(1975).

菅原健「地球化学概念の内包と外延」『化学史研究』第15号(1981):1-7.

地球化学課「地質調査所における地球化学研究の歴史と展望」『地質ニュース』337(1982):146-152.

藤原鎮男編『地球化学の発展と展望』東海大学出版会(1997).

角皆静男「海洋化学の歴史と発展—21世紀に向けて」『海洋と生物』21(2)(1999):117-122.

角皆静男「21世紀における地球科学としての海洋化学の展望:日本における20世紀の気水圏地球化学を省みて」『地球化学』34(3)(2000):125-134.

角皆静男「なぜ、なぜ、なぜ—三宅泰雄先生の地球化学」『学術月報』54(2001):908-909.

秋山雅彦「古生化学と有機地球化学の半世紀」『地質学史懇話会会報』19号(2002):11-15.

角皆静男「地球化学から化学地球学へ」『地球化学』37(1)(2003):61-68.

高分子化学・高分子化学工業

FDI 開発物語編集委員会『FDI 開発物語—ポリオレフィン市場開発の系譜—』非売品(1937).

『ナイロン』紡織雑誌社(1939).

池尾勝巳『ゴム工業の発展』商工協会(1948).

日本ゴム工業史編纂委員会『日本ゴム工業史』ゴム時報社(1950).

奥田平「「高分子化学」の歴史—あとがきに代えて—」『高分子の化学と工業』高分子化学協会出版部(1950), pp. 193-194.

東洋紡績株式会社経済研究所[編]『日本化学繊維工業発展略史』東洋紡績経済研究所(1951).

呉祐吉「旧知を尋ねて高分子化学の発達とその将来を想う(高分子化学者の横顔) 1-7」『ゴム』4(1957):3-5; 69-71; 201-203; 267-270; 399-402; 527-530; 656-659.

岩倉義男編『星野敏雄先生還暦記念集』星野敏雄先生退官記念事業会(1960).

岸信介「雌伏20余年」『高分子』9(1960):412.

荒井溪吉「高分子学会10年に思う—学会設立までの経緯と現実—」『高分子』(1962):728-732.

児玉信次郎「喜多源逸先生」『化学』17(1963):578-580.

「座談会 高分子科学のおいたちとその行方」(桜田一郎, 祖父江寛, 呉祐吉, 荒井溪吉, 矢沢将英, 星野孝平, 岩倉義男, 昭和40年7月7日繊維会館にて)『高分子』14巻, 163号(1965):1038-1057.

小山寿『日本プラスチック工業史』工業調査会(1967).

相馬順一「矢沢将英インタビュー「ビニロン発明当時の思い出」」『繊維科学』9, 10月号(1967); 5, 6月号(1972).

荒井溪吉「日本における合成繊維研究のはじめ」『化繊月報』31(1968):35-36.

奥田平「合成繊維研究協会設立前後」『化繊月報』31(1968):38.

- 李升基『ある朝鮮人科学者の手記』未来社（1969）.
- 日本化学繊維協会編『日本化学繊維産業史』日本化学繊維協会（1974）.
- 相馬順一「わが国における高分子化学研究のあけぼの」『高分子加工』**24**（1975）：331-334；329-333；368-373；406-412；**25**（1976）：11-25；49-56；89-97；126-133；151-157；197-202；225-230；257-263；286-291；305-311.
- 児玉信次郎「ポリエチレン工業が成立するまで」『高分子』第26巻（1977）：829-836.
- 相馬順一「高分子化学と高分子化学工業の年表（～1945）」『高分子』**26**（1977）：851-858.
- 相馬順一「わが国における初期の高分子化学研究について」『高分子』**27**（1978）：849-853.
- 成田耕造「日本におけるタンパク質化学」『化学教育』第26巻（1978）：414-421.
- 児玉信次郎『研究開発への道』東京化学同人（1978）.
- 「日本の高分子が歩んだ道-2-高分子科学の発展をふりかえって」『高分子』**27**(12)（1978.12）：845-887.
- 相馬順一「わが国における高分子化学の関する初期の研究について」『化学史研究』第8号（1978）：38.
- Pariser, R.; Takeshita, T.; Wood, T. D. 「すぐれている日本の高分子科学と技術」『高分子』**30**(1)（1981.01）：46.
- 古川淳二「高分子科学および工業のゆくえ」『化学と工業』**34**(7)（1981.07）：459.
- 岡村誠三（編）『独創性開発のケース・スタディー—合成繊維ビニロンについて』財団法人二十一世紀文化学術財団，非売品（1980-1982）.
- 岩倉義男「青春の記」『高分子』31巻（1982）：79.
- 神原周「幻のポリマー」『高分子』**31**（1982）：31.
- 「高分子学会設立の頃—呉祐吉先生に聞く—」『高分子』**31**（1982）：76.
- 「日本の高分子科学技術の振興のために」『高分子』**31**(2)（1982.02）：109-133.
- Bamford, C. H.（今西幸男訳）「高分子科学を築いた人びと—C. H. Bamford—3-リバプール大学へそして多くの日本人研究者との交わり」『高分子』**34**(3)（1985.03）：248-251.
- 荒井溪吉『遺稿・戦時追憶の記—応召から敗戦・巣鴨までのつれづれ—』私家版（1987）.
- 神原周『爽やかにほどほどに』科学新聞社（1987）.
- 岡本敏彦編『落合英二先生回想録』落合英二先生顕彰会・廣川書店（1992）.
- 神原周『新しい発想のために』ラバーダイジェスト社（1992）.
- 浅井治海『激動の高分子化学工業—歴史と将来展望—』シーエムシー（1995）.
- 岩倉義男「高分子学会の歴史と役割」『化学史研究』第22巻（1995）：53-55.
- 岡村誠三「櫻田一郎と日本の高分子化学—科学史の一つの見方—」『化学史研究』第22巻（1995）：56-58.
- 古川淳二「日本の合成ゴム研究史」『化学史研究』第22巻（1995）：59-62.
- 大島敬治「わが国のプラスチック時代到来までの概要」『化学史研究』第22巻（1995）：63-66.
- 丹沢宏「日本の高分子産業史のひとこま—化学繊維技術成立事情—」『化学史研究』第22巻（1995）：67-68.
- 石川欣造「日本の繊維・高分子科学の先達者 祖父江先生」『繊維と工業』**52**（1996）：295-298.
- 辻和一郎「繊維・高分子化学における桜田一郎先生の業績点描」『化学史研究』第24巻（1997）：205-217.
- 岩倉義男「わが国におけるナイロンの化学構造の決定について」『化学史研究』第24巻（1997）：218-219.
- 西島安則「堀尾正雄先生を偲ぶ」『高分子』**46**（1997）：155.
- 井上尚之「ナイロンの日本上陸経路と絹の駆逐」『化学史研究』第25巻（1998）：93-107.

- 大津隆行「井本稔先生を偲んで」『高分子』48 (1999) : 282.
- 高分子学会『日本の高分子科学技術史』高分子学会 (1998) ; 補訂版, 高分子学会 (2005).
- 岡村誠三「1. 高分子科学 事始めと展開 1) 櫻田一郎先生と日本の高分子化学—科学研究史の一つの見方—」『高分子』47 (1998) : 58.
- 白川英樹『化学に魅せられて』岩波文庫 (2001).
- 白川英樹『私の歩んだ道—ノーベル化学賞の発想—』朝日選書 670, 朝日新聞社 (2001).
- 岩倉義男「わが研究回想 4—その 1—ポリメチレンビスエチレン尿素との出会いから反応性接着剤, 開環重合付加反応, 反応性高分子開発への途」『化学史研究』第 29 卷 (2002) : 43-48.
- 田中耕一『生涯最高の失敗』朝日選書 736, 朝日新聞社 (2003).
- 北日本新聞社編集局監修『きめた道をまっすぐに—ノーベル賞化学者・田中耕一の原点—』北日本新聞社 (2003).
- 黒田龍彦『田中耕一という生き方』大和書房 (2003).
- フレア情報研究会『ノーベル化学賞「田中耕一さん」の研究』第三書館 (2003).
- 古林祐佳「日本における高分子化学の成立—第二次世界大戦期における日本合成繊維研究協会の業績の分析を通して—」東京工業大学 2003 年度修士論文.
- Toru Matsushashi and Shigeo Sugiyama, “The Technological Development of the Japanese Plastic Industry Shortly after WW II and the Introduction of Western High Technology,” *Historia Scientiarum*, Vol. 12, No. 3 (March 2003).
- 佐伯康治「高分子企業の研究開発」『化学史研究』第 31 卷 (2004) : 142-143.
- 稲垣博, 平見松夫, 山本雅英 (編)『昭和繊維化学史の一断面—化学者堀尾正雄生誕 100 周年に因む—』私家版 (2005).
- 古林祐佳「高分子学会編『日本の高分子科学技術史 補訂版』」『化学史研究』第 33 卷 (2006) : 184-185.
- 井上尚之『ナイロン発明の衝撃: ナイロンが日本に与えた影響』関西学院大学出版会 (2006).
- 北原文雄「戦前の日本人留学生と巨大分子論争—櫻田一郎, 野津龍三郎, 落合英二について—」『化学史研究』第 33 卷 (2006) : 161-171.
- 五島綾子『ブレイクスルーの科学—ノーベル賞学者・白川英樹博士の場合—』日経 BP 社 (2007).

コロイド・界面化学

- 玉蟲文一『一化学者の回想』中央公論社自然選書 (1978).
- 玉蟲文一「界面化学への道—片山正夫教授生誕 100 年にちなんで—」『化学史研究』第 8 号 (1978) : 1-6.
- 立花太郎「初期のコロイド化学と寺田寅彦の物理学」『化学史研究』25(4) (1999) : 229-240.
- 日本化学会コロイドおよび界面化学部会創立 25 周年記念誌出版委員会編『日本における界面化学の歩み』日本化学会コロイドおよび界面化学部会 (2001).
- 桂井富之助『親愛なる「ユニークな」—研究者桂井富之助の記録』桂井仁 (私家版) (2002).
- 立花太郎; 北原文雄; 妹尾学「日本におけるコロイド・界面化学の歴史的変遷 1~3」『化学史研究』29(4) (2002) : 237-246; 30(1) (2003) : 26-35; 30(2) (2003) : 84-92.
- 北原文雄「異色の化学者桂井富之助のこと—アカデミックな視点から—」『化学史研究』第 32 卷 (2005) : 32-44.

生 化 学

上代皓三編『近代の生化学』化学同人（1968）。

Tatsumasa Doke, "Establishment of Biochemistry in Japan," *Japanese Studies in the History of Science*, 8 (1969) : 145-153.

寺本英他「日本生物物理学—歴史と将来」『生物物理』18(6) (1978.12) : 285-288.

野島徳吉「不思議な存在感—生化学者江上不二夫」『自然』1982年10月号 : 40-45.

太田隆久「バイオテクノロジーの基礎としての化学技術」『化学と工業』37(1) (1984.01) : 100-103.

「生理学談話会の歴史的推移-1,2-」『日本生理学雑誌』46(11) (1984.11) : 643-655; 46(12) : 673-695.

島園順雄「柿内三郎先生伝」『生化学』57(11) (1985.11) : 1501-1516.

大林雅之「日本における分子生物学の起源」『産業医科大学雑誌』8(2) (1986) : 251-256.

高橋健「日本におけるバイオテクノロジーの源流」『化学史研究』第42号 (1988) : 1-7.

岡部昭彦『科学者点描』みすず書房 (1989).

「シリーズ ビタミン研究のブレイクスルー—その歴史と展望（ビタミンC）；ビタミンB1；ビタミンB2；
ビタミンB6；ビタミンB12；ピオチン；ナイアシン（1）」『ビタミン』73(2) (1999.02) : 95-120; 73
(3) (1999.03) : 155-197; 73(7) (1999.07) : 379-401; 73(8) (1999.08) : 467-489; 73(9) (1999.09) :
533-566; 73(11) (1999.11) : 659-697; 75(2) (2001.2) : 63-94.

永沼章「メタロチオネイン研究の歴史と今後の展望」『Biomedical research on trace elements』11(2)
(2000.06) : 99-103.

紀氏健雄；高橋隆幸；岡本正志「(1) 呼吸鎖における Coenzyme Q 研究の歴史と現状」『ビタミン』75(5・
6) (2001.06) : 263-271.

足立収生「バイオフィクター研究のブレイクスルー—その歴史と展望：PQQ；イノシトール；微量元素・
ミネラル（1）-（3）；ポリフェノール（1）；グルタチオン；微量元素・ミネラル（4）」『ビタミン』75(7)
(2001.7) : 355-387; 75(8) (2001.8) : 421-433; 75(11) (2001.11) : 525-542; 75(12) (2001.12) : 557-
573; 76(1) (2002.1) : 3-13; 76(4) (2002.4) : 209-221; 76(9) (2002.9) : 413-426; 76(11)
(2002.11) : 507-549; 76(12) (2002.12) : 595-605.

志水禮子編集『遺稿集・柿内三郎の生涯』私家版，志水禮子（私製）（2002）。

「平成14年度 市民公開講座「ビタミン：研究の歴史から新しい機能まで」」『ビタミン』77(1) (2003.1) :
41-47.

木村美恵子「(1) 発見の歴史と微量栄養素としてのマンガン（バイオフィクター研究のブレイクスルー：
「マンガン」）」『ビタミン』78(1) (2004.01) : 13-18.

木村美恵子「(2) 我が国における TPN (total parental nutrition) 用微量元素製剤におけるマンガン添加量
の課題と歴史（バイオフィクター研究のブレイクスルー：「マンガン」）」『ビタミン』78(1) (2004.01) :
19-30.

農 芸 化 学

『東京大学農学部水産学科の五十年』東京大学農学部水産学科創立五十周年記念会（1960）。

安藤圓秀『農学事始め』東京大学出版会（1964）。

『東京農工大学百年の歩み』東京農工大学創立記念事業会（1981）。

『東京大学農学部農業工学科八十周年記念誌』東京大学農業工学科同窓会（1984）。

小林恒夫『回想録 戦中戦後の研究生生活の思い出』（非売品）（1985）.
『東京大学農学部水産実験所の五十年』東京大学農学部附属水産実験所（1986）.
『農芸化学の100年』日本農芸化学会（1987）.
東京大学農学部獣医内科学教室『東京大学農学部獣医内科学教室100年の歩み』1998.

医学関係

古賀十二郎『西洋医術伝来史』形成社（1972）.
新井正治「慈恵会医科大学解剖学教室の歴史」『解剖学雑誌』**50**(4)（1975.08）：193-194.
川村光毅；山内昭雄「岩手医科大学解剖学教室の歴史」『解剖学雑誌』**52**(1)（1977.02）：136-139.
粟屋和彦「山口大学医学部解剖学教室の歴史」『解剖学雑誌』**53**(1)（1978.02）：147-152.
万年甫；東京医科歯科大学解剖学教室「東京医科歯科大学解剖学教室の歴史」『解剖学雑誌』**54**（4）（1979.08）：236-238.
酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍（1982）.
阿知波五郎『近代日本の医学—西洋医学受容の軌跡』思文閣出版（1982）.
山下政三『脚気の歴史：ビタミン発見以前』東京大学出版会（1983）.
市河三太「生理学東京談話会小史—草創期と戦後の変遷」『日本生理学雑誌』**46**(11)（1984.11）：643-652.
吉村寿人「近畿生理学談話会成立の経過」『日本生理学雑誌』**46**(11)（1984.11）：653-655.
藤野恒三郎『日本細菌学史』近代出版（1984）.
板倉聖宣『脚気の歴史：資料・文献年表』つばさ書房（1988）.
板倉聖宣『模倣の時代』上・下，仮説社（1988）.
宗田一ほか編著『医学近代化と来日外国人』世界保健通信社（1988）.
山下政三『明治期における脚気の歴史』東京大学出版（1988）.
山下政三「「明治期における脚気の歴史」をめぐる話題」『日本医史学雑誌』**35**(3)（1989.07）：292-300.
小高健『伝染病研究所：近代医学開拓の道のり』学会出版センター（1992）.
酒井シヅ『日本疾病史』放送大学教育振興会（1993）.
杉山章子『占領期の医療政策』頸草書房（1995）.
山下政三『脚気の歴史 ビタミンの発見』思文閣出版（1995）.
宮下三郎『和蘭医書の研究と書誌』井上書店（1997）.
山下政三「ビタミンの発見に対する漢方医学の貢献」『日本医史学雑誌』**44**(1)（1998）：152-153.
山下政三「森鷗外と明治の脚気問題」『鷗外』通号63（1998.07）：115-132；通号64（1999.01）：40-72.
山下政三「時代背景からみた「日本医学会論」と「傍観機関」論」『鷗外』通号66（2000.01）：30-74.
坂内正『鷗外最大の悲劇』新潮社（2001）.
吉田忠；深瀬泰旦編『東と西の医療文化』思文閣出版（2001）.
長與又郎（小高健編）『長與又郎日記：近代化を推進した医学者の記録』上，下，学会出版センター（2001）.
酒井シヅ『病が語る日本史』講談社（2002）.
山下政三「森林太郎の小倉左遷の背景—台湾軍への麦飯給与をめぐる土岐頼徳と石黒忠恵との大喧嘩」『鷗外』通号70（2002.1）：112-162.
太田安雄『太田雄寧伝』雄寧会（2003）.
山下政三「森林太郎の小倉左遷」『鷗外』通号70（2002.1）：163-194；通号73（2003.11）：26-55；通号75

(2004.7)：49-68.

酒井シヅ『絵で読む江戸の病と養生』講談社（2003）.

山嶋哲盛『明治金澤の蘭方医たち』慧文社（2005）.

山下政三「日露戦争時の森林太郎」『鷗外』77（2005.7）：56-75.

内田正夫「日清・日露戦争と脚気」『東西南北（和光大学総合文化研究所年報）』（2007）：144-156.

薬 / 薬学

宇田川榛斎譯述『遠西医方名物考・同補遺』（1834）.

石黒忠恵『軍醫寮局方』島村屋利助（1871）.

大沢昌督輯；永松東海校『陸軍病院薬局方』第2版，陸軍文庫（1878）.

今泉源吉他「桂川家をめぐる日蘭交渉史—初代桂川甫筑の研究」『六浦論叢』通号4（1955.07）：30-46.

伊東榮『伊東玄朴伝』玄文社（1916）；八潮書店（1978）.

穂積甫庵撰『救民妙薬』[出版者不明]，元禄8 [1695]；博新館（1981）.

宗田一「宇田川榛斎(玄真)訳『和蘭局方』について」『医譚』通号11（1956.07）.

宗田一『日本製薬技術史の研究』薬事日報社（1965）.

河村健太郎；滝口康彦『伊東玄朴. 副島種臣』佐賀県青少年育成県民会議（1970）.

遠藤元理原著（難波恒雄編集）『本艸辨疑』巻1-5，漢方文献刊行会（1971）.

馬島勝蔵ほか『伊東玄朴』（1971）.

清水藤太郎『日本薬学史』南山堂，復刻（1971）.

宮下三郎「薬学の先駆者としての橋本宗吉」『科学史研究』通号100（1971.12）：208-212.

宗田一『近代薬物発達史』薬事新報社（1974）.

大滝紀雄「西説内科撰要について」『日本医史学雑誌』19（1973）：19-28，165-173，333-342；20（1974）：142-150，268-279；21（1975）：61-70，242-252；22（1976）：294-308.

佐藤亨「『遠西医方名物考』の漢語」『岩手医科大学教養部研究年報』通号13（1978）：116-102.

根本曾代子「薬学人の伝記」『ファルマシア』15(5)（1979）：379-380.

宗田一『日本の名薬』八坂書店（1981，1993）.

菅原国香「『遠西医方名物考補遺』巻7，8（元素編第一，第二）の原本の一つについて」『化学史研究』通号17（1981）：17，19.

根本曾代子『日本の薬学：東京大学薬学部前史』南山堂（1981）.

根本曾代子「薬学ゆかりの外国人（2）—エイクマン Johann Frederik Eijkmann—」『ケミカルタイムズ』100（1981）.

根本曾代子「薬学ゆかりの外国人（3）—ケンベル Engelbert Kaempfer—」『ケミカルタイムズ』101（1981）.

根本曾代子「薬学ゆかりの外国人（4）—ゲールツ Anton Johannes Cornelis Geerts—」『ケミカルタイムズ』102（1981）.

根本曾代子「薬学ゆかりの外国人（5）—ツェンペリー Carl Peter Thunberg—」『ケミカルタイムズ』103（1982）.

根本曾代子「薬学ゆかりの外国人（6）—シーボルト Philipp Franz von Siebold—」『ケミカルタイムズ』104（1982）.

- 根本曾代子「薬学ゆかりの外国人 (7)ーヘボン Jaws Curtis Hepburnー」『ケミカルタイムズ』105 (1982).
- 水戸市医師会会史編纂委員会編集『救民妙薬注解』水戸市医師会 (1983).
- 一ノ宮一男「遠藤元理の度量衡及び本草研究について」『科学史研究』第II期24 (1985): 35-39.
- 宇田川榛斎『和蘭薬鏡』科学書院; 霞ヶ関出版発売 (1988).
- 宗田一『図説・日本医療文化史』思文閣出版 (1989).
- 白井光太郎 (木村陽二郎編)『本草百家伝・その他』科学書院; 霞ヶ関出版発売 (1990).
- 井上清恒『医人の探索』内田老鶴圃 (1991).
- 道家達将「宇田川玄随 (槐園) について」『一滴』1 (1992).
- 宗田一『渡来薬の文化誌: オランダ船が運んだ洋薬』八坂書房 (1993).
- 日本薬史学会編『日本医薬品産業史』薬事日報社 (1995).
- 小曾戸洋『中国医学古典と日本: 書誌と伝承』塙書房 (1996).
- 大場秀章「小石川御薬園と小石川植物園」『学鑑』93(11) (1996.11): 20-27.
- 辰野美紀「近代臨床薬剤師の職業化の歴史」『薬史学雑誌』32(1) (1997): 88-92.
- 辰野美紀「近代病院薬剤師の職業専門化の歴史的過程 (第5報): 近代薬学の誕生」『薬史学雑誌』32(2) (1997): 200-205.
- 宮下三郎『長崎貿易と大阪一輸入から創薬へ』清文堂 (1997).
- 小曾戸洋『漢方の歴史』大修館書店 (1999).
- 小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』大修館書店 (1999).
- 山崎幹夫『薬と日本人』吉川弘文館 (1999).
- 幸田正孝『『遠西医方名物考補遺』の空気ポンプー松平定信と蘭学』『豊田工業高等専門学校研究紀要』33 (2000): 229-268.
- 米田該典『洪庵のくすり箱』大阪大学出版会 (2001).
- 野高宏之「和薬改会所ー幕府の薬種政策と薬種商の対応」『大阪の歴史』60 (2002): 53-92.
- 渡辺祥子「薬種中買仲間と唐薬問屋ー和薬改会所をめぐる対応から」『都市文化研究 (大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター)』1 (2003.03): 104-123.
- 鳥越泰義『正倉院薬物の世界ー日本の薬の源流を探る』平凡社新書 (2005).
- 渡辺祥子『近世大坂薬種の取引構造と社会集団』清文堂出版 (2006).
- 池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙斎: 池田文書の研究』上, 下, 思文閣出版 (2006).

原子論・分子論

- Eri Yagi, "On Nagaoka's Saturnian Atomic Model (1903)," *Japanese Studies in the History of Science*, 3 (1964): 29-47.
- Eri Yagi, "The Development of Nagaoka's Saturnian Atomic Model II (1904-05): Nagaoka's theory of the Structure of Matter," *Japanese Studies in the History of Science*, 11 (1972): 73-89.
- 塚原徳道「槌田龍太郎研究 (1)ー新簡易原子価論をめぐってー」『化学史研究』第1号 (1974): 23-30.
- 三井澄雄「日本における原子論的な中等化学教育の始まり」『化学史研究』第1号 (1974): 38-41.
- 藤井清久「明治前期における原子論」『化学史研究』第4号 (1975): 5-15.
- Kiyohisa Fujii, "Atomism in Japan, 1868-1888," *Japanese Studies in the History of Science*, 14 (1975):

141-156.

塚原徳道「槌田龍太郎研究（2）一新簡易原子論と電子対反発則一」『化学史研究』第5号（1976）：29-35。
坂口正男「“元素”と“原子”一字田川榕菴を中心とした化学書の翻訳」『化学と工業』29(5)（1976.05）：
390-392.

藤井清久「江戸期から明治期にかけての物質の理解—粒子から原子へ」『化学と工業』30(6)（1977）：426-428.

Minoru Tanaka, “The Reception of Atomic Theory in Japan during her Feudal Age,” *Japanese Studies in the History of Science*, 16 (1977) : 113-117.

藤井清久「明治期における原子論—西欧との対応において—」『化学史研究』第8号（1978）：32-33.

広田鋼蔵；山口達明「森鷗外の原子観」『千葉工業大学研究報告 人文編』通号15（1978）：25-33.

菅原国香，中村邦光，板倉聖宣「atomの訳語の形成過程」通号157（1986.3）：34-45.

化学親和力

ゲーテ（久保正夫訳）『親和力』新潮社（1920）（ゲーテの『親和力』の邦訳は他にも多数）.

坂口正男「〔舎密開宗〕における化学親和力の観念（1）；（2）」『科学史研究』第2期 通号67（1963.09）；
第2期通号83（1967.09）：124-132.

藤井清久「化学における力—求力と舎密親和力」『化学と工業』30(7)（1977）：515-517.

Togo Tsukahara, *Affinity and Shinwa Ryoku*, J. C.Gieben Publisher : Amsterdam, 1993.

鉱業・鉱山

Nakasawa, I., *The Chemistry of Copper Smelting*, Tokyo : The Department of Science, Tokio Daigaku, 1879.

鉱山懇話会編『日本鉱業発達史』上巻，中巻，下巻，鉱山懇話会（1932）；復刻，ロゴス出版（1973）；原書房（1993）（明治百年史叢書414-419巻）.

『筑豊石炭鑛業會五十年史』筑豊石炭鉱業会（1935）.

久保山雄三『石炭鑛業発達史』公論社（1942）.

西尾我次郎『日本鑛業史要』十一組出版部（1943）.

久保山雄三『日本石炭鑛業発達史』再版，公論社（1947）.

『社団法人若松石炭協会五十年史』若松石炭協会（1957）.

佐藤典正『細倉鉱山史』三菱金属鉱山細倉鉱業所（復刻 鶯沢町公民館）（1961）.

園田稔『戦後石炭史』セキツウ（1970）.

大矢真一『日本の産業技術—鯨捕りから反射炉まで—』三省堂（1971）.

筑波常治；菊池俊彦編『明治の群像—7—産業の開発』三一書房（1971）.

井手以誠『佐賀県石炭史』金華堂（1972）.

奥村正二『小判・生糸・和鉄—統江戸時代技術史—』岩波新書（1973）.

川崎茂『日本の鉱山集落』大明堂（1973）.

木下亀城『炭鉱の歴史』木下亀城先生喜寿祝賀記念事業会（1973）.

筑豊石炭鉱業史年表編纂委員会編『筑豊石炭鉱業史年表』田川郷土研究会（1973）.

『別子銅山圖録』別子銅山記念出版委員会（1974）.

- 秀村選三ほか編『九州石炭鉱業史資料目録』第1集—第12集, 西日本文化協会 (1975-).
- 荒川禎『石炭志: 常磐炭田史』石炭志刊行会 (1975).
- 住友修史室編『住友と立川銅山』住友修史室 (1977).
- 小葉田淳『日本鉱山史の研究』岩波書店 (1978).
- 矢野牧夫ほか『石炭の語る日本の近代』そしえて (1978).
- 今井典子「近世住友の吹所の研究」『泉屋叢考』**19** (1980).
- 荻慎一郎「南部鉄山における生産組織と労働組織—近世後期中村家の場合」『日本文化研究所研究報告 別巻』通号 18 (1981.03): 49-85.
- 荻慎一郎「阿仁銅山周辺地域の社会構造—幕末・維新时期を中心に」『歴史』通号 61 (1983.12): 45-72.
- 東海林吉郎;菅井益郎『通史足尾銅毒事件 1877-1984』新曜社 (1984).
- 坪内安衛編『石炭史: 佐賀県石炭産業資料』佐賀県商工労働部工鉱課 (1985).
- 大沢真澄・塚原東吾「Ph. F. フォン・シーボルトの日本産銅物・岩石および和漢薬などの調査」『化学史研究』第 32 号 (1985): 157.
- 荻慎一郎「近世後期における鉱山経営—秋田藩領大葛金山の研究 (上) (中) (下)」『秋田大学教育学部研究紀要, 人文科学・社会科学』通号 35 (1985.02): 45-63; 36 (1986.02): 69-86; 37 (1987.02): 99-116.
- 小葉田淳『続日本鉱山史の研究』岩波書店 (1986).
- 武田晴人『日本産銅業史』東京大学出版会 (1987).
- 正田誠一『九州石炭産業史論』九州大学出版会 (1987).
- 下野克己『戦後日本石炭化学工業史』御茶の水書房 (1987).
- 住友史料館編『別子銅山公用帳』1 番・2 番—7 番, 思文閣出版 (1987-).
- 荻慎一郎「近世における院内銀山の金生産—金銀吹分法の技術伝播」『地方史研究』**38**(1) (1988.02): 32-44.
- 荻慎一郎「近世後期における鉱山労働者の闘争—秋田藩領大葛金山を中心に」『歴史』通号 70 (1988.04): 58-92.
- 田中久夫『金銀島日本』弘文堂 (1988).
- 松本恒平『鯛生金山史』佐伯印刷 (1989).
- 荻慎一郎「近世製鉄史に関する一覧書」『地方史研究』**39**(4) (1989.08): 48-57.
- 西岡邦彦『太陽の化石: 石炭』アグネ技術センター (1990).
- 前川雅夫編『炭坑誌: 長崎県石炭史年表』葦書房 (1990).
- 黒岩俊郎編『金属の文化史』アグネ (1991).
- 住友金属鉱山株式会社住友別子鉱山史編集委員会編, 小葉田淳監修『住友別子鉱山史』住友金属鉱山 (1991).
- 高橋求「江戸時代末期における細倉鉱山「生吹」復元実験について」『化学史研究』第 18 巻 (1991): 172.
- 森島宏「我が国石油鉱業技術の発展」『化学史研究』第 19 巻 (1992): 156-157.
- 荻慎一郎「天保年間における院内銀山経営」『日本歴史』通号 530 (1992.07): 46-64.
- 小葉田淳『日本銅鉱業史の研究』思文閣出版 (1993).
- 藤本鐵雄『「明治期」の別子そして住友: 近代企業家の理念と行動』御茶の水書房 (1993).
- 藤野明「銅の伝統技術—近世・江戸期から明治維新へ—」『化学史研究』第 21 巻 (1994): 172-185.
- 植田晃一「江戸時代の金・銀・銅の製錬技術(1)~(4)」『日本鉱業史研究』**30** (1995): 55-59; **31** (1996):

- 78-85; **32** (1997): 65-69; **33** (1998): 57-60.
- 寺尾美保「明治十年代の島津家の家政運営と財政事情：鉱山近代化事業をめぐる島津家と明治政府」『尚古集成館紀要』8 (1995).
- 植田晃一「英国の銅もジャパン・カッパー」『住友史料叢書月報』10 (1996).
- 荻慎一郎『近世鉱山社会史の研究』思文閣出版 (1996).
- 黒川静夫編『熊野銅山・紀州鉱山 研究集録1・2』黒川静夫 (1996).
- 田中久夫『金銀銅鉄伝承と歴史の道』岩田書院 (1996).
- 永末十四雄『筑豊万華：炭鉱の社会史』三一書房 (1996).
- 国立科学博物館『日本の鉱山文化：絵図が語る暮らしと技術』国立科学博物館 (1996).
- 笹尾了祐『桂川町炭鉱資料集（採炭編）』王塚装飾古墳館 (1997).
- 『別子開坑二百五十年史話』ゆまに書房 (1997).
- 今井典子「近代石見銀山の産銅について」『日本鉱業史研究』35 (1998).
- 伊澤英二「石見銀山の地質と鉱物について」『日本鉱業史研究』35 (1998).
- 村上隆「石見銀山遺跡の科学的調査」『月刊文化財』通号21 (1998): 46-51.
- 『住友銅吹所跡発掘調査報告』大阪市文化財協会 (1998).
- 山陰中央新報社編『輝き再び石見銀山』山陰中央新報社 (1998).
- 糸魚川忠平「わが国の放射性希元素鉱物研究の歴史」『化学史研究』第25巻 (1998): 71-72.
- 浅田政広『北海道金鉱山史』北海道大学図書刊行会 (1999).
- 石見銀山資料館編『資料で見る石見銀山の歴史』石見銀山資料館 (1999).
- 植田晃一「16世紀初頭の李氏朝鮮端川銀山の灰吹法と石見銀山への伝来について」『日本鉱業史研究』35 (1998).
- 太田町教育委員会編『川口鉱山誌』秋田県太田町 (1999).
- 神岡鉱山労働組合編発行『鉱山と共に50年』(1999).
- 佐藤一男『会津の鉱山 檜原金銀山物語』(1999).
- 坪内安衛『石炭産業の史的展開』文献出版 (1999).
- 妙見山麓遺跡調査会編『播磨産銅史の研究—分析資料編一』妙見山麓遺跡調査会 (1999).
- 島根県教育委員会ほか『石見銀山遺跡総合調査報告書』(1999).
- 新居浜市編『未来への鉱脈—別子銅山と近代化遺産—』新居浜市 (1999).
- 小葉田淳『貨幣と鉱山』思文閣出版 (1999).
- 今井典子「近世の銅精錬法—『鼓銅図録』と『銅製造図』にみる南蛮吹・間吹・小吹—」『日本鉱業史研究』39 (2000): 79-87.
- 東和建設工業(株)編『石見銀山 写真探訪—世界に冠たるジパングの遺産』(2000).
- 村上安正『鉱山の技術・経営・社会』村上安正 (2000).
- 武富登巳男・林えいだい編『異郷の炭鉱—三井山野鉱強制労働の記録—』海鳥社 (2000).
- 畠山秀樹『近代日本の巨大鉱業経営』多賀書房 (2000).
- 芝竹夫編著『炭坑と強制連行』筑豊塾 (2000).
- 明るい町編『町民がつづる足尾の百年・第2部』光陽出版社 (2000).
- 児玉清臣『石炭の技術史 摘録』児玉清臣 (2000).
- 近畿大学九州工学部図書館地域資料室編『筑豊近代化大年表(大正編)』近畿大学九州工学部図書館 (2000).

- 荻慎一郎「対馬藩領鉾山の研究—佐須銀山の開発と労働力—」『海南史学』（2000）.
「石炭産業特集」『嘉飯山郷土研究会会誌』第14号（2000）.
今井典子「貞享・元禄期の銅貿易と住友」『住友史料館報』32（2001.7）：1-39.
今井典子「住友銅吹所と大坂—技術とオランダ商館長応接をめぐって（特集 近世大坂と住友銅吹所—発掘から10年）」『ヒストリア』176（2001.9）：23-30.
小山矩子『足尾銅山—小滝の里の物語—』文芸社（2001）.
田賀井篤平編『和田鉾石標本』東京大学総合研究博物館（2001）.
村上隆；高田潤；鳥越俊行「石見銀山遺跡における選鉾工程技術の解明—「ゆりかす」の科学的調査」『古代文化研究』9（2001）：13-24.
村上隆編著『金工技術』至文堂（2003）.
大阪歴史博物館編『よみがえる銅』大阪歴史博物館（2003）.
島根県教育委員会編『石見銀山史料解題 銀山旧記』島根県教育委員会（2003）.
山口梅太郎「（資料）日本鉾山史年表」『日本鉾業史研究』45（2003）.
金光烈『足で見た筑豊朝鮮人炭鉾労働者の記録』明石書店（2004）.
沢田正昭編『科学が解き明かす古代の歴史—新世紀の考古科学』クバプロ（2004）.
文化財保存修復学会編『科学で探る先達の知恵』クバプロ（2004）.
三浦佐久子『足尾万華鏡—銅山町を彩った暮らしと文化』随想舎（2004）.
ルイ・ラロック『別子鉾山目論見書』第1部，第2部，住友史料館編集，住友史料館（2004-2005）.
荻慎一郎「近世日本の鉾山と社会」『ヨーロッパ文化史研究』6（2005.3）：113-127.
荻慎一郎「近世日本の鉾山：薩摩藩領長野（山ヶ野）金山の開発と寛永20年の閉山を中心に」『まてりあ：日本金属学会会報』45(4)（2006）：246-248.
青木隆夫；吉田勲；石川孝織；三輪宗弘；井上雅弘；山田大隆「シンポジウム：世界から見た日本の炭鉾技術：炭鉾保存と技術の継承」『科学史研究』第45巻（2006）：42-56.
村上安正『足尾銅山史』随想舎（2006）.
村上隆『金・銀・銅の日本史』岩波新書（2007）.

鉄・製鉄・鉄鋼業

- 野呂景義「本邦製鐵事業の過去及将来」『鐵と鋼：日本鐵鋼協會々誌』1(1)（1915）：5-16；1(2)（1915）：145-153；1(3)（1915）：265-273；1(4)（1915）：393-400；1(5)（1915）：494-503；1(6)（1915）：595-608；1(7)（1915）：717-750；1(8)（1915）：840-867；1(9)（1915）：978-987；1(10)（1915）：1125-1138；2(1)（1916）：48-55；2(2)（1916）：159-167；2(3)（1916）：257-260；2(4)（1916）：370-380；2(5)（1916）：479-487；2(6)（1916）：611-620；2(7)（1916）：679-692；2(11)（1916）：140-146；3(9)（1917）：983-989.
島袋盛範『藩政時代に於ける製鉄鉾業』（1932）.
小島精一『日本鉄鋼史』明治篇，千倉書房（1945）.
三枝博音；飯田賢一『日本近代製鉄技術発達史—八幡製鉄所の確立過程』東洋経済新報社（1957）.
たたら研究会『研究紀要』たたら研究会，1号（1958.6）.
桶谷繁雄『金属と人間の歴史』講談社ブルーバックス（1965）.
大橋周治『鉄鋼業』東洋経済新報社（1966）.

- 窪田蔵郎『鉄の生活史』角川書店（1966）。
- 黒岩俊郎『製鉄技術発達過程の技術史的研究』（1967）。
- 黒岩俊郎「たたらへの衰退過程」『鐵と鋼：日本鐵鋼協會々誌』**53**(7)（1967）：867-870。
- 黒岩俊郎「維新前後における日本の海外技術移植過程のドイツとの比較について」『鐵と鋼：日本鐵鋼協會々誌』**53**(11)（1967）：1369-1372。
- 黒岩俊郎「技術史より見た日本製鉄技術の課題」『鐵と鋼：日本鐵鋼協會々誌』**54**(9)（1968）：1073-1088。
- 飯田賢一，大橋周治，黒岩俊郎編『鉄鋼』現代日本産業発達史研究会（1969）（現代日本産業発達史；4）。
- 黒岩俊郎『製鉄技術発達過程の歴史的研究：産業技術論』黒岩俊郎，[1970]。
- 野原建一「近世後期産鉄市場構造の特質」『日本製鉄史論』（1970）。
- たたら研究会編『日本製鉄史論：たたら研究会創立十周年記念論集』たたら研究会（1970）。
- 鎌谷親善「日本における近代鉄鋼業の形成過程についての再検討」『東洋大学経済経営研究所研究報告』通号 1971 年版（1971.03）：1-74。
- 大橋周治「明治期の製鉄技術」『経営史学』**7**(1)（1972.05）：28-38。
- 野原建一「明治前期和式製鉄業の危機」『社会経済史学』**36**(2)（1971）。
- 武井良明『近世製鉄史論』三一書房（1972）。
- 飯田賢一『日本鉄鋼技術史論』三一書房（1973）。
- Ken-ichi Iida, *History of Steel in Japan*, Nippon Steel Corporation, 1973.
- 窪田蔵郎『鉄の考古学』雄山閣出版（1973）。
- 大橋周治「幕末鑄砲事業の源流—江川太郎左衛門と韮山反射炉」『技術と人間』通号 11（1974.06）：91-103。
- 大橋周治『幕末明治製鉄史』アグネ（1975）。
- 飯田賢一『鉄の語る日本の歴史』上下，そしえて（1976）。
- 黒岩俊郎『たたら：日本古来の製鉄技術』玉川大学出版部（1976）。
- 大橋周治「幕末明治製鉄史—補—安心院(アジム)の反射炉について」『金属』**46**(2)（1976.02）：49-54。
- 大橋周治「幕末明治製鉄史—補の2—福岡藩の反射炉について」『金属』**46**(2)（1976.04）：76-81。
- 大橋周治「幕末明治製鉄史—補遺3—土佐の反射炉」『金属』**46**(9)（1976.02）：55。
- 大橋周治「幕末明治製鉄史—補遺4—津藩に反射炉はなかった」『金属』**46**(9)（1976.11）：72-73。
- 大橋周治「幕末 武雄の鑄砲事業—秋帆と佐賀の接点として」『金属』**47**(6)（1977.06）：58-63。
- 大橋周治「金属分野における産業考古学の課題—鉄鋼の製錬・加工を中心に」『金属』**47**(10)（1977.10）：75-79。
- 大橋周治「欧州に鉄のふるさとを訪ねて-2-高炉と日本の近世たたらを考える」『金属』**49**(9)（1979.09）：64-69。
- 長島修「日本帝国主義下朝鮮における鉄鋼業と鉄鉱資源—上・下—」『日本史研究』通号 183（1977.11）：1-32；184（1977.12）：30-47。
- 長島修「戦前日本鉄鋼業と銑鉄輸入問題(上)(下)」『立命館経営学』**17**(3)（1978）：27-64；**18**(2)（1979）：33-59。
- 飯田賢一『日本鉄鋼技術史』東洋経済新報社（1979）。
- 飯田賢一『日本鉄鋼技術の形成と展開』国際連合大学（1979）。
- Ken'ichi Iida, *Origin and Development of Iron and Steel Technology in Japan*, United Nations Univer-

sity, 1980.

八幡製鐵所所史編さん実行委員会『八幡製鐵所 80 年史』新日本製鐵株式会社 (1980).

飯田賢一『近代鉄鋼技術の発展と労働力』国際連合大学 (1981).

潮見浩「たたら製鉄の歴史について」『化学史研究』第 17 号 (1981): 3.

長島修「1930 年代の日本鉄鋼業 (上) (中) (下): 日本鋼管株式会社の場合」『立命館経営学』**19**(6) (1981): 39-79; **20**(1) (1981): 35-68; **20**(2) (1981): 43-55.

長島修「日本における戦時鉄鋼統制の成立過程: 製鉄事業法成立の前提」『立命館経営学』**20**(3・4) (1981): 519-548.

長島修「日本における戦時鉄鋼統制の成立過程—製鉄事業法の成立」『立命館経営学』**20**(5/6) (1982): 61-87.

東京工業大学製鉄史研究会『古代日本の鉄と社会』平凡社 (1982).

飯田賢一『日本人と鉄—現代技術の源流と土壌—』有斐閣 (1982).

日本鉄鋼協会科学・技術史委員会製鉄ワーキンググループ編『わが国における酸素製鋼法の歴史』日本鉄鋼協会 (1982).

大橋周治『鉄の文明』岩波書店 (1983).

たたら研究会編『日本製鉄史論集』たたら研究会 (1983).

窪田蔵郎『製鉄遺跡』ニュー・サイエンス社 (1983).

野原建一「長野県における製鉄遺物の分布について—東北信地方を中心に (研究ノート)」『長野大学紀要』**4**(3・4) (1983.03): 121-127.

光永真一「古代の鉄生産—美作国におけるあり方」『考古学研究』**29**(4) (1983.03): 8-10; **30**(2) (1983.10): 73-84.

日本鉄鋼協会科学・技術史委員会製鉄ワーキンググループ編『原燃料から見たわが国製鉄技術の歴史』日本鉄鋼協会 (1984).

小島精一, 日本鉄鋼史編纂會編『日本鉄鋼史』大正前期篇—昭和第二期篇, 文生書院 (1984-85).

長島修『日本戦時鉄鋼統制成立史』法律文化社 (1986).

窪田蔵郎『鉄の民俗史』雄山閣出版 (1986).

昭和 61 年度たたら研究会大会富山大会実行委員会編『シンポジウム「北陸の鉄生産」: 基調報告要旨』たたら研究会 (1986).

野原建一「明治中期のたたら製鉄業の展開」『長野大学紀要』**7**(3・4) (1986.05): 1-13.

飯田賢一「日本鉄鋼技術の恩人たち: 初代会長野呂景義博士につらなる人びと」『鐵と鋼: 日本鉄鋼協會々誌』**73**(7) (1987): 751-760.

潮見浩 [ほか] 編『日本古代の鉄生産: 1987 年度たたら研究会大会資料』たたら研究会 (1987).

高橋一郎; 野原建一「古文書からみた山陰地方のたたら製鉄業」『金属』**57**(2) (1987.02): 50-57.

長島修『戦前日本鉄鋼業の構造分析』ミネルヴァ書房 (1987).

飯田賢一『人物・鉄鋼技術史』日刊工業新聞社 (1987).

山口県萩市『史跡萩反射炉保存整備事業報告書』(1987).

堀切善雄『日本鉄鋼業史研究: 鉄鋼生産構造の分析を中心として』早稲田大学出版部 (1987).

高橋一郎; 野原建一「古文書からみた山陰地方のたたら製鉄業」『金属』**57**(2) (1987.02): 50-57.

野原建一「古産業と技術の記録—信州の製鉄技術—」『金属』**57**(12) (1987.12): 50-55.

- 飯田賢一；後藤佐吉『製鉄 金属』筑摩書房（1988）。
- 飯田賢一『鉄の100年 八幡製鉄所』第一法規出版（1988）。
- 下川義雄『日本鉄鋼技術史』アグネ技術センター（1989）。
- 「〈特集〉金属と神々」『金属』58(6)（1988）。
- 大橋周治編著『幕末明治製鉄論』アグネ（1991）。
- 窪田蔵郎『鉄の文明史』雄山閣出版（1991）。
- たたら研究会編『日本古代の鉄生産』六興出版（1991）。
- たたら研究会編『たたら研究』復刻版，示人社，1号（1958.11）—32・33号（1992.10）。
- 葉山禎作『タタラ製鉄業の発展』中央公論社（1992）。
- たたら研究会国際シンポジウム実行委員会編『国際シンポジウム東アジアの古代鉄文化：その起源と伝播：1993年たたら研究会国際シンポジウム予稿集』たたら研究会（1993）。
- たたら研究会編『日本製鉄史論集：たたら研究会創立二十五周年記念論集』復刻版，示人社（1994）。
- 野原建一「近世～近代期のたたら製鉄業の展開」『化学史研究』第21巻（1994）：38-46。
- 楠本寿一「長崎製鉄所の舎密所について」『化学史研究』第21巻（1994）：90-92。
- 鎌谷親善「東北大学附属鉄鋼研究所—その設立と事業—」『化学史研究』第23巻（1996）：205-234。
- 飯島孝「川崎製鉄千葉製鉄所の建設をめぐる鞍山製鉄所の二つの流れ」『化学史研究』第24巻（1997）：103。
- 長島修「戦時下日本鋼管の海外進出—小型高炉建設方針を中心として」『立命館経営学』33(2)（1994.07）：1-43。
- 長島修「明治期鉄鋼問屋の成立と展開—大阪鉄商津田勝五郎商店の成立と展開」『経営史学』32(2)（1997.07）：1-26。
- 長島修「敗戦後の鉄鋼企業とその復興（1）（2）（3）日本鋼管株式会社の復興過程」『立命館経営学』36(4)（1997.11）：1-29；36(5)（1998.01）：11-34；37(1)（1998.05）：1-39。
- 野原建一「広島県比和町におけるたたら製鉄業の展開」『広島県立大学紀要』第8（2）（1997）。
- 奈倉文二著『兵器鉄鋼会社の日英関係史』日本経済評論社（1998）。
- 坂本浩太郎編纂『古代の製鉄遺跡：金津・芦原町と加賀地方』加越たたら研究会（1999）。
- たたら研究会編『製鉄史論文集：たたら研究会創立四〇周年記念』たたら研究会（2000）。
- 堀川一男『海軍製鋼技術物語—大型高級特殊鋼の製造技術の発展—』アグネ技術センター（2000）。
- 長島修『日本戦時企業論序説：日本鋼管の場合』日本経済評論社（2000）。
- 松尾宗次；下村泰人「鉄の歴史—鉄の人物史（1）野呂景義」『ふえらむ』5(1)（2000.01）：30-37。
- 育成委員会厚板技術史WG編『わが国における厚板技術史』日本鉄鋼協会（2001）。
- 日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会「鉄の歴史その技術と文化」フォーラム編『中澤護人記念シンポジウム：人と鉄』日本鉄鋼協会（2001）。
- 島津光夫「明治・大正時代の金属鉱山開発と鉱床学」『地質学史懇話会会報』第19号（2002）：25-34。
- 浜崎健児「明治の鉱物学教科書（和本）に影響をあたえたドイツ鉱物学書について」『地質学史懇話会会報』第19号（2002）：35-37。
- 長島修「官営製鉄所成立前史—官営釜石鉱山廃止以後」『立命館経営学』42(4)（2003.11）：23-36。
- 窪田蔵郎『鉄から読む日本の歴史』講談社学術文庫（2003）。
- 雀部実，館充，寺島慶一編『近世たたら製鉄の歴史』丸善プラネット（2003）。

- 光永真一『たたら製鉄』吉備人出版（2003）。
- 『旧集成館 熔鉱炉・反射炉跡（発掘調査報告書）』尚古集成館発行（2003）。
- 黒岩俊郎「日本の製鉄技術史と産業遺産」『専修大学社会科学研究所月報』498（2004.12）：1-33。
- 天辰正義 [ほか] 著『たたら：日本古来の製鉄』JFE 21 世紀財団（2004）。
- 野原建一「経済・経営史からみたたたら製鉄業」『ふえらむ：日本鉄鋼協会会報』9(7)（2004）：504-508。
- 薩摩のものづくり研究会編『薩摩藩集成館事業における反射炉・建築・水車動力・工作機械・紡績技術の総合的研究：薩摩のものづくり研究』薩摩のものづくり研究会（2004）。
- 長島修「外国人のみた創定期官営八幡製鐵所」『立命館国際研究』18(1)（2005.6）：49-68。
- 上岡一史『戦後日本鉄鋼業発展のダイナミズム』日本経済評論社（2005）。
- 日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会編『中国地方のたたら製鉄の成立と発展』日本鉄鋼協会（2005）。
- 「特集」鉄の技術と文化および循環型社会」『鐵と鋼：日本鉄鋼協会々誌』91(1)（2005）。
- 渡辺ともみ『たたら製鉄の近代史』吉川弘文館（2006）。
- 「特集 沖縄の鉄器文化」『たたら研究』45（2006）。
- 「特集 北海道の鉄器文化」『たたら研究』46（2006）。

陶磁器/窯業

- 『内國勸業博覽會窯業品審査報告』大日本窯業協會事務所（1904）。
- 大日本窯業協會編『日本窯業大觀』大日本窯業協會（1908）。
- 大日本窯業協會編『日本近世窯業史』大日本窯業協會（1916）。
- 『會津窯業史』會津陶磁器同業組合（1919）。
- 鹽田力藏『近代の陶磁器と窯業』大阪屋號書店（1929）。
- 『國產振興窯業博覽會報告書』愛知國產振興會（1929）。
- 江村恒一編著『大阪窯業株式會社五十年史』大阪窯業（1935）。
- 中沢岩太博士喜寿祝賀記念會編『中沢岩太博士喜寿祝賀記念帖』中沢岩太博士喜寿祝賀記念會（1935）。
- 東京工業大学窯業研究所編『東京工業大学窯業研究所要覽』東京工業大学窯業研究所（1952）。
- 日本化学会編著『鉍物と窯業の化学』大日本図書（1956）。
- 大阪商工会議所調査部編『大阪化学窯業の構造』大阪商工会議所調査部（1957）。
- 窯業大觀編集委員會編『発展するセラミックス：窯業大觀』窯業協會（1971）。
- 益井邦夫「蝦夷窯業史考—その成立と背景」『国学院雑誌』73(9)（1972.09）：30-41。
- 常滑市誌編さん委員會編『常滑窯業誌』常滑市（1974）。
- 愛知県立瀬戸窯業高等学校編『愛知県立瀬戸窯業高等学校 80 年史』愛知県立瀬戸窯業高等学校創立 80 周年記念行事委員會（1975）。
- 京都府立総合資料館編『陶磁器・窯業文献目録：故藤岡幸二氏旧蔵資料を含む』京都府立総合資料館（1977）。
- 三井弘三『概説近代陶業史』日本陶業連盟（1979）。
- 三井弘三『昭和陶業史余聞』中部経済新聞社（1980）。
- 松下亘編著『野幌窯業史』野幌窯業振興協會（1980）。
- 中山成基（香蘭社社史編纂委員會編）『有田窯業の流れとその足あと：香蘭社百年の歩み』香蘭社（1980）。
- 『茨城の窯業史』茨城県窯業指導所：茨城県窯業振興協會（1981）。

- 『大正・昭和の窯業』東濃西部歴史民俗資料館瑞浪陶磁資料館（1982）。
- 益井邦夫「喜作焼窯業史解明への考察」『国学院雑誌』83(10)（1982.10）：48-60。
- 『福井県窯業誌』福井県窯業誌刊行会（1983）。
- 村上正名『広島はやきもの：広島県窯業史序説』国書刊行会（1984）。
- 中村浩『古代窯業史の研究』柏書房（1985）。
- 鎌谷親善「京都市陶磁器試験場—その創立から国立移管まで—」『化学史研究』第32号（1985）：153。
- 鎌谷親善「明治初期における陶磁器業の近代化政策」『化学史研究』第35号（1986）：49-71。
- 『九十年の歩み・窯業関係資料集』京都市工業試験場（1986）。
- 益井邦夫「尚古園窯業史考序説—乾也と良助を巡って—」『国学院雑誌』87(12)（1986.12）：56-77。
- 山崎一雄「陶磁器の科学と歴史」『セラミックス』22(11)（1987）：934-938。
- 鎌谷親善「京都市陶磁器試験場—明治29年～大正9年—(I)」『化学史研究』第40号（1987）：97-115。
- 鎌谷親善「京都陶磁器試験場—明治29年～大正9年—(II)」『化学史研究』第41号（1987）：147-163。
- 鎌谷親善「日本陶磁器業における近代化と技術」『化学史研究』第16巻（1989）：147。
- 南邦男『近代日本の陶磁』平凡社（1990）。
- 『東日本における古代・中世窯業の諸問題：大戸窯検討のための「会津シンポジウム」』大戸古窯跡群検討会（1992）。
- 長崎県窯業技術センター編『長崎県窯業技術センター60年のあゆみ』長崎県窯業技術センター（1993）。
- 瀬戸市歴史民俗資料館編『明治時代の瀬戸窯業：時代を彩ったやきもの』瀬戸市歴史民俗資料館（1993）。
- 仲野泰裕「19世紀の窯業—伝統と西欧技術の受容—」『化学史研究』第21巻（1994）：152-171。
- 齋藤努「最新分析化学がさぐる土器・陶磁器の歴史」『セラミックス』30(7)（1995）：559-563。
- 京都市工業試験所窯業技術研究室『京都市陶磁器試験所総説00周年記念誌』京都市工業試験所（1997）。
- 『近世窯業遺跡データベース・近世窯業関係主要文献目録データベース』国立歴史民俗博物館（1998）。
- 大日本窯業協会編纂『日本近世窯業史：第4篇 硝子工業』復刻版，龍溪書舎（1998）。
- 『江戸・東京のやきもの：隅田川・江戸川流域の窯業史：平成11年度企画展』葛飾区郷土と天文の博物館（1999）。
- 島尾永康「中国陶磁の化学と芸術」『化学史研究』第27巻（2000）：119-120。
- 仲野泰裕「万国博覧会と陶磁技術」『化学史研究』第28巻（2001）：38-44。
- 植田哲也「陶磁器試験所の果たした役割」『化学史研究』第28巻（2001）：45-55。
- 森田直文「陶磁器製造技術の変遷」『化学史研究』第28巻（2001）：56-62。
- 松島茂「陶磁器産業と産業技術政策」『化学史研究』第28巻（2001）：63-66。
- 野上建紀『近世肥前窯業生産機構論：現代地場産業の基盤形成に関する研究』野上建紀（2002）。
- 小松隆史「近世信濃の窯業史研究」『金沢大学考古学紀要』26（2002）：76-106。
- 柴垣勇夫『東海地域における古代中世窯業生産史の研究』真陽社（2003）。
- 金谷町史編さん委員会編『志戸呂窯業史』金谷町役場（2004）。
- 全国シンポジウム「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会編『中世窯業の諸相：生産技術の展開と編年：全国シンポジウム』全国シンポジウム「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会（2005）。
- 関西陶磁史研究会編集『窯構造・窯道具からみた窯業：関西窯場の技術的系譜をさぐる：研究集会資料集』関西陶磁史研究会（2005）。

上原静「八重山諸島の窯業史における屋瓦の特質」『南島文化』**27** (2005) : 109-133.
東濃西部歴史民俗資料館瑞浪陶磁資料館編集『美濃近代窯業の記憶：幕末から明治新たな時代へ：特別展』
東濃西部歴史民俗資料館瑞浪陶磁資料館 (2005).
渡辺一『古代東国の窯業生産の研究』青木書店 (2006).

酒

加藤百一『旧式焼酎に関する研究』加藤百一 (1962).
坂口謹一郎『日本の酒』岩波新書 (1964).
篠田統「日本酒の源流」『風俗』**6**(4) (1967.03) : 1-6.
坂口謹一郎『古酒新酒』講談社 (1974).
柚木学『日本酒の歴史』雄山閣出版 (1975).
加藤辨三郎編；坂口謹一郎監修；加藤百一，村上英也，野白喜久雄，秋山裕一，佐藤信，菅間誠之助，山下
勝共著『日本の酒の歴史：酒造りの歩みと研究』研成社 (1977).
藤原隆男「近代日本酒造業史序論」『岩手史学研究』**62** (1977) : 1-24.
伊藤うめの「日本古代のタガネ飴とタガネ餅とカムタチ麴と日本酒」『風俗』**18**(1) (1979.12) : 39-65.
加藤百一「日本の酒の発掘」『月刊文化財』通号 196 (1980.01) : 18-24.
加藤百一「かんも・しょうちゅう (醸造と文化)」『日本醸造協会雑誌』**76**(3) (1981.03) : 183-187.
加藤百一「古の酒と今の酒」『日本醸造協会雑誌』**77**(10) (1982.10) : 683-684.
藤原隆男「明治大正期における酒造業体制」『研究年報 (東北大学) 経済学』44 卷 2 号 (1983) : 67-79.
藤原隆男「明治前期の酒造技術と酒造労働—岩手県柿帯村駒木酒造場の分析—」『岩手大学文化論叢』**1**
(1984) : 173-195.
伊藤うめの「原始日本酒とその原郷」『風俗』**23**(1) (1984.12) : 25-47.
藤原隆男「酒造検査制度成立の歴史的意義」『酒史研究』**2** (1985) : 23-45.
藤原隆男「近代的」酒造労働形成の系譜—「古典的」酒造労働から「近代的」酒造労働へ—『岩手大学文
化論叢』**2** (1986) : 113-144.
加藤百一『日本の酒 5000 年』技報堂出版 (1987).
鎌谷親善「伊丹満願寺屋酒醬油造伝 解説」『酒史研究』**5** (1987) : 31-47.
加藤百一「僧坊酒」『酒史研究』**7** (1988) : 1-38.
鎌谷親善「酒直千代伝法 解説」『酒史研究』**6** (1988) : 23-40.
加藤百一『酒は諸白：日本酒を生んだ技術と文化』平凡社 (1989).
吉田元「僧坊酒について」『密教学』通号 25 (1989) : 30-47.
吉田元「16 世紀寺院の発酵食品づくり」『日本醸造協会誌』**85**(3) (1990.03) : 167-171.
吉田元『日本の食と酒：中世末の発酵技術を中心に』人文書院 (1991).
上田誠之助「日本古代の酒づくりを想う：口嚙酒と醴」『醸酵工学会誌』**70**(2) (1992) : 133-137.
吉田元「御免関東上酒—埼玉の旧家の記録から」『日本醸造協会誌』**87**(2) (1992.02) : 116-123.
加藤百一「摂州伊丹満願寺屋伝—解説と翻刻—」『酒史研究』**11** (1993) : 39-73.
鎌谷親善「江戸時代初期における酒造技術」『化学史研究』第 21 卷 (1994) : 309-332.
市川次郎『東亜における酒と医療の起源』東亜文物懇話会 (1995).
鎌谷親善「江戸後期における酒造技術—灘酒の出現と特徴—」『化学史研究』第 22 卷 (1995) : 85-113.

- 鎌谷親善「御酒之日記について」『酒史研究』13（1995）：1-32.
- 鎌谷親善「御酒之日記—その解説と翻刻」『酒史研究』13（1995）：35-76.
- Chikayoshi Kamatani, “Sake Brewing and Its Records in Edo Japan,” *Historia Scientiarum*, 5（1995）：117-126.
- 坂口謹一郎先生追悼記念文集刊行委員会編『坂口謹一郎先生追悼記念文集』坂口謹一郎先生追悼記念文集刊行委員会（1996）.
- 袋屋孫六『童蒙酒造記（摂津）．寒元造様極意伝（摂津）』農山漁村文化協会（1996）.
- 上田誠之助「“しとぎ”と古代の酒」『日本醸造協会誌』91（7）（1996.07）：498-501.
- 西敏明「日本酒の変遷とその特質について：岡山の酒造と歴史」『岡山商大経営研究所報』17（1996）：81-91.
- 石川道子「江戸積み酒造家・小西家と出店の創設期」『酒史研究』通号14（1997.03）：1-26.
- 上田誠之助「“しとぎ”と古代の酒（その2）国栖（くず）の醴酒（こぎけ）を中心に」『日本醸造協会誌』92（10）（1997.10）：725-727.
- 鎌谷親善「『酒造手引草，伊丹酒造諸式之控』について—『日本山海名産図会』との関連において」『酒史研究』通号14（1997.03）：27-36.
- 鎌谷親善「小西新右衛門家『酒永代覚帳』について」『酒史研究』通号14（1997.03）：37-100.
- 鎌谷親善；石川道子「『酒造手引草 全』の解説と翻刻」『酒史研究』通号14（1997.03）：101-124.
- 鎌谷親善「近世日本の酒造技術—伊丹における酒造法を中心に」『酒史研究』通号15（1997.03）：1-103.
- 鎌谷親善；石川道子「『寒造酒屋永代記伝』の解説と翻刻」『酒史研究』通号15（1997.03）：105-117.
- 鎌谷親善；石川道子「『寒元酒伝記』の解説と翻刻」『酒史研究』通号15（1997.03）：118-152.
- 鎌谷親善「技術史における異分野間協力—『御酒之日記』をめぐって」『科学技術史』通号1（1997.12）：106-124.
- 坂口謹一郎『日本の酒文化（坂口謹一郎酒学集成1）』岩波書店（1997）.
- 鎌谷親善「近世日本における酒造り」『化学史研究』第24巻（1997）：183-184.
- 鎌谷親善「伊丹の酒—近世日本酒の原型—」『化学史研究』第24巻（1997）：191.
- 藤原隆男「自家用酒の製造禁止過程について—密造酒問題の歴史的背景—」『岩手史学研究』80（1997）：420-436.
- 吉田元『江戸の酒：その技術・経済・文化』朝日新聞社（1997）.
- 吉田元「江戸時代の酒づくり」『ヴェスタ』通号29（1997.09）：63-69.
- 上田誠之助「“しとぎ”と古代の酒（その3）全国の神社での“しとぎ”分布」『日本醸造協会誌』93（12）（1998.12）：947-950.
- 坂口謹一郎『醸酵と酒学（坂口謹一郎酒学集成5）』岩波書店（1998）.
- 上仲博「灘の酒と震災」『化学史研究』第25巻（1998）：20-22.
- 向山寛夫「旧満洲に残る「清酒」という日本酒」『問題と研究』28（2）（1998.11）：44-49.
- 大谷哲也「近世初期の酒造政策と奈良酒」『高円史学』通号15（1999）：15-33.
- 加藤百一「奈良・正暦寺の酒母製造免許交付」『日本醸造協会誌』94（7）（1999.07）：535-541.
- 藤原隆男『近代日本酒造業史』ミネルヴァ書房（1999）.
- 上田誠之助『日本酒の起源：カビ・麴・酒の系譜』八坂書房（1999）.
- 安藤優一郎「日本酒文化における濁酒醸造の歴史—清酒との比較から」『食生活科学・文化及び地球環境科

- 学に関する研究助成研究紀要』**16** (2000) : 65-72.
- 加藤百一「からさけ覚書」『酒史研究』通号16 (2000.02) : 33-56.
- 鎌谷親善「酒造用具としての桶と樽—近世酒造技術の創始との関連において」『酒史研究』通号16 (2000.02) : 1-32.
- 鎌谷親善「天保期 灘の千石蔵—御影千石酒造場帳 (天保6年) の解説と翻刻」『酒史研究』通号16 (2000.02) : 63-104.
- 落合功「広島酒と三浦仙三郎」『修道商学』**41**(2) (2001) : I-XVII.
- 加藤百一「鎌倉武者と酒」『酒史研究』通号17 (2001.2) : 1-29.
- 鎌谷親善「近世における日本酒—伊丹の酒の技術的特徴」『食品・食品添加物研究誌』**190** (2001) : 45-63.
- 鎌谷親善「近世における日本酒—伊丹の酒造業の構造と技術」『食品・食品添加物研究誌』**194** (2001) : 49-80.
- 鎌谷親善「創製期の南都諸白」『酒史研究』通号17 (2001.2) : 31-67.
- 鎌谷親善「史料 十返舎久『手製集酒編 手造酒法』—解説と翻刻」『酒史研究』通号17 (2001.2) : 69-81.
- 鎌谷親善「史料 十返舎久『手造気利酒』—解説と翻刻」『酒史研究』通号17 (2001.2) : 83-100.
- 鎌谷親善「『酒造仕事順立—文鳳堂雜纂 卷之四十七 飲食部』—解説と翻刻」『酒史研究』通号17 (2001.2) : 101-133.
- 吉田元「歴史手帖 日本酒この百年」『日本歴史』**632** (2001.1) : 53-55.
- 市川次郎「日本の酒—その起源と歴史」東亜文物懇話会 (2002).
- 江後廸子「大名家と酒—白杵藩稲葉家の『奥日記』に現われた酒」『酒史研究』通号18 (2002.2) : 65-73.
- 大森大陸「(講演) 合成清酒の歴史」『酒史研究』通号18 (2002.2) : 45-64.
- 鎌谷親善「元禄期の酒造法の検討—『本朝食鑑』と『和漢三才図会』を中心に」『酒史研究』通号18 (2002.2) : 1-44.
- 鎌谷親善「小西新右衛門家「酒永代覚帳 (2)」について」『酒史研究』通号18 (2002.2) : 87-188.
- 浦里延明「日本酒 (基礎編) : 日本酒の歴史と製造方法」『ペトロテック』**26**(8) (2003) : 653-656.
- 鎌谷親善「小西新右衛門家「酒永代覚帳 (3)」について」『酒史研究』通号19 (2003.3) : 57-183.
- 鎌谷親善「史料 翻刻 : 『酒造米手引』の解説と翻刻」『酒史研究』通号20 (2004.3) : 95-170.
- 藤原隆男「明治初年の洋酒産業移植論」『岩手大学文化論叢』**7** (2004) : 1-16.
- 吉田元「津軽の酒屋 : 凶作下の酒づくり」『種智院大学研究紀要』**5** (2004) : A37-A50.
- 吉田元「江戸時代の京都酒造業 (1)」『日本醸造協会誌』**99**(3) (2004) : 170-177.
- 吉田元「江戸時代の京都酒造業 (2) : 酒造技術」『日本醸造協会誌』**99**(4) (2004) : 232-238.
- 和島恭仁雄 ; 鎌谷親善「史料 翻刻 : 津国屋『永代帳』その一」『酒史研究』通号20 (2004.3) : 171-261.
- 和島恭仁雄 ; 鎌谷親善「史料 翻刻 : 津国屋『永代帳』その二」『酒史研究』通号21 (2005.3) : 55-93.
- 加藤百一「万葉の古代と酒 (1)~(7)」『日本醸造協会誌』**100**(2) (2005) : 113-124 ; **100**(3) (2005) : 175-183 ; **100**(4) (2005) : 270-279 ; **100**(5) (2005) : 344-352 ; **100**(6) (2005) : 426-434 ; **100**(7) (2005) : 497-510 ; **100**(8) (2005) : 564-578.
- 藤原隆男「大正期東北地方の濁酒密造と密造防止策」『酒史研究』**23** (2006) : 15-32.
- 吉田元「高粱酒」『種智院大学研究紀要』**7** (2006.3) : 96-107.
- 吉田元「軍政下奄美の酒 (1)~(2)」『日本醸造協会誌』**101**(11) (2006.11) : 862-866 ; **101**(12) (2006.12) :

935-940.

醤油/醸造

T. Isono, *On Shoyu*, Tokyo: The Department of Science in Tokio Daigaku, 1879.

大藤孝雄「ビール業界の歴史（醸界 70 年の歩み）」『日本醸造協会雑誌』**70**(7) (1975.07): 437-442.

二瓶孝夫「ハワイにおける日本酒・味噌・醤油の歴史, 1-3」『日本醸造協会雑誌』**73**(5) (1978.05): 346-350; **73**(6) (1978.06): 446-452; **73**(7) (1978.07): 542-549; **80**(11) (1985.11): 786-789; **80**(12) (1985.12): 838-842.

柚木学「伝統産業の歴史的背景」『日本醸造協会雑誌』**74**(4) (1979.04): 202-205.

大塚謙一「研究の歴史と展望（醸造試験所）（醸造試験所創立 75 周年記念講演集）」『醸造試験所報告』通号 151 (1979.12): 1-6.

北村芳彦「ビールの歴史的変遷と近年の製品動向」『日本醸造協会雑誌』**81**(10) (1986.10): 735-738.

山口和雄; 石井寛治編『近代日本の商品流通』東京大学出版会 (1986).

藤井宏志「山口県の酒造の歴史（わが郷土史）」『日本醸造協会雑誌』**82**(12) (1987.12): 881-888.

林玲子編『醤油醸造業史の研究』吉川弘文館 (1990).

長谷川彰『近世特産物流通史論：龍野醤油と幕藩制市場』柏書房 (1993).

鈴木ゆり子「醤油醸造と技術」『化学史研究』第 20 卷 (1993): 231-232.

中台忠信「キッコーマンにおける醤油醸造技術開発の歴史」『千葉県工業歴史資料調査報告書』第 4 号 (1995): 1-11.

國中明・稲森和夫「ヤマサにおける核酸系調味料・医薬品開発の歴史と醤油技術の進歩」『千葉県工業歴史資料調査報告書』第 4 号 (1995): 12-26.

林玲子・天野雅敏編『東と西の醤油史』吉川弘文館 (1999).

高木亨「明治期以降における醤油醸造業年表」『地域研究』**40**(2) (2000.03): 19-26.

藤重豊「近世、柳井の醤油醸造業の展開」『山口県地方史研究』通号 83 (2000.06): 1-14.

谷田部隆博「明治末～大正期の野田醤油醸造工の状況」『風俗史学』通号 10 (2000.01): 27-49.

高木亨「石川県の醤油醸造業集積地域」井出策夫編著『産業集積の研究』大明堂 (2002), pp. 150-163,

宮久保真紀「甲府城内葡萄酒醸造所について一国産ワインの発祥地甲府」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』通号 18 (2002): 55-68.

西太一郎「三和酒類の歴史と経営理念一時代の流れの中で」『日本醸造協会誌』**97**(8) (2002.8): 538-543.

上芝雄史「仕込み桶の歴史と展開：醤油，味噌そして食酢の桶」『日本醸造協会誌』**98**(7) (2003): 491-496.

高木亨「明治期以降における醤油醸造業の展開過程」『地域研究』**43**(2) (2003.3): 1-22.

林玲子『関東の醤油と織物 十八～十九世紀を中心として』吉川弘文館 (2003).

落合功「近世後期，江戸近郊農村における醤油醸造業の展開」『修道商学』**45**(1) (2004): 27-74.

落合功「戦時期，食品企業の満州進出について一満州ヤマサ醤油株式会社を例にして」『修道商学』**45**(2) (2005.2): 25-83.

高木亨「生産と流通からみた日本の醤油醸造業と醤油嗜好の地域性」『季刊地理学』**57**(3) (2005): 121-136.

林玲子・天野雅敏編『日本の味 醤油の歴史』吉川弘文館 (2005).

山下勝「愛知県における醸造の歴史」『食の科学』**329** (2005.7) : 16-27.

高木亨「第二次世界大戦前の金沢市大野町における醬油産地の展開過程」『歴史地理学』**48**(2) (2006.3) : 1-18.

塩

日本塩業研究会編『日本塩業の研究』[第1集]—第29集, 香川県塩業組合連合会 (1958-)—塩業組合中央会 (第4集-)—日本塩工業会 (第14集-) 第29集 (2005).

『日本塩業史』日本専売公社 (1958).

『戦後日本塩業史』日本専売公社 (1958).

日本塩業研究会『研究会結成記念論文集 日本塩業の研究』香川県塩業組合連合会塩業展望編集部 (1958).

平島裕正『塩』法政大学出版局 (1973).

日本塩業大系編集委員会編『日本塩業大系』17冊, 日本専売公社 (1974-1982).

(原始・古代・中世(稿)); (近代(稿)); (近世(稿)); (史料編・考古); (史料編・古代・中世・1); (史料編・古代・中世・1・補遺); (史料編・古代・中世・2); (史料編・近世・1); (史料編・近世・2); (史料編・近世・3); (史料編・近世・4); (史料編・近・現代・1); (史料編・近・現代・2); (史料編・近・現代・3); (史料編・近・現代・4); (特論・地理); (特論・民俗)

加茂詮『近代日本塩業の展開過程』北泉社 (1993).

村上正祥「19世紀の日本塩業」『化学史研究』第20巻 (1993) : 223-224.

村上正祥「製塩業」『化学史研究』第21巻 (1994) : 47-59.

落合功「江戸内湾塩業の展開と近世社会」『地方史研究』**45**(6) (1995.12) : 77-94.

落合功「小豆島塩業の展開と大坂城御詰塩」『ヒストリア』通号147 (1995.06) : 24-41.

落合功『江戸内湾塩業史の研究』吉川弘文館 (1999).

落合功「幕末～明治期における塩業労働者：備後国松永塩浜を例にして」『史学研究』**229** (2000) : 43-65.

落合功「「近世的瀬戸内塩業」の崩壊と塩業経営：備後国松永塩田を例にして」『社会経済史学』**65**(6) (2000) : 645-661, 727.

落合功「休浜同盟の展開と芸備塩田—「生口浜増稼一件」を素材として」『ヒストリア』通号170 (2000.06) : 24-49.

落合功「近世竹原塩業の成立と塩業労働者」『修道商学』**41**(1) (2000) : I-LX.

落合功「19世紀前半, 瀬戸内塩田における休浜思想の特質—増産思想から経営重視の思想へ」『日本経済思想史研究』**4** (2004.3) : 19-36.

アルカリ

鎌谷親善「幕末期著作にみる酸・アルカリ工業について」『化学史研究』第44号 (1988) : 147.

硝石

津田彦五郎『消石制法始末』[書写資料], [出版者不明], 嘉永4 [1851].

『硝石志』嘉永5 [1852] 写.

佐藤信淵『硝石製造辨』和泉屋半兵衛, 嘉永7 [1854].

伊藤圭介譯『萬寶叢書硝石篇 3巻』巻上, 巻中, 巻下, 美濃屋清七, 藤屋禹三郎, 岡田屋嘉七, 嘉永7

[1854].

櫻寧居士『硝石製煉法』丁子屋平兵衛，文久3 [1863].

高松豊吉，丹波敬三，田原良純編纂『沃度，沃度加里及其侬沃度製品；臭素及臭素鹽類；硝石及亞硝酸加里；黃色血鹵鹽及爾餘ノ藏化合物』丸善：南江堂（1895）.

東洋拓殖株式會社編『智利硝石』東洋拓殖株式會社（1918）.

『遠西觀象図説；本草正譌；本草正々譌；本草正々譌刊誤；木曾採藥記；日用藥品考；算髓；算法笈隱；粉砲考；硝石編；写真鏡図説』名古屋市教育委員会（1963）（名古屋叢書/名古屋市蓬左文庫編；第13巻；科学編）.

山本健麿「五ヶ山の塩硝」『富山大学教育学部紀要』**15**（1967）：107-113.

南坊平造「越中五箇山に塩硝を訪ねて」『銃砲史研究』**7**（1969）：15-19.

伊丹政太郎「加賀藩五ヶ山羽馬家塩硝史料について〔付史料（幕末期文書）翻刻〕」『立命館文學』通号304（1970.10）：40-74.

鎌谷親善「塩硝づくりの近代化」『化学と工業』**29**(7)（1976.07）：563-565.

平野元亮 [著]. 佐藤信淵 [著]. 伊藤圭介 [著]『硝石製煉法. 硝石製造弁. 硝石篇』恒和出版（1978）（江戸科学古典叢書；12）.

「塩硝製法再開発のあけぼの」『銃砲史研究』**109**（1979）.

川越重昌「鎖国時代の硝石考—その結晶率について」『工業火薬協会誌』**42**(4)（1981.08）：250-253.

遠藤聡「塩硝の道（地域だより・北陸）」『道路』通号574（1988.12）：52-55.

佐藤信淵『硝石製造辨』白亜書房（1991）（日本鉱業史料集/日本鉱業史料集刊行委員会編；第14期 近世篇 下）.

中西孝；日吉芳朗；本浄高治「加賀藩の産業・工芸の史跡と遺品」『化学と教育』**39**(4)（1991）：420-424.

粕谷利一「藩政時代の硝石の収量とその化学分析」『銃砲史研究』**242**（1992）：30-57.

『童蒙酒造記；造酒得度記；醬油製造方法；製油録；樟腦製造法；金吹方之図訳書；硝石製練法；鼓銅図録；佐渡物産志；運材図會』科学書院，霞ヶ関出版（発売）（1992）（近世歴史資料集成；第2期；第4巻. 日本産業史資料/浅見恵，安田健訳編 4. 農産製造・林業及鉱山・冶金）.

川越重昌「19世紀の日本硝石・火薬技術」『化学史研究』第20巻（1993）：225-226.

鎌谷親善「江戸時代における火薬について—硝石を中心に—」『化学史研究』第21巻（1994）：101-102.

高田善太郎編『塩硝(硝石)と黒色火薬全国資料文庫収蔵総合目録』平村役場（1995）.

高田善太郎企画・編集『塩硝(硝石)と黒色火薬全国資料文庫収蔵総合目録資料追加目録』平村役場（1998）.

塩硝の道検証委員会編『加賀藩塩硝をたどる歴史の道』金沢市崎浦公民館（2001）.

塩硝の道研究会編『塩硝の道：五箇山から土清水へ』塩硝の道研究会（2002）.

板垣英治「加賀藩の火薬 1. 塩硝及び硫黄の生産」『日本海域研究』**33**（2002）：111-127.

佐藤敬子『幕末に八幡宿の百姓が製産した硝石』浅科村教育委員会（2003）.

馬路泰蔵「白川郷における江戸時代の硝石生産に関する技術史研究1—焰硝土およびその原料の成分からみた硝化菌による硝石生産の実態—」『化学史研究』第32巻（2005）：75-84.

馬路泰蔵「白川郷における江戸時代の硝石生産に関する技術史研究2—硝酸の抽出効率からみた焰硝土による硝石の生産性—」『化学史研究』第32巻（2005）：137-143.

馬路泰蔵「白川郷における江戸時代の硝石生産に関する技術史研究3—焰硝土中の硝酸体Nに対する人尿Nの寄与率の推定—」『化学史研究』第33巻（2006）：1-14.

- 板垣英治「硝石の舎密学と技術史」『金沢大学文化財学研究』8 (2006) : 19-57.
中西崇「近世の塩硝・硫黄生産と火薬製造」『史観』154 (2006) : 17-36.
馬路泰蔵・馬路明子『床下から見た白川郷：焰硝生産と食文化から』風媒社 (2007).

火 薬

- 西沢勇志智編著『日本火術考』聚芳閣 (1927).
秀島成忠編『佐賀藩銃砲沿革史』肥前史談会 (1934) ; 原書房 (明治百年史叢書 第156巻) (1972).
西澤勇志智『日本火術薬法之巻』東學社 (1935).
松原宏遠『下瀬火薬考』北隆館 (1943).
松原宏遠『下瀬火薬發明記』葛城書店 (1944).
宮本又次「福岡藩に於ける幕末の新事業」『経済史研究』30(2) (1943) : 64-82.
大阪市編『重要文化財大阪城千貫櫓・焰硝蔵・金蔵 (附乾櫓) 修理工事報告書』大阪市 (1961).
石崎直義「加賀藩の五箇山支配の成立と焰硝生産」『北陸史学』通号18 (1970) : 53-62.
川越重昌「本多利明の焰硝基源論」『 (蘭学資料研究会) 研究報告』 (1972).
須賀操平「加賀藩における火薬の歴史」『化学史研究』第11号 (1979) : 14-15.
『松森焰硝蔵跡』泉市教育委員会 (1984).
太田弘毅「倭寇をめぐる焰硝と硫黄と火薬」『芸林』34(4) (1985.12) : 39-64.
宇田川武久『鉄砲伝来』中公新書 (1990).
小田原市教育委員会編『小田原城焰硝曲輪：都市計画道路栄町・城内線改良に伴う発掘調査』小田原市教育委員会 (1991).
太田弘毅「倭寇による焰硝の密輸入—中国から日本へ」『芸林』45(3) (1996.08) : 2-26.
和田正人「史料紹介 和田弥右衛門家文書より—焰硝製造に関わって」『岐阜県歴史資料館報』通号21 (1998.03) : 112-123.
布引敏雄「部落史の窓 (15)—焰硝製造と幕末の被差別部落民」『部落解放研究』通号122 (1998.06) : 110-114.
畑大介「焰硝蔵の成立をめぐる」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』通号9 (1999) : 247-264.
川崎譲司「長興寺村焰硝蔵場の建設」『大阪の歴史』通号53 (1999.06) : 95-107.
西ヶ谷恭弘「城郭解体学 (36) 御金蔵・焰硝蔵・船蔵」『歴史と旅』27(7) (2000.05) : 208-211.
小池重喜『日本海軍火薬工業史の研究』日本経済評論社 (2003).

砂 糖

- 勸農局編『製糖試験録』内務省勸農局 (1880).
『大日本製糖會社の整理經過及會社内容に就き藤山社長の説明』野村商店調査部 (1914).
黒野張良「製糖の神齋藤定雋翁：一名製糖沿革史」好學書院 (1928).
水田榮雄編輯『製糖會社要覽』再版，日本糖業聯合會 (1933).
『臺灣製糖株式會社々況概要』臺灣製糖 (1934).
中村誠司編輯『製糖會社要覽』3版，日本糖業聯合會 (1936).
早川孝太郎「大藏永常と製糖技術」『社會經濟史學』6(7) (1936) : 829-847.
伊藤重郎編『臺灣製糖株式會社史』臺灣製糖株式會社 (1939).

- 岡田唯『讃岐製糖史』鎌田共済会（1940）。
- 鎌田久明「讃岐製糖業：幕末期の一搾屋を中心に」『社会経済史学』25(6)（1960）：501-515。
- 糖業協会編『近代日本糖業史』上巻，下巻，勁草書房（1962-97）。
- 山川充夫「沖縄の糖業地域—特に宮古島における製糖工場の甘蔗栽培地域の支配機構とその空間配置について」『地理学報告』通号 35（1970.11）：21-27。
- 大庭景利「四国製糖史」『高知大学教育学部研究報告』第2部 通号 24（1972）：1-14。
- 大庭景利「四国製糖史」『四国学院大学論集』通号 31（1974.12）：82-103。
- 萩原茂「熊毛地域に於ける糖業の発展（II）：再興後自家製糖期の糖業」『鹿児島大学農学部学術報告』31（1981）：179-193。
- 木下圭三「江戸時代の製糖についての一考察」『化学史研究』第32号（1985）：158。
- 木下圭三・田中和男「天保以後の日本の製糖法について」『化学史研究』第36号（1986）：136。
- 木下圭三・田中和男「江戸時代および明治初期の砂糖の製造について（第1報）—気候の重要性と肥料の使用法について—」『化学史研究』第43号（1988）：53-62。
- 清水俊秀『露・和製糖技術用語集』清水俊秀（1988）。
- 仙石鶴義「和製砂糖開産史の研究—池上幸豊の製糖法伝法を中心に」『法政史学』通号 43（1991.03）：78-97。
- 落合功「近世砂糖業から見た幕府国産化政策の特質」『社会文化史学』通号 30（1993.02）：56-72。
- 坂本守央「井上甚太郎と中江兆民—明治期の製糖業をめぐる—」『史叢』通号 50（1993.03）：137-143。
- 植村正治「讃岐製糖技術史（I）～(III)」『流通科学大学論集，経済・経営情報編』2(1)（1993）：73-95；2(2)（1994）：65-130；3(1)（1994）：77-115。
- 植村正治「近代製糖技術史（I），(II)」『流通科学大学論集，経済・経営情報編』3(2)，69-110，1995；4(1)（1995）：63-120。
- 植村正治「江戸・明治期を通してみた製糖技術史の視角：1700-1900年」『流通科学大学論集，経済・経営情報編』5(1)（1996）：133-171；5(2)（1997）：121-150。
- 保坂秀明「技術史 製糖機械」『食品加工技術』17(2)（1997.06）：119-134。
- 植村正治『日本精糖技術史 —1700～1900—』清文堂出版（1998）。
- 飯高伸五「日本統治下マリアナ諸島における製糖業の展開—南洋興発株式会社の沖縄県人労働移民の導入と現地社会の変容」『史学』69(1)（1999.08）：107-140。
- 植村正治「台湾製糖の設立—資本と技術の結合」『経営史学』34(3)（1999.12）：1-22。
- 荒尾美代「ベトナム中部における白砂糖生産法—17・8世紀における中国・日本の製糖との比較研究—」『昭和女子大学文化史研究』4（2000）：80-90。
- 落合功「近世における砂糖貿易の展開と砂糖国産化」『修道商学』42(1)（2001）：405-454。
- 荒尾美代「宝暦(1751-1763)年間における長府藩の砂糖生産方式について」『化学史研究』第30巻（2003）：205-217。
- 西原雄次郎編；昭和製糖株式会社『新高略史，昭和製糖株式会社十年誌』ゆまに書房（2003）（社史で見る日本経済史；植民地編；第16巻）。
- 荒尾美代「田村元雄（1718-1776）の白砂糖生産について—「覆土法」を中心として—」『化学史研究』第31巻（2004）：268-278。
- 宇佐美尚穂「讃岐糖業近代化への試み—志度製糖場」『都女子大学大学院文学研究科研究紀要，史学編』3

(2004) : 35-58.

久保文克「近代製糖業における生産・流通・消費の錯綜性—糖業連合会をめぐる協調と競争」『経営史学』**40**(3) (2005) : 62-66.

竹野学「戦時期樺太における製糖業の展開—日本製糖業の「地域的发展」と農業移民の関連について」『歴史と経済』**48**(1) (2005.10) : 1-17.

「現代糖業技術史 精製糖業編 (1) 第二次大戦終了以後」『精糖技術研究会誌』**53** (2005.12) : 25-53.

水田丞「奄美大島製糖史における慶応年間白糖製造工場の建築と技術：イギリス資本から見た集成館事業の研究 (3)」『日本建築学会計画系論文集』**610** (2006) : 177-184.

サ ラ シ 粉

宗田一「わが国最初のサラシ粉製造」『化学史研究』第21号 (1982) : 154-160.

セ メ ン ト

鎌谷親善「官営事業と化学工業—セメント工業」『経済経営論集』通号71 (1974.01) : 49-72.

鎌谷親善「セメント工業の確立と技術」『東洋大学経済経営研究所研究報告』通号7 (1974.03) : 131-155.

芝哲夫「明治初期のセメント製造にたずさわった化学技術者鈴木儀六」『化学史研究』第34巻 (2007) : 120.

硫 酸

鎌谷親善「日本における硫酸工業のはじまり—造幣寮硫酸製造所—」『化学史研究』第1号 (1974) : 11-22.

鎌谷親善「造幣寮における最初の硫酸工場について」『科学史研究』第2期14 (通号115) (1975.9) : 118-127.

鎌谷親善「フインチの雇入れをめぐって—造幣寮硫酸工場との関連で—」『化学史研究』第3号 (1975) : 11-17.

鎌谷親善「造幣局硫酸製造所における事業の展開—明治8~18年—」『化学史研究』第16号 (1981) : 8-21.

鶴田利行「硝酸式硫酸製造プロセスの盛衰」『化学史研究』第22巻 (1995) : 83.

藍

鎌谷親善「藍の製造技術史に関する序章」『経営論集』**1** (1975) : 77-88.

大作勝・瀬田久男「藍 (青藍)—インジゴの研究を通して見た構造化学史の一断片」『化学史研究』第7号 (1978) : 27-31.

鎌谷親善「阿波藍, とくにスクモ製造技術の史的展開について (I) (II)」『化学史研究』第24号 (1983) : 95-110; 第25号 (1983) : 127-139.

鎌谷親善「明治期日本における伝統技術の変容：阿波藍の栽培・製造」『経営論集』**31** (1988) : 43-75.

ソーダ工業

日本ソーダ工業史編纂委員会編著『日本ソーダ工業史』日本ソーダ工業会 (1952).

『グルタミン酸ソーダ工業協会拾周年記念史』グルタミン酸ソーダ工業協会 (1958).

『主要産業の変遷』川崎図書館 (1962-1963).

- 「ソーダ工業と技術の展開」『経済経営論集（東洋大学経済経営研究所）』通号 62（1971.12）：119-155.
関西地区ソーダ技術研究懇話会 30 年の歩み編集委員会編集『関西地区ソーダ技術研究懇話会 30 年の歩み』
関西地区ソーダ技術研究懇話会（1981）.
日本ソーダ工業会編『日本ソーダ工業百年史』日本ソーダ工業会（1982）.
鎌谷親善「日本におけるソーダ工業のはじまり」『化学史研究』第 20 号（1982）：XII.
慈道裕治「ソーダ工業と食塩電解法—その構造的・歴史的把握をめぐって」『立命館大学人文科学研究紀要』通号 41（1986.03）：185-215.
勝村龍雄『ソーダ工業製法転換の波濤を越えて』化学工業日報社（1994）.
東庄アンモニア技術同好会『クロード 東洋高压アンモニア合成技術の変遷』（非売品）（1994）.
徳田晋吾・勝村龍雄「日本における苛性ソーダの製法転換とその社会的背景」『化学史研究』第 23 巻（1996）：311-331.
旭硝子千葉工場アンモニア・ソーダ塩安記念誌編集委員会編『アンモニア・ソーダ塩安 40 年のあゆみ』旭硝子千葉工場（1997）.
鎌谷親善「日本のソーダ工業 100 年」『化学史研究』第 24 巻（1997）：101.
飯島孝「ソーダ工業の製法転換と第三水俣病」『化学史研究』第 25 巻（1998）：89-90.
佐藤公彦「イオン交換膜法苛性ソーダの製造」『化学史研究』第 31 巻（2004）：140-143.
宮本真樹「日本における水銀法電解ソーダ工業技術の歴史（1）」『化学史研究』第 32 巻（2005）：235-245.
宮本真樹「日本における水銀法電解ソーダ工業技術の歴史（2）」『化学史研究』第 33 巻（2006）：15-27.
鎌谷親善「わが国ソーダ工業の技術と社会 第 1 部 電解法ソーダ工業の創始期（1）」『ソーダと塩素』57（9・10）（2006）：211-231.
木村達人；梅村和郎；斉藤義彦他「食塩電解用イオン交換膜 Flemion 開発の歴史」『ソーダと塩素』57（3・4）（2006）：45-54.

その他化学物質

- 宗田一「伊勢白粉とソッピル・カロメル製造」『化学と工業』29（8）（1976.08）：682-684.

B. 時 代 別

西洋との接触前

錬金術/錬丹術

- 松田寿男「古代東北日本の開発と水銀鉱床の役割—統「丹生」考」『古代学』8（1）（1959.03）：8（2）（1959.07）.
松田寿男「古代西北日本の水銀文化」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』通号 5（1959.11）.
松田寿男「紀伊における丹生都比売祭祀」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』通号 7（1961）.
松田寿男「丹生明神と高野明神」『史観』通号 63・64（1962.03）：11-41.
吉田光邦『錬金術』中央公論社新書（1963）.
松田寿男「古代山陽道の水銀文化」『古代学』12（4）（1966.02）：228-243.
松田寿男「宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題」『東洋学報』48（4）（1966.10）：62-95.
松田寿男「装飾古墳と水銀文化」『古代学』13（3・4）（1967.03）：197-203.
松田寿男「大仁保神社を主題とする丹生の研究」『古代学』15（2）（1968.12）：82-100.

- 松田寿男『丹生の研究—歴史地理学から見た日本の水銀』早稲田大学出版部（1970）。
- 吉田光邦「錬金術と錬丹術（工芸史雑筆-9-）」『日本美術工芸』通号 422（1973.11）：48-55。
- 内藤正敏『ミイラ信仰の研究—古代化学からの投影』大和書房（1974）。
- 矢嶋澄策；中村忠晴「古代の朱色塗料と辰砂について」『早稲田大学教育学部学術研究 生物学・地学編』通号 24（1975.12）：1-11，図 4 p.
- 松田寿男『古代の朱』学生社（1975）；ちくま学芸文庫（2005）。
- 市毛勲『朱の考古学—日本古代朱の史的研究』雄山閣（1975）。
- 深沢武雄「古代工人史紀行・技術の神々-10-水銀の女神—朱砂採鉱と丹生一族の誕生」『技術と人間』5(2)（1976.02）：127-135。
- 谷川建一『青銅の神の足跡』集英社（1979）。
- 内藤正敏・松岡正剛『古代金属国家論』工作舎（1980）。
- 佐藤任『密教と錬金術』勁草書房（1983）。
- 矢嶋澄策「日本の古い時代に使われた水銀について」『地学研究』33(7~12)（1983.12）：321-340。
- 谷川健一『鍛冶屋の母』講談社学術文庫（1985）；河出書房新社（2005）。
- 吉田光邦『工芸の社会史：機能と意味をさぐる』日本放送出版協会（1987）。
- 田中久夫『金銀島日本』弘文堂（1988）。
- 佐藤任「仏教と科学—空海の密教と科学」『講座科学史 4 日本科学史の射程』（培風館，1989）：41-60。
- 谷川健一編『金属の文化誌』三一書房（1991）。
- （新編砂金掘り物語/脇とよ；北辺のゴールドラッシュ/日塔聡；日本産水銀の史的研究/大西源一；日本水銀鉱業発達史/矢嶋澄策；日本水銀鉱床の史的考察/矢嶋澄策；山陰の鑛/白石昭臣編；鉄と琉球/城間武松編）
- 佐藤任『空海と錬金術：金属史観による考察』東京書籍（1991）。
- 石田行雄『不老不死と薬—薬を求めた人間の歴史』築地書館（1992）。
- 邦光史郎『朱の伝説：古代史の謎』集英社（1994）。
- 小西正彦「創建時東大寺大佛の鍍金に使われた金と水銀の量について」『計量史研究』24(2)（2002.12）：91-110。
- 池口恵観；藤原肇「（特別対談）若き日の修験者・空海のコスモロジーと錬金術 池口恵観（高野山真言宗 伝灯刀大阿闍梨）VS 藤原肇（フリーランス・ジャーナリスト）」『財界につぼん』36(6)（2004.6）：24-29；36(7)（2004.7）：28-33。
- 田中八郎『大和誕生と水銀：土ぐもの語る古代史の光と影』彩流社（2004）。

『大同類聚方』

- 大神神社史料編修委員会『校注大同類聚方』大神神社史料編修委員会（1979）。
- 槇佐知子『大同類聚方：全訳精解』2冊，平凡社（1985）。
- 中村昭「流布本『大同類聚方』における麻疹と痘瘡」『日本医史学雑誌』32(3)（1986.07）：268-280。
- [安倍真直，出雲広貞原著]；槇佐知子全訳精解『大同類聚方』5冊，新泉社（1992）。
- 槇佐知子『病から古代を解く：『大同類聚方』探索』新泉社（1992）。
- 後藤志朗「『大同類聚方』の問題点—同撰—について」『日本医史学雑誌』42(4)（1996）：657-659。
- 後藤志朗「『勅撰真本大同類聚方』について」『日本医史学雑誌』43(1)（1997）：85-99。

- 後藤志朗「新発見『大同類聚方』に関する大同三年五月三日の詔文」『日本医史学雑誌』**45**(2) (1999)：160-161.
- 昭和漢方生薬ハーブ研究会編『古代出雲の薬草文化：見直される出雲薬と和方』出帆新社（2000）.
- 榎佐知子『くすり歳時記：古医学の知恵に学ぶ』筑摩書房（2000）.
- 後藤志朗「佐藤方定の発見した『大同類聚方（延喜本・寮本）』の上表文について」『日本医史学雑誌』**46**(2) (2000)：268-269.
- 鳥居塚和生；後藤志朗；根本幸夫；平井康昭；伊田喜光「『勅撰真本大同類聚方』にみる出雲由来薬方に関する研究」『日本東洋医学雑誌』**51**(6) (2001)：189.

西洋との接触後

江戸時代

蘭学/洋学史

- 大槻玄沢（源昌綱，孔平信敏序；桂川甫周跋）『蘭学階梯』松本平助，天明8（1788）.
- 神田充『蘭學實驗』若山屋茂助（発兌），嘉永元 [1848].
- 可野亮鉦〔編譯〕『蘭學獨案内』（1856）.
- 柳河春三輯『袖珍洋學便覧』慶應2 [1866].
- 柳川春三著；篠崎隆由序；篠崎礼卿，印東玄得同校；英学部『洋学指針』大和屋喜兵衛（発売），慶応3（1867）.
- 松岡文橘序；樵雲逸史跋；春澄齊英流鐫『掌中洋学童子訓』小川柳影軒（1871）.
- 柴田清顯編述；二編英学部『洋学指針』大和屋喜兵衛（発兌）（1871）.
- 小宮山綏介『洋学大家列伝』博文館（1897）.
- 魚澄総五郎『新文明の源流：日本洋学の発達』赤城正蔵（1914）.
- 武藤長平『鎮西洋學史論』（1915）.
- 〔司馬江漢著〕；佐藤信淵写『蘭學大道編』報効義會（1920）.
- 大槻如電『新選洋學年表』大槻茂雄（1927）.
- 京都市立西京商業高等学校編『京都市立西京商業高等学校平野文庫所蔵洋学関係資料目録』京都市立西京商業高等学校（1928）.
- 大槻如電『新撰洋學年表』大槻茂雄，六合館（發賣），開成館（發賣）（1927）.
- 長井石峰『蘭學大家三瀬諸淵先生』不偏閣（1928）.
- 杉田玄白（野上豊一郎校註）『蘭學事始』岩波文庫（1930）.
- 板沢武雄『蘭学の発達』岩波書店（1933）.
- 堀川柳人編『尾張蘭学者考』安藤次郎（1933）.
- 出田新『萬里先生と蘭学：八十五年祭に際し再檢』宇佐郡史談會（1936）.
- 村上一郎『蘭學者木村軍太郎傳』村上一郎（1937）.
- 花園兼定『洋學百花：隨筆』ヘラルド雜誌社（1939）.
- 高橋貪一『洋學論』三笠書房（1939）.
- 板澤武雄『杉田玄白の蘭學事始』日本放送出版協會（1940）.
- 山岸光宣編『幕末洋學者歐文集解説』弘文莊（1940）.
- 今村明恒『蘭學の祖今村英生』朝日新聞社（1942）.

- 藤森成吉『若き洋學者』日新書院（1942）.
- 乙竹岩造『蘭學者の日本精神』社會教育協會（1943）.
- 住彦次郎『蘭學旋風記』大衆文藝社（1943）.
- 竹内運平氏口述『佐々木元俊先生：津輕蘭學の始祖種痘普及の恩人』大日本同志会青森県支部（1943）.
- 緒方富雄『蘭學のころ』弘文社（1944）.
- 白川今朝晴『蘭学』目黒書店（1944）.
- 沼田次郎『出島：日本とオランダの関係』大化書房（1947）.
- 緒方富雄『蘭學のころ』弘文社（1948）.
- 杉本勲「天動説から地動説」『日本歴史』通号14（1949.03）：11-22.
- 沼田次郎「蘭学から英学へー上・下ー幕末洋学史の一節」『日本歴史』通号14（1949.03）：30-35；通号15（1949.04）：45-51.
- 杉田玄白（和田信二郎校定）『校定蘭学事始』東西医学社（1950）.
- 杉田玄白（緒方富雄訳）『蘭学事始』学風書院（1950）.
- 沼田次郎『幕末洋学史』刀江書院（1950）.
- 杉本勲「沼田次郎著『幕末洋学史』」『史学雑誌』60(4)（1951.04）：60-64.
- 村井益男『洋學論』中央公論社（1953）.
- 杉本勲「禁書令下の西洋文化」『日本歴史』通号59（1953.04）：20-25.
- 蘭學資料研究会編『洋學ことはじめ展：蘭學の諸系列と江戸幕府舊藏本』蘭學資料研究会（1954）.
- 藤林普山先生景仰会編『藤林普山先生傳：蘭學の泰斗』藤林普山先生景仰会（1957）.
- 有馬成甫『西學と蘭學』有馬成甫（1958）.
- 杉本勲「伊藤東涯の実学研究」『日本大学史学会研究彙報』通号2（1958.12）.
- 小松原濤編『日本洋学史料』上，龍船堂（1959）.
- 山崎佐『会津藩洋学発達史』[会津史談会]，[1959].
- 杉本勲「蘭学事始」『歴史教育』6(12)（1958.10）.
- 小松原濤編『日本洋学史料：下；澁川先祖書』竜船堂（1959）.
- 杉田玄白（緒方富雄訳）『蘭學事始』好学社（1959）.
- 『蘭学時代の科学書展：出品目録』京都大学附属図書館（1960）.
- 片桐一男編『著訳書を持つ蘭学者名簿』蘭学資料研究会（1960）.
- 杉本勲『伊藤圭介』吉川弘文館（1960；新装版，1980）.
- 沼田次郎『洋学伝来の歴史』至文堂（1960）.
- 『上毛の蘭学』蘭学資料研究会（1960）.
- 蘭学資料研究会編『大槻俊斎先生建碑記念蘭学・医史学資料展示出陳目録』蘭学資料研究会（1960）.
- 杉本勲「歴史教育と科学史」『日本歴史』通号147（1960.09）.
- 杉本勲「伊藤圭介の実学の性格」『日本大学人文科学研究所研究紀要』通号2（1960.03）.
- 有馬成甫『武雄の蘭学』武雄市教育委員会（1962）.
- 福島義一『徳島県（藩政時代）：洋学・本草学・医学の歴史』福島義一（1962）.
- 大槻如電『新撰洋学年表』再版，柏林社書店（1963）.
- 蘭学資料研究会編『板沢武雄博士と蘭学』蘭学資料研究会（1963）.
- 内藤虎次郎著；服部之総著；杉田玄白；森銑三著『日本文化史研究．黒船前後．蘭学事始．おらんだ正月』

- 平凡社世界教養全集（1963）。
- 静岡県立中央図書館英文庫編『洋学資料展目録：英文庫所蔵：徳川幕府旧蔵本を主として』静岡県立中央図書館英文庫（1964）。
- 佐藤昌介『洋学史研究序説：洋学と封建権力』岩波書店（1964）。
- 杉本勲「近世後半期の百科事典について」『日本大学史学会研究彙報』通号 8（1964.12）：17-28。
- 杉本勲「元禄期諸科学の成立」『歴史教育』12(10)（1964.10）。
- 東京大学総合図書館編『蘭学資料展示書目：「蘭学事始」完成百五十周年記念』東京大学総合図書館（1965）。
- 『蘭学事始：150 年記念展』蘭学事始百五十年記念会（1965）。
- 今泉源吉『蘭学の家桂川の人々』[正篇]，続篇，最終篇，篠崎書林（1965-1969）。
- 木崎良平；井田好治共編『漂海紀聞：文化九-十三年薩摩永寿丸カムチャツカ漂流記：附・玉里文庫所蔵洋学関係書籍目録』鹿児島大学教養部歴史研究室（1965）。
- 沼田次郎『洋学伝来の歴史』増補版，至文堂（1966）。
- 岩治勇一『大野藩における洋学教育について』（1966）。
- 金沢市立図書館編『幕末から明治までの加賀洋学展解説目録』金沢市立図書館（1966）。
- 杉本勲「近世以前科学史研究の必要性」『日本歴史』通号 212（1966.01）：66-70。
- 古賀十二郎（長崎学会編）『長崎洋学史』上巻，下巻，続編，長崎文献社（1966-68）。
- 福井県立大野高等学校編『福井県立大野高等学校所蔵洋学関係書目録』福井県立大野高等学校（1966）。
- 園部昌良『蘭学資料としての「Atlas nouveav」と「輿地図編小解」』園部昌良（1967）。
- 山口啓二「講演」『松平定信と蘭学』楽翁公遺徳顕彰会：東京都慰霊協会（1967）。
- 杉本勲「筑前蘭学事始考—青木興勝の事歴を通じて」『九州文化史研究所紀要』通号 12（1967.03）：23-79。
- 京都市立西京商業高等学校図書館編『洋学関係資料解題：京都市立西京商業高等学校所蔵』京都市立西京商業高等学校（1967）。
- 斉藤静『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』篠崎書店（1967）。
- 有坂隆道編『日本洋学史の研究』創元社（1968）。
- 小川鼎三『解体新書：蘭学をおこした人々』中公新書（1968）。
- 影山昇『伊予諸藩にみる蘭学需要の系譜：宇和島藩・大州藩・松山藩・西条藩を中心として』愛媛大学教育学部教育学研究室（1968）。
- 杉本勲「佐賀支藩の蘭学について—小城藩の場合」『史淵』通号 100（1968.03）：73-88。
- 早稲田大学図書館編『洋学資料展出品目録』早稲田大学図書館（1968）。
- 『美作洋学年表；箕作家関係資料』津山郷土館（1968）。
- 杉本勲「洋学の伝来」『歴史教育』17(2)（1969.06）：1-10。
- Genpaku Sugita, *Dawn of Western science in Japan: Rangaku kotohajime*, translated by Ryoza Matsumoto, Eiichi Kiyooka; supervised by Tomio Ogata, Masafumi Tomita, Kazuyoshi Nakayama, Hokuseido Press, 1969.
- 杉本勲「研究代表者」『咸宜園蔵書目録：大分県日田市立淡窓図書館保管』[謄写版] 杉本勲：九州文化史研究施設（1970）。
- 芳賀登『蛸社の獄：洋学の弾圧と夜明け前の犠牲者』秀英出版（1970）。
- 杉本勲「佐賀藩蘭学史の研究—精煉方の動向を中心に据えて」『九州文化史研究所紀要』通号 15（1970.03）：77-103。

- 杉浦明平編『切支丹・蘭学集』筑摩書房（1970）。
- 惣郷正明『図説日本の洋学』築地書館，丸善（発売）（1970）。
- 芳賀徹責任編集『杉田玄白；平賀源内；司馬江漢』中央公論社日本の名著（1971）。
- 松村明『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版（1970）。
- 緒方富雄編『蘭学と日本文化』東京大学出版会（1971）。
- 仲田一信『埼玉県医学校と日習堂蘭学塾』浦和市尾間木史蹟保存会（1971）。
- 佐藤昌介『洋学史』『科学史研究』通号 97（1971.03）：1-6。
- 早稲田大学図書館編『洋学文庫目録[稿]』早稲田大学図書館（1971）。
- 杉本勲「咸宜園と洋学」『史淵』通号 105・106（1971.08）：205-237。
- 緒方富雄編『江戸時代の洋学者たち』新人物往来社（1972）。
- 加藤文三『学問の花ひらいて：『蘭学事始』のなぞをさぐる』新日本出版社（1972）。
- 小浜市立図書館編『蘭学者中川淳庵』小浜市立図書館（1972）。
- 高橋倉一『洋学思想史論』新日本出版社（1972）。
- 沼田次郎，松村明，佐藤昌介校注『洋学（日本思想大系 64-65）』岩波書店（1972）。
- 藤森成吉『近代日本の先駆者たち：幕末の洋学』新日本出版社（1972）。
- 佐野正巳『国学と蘭学』雄山閣（1973）。
- 宮崎道生『新井白石の洋学と海外知識』吉川弘文館（1973）。
- 『宇田川家勤書；所管洋学関係資料目録』津山郷土館（1973）。
- 内山孝一『和蘭事始：『蘭学事始』古写本の校訂と研究』中央公論社自然選書（1974）。
- 杉田玄白（杉本つとむ訳・解説）『蘭学事始：鎖国の中の青春群像』社会思想社（1974）。
- 木村陽二郎『日本自然誌の成立：蘭学と本草学』中央公論社（1974）。
- 洋学二百年記念会編『洋学二百年記念展：世界のなかの日本の学術のあゆみのあとをたどって』朝日新聞社（1974）。
- 緒方富雄抄『現代文蘭学事始五十抄：杉田玄白著蘭学事始の緒方富雄現代語訳から』緒方医学化学研究所（1974）。
- 池田哲郎「幕末明治初期洋学史話—江戸以外の」『日本古書通信』39(6)（1974.06）：3-5。
- 洋学二百年記念会編『洋学二百年記念展：出品総目録』洋学二百年記念会（1974）。
- 大阪市立博物館『近代日本のあけぼの：『解体新書』刊行二〇〇年記念：シーボルト長崎開塾一五〇年記念』大阪市立博物館（1974）。
- J. MacLean, "The Introduction of Books and Scientific Instruments into Japan, 1712-1852", *Japanese Studies in the History of Science*, 13 (1974) : 9-68.
- 安藤次郎，服部菊三郎『名古屋の蘭学者と郷土史夜話』名古屋市教育委員会（1975）。
- 影山昇『伊予の蘭学』青葉図書（1975）。
- 長尾政憲「幕末洋学史における適塾の地位—「福沢屋諭吉」前史研究として」『法政史学』通号 27(1975.03) : 47-62。
- Saburo Miyasita, "A Bibliography of the Dutch Medical Books Translated into Japanese", *Archives Internationales d'Histoire des Sciences*, Vol. 25, No. 96 (1975) : 8-72.
- 杉本勲「近代化学技術の移植と消化—とくに佐賀藩の事業を中心に」『化学と工業』29(12)（1976.12）：1008-1010。

- 鍵山栄『佐賀の蘭学者たち』佐賀新聞社（1976）。
- 影山昇『日本近代教育の遺産：洋学受容と地域教育の展開』第一法規出版（1976）。
- 杉本つとむ『（江戸時代）蘭語学の成立とその展開』早稲田大学出版部，全5冊，（1976，1977，1978，1981，1982）。
- 大阪市立博物館編『江戸時代の科学技術：町人天文学者間重富没後160年記念』大阪市立博物館（1977）。
- 七宮淳三『みちのく蘭学事始：大槻玄沢とその時代』新人物往来社（1977）。
- 杉本つとむ『蘭学者による蘭語の学習とその研究』早稲田大学出版部（1977）。
- 天理図書館編輯『洋学』天理大学出版部（1977）。
- 沼尻源一郎編著『水戸の洋学』柏書房（1977）。
- 津山洋学資料館編『目で見る津山の洋学』津山洋学資料館（1978）。
- 中谷一正『幕末明治洋学史』中谷一正（1978）。
- 伴忠康『適塾をめぐる人々：蘭学の流れ』創元社（1978）。
- 『津山洋学資料』第7巻，津山洋学資料館（1978）。
- 青木一郎『岐阜県蘭学史話：江馬蘭学塾とその周辺』江馬文書研究会（1979）。
- 岩生成一編『近世の洋学と海外交渉』巖南堂書店（1979）。
- 鎌田道隆『渡辺崋山：洋学開花期の芸術と思想』平凡社（1979）。
- 高瀬重雄『山村昌永とその『訂正増訳采覧異言』について一幕末における洋学史の一断面』『金沢経済大学論集』12(3)（1979.03）：190-166。
- 中野操『大坂蘭学史話』思文閣出版（1979）。
- 赤木昭夫『蘭学の時代』中公新書（1980）。
- 今井正，沼田次郎『エンゲルベルト・ケンペル『日本誌』および『日本植物図譜』ファクシミリ版解説』丸善（1980）。
- 杉田玄白（浜久雄訳）『蘭学事始』教育社（1980）。
- 北沢正誠ほか編著『蘭学者伝記資料』青史社，合同出版（発売）（1980）。
- 佐藤昌介『洋学史の研究』中央公論社（1980）。
- 『洋学者書簡集』津山洋学資料館（1980）。
- 北沢正誠ほか編著『蘭学者伝記資料』青史社，合同出版（発売）（1980）。
- [フランソワ・ハルマ原編]；藤林普山編；朝倉治彦解題『譯鍵：附蘭学選』青史社（1981）。
- 『津山洋学資料館資料目録』津山洋学資料館（1982）。
- 伊東多三郎『国学と洋学』吉川弘文館（1982）。
- 杉田玄白（緒方富雄校註）『蘭学事始』岩波文庫（1982）。
- 鈴木常光『飯泉譲介：和蘭文典を著した蘭学者』筑波書林（1982）。
- 松野良寅『東北の長崎：米沢の洋学』ぎょうせい（1982）。
- 福島義一『阿波の蘭学者：西洋文化を伝えた人たち』徳島県出版文化協会（1982）。
- 大久保利謙「洋学史家としての呉秀三先生」『日本医史学雑誌』28(4)（1982.10）：489-491。
- 青木一郎『岐阜県蘭学医学歴史散歩』岐阜県医師会（1983）。
- 言語編集部編『洋学事始め：特集（言語 第12（2号））』大修館書店（1983）。
- 佐光昭二『阿波の洋学事始』徳島市立図書館（1983）。
- 惣郷正明『洋学の系譜：江戸から明治へ』研究社出版（1984）。

- 東京外国語大学附属図書館編『東京外国語大学附属図書館所蔵洋学関係図書仮目録』東京外国語大学附属図書館（1984）。
- 岩治勇一『大野藩の洋学』岩治勇一（1984）。
- 高橋貪一『洋学論（高橋貪一著作集 1）』あゆみ出版（1984）。
- 田村栄太郎『人物・近世洋学文化史』雄山閣出版（1984）。
- 桃裕行『松江藩と洋学の研究』思文閣出版（1989）。
- 杉田玄白（緒方富雄訳・解説）『現代文蘭学事始』岩波書店（1984）。
- 『黒船の渡来と津山の洋学者』津山洋学資料館（1984）。
- 中山茂編『幕末の洋学』ミネルヴァ書房（1984）。
- 日蘭学会編『洋学関係研究文献要覧』日蘭学会（1984）。
- 日蘭学会編『洋学関係研究文献要覧』日外アソシエーツ（1984）。
- 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版（1984）。
- 岐阜県博物館編『美濃の蘭学』岐阜県博物館（1984）。
- 吉田忠「展望：蘭学史」『科学史研究』23巻（1984）：73-80。
- 角川書店編『国学と洋学』角川書店（1985）。
- 杉本つとむ編『図録蘭学事始』早稲田大学出版部（1985）。
- 西南諸藩洋学史研究会編『西南諸藩の洋学：佐賀・鹿児島・萩藩を中心に』西南諸藩洋学史研究会（1985）。
- 滝川義一『木村蒨葭堂の蘭学志向』科学書院（1985）。
- 田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版（1985）。
- 『近世の洋学研究資料：新潟県文化財緊急調査報告書』新潟県教育委員会（1985）。
- 『津山洋学者の墓誌・顕彰碑文』津山洋学資料館（1985）。
- 西南諸藩洋学史研究会編『西南諸藩の洋学：佐賀・鹿児島・萩藩を中心に』西南諸藩洋学史研究会（1985）。
- 日蘭学会編『日蘭学会創立十周年記念誌：1985年』日蘭学会（1985）。
- 日本英学史学会北陸支部編『稿本加賀洋学資料：蘭学から英学へ』日本英学史学会北陸支部（1985）。
- 『洋学史資料展：近代日本学術の源流』京都大学附属図書館（1986）。
- 大久保利謙『幕末維新の洋学』吉川弘文館（1986）。
- 片桐一男『杉田玄白』吉川弘文館（1986）。
- 『津山洋学：水田昌二郎遺稿集』津山洋学資料館（1986）。
- 杉本勲「幕末佐賀を探る一洋学史研究会佐賀大会報告」『日本歴史』通号 462（1986.11）：53-55。
- 沼倉延幸『長崎養生所の設立をめぐる長崎奉行の施策と幕府評議：幕末期改革派官僚岡部長常の洋学導入』青山学院大学（1986）。
- 杉本勲 [ほか] 編著『幕末軍事技術の軌跡：佐賀藩史料『松乃落葉』』杉本勲（1987）。
- 杉本つとむ『解体新書の時代：江戸の翻訳文化をさぐる』早稲田大学出版部（1987）。
- 天理大学附属天理図書館編『洋学』臨川書店（1988）。
- 松野良寅『東北の長崎：米沢洋学の系譜学』ぎょうせい（1988）。
- 石田純郎『江戸のオランダ医』三省堂（1988）。
- 石田純郎『蘭学の背景』思文閣出版（1988）。
- 吉備洋学資料研究会編『洋学資料による日本文化史の研究』吉備洋学資料研究会（1988）。
- 大月明『近世日本の儒学と洋学』思文閣出版（1988）。

- 木村陽二郎『江戸期のナチュラリスト』朝日新聞社（1988）。
- 宗田一ほか編著『医学近代化と来日外国人』世界保健通信社（1988）。
- 西岡まさ子『緒方洪庵の妻』河出書房新社（1988）。
- ジョン・Z・パワース（金久卓也；鹿島友義訳）『日本における西洋医学の先駆者たち』慶応義塾大学出版会（1998）。
- 鮎沢信太郎『山村才助』吉川弘文館（1989）。
- 片桐一男〔述〕『杉田玄白と『解体新書』；緒方洪庵』ぎょうせい（1989）。
- 久米康生『シーボルトと鳴滝塾：悲劇の展開』木耳社（1989）。
- 杉本勲編『近代西洋文明との出会い：黎明期の西南雄藩』思文閣出版（1989）。
- 土浦市立博物館編『山村才助と蘭学の時代：江戸時代世界地理研究の先駆者：第2回特別展』土浦市立博物館（1989）。
- 中西啓『シーボルト前後 長崎医学史ノート』長崎文献社（1989）。
- 沼田次郎『洋学』吉川弘文館（1989；新装版，1996）。
- 『蘭学の巨星杉田玄白・緒方洪庵展』蘭学資料研究会（1990）。
- 『堀田正睦と佐倉藩の洋学：堀田正睦生誕180年記念』成田山靈光館（1990）。
- 『津山洋学資料館資料目録（平成2年度改訂版）』津山洋学資料館（1990）。
- 源了円編『江戸後期の比較文化研究』ペリカン社（1990）。
- 杉浦明平；別所興一編著『江戸期の開明思想—世界へ開く・近代を耕す』社会評論社（1990）。
- 杉本つとむ『江戸洋学事情』八坂書房（1990）。
- 美濃のポトガラヒィ事始め展実行委員会編『美濃のポトガラヒィ事始め：美濃の蘭学と写真術』岐阜県営写真家協会（1990）。
- 有坂隆道「（講演）洋学史50年」『史泉』通号74（1991.09）：1-16。
- 上野益三『博物学者列伝』八坂書房（1991）。
- 香川節『洋学と異人さんと八王子：世界史の視座から』かたくら書店（1991）。
- 大分県立芸術会館編『洋学の広がりと美術：良沢，玄白，源内，江漢らの生きた時代』大分県立芸術会館（1991）。
- 源了圓；末中哲夫共編『日中実学史研究』思文閣出版（1991）。
- 『佐倉洋学者伝記』佐倉歴史顕彰会（1991）。
- 竜文雄『おんな医者奔る：大阪蘭学事始め』かもがわ出版（1991）。
- 井上清恒『医人の探索』内田老鶴圃（1991）。
- 石田純郎編著『緒方洪庵の蘭学』思文閣出版（1992）。
- 川島真人『蘭学の泉ここに湧く』西日本臨床医学研究所（1992）。
- 杉本つとむ『江戸蘭方医からのメッセージ』ペリカン社（1992）。
- 田崎哲郎編『在村蘭学の展開』思文閣出版（1992）。
- Western learning: a short history of the study of western science in early modern Japan, Japan-Netherlands Institute*（1992）。
- 原平三『幕末洋学史の研究』新人物往来社（1992）。
- 京都大学附属図書館編『江戸期における翻訳の世界：洋学資料展』京都大学附属図書館（1992）。
- 片桐一男『蘭学，その江戸と北陸：大槻玄沢と長崎浩斎』思文閣出版（1993）。

- 桂川甫周(杉本つとむ編著)『北槎聞略：影印・解題・索引』早稲田大学出版部(1993)。
- 加藤雅彦『知られざる蘭医の夢：広瀬元恭の生涯』近代文芸社(1993)。
- ヴォルフガング・ミヒェル「Willem Bijleveltの金銭出納簿」『洋学史研究』10(1993)：38-81。
- 佐藤昌介『洋学史論考』思文閣出版(1993)。
- 森納『因伯洋学史話』富士書店(1993)。
- 幕末・明治初期における西洋文明の導入に関する研究会編『洋学事始：幕末・維新时期西洋文明の導入』文化書房博文社(1993)。
- 吉川芳秋(木村陽二郎、遠藤正治編)『医学・洋学・本草学者の研究：吉川芳秋著作集』八坂書房(1993)。
- 頼祺一編『儒学・国学・洋学』中央公論社(1993)。
- 大橋敦夫「信州洋学史研究序説：藩校旧蔵書と関連人物を中心に」『紀要(上田女子短期大学)』16(1993)：61-120。
- 藤原暹「北方洋学史への提言—南部と箱館」『地方史研究』43(4)(1993.08)：62-65。
- 芝哲夫「長崎の御用時計師御幡家の化学史資料」『化学史研究』第21巻(1994)：93-94。
- 川島真人「中津藩の蘭学について」『化学史研究』第21巻(1994)：95-96。
- 菅原国香「太田雄寧訳纂『新式化学』の原書について」『化学史研究』第21巻(1994)：105-106。
- 杉田玄白(杉本つとむ編)『杉田玄白集』早稲田大学出版部(1994)。
- 大野進『鷹見泉石ものがたり：古河が生んだ政治家・蘭学者』古河市教育委員会(1994)。
- 武内博編著『日本洋学人名事典』柏書房(1994)。
- 木村岩治『洋学者箕作阮甫とその一族』日本文教出版(1994)。
- 杉本つとむ訳・著『知の冒険者たち：『蘭学事始』を読む』八坂書房(1994)。
- 杉本つとむ編『前野蘭化集』早稲田大学出版部(1994)。
- 戸沢行夫『オランダ流御典医桂川家の世界：江戸芸苑の気運』築地書館(1994)。
- 高橋文「ツェンペリーと日本人との交流」『洋学史研究』11(1994)：42-61。
- Endo, Shoji「The West Plate Photography and Scholars of Western Learning」『洋学：洋学史学会研究年報』2(1994)：103-128。
- Doi, Yasuhiro「The Making of “Kakanpu” by Hiraga Gennai : Its Background and Aftermath」『洋学：洋学史学会研究年報』2(1994)：129-160。
- Yoshida, Atsuko「Otsuki Gentaku: His Assignment for the Ezochi-Goyo and Investigation into Northern Regions」『洋学：洋学史学会研究年報』2(1994)：161-182。
- 香川大学附属図書館編『啓蒙の源流：神原文庫洋学資料展』香川大学附属図書館(1995)。
- 大槻如電原著；佐藤榮七増訂『日本洋學編年史』錦正社(1965)；鳳文書館(1995)。
- 水田榮男『洋学者宇田川家のひとびと』日本文教出版(1995)。
- 佐倉市立中央公民館編『洋学のまち佐倉』佐倉市立中央公民館(1995)。
- 毛呂山町歴史民俗資料館編『蘭学事始：蘭医安藤文澤・太郎父子とその周辺：第5回特別展』毛呂山町歴史民俗資料館(1995)。
- 杉本つとむ編『蘭学者肖像・遺墨・書簡集』早稲田大学出版部(1995)。
- Unno, Katsutaka「The Celestial and Terrestrial Globes Illustrated in the Kansei Rekisho, an Expository Book on the Kansei Calendar Compiled in 1839」『洋学：洋学史学会研究年報』4(1995)：13-43。
- Isozaki, Yasuhiko「John Jonston's “Beschreyving van de Natuur” Imported and Translated in Japan」

- 『洋学：洋学史学会研究年報』4（1995）：45-83.
- 磯崎康彦「ヨーン・ヨnston著『動物図譜』の舶載と翻訳」『洋学』通号4（1995）：45-83.
- 勝山脩「江戸時代に翻訳されたオランダ語獣医学書の原典の探索」『洋学』通号4（1995）：85-123.
- 「シンポジウム「19世紀前半の西洋と日本」〔含 討論〕」『洋学』通号4（1995）：125-182.
- 石山洋，鈴木瑞枝，南啓治編『江戸文人辞典：国学者・漢学者・洋学者』東京堂出版（1996）.
- 岩崎克己『解体新書以前』平凡社東洋文庫（1996）.
- 岩崎克己（片桐一男解説）『解体新書の研究』平凡社東洋文庫（1996）.
- 梅溪昇『緒方洪庵と適塾』大阪大学出版会（1996）.
- 柴田収蔵（田中圭一編注）『柴田収蔵日記：村の洋学者』平凡社東洋文庫（1996）.
- 高田誠二「久米邦武と金武良哲の物理学手稿」『洋学』通号5（1996）：13-33.
- 東徹「佐久間象山と西洋科学のかかわりー化学分野を中心に」『洋学』通号5（1996）：35-62.
- 吉田厚子「長谷川延年書写『西洋雜記』『万国人物図纂』に関する二，三の検討〔含 資料翻刻 長谷川延年「目録書目并地理書目漂流書目」〕」『洋学』通号5（1996）：63-129.
- 石山洋「（会長講演）洋学史研究における江戸時代舶載原書の意義」『洋学』通号5（1996）：157-172.
- 「シンポジウム「シーボルト生誕200年記念ー長崎とシーボルトの諸問題」」『洋学』通号5（1996）：181-228.
- 楠本寿一「オランダ海軍機関将校ハ・ハルデスが長崎で使用した参考書」『洋学』通号5（1996）：231-233.
- 今村英明「阿蘭陀通詞今村・堀家に関する考察」『洋学史研究』通号13（1996.04）：1-18.
- Michel, Wolfgang「エンゲルベルト・ケンペルからみた日本語」『洋学史研究』通号13（1996.04）：19-54.
- 片桐一男「ケンペル・今村源右衛門英生の新訳語協議・決定」『洋学史研究』通号13（1996.04）：55-66.
- 山中三雄「不潔の水を善水にする法ーvan Swieten'sの法は正しいか」『洋学史研究』通号13（1996.04）：85-101.
- 秋葉哲生「古方派医学の成立とそれに与えたオランダ医学の影響ー漢方医学理論の再構成について」『洋学史研究』通号13（1996.04）：102-120.
- 河元由美子「マクドナルドと日本との出会い（2）」『洋学史研究』通号13（1996.04）：121-154.
- 『大坂が見た「異国」：オランダからの風』大阪府立中之島図書館（1997）.
- 片桐一男『蘭学事始とその時代』日本放送出版協会（1997）.
- 片桐一男『未刊蘭学資料の書誌的研究』ゆまに書房（1997）.
- 愛媛県歴史文化博物館編『伊予の蘭学：近代科学の夜明け：平成9年度企画展』愛媛県歴史文化博物館（1997）.
- 杉本つとむ『江戸長崎紅毛遊学』ひつじ書房（1997）.
- 二宮陸雄『種痘医北城諒斎天然痘に挑む』平河出版社（1997）.
- 栗原福也「オランダ領東インドとフォン・シーボルト（1）」『洋学』通号6（1997）：167-193.
- （石山慎一；桂ゆりえ 訳）「フィリップ・フランツ・ドゥ・シーボルト，カール・ルートヴィヒ・ブルーメ共編『オランダにおける王立園芸奨励協会年報 第1号』（ライデン，H・W・ヘイゼンバーク社，1844年，総90頁，図版4葉 四つ折り本）の部分訳（その1）」『洋学』通号6（1997）：195-231.
- 加藤僖重「牧野標本館にあるシーボルトコレクション（その1）伊藤圭介作成の標本」『洋学』通号6（1997）：233-261.
- 山田慶児「（特別講演）中国の「洋学」と日本」『洋学』通号6（1997）：1-9.

- Michel, Wolfgang「大英図書館のケンペル資料にみる日本の病名および病気」『洋学史研究』通号14 (1997.04) : 1-9.
- 今村英明「出島の営繕について一蘭館日誌の記述及び出島図との比較」『洋学史研究』通号14 (1997.04) : 10-27.
- 片桐一男「今村源右衛門英生の筆跡を求めて (2)」『洋学史研究』通号14 (1997.04) : 28-37.
- 秋葉哲生「日本の伝統医学理論とオランダ医学」『洋学史研究』通号14 (1997.04) : 46-54.
- 石川治「鷹見泉石の家老退隠口碑と鷹見家歴史資料のはざま」『洋学史研究』通号14 (1997.04) : 55-71.
- 杉田玄白 [ほか訳著] (酒井シヅ現代語訳)『解体新書：全現代語訳』講談社学術文庫 (1998).
- 青木歳幸『在村蘭学の研究』思文閣出版 (1998).
- 池田逞『青地林宗の世界：伊予の蘭学者』愛媛県文化振興財団 (1998).
- 小川亜弥子『幕末期長州藩洋学史の研究』思文閣出版 (1998).
- 杉本つとむ編著『江戸時代西洋百科事典：『厚生新編』の研究』雄山閣出版 (1998).
- 福原義春『蘭学事始』集英社 (1998).
- 松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店 (1998).
- 下山純正「美作の洋学一洋学者輩出とその地域特性を中心に」『化学史研究』第25巻 (1998) : 75-76.
- 中山沃「備前の洋学一児玉順蔵と山川正朔」『化学史研究』第25巻 (1998) : 77-78.
- 石田純郎「緒方洪庵とロイトル」『化学史研究』第25巻 (1998) : 79.
- 菅原国香『『厚生新編』(1811-45) おける化学術語一原本との対比を中心に』『東洋大学工学部教養課程紀要』第33号 (1998) : 1111-123; 第34号 (1999) : 95-105.
- (石山禎一; 桂ゆりえ訳)「フィリップ・フランツ・ドゥ・シーボルト, カール・ルートヴィヒ・ブルーメ 共編『オランダにおける王立園芸奨励協会年報 第1号』(ライデン, H・W・ヘイゼンパーク社, 1844年, 総90頁, 図版四葉 四つ折り本) の部分訳 (その2)」『洋学』通号7 (1998) : 79-113.
- 加藤信重「牧野標本館にあるシーボルトコレクション (その2) 長崎奉行所の目付であった茂伝之進宅に植えられていたネズの標本」『洋学』通号7 (1998) : 115-124.
- 森睦彦「徳川幕府の洋学書の出版統制」『洋学』通号7 (1998) : 125-152.
- 長井純市; 安岡昭男; 湯本豪一 他「大会シンポジウム 幕末維新の海外留学生」『洋学』通号7 (1998) : 153-176.
- 田崎哲郎; 青木歳幸; 小川亜弥子 他「平成10年度総会 在村蘭学の研究」『洋学』通号7 (1998) : 187-212.
- 小形利彦「明治期公立医学校の研究：ローレツと山形県済生館医学寮」『洋学：洋学史学会研究年報』7 (1998) : 1-22.
- Michel, Wolfgang「異文化との出会いーオランダ・カピタンの「謁見」について」『洋学史研究』通号15 (1998.04) : 1-11.
- 松本英治「北方問題の緊迫と貸本『北海異談』の筆禍ー文化期における幕府の情報統制」『洋学史研究』通号15 (1998.04) : 19-48.
- 長沼秀明「目賀田種太郎のアメリカ留学ー明治初期における洋学の開花」『洋学史研究』通号15 (1998.04) : 49-64.
- 高橋勇市「史料紹介 柴田収蔵年譜考」『洋学史研究』通号15 (1998.04) : 65-80.
- 片桐一男「史料紹介 杉田玄白の養生法」『洋学史研究』通号15 (1998.04) : 81-92.

- 片桐一男他「特集 わが町の蘭学資料・蘭学者たち」『洋学史研究』通号 15 (1998.04)：99-151.
- 青木宏一郎『江戸時代の自然：外国人が見た日本の植物と風景』都市文化社 (1999).
- 石山洋『洋学の人と本』日本古書通信社 (1999).
- 長野県立歴史館編『蘭学万華鏡：江戸時代信濃の科学技術：1999 年度秋季企画展』長野県立歴史館 (1999).
- 『「特集」洋学の九州 (Fukuoka style Vol. 26)』福博総合印刷 (1999).
- 杉本つとむ『蘭学に命をかけ申し候』皓星社 (1999).
- 吉田洋一「亀井南冥の医学思想」『洋学』通号 8 (1999)：1-21.
- 羽場俊秀「幕末期の佐賀藩の上海視察」『洋学』通号 8 (1999)：23-46.
- 鈴木幸彦「一関藩医に見る蘭学浸透の若干例」『洋学』通号 8 (1999)：47-66.
- 小形利彦「明治期公立医学校の授業科目一分析と特色」『洋学』通号 8 (1999)：1-21.
- 小暮実徳「ファン・デル・シェイスの『オランダ日本開国論』の成立事情—未公開目次を含む」『洋学』通号 8 (1999)：95-113.
- 加藤信重「牧野標本館にあるシーボルトコレクション (3) シーボルトが蒐集した日本産カンアオイ属植物について」『洋学』通号 8 (1999)：115-132.
- 石山禎一「資料 オランダ王立園芸奨励協会の種苗園で栽培された、日本と中国から輸入された新旧の植物一覧表—ライデンにあるフォン・シーボルト商会」『洋学』通号 8 (1999)：133-165.
- 栗原福也「(会長講演) フォン・シーボルトの日本調査報告書」『洋学』通号 8 (1999)：167-177.
- 井上勝也「新島襄—留学・思想形成・実践」『洋学』通号 8 (1999)：180-193.
- 高橋裕子「最初的女子留学生津田梅子—アメリカ社会史の視座から」『洋学』通号 8 (1999)：194-223.
- 戸田文明「洋学的知識人と官学」『洋学』通号 8 (1999)：224-233.
- 八百啓介「18 世紀オランダ貿易の主体と蘭学」『洋学』通号 8 (1999)：262-272.
- 磯崎康彦「秋田蘭画と平賀源内所蔵蘭書」『洋学』通号 8 (1999)：273-286.
- 海原亮「18 世紀蘭方医学の展開とその社会的影響」『洋学』通号 8 (1999)：287-301.
- 片桐一男「阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門耕牛 (1) 祖父寿山と父藤三郎」『洋学史研究』通号 16 (1999)：1-25.
- 今村英明「出島阿蘭陀商館の三板(舳)について—蘭館日誌の記述を軸として」『洋学史研究』通号 16 (1999)：26-40.
- 佐藤賢一「忘れられた数学塾「数理研究舎」の軌跡—和算家、武田謙蔵の数理思想」『洋学史研究』通号 16 (1999)：41-58.
- (長田和之訳)「史料紹介 A. H. フット著 下田・箱館訪問記」『洋学史研究』通号 16 (1999)：59-75.
- 沈国威編著『『六合叢談』(1857-58)の学際的研究 (付語彙索引/影印本文)』白帝社 (1999).
- 杉田玄白 (片桐一男全訳注)『蘭学事始』講談社 (2000).
- 一関市博物館編『はるかなるヨーロッパ：蘭学者大槻玄沢の世界認識：日蘭交流 400 年記念』一関市博物館 (2000).
- 遠藤正治『本草学と洋学 小野蘭山学統の研究』思文閣出版 (2000).
- 片桐一男『江戸の蘭方医学事始：阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門耕牛』丸善 (2000).
- 吉良枝郎『日本の西洋医学の生い立ち：南蛮人渡来から明治維新まで』築地書館 (2000).
- 久米美術館編『久米邦武文書 2 科学技術史関係』吉川弘文館 (2000).
- ザビエル渡来 450 周年記念シンポジウム委員会編『薩摩と西欧文明：ザビエルそして洋学，留学生』鹿児島

- 純心女子大学, 南方新社 (発売) (2000).
- 古西義麿『幕末洋学史の研究：緒方洪庵と大坂の除痘館』古西義麿, (2000.10).
- 長野暹『佐賀藩と反射炉』新日本出版社 (2000).
- 長崎大学薬学部編『出島のくすり』九州大学出版会 (2000).
- 中村真一郎『木村蒹葭堂のサロン』新潮社 (2000).
- 南出康世 [ほか] 共編『大阪女子大学蔵洋学資料総目録』大阪女子大学 (2000).
- 有坂隆道「追悼 フリッツ・フォス博士を偲んで」『洋学』通号9 (2000) : 1-8.
- 鈴木幸彦「芝蘭堂門人吉川良祐と『蘭學佩〔ケイ〕』」『洋学』通号9 (2000) : 1-8.
- 加藤僊重「オランダ王立植物標本館にあった岡研介作成のフノリ属の標本」『洋学』通号9 (2000) : 105-110.
- 平野満「日本の本草学略史—物産学の観点から」『洋学』通号9 (2000) : 144-147.
- 大場秀章「日本の本草学へのヨーロッパ自然科学の影響」『洋学』通号9 (2000) : 150-153.
- 田中義信「田中芳男—その生涯と著作」『洋学』通号9 (2000) : 156-167.
- 大沢眞澄; 岩瀬忠男「佐倉高校鹿山文庫蔵『模理損字書』について」『洋学』通号9 (2000) : 179-182.
- 土井康弘「佐賀藩武雄領医師群の西洋兵学研究への寄与—清水宗庵を中心として」『洋学』通号9 (2000) : 182-186.
- 向井晃「『浩然隨筆』の対外記事」『洋学』通号9 (2000) : 187-190.
- 小形利彦「博物学者 松森胤保とその周辺 (1) 弄石餘談を中心として」『洋学』通号9 (2000) : 193-195.
- 平野恵「幕末から明治の植木屋, 柏木吉三郎」『洋学』通号9 (2000) : 195-197.
- 岩下哲典「長崎開役とペリー来航予告情報」『洋学』通号9 (2000) : 200-202.
- 沼倉延幸「長崎開役と海外情報」『洋学』通号9 (2000) : 203-206.
- 片桐一男「『蘭学事始附記』について」『洋学史研究』通号17 (2000) : 1-14.
- 今村英明「史料紹介 大英図書館所蔵『役人名録』等について—ケンペルコレクション新発見史料の一部として」『洋学史研究』通号17 (2000) : 39-45.
- 菅原国香「馬場貞由(佐十郎)訳述『泰西七金訳説』の原本と基本的化学術語」『東洋大学工学部教養課程紀要』第35号 (2000) : 79-92.
- 金井幸佐久『吾妻の蘭学者たち：高野長英門下』上毛新聞社出版局 (発売) (2001).
- 川島真人『中津藩蘭学の光芒：豊前中津医学史散歩』西日本臨床医学研究所 (2001).
- 川島真人『蘭学の里・中津：川島真人エッセイ集』近代文芸社 (2001).
- 杉本つとむ編著『日本洋学小誌』皓星社 (2001).
- 飛田良文編『洋学者の伝記』ICU 大学院比較文化研究科飛田研究室 (2001).
- Cryns, Frederik (フレデリック・クレインス)「新宮涼庭『血論』の研究」『科学医学資料研究』297号 (2000) : 1-8 ; 307号 (2001) : 1-13.
- Cryns, Frederik「坪井信道とブルハーフェの病理学思想」『洋学史学会研究年報 洋学』第8号 (2000) : 244-245.
- 幸田正孝「美濃洋学の起源」『化学史研究』第28巻 (2001) : 2-17.
- 遠藤正治「尾張美濃の写真術」『化学史研究』第28巻 (2001) : 18-24.
- 八耳俊文「洋学と漢学—在華英米人の漢文書をめぐって—」『化学史研究』第28巻 (2001) : 25-37.
- 石田純郎「オランダの外科医ギルドの成立—蘭学の情報源としてのオランダの外科医」『洋学』通号10

- (2001)：15-38.
- 今村英明「徳川吉宗の植物注文と御用方阿蘭陀通詞ーオランダ商館史料を通して」『洋学』通号 10 (2001)：39-63.
- 遠藤正治「將軍吉宗がオランダ商館に注文した薬用植物」『洋学』通号 10 (2001)：65-94.
- 加藤僖重「牧野標本館にあるシーボルトコレクション (4) 美馬順三作成の植物標本」『洋学』通号 10 (2001)：95-103.
- 勝山脩「日本に西洋の獣医学をもたらした人々」『洋学』通号 10 (2001)：105-114.
- 「『洋学』の 10 年「洋学」1～10 (1993 年～2002 年) 目次一覧」『洋学』通号 10 (2001)：145-152.
- 片桐一男「江戸参府一行の人名・役職名・働き」『洋学史研究』通号 18 (2001)：1-22.
- Cryns, Frederik「ブルハーフェの機械論思想と坪井信道」『科学医学資料研究』328 号 (2001)：1-15.
- Cryns, Frederik「坪井信道『万病治準』における病理論」『科学医学資料研究』322 号 (2001)：1-12 頁；323 号 (2001)：1-5.
- 片桐一男『日蘭交流史：その人・物・情報』思文閣出版 (2002).
- 北原かな子『洋学受容と地方の近代：津軽東奥義塾を中心に』岩田書院 (2002).
- 坂本保富『幕末期日本における西洋砲術家の洋学知識：高知市民図書館蔵『徳弘家資料』所収『書籍写本等史料』の分析』信州大学坂本保富研究室 (2002).
- 杉本つとむ『江戸の阿蘭陀流医師』早稲田大学出版部 (2002).
- 高橋輝和『シーボルトと宇田川榕菴：江戸蘭学交遊記』平凡社新書 (2002).
- 高橋貪一『洋学思想史論』新装版，新日本出版社 (2002).
- 高知県立牧野植物園編『牧野富太郎蔵書の世界：牧野文庫貴重書解題』高知県立牧野植物園 (2002).
- 長崎大学『出島の科学』刊行会編著『出島の科学＝Modern science from Dejima：長崎を舞台とした近代科学の歴史ドラマ』九州大学出版会 (2002).
- 山崎彰『論集勃興期蘭学の研究：杉田玄白と大槻玄澤を中心に』[山崎彰] (2002).
- 臨川書店編『蒹葭堂時代の日本文化：旅とサロンと開かれた知性』臨川書店 (2002).
- 宮永孝「〈論説〉日本洋学史：蘭学事始」『社会志林』49(2) (2002)：62-124.
- 今村英明「徳川吉宗と洋学 (その一，軍事・工学)」『洋学史研究』通号 19 (2002)：10-46.
- 石田純郎「オランダ外科医ギルドの全盛期一十七，十八世紀のギルド規約と外科医数の推移」『洋学』通号 11 (2002)：1-24.
- 深瀬泰旦「西洋医学所医師添田玄春の長崎留学」『洋学』通号 11 (2002)：25-50.
- 田中智子「明治前期の官立学校における外国人教員雇用ー第三高等学校前身校を事例に」『洋学』通号 11 (2002)：83-110.
- 羽場俊秀「竹内使節団の西洋視察ーイギリスの医療・教育施設」『洋学』通号 11 (2002)：111-132.
- 吉田忠「(会長講演) 図示された太陽中心説」『洋学』通号 11 (2002)：133-153.
- 八百啓介「18・19 世紀日蘭貿易の研究動向 (1991～2000)ー「公」の視点から「私」の視点へ」『洋学』通号 11 (2002)：161-164.
- 岩下哲典「幕末海外情報史研究ーアヘン戦争，パレンバン号，ペリー来航前後を中心に」『洋学』通号 11 (2002)：167-170.
- 「(大会シンポジウム) 近代的知識人と留学」『洋学』通号 11 (2002)：181-192.
- 片桐一男「泉屋文書にみえる輸入白砂糖」『洋学史研究』通号 19 (2002)：1-9.

- 今村英明「徳川吉宗と洋学（その1 軍事・工学）オランダ商館史料を通して」『洋学史研究』通号19（2002）：10-46.
- Nomura, Toru「Magotaro: A Japanese Sailor's Records of Insular Southeast Asia in the Eighteenth Century」『洋学史研究』通号19（2002）：47-91.
- 幸田正孝；佐光昭二「野村立栄・羽栗三圭（吉雄常庵）・富永晋二：『免帽降乗録』と江戸の蘭学徒」『豊田工業高等専門学校研究紀要』35（2002）：227-298.
- 朱京偉『近代日中新語の創出と交流：人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社（2003）.
- 第3回国際シンポジウム/文部科学省特定領域研究「江戸のモノづくり」第3回国際シンポジウム実行委員会編『近世日本における科学・技術の源流：ガリレオ，レーウェンフックから一貫斎まで』文部科学省特定領域研究「江戸のモノづくり」第3回国際シンポジウム実行委員会（2003）.
- 今村英明「徳川吉宗と洋学（その二，医学・薬学）」『洋学史研究』20（2003）：25-74.
- 片桐一男「1850年，江戸参府カピタンの献上・販売・残品」『洋学史研究』20（2003）：98-128.
- 市立長浜城歴史博物館企画・編集『江戸時代の科学技術：国友一貫斎から広がる世界』市立長浜城歴史博物館（2003）.
- Cryns, Frederik（フレデリック・クレインス）「宇田川玄真の神経観，『医範提綱』の文献学的研究」『科学医学資料研究』341号（2003）：207-226；342号（2003）：239-257；343号（2003）：275-311.
- 「『洋学史研究』総目次（創刊号より第20号まで）」『洋学史研究』20（2003）：168-178.
- 青木歳幸；岩淵令治編『「共同研究」地域蘭学の総合的研究』国立歴史民俗博物館（2004）.
- 片桐一男『平成蘭学事始：江戸・長崎の日蘭交流史話』智書房，星雲社（発売）（2004）.
- 杉田玄白（芳賀徹；緒方富雄；檜林忠男訳）『蘭学事始ほか』中公クラシックス（2004）.
- 小西聖一『杉田玄白：蘭学のとびらを開いた一冊の書物』理論社（2004）.
- 西條敏美『東国科学散歩』裳華房（2004）.
- 酒井シヅ『すらすら読める蘭学事始』講談社（2004）.
- 坂本保富『幕末洋学教育史研究：土佐藩『徳弘家資料』による実態分析：高知市民図書館』高知市民図書館（2004）.
- 津山洋学資料館編『素晴らしき津山洋学の足跡』津山洋学資料館（2004）.
- 武雄市図書館・歴史資料館編『蘭学の来た道：武雄領主の買いもの帳：武雄市制施行50周年記念特別展』武雄市図書館・歴史資料館（2004）.
- 宮永孝『日本洋学史：葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』三修社（2004）.
- Cryns, Frederik『杏雨書屋洋書目録』武田科学振興財団杏雨書屋（2004）.
- 今村英明「徳川吉宗と洋学（その三，天文暦法・人文学）」『洋学史研究』21（2004）：34-95.
- 片桐一男「阿蘭陀通詞に対する家学試験の実施」『洋学史研究』21（2004）：1-14.
- 相原修『蘭学者・石井修三の生涯：西洋を学び明治を先覚した偉才』羽衣出版（2005）.
- 有坂隆道『山片蟠桃と大阪の洋学』創元社（2005）.
- 大分県立歴史博物館編『おおいた蘭学事始：文明開化への』大分県立歴史博物館（2005）.
- 金子務『江戸人物科学史：「もう一つの文明開化」を訪ねて』中公新書（2005）.
- 坂本保富『土佐藩『徳弘家資料』から見た幕末期の日本：軍事科学を媒介とした洋学の普及拡大過程』信州大学坂本保富研究室（2005）.
- 芝哲夫『適塾の謎』大阪大学出版会（2005）.

- ティツィング（横山伊徳編）『オランダ商館長の見た日本：ティツィング往復書翰集』吉川弘文館（2005）。
 『「大艦・巨砲ヲ造ル」：江戸時代の科学技術：開館1周年記念平成17年度佐賀城本丸歴史館企画展』佐賀県立佐賀城本丸歴史館（2005）。
 吉良枝郎『幕末から廃藩置県までの西洋医学』築地書館（2005）。
 土井康弘『日本初の理学博士伊藤圭介の研究』皓星社（2005）。
 壬生町立歴史民俗資料館編『みぶ蘭学人あらわる』壬生町立歴史民俗資料館（2005）。
 山嶋哲盛『明治金澤の蘭方医たち』慧文社（2005）。
 今村英明「18世紀の漆器・磁器オランダ貿易について（その1）漆器篇」『洋学史研究』22（2005）：1-40。
 片桐一男「事件の発端となったシーボルトの手紙—阿蘭陀通詞中山作三郎が手控えたシーボルトの手紙と鷹見泉石の手紙控え」『洋学史研究』22（2005）：41-59。
 松本英治「加賀藩における洋式兵学者の招聘と佐野鼎の出仕」『洋学史研究』22（2005）：60-81。
 佐々木譲『幕臣たちと技術立国』集英社（2006）。
 前田勉『兵学と朱子学・蘭学・国学：近世日本思想史の構図』平凡社選書（2006）。
 『蘭学者と蘭学資料：古典籍総合データベース公開記念』早稲田大学図書館（2006）。
 『森本家が守り伝えた津山洋学の至宝展：津山洋学資料館平成18年度特別展図録』津山洋学資料館（2006）。
 Cryns, Frederik（フレデリック・クレインス）『江戸時代における機械論的身体観の受容』臨川書店（2006）。
 今村英明「18世紀の漆器・磁器オランダ貿易について（その2）磁器篇」『洋学史研究』23（2006）：102-139。
 河元由美子「開港地に於ける黒船艦隊一役人との私的交流及び日本庶民の黒船観察記」『洋学史研究』23（2006）：140-160。
 片桐一男「研究余滴『一角之図』にオランダ語賛を入れたのは誰か」『洋学史研究』23（2006）：191-195。
 石田純郎『オランダにおける蘭学医書の形成』思文閣出版（2007）。
 八木正自「Bibliotheca Japonica（110）洋学史研究の系譜—蘭学資料研究会を中心に（1）」『日本古書通信』72（2）（通号931）（2007.2）：21。
 緒方惟之『医の系譜 緒方家五代』燃焼社（2007）。
 東徹『エレキテルの魅力 理科教育と科学史』裳華房（2007）。

ルイス・デ・アルメイダ

- 結城了悟＝パチェコ・ディエゴ『ルイス・デ・アルメイダ（一五二五—一五八三）：光を燈す医師』（ポルトガル語と日本語）[Macau]：Instituto Cultural de Macau, 1989。
 東光博英「イエズス会士ルイス・デ・アルメイダの生涯について：アジュダ図書館蔵“Jesuitas na Asia”集書による」『研究論叢（京都外国語大学）』44（1995）：113-129。
 門脇聖子「デアコニア史（2）：ルイス・デ・アルメイダの生涯と思想」『紀要 visio：research reports（九州ルーテル学院大学）』26（1999）：11-22。
 杉山貴要江「ルイス・アルメイダと社会事業—「育児院」が示唆するもの」『日本文理大学商経学会誌』22（2）（2004.3）：35-54。
 相川忠臣「ルイス・デ・アルメイダとポンペ・ファン・メールデルフォールト」『日本医事新報』4198（2004.10）：39-43。

木村専太郎「西洋医学の伝来事始 ルイス・デ・アルメイダ (1) ポルトガルから大分へ」『臨床整形外科』
40(3) (2005.3) : 282-286.

木村専太郎「西洋医学の伝来事始 ルイス・デ・アルメイダ (その2) 西九州での布教活動」『臨床整形外科』
40(6) (2005.6) : 690-693.

エイクマン

石田純郎；ボイケルス，ハルム「エイクマン先生伝」『医学史研究』通号 58 (1984.09) : 783-787.

宗田一「医学近代化と外人たち-9-司薬場で活躍した人びと」『臨床科学』22(1) (1986.01) : 111-116.

宗田一ほか編著『医学近代化と来日外国人』世界保健通信社 (1988).

シーボルト

呉秀三『シーボルト』吐鳳堂 (發賣)，丸善書籍店 (賣捌) (1896).

シーボルト先生渡来百年記念会編『シーボルト先生渡来百年記念会趣意書・記念事業・会則』シーボルト先生渡来百年記念会 (1923).

シーボルト先生渡来百年記念会編輯『シーボルト先生渡来百年記念論文集』シーボルト先生渡来百年記念会 (1924).

武藤長藏『我國最初の商業學校創立計劃者シーボルト』[武藤長藏?] (1924).

呉秀三『シーボルト先生：其生涯及功業』第2版，吐鳳堂書店 (1926).

シーボルト (呉秀三譯註)『シーボルト江戸参府紀行』駿南社 (1928)；改訂復刻版，雄松堂書店 (1966)；
オンデマンド版，雄松堂出版 (2005).

シーボルト (呉秀三訳註；呉茂一校訂)『シーボルト日本交通貿易史』駿南社 (1929)；改訂復刻版，雄松堂書店 (1966)；オンデマンド版，雄松堂出版 (2005).

シーボルト (小澤敏夫訳)『シーボルトの最終日本紀行』駿南社 (1931).

江崎悌三『Philipp Franz von Siebold の Fauna Japonica 解説』植物文献刊行會 (1935).

今宮新「アレキサンダー・フォン・シーボルト」『三田史學會』第十五卷第四號 (1937) : 115-155.

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (ヨハン・ホフマン解説；日本學會，日獨文化協會編輯)『フィリップ フランツ フォン シーボルト蒐集並ニヘーグ王立博物館所蔵日本書籍及手稿目録』郁文堂書店 (1937).

Philipp Franz von Siebold, *Beitrage zur Geschichte von Japan*, [郁文堂書店], [1937].

Philipp Franz von Siebold, *Anbau und Bereitung des Thees auf Japan*, [郁文堂書店], [1937].

日獨文化協會編『シーボルト研究』岩波書店 (1938).

シーボルト (大島蘭三郎翻譯；日本學會，日獨文化協會編輯)『シーボルト關係書翰集：シーボルトよりシーボルトへ』大井久五郎，郁文堂書店 (發賣) (1941).

羽仁説子『シーボルトの娘たち』創生社 (1948).

板沢武雄『シーボルト』吉川弘文館 (1960).

『シーボルト評伝』シーボルト先生史跡保存会 (1962).

『ケンペル，シーボルト資料展示会目録』ケンペル・シーボルト記念顕彰会 (1966).

中西啓『二人の日本研究家：ケンペル没後二百五十年およびシーボルト没後百年を記念して』ケンペル・シーボルト記念顕彰会 (1966).

- シーボルト（斎藤信訳）『江戸参府紀行』平凡社（1967）。
- 呉秀三『シーボルト先生 その生涯及び功業』3冊，平凡社東洋文庫（1967）。
- 秋岡武次郎『一八四〇年シーボルト著日本図ならびに一八一一年アロースミス著日本図』大日本測量（1967）。
- L. B. ホルサイス；酒井恒『シーボルトと日本動物誌：日本動物史の黎明』学術書出版会，啓学出版（発売）（1970）。
- L. B. Holthuis and T. Sakai, *Ph. F. von Siebold and Fauna Japonica : A History of Early Japanese Zoology*, 学術書出版会，1970。
- Yoshikazu Ishiyama, "A Brief Chronology of Dr Heinrich Bürger," *Japanese Studies in the History of Science*, **9** (1970) : 107-113.
- シーボルト『シーボルト日本植物図譜』講談社（1974）。
- ハンス・ケルナー（竹内精一訳）『シーボルト父子伝』創造社（1974）。
- 日蘭学会編『シーボルトと日本：「日本」復刻版刊行記念資料展目録』日蘭学会（1975）。
- 竹田道子（田代三善絵）『父のさじ：シーボルトのむすめの物語』実業之日本社（1976）。
- 本田正次ほか解説執筆『シーボルト日本植物誌解説』[出版者不明]，[1976？]。
- フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（中井晶夫訳）『日本：日本とその隣国，保護国一蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島一の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による。』第1巻-図録 第3巻，雄松堂書店（1977-79）。
- 緒方富雄ほか『シーボルト『日本』の研究と解説』講談社（1977）。
- 布施昌一『シーボルトの日本探検：この『人間と歴史』の風景』木耳社（1977）。
- 檜崎宗重編『秘蔵浮世絵：オランダ国立ライデン民族学博物館シーボルト・コレクション』第1巻-第3巻，講談社（1978）。
- 日独文化協会編『シーボルト研究』名著刊行会（1979）。
- 木村陽二郎『シーボルトと日本の植物：東西文化交流の源泉』恒和出版（1981）。
- シーボルト（斎藤信訳）『シーボルト：参府旅行中の日記』思文閣出版（1983）。
- 『シーボルト日本鳥類図譜』文有（1984）。
- 吉田昭治『連座：シーボルト事件と馬場為八郎』無明舎出版（1984）。
- 大沢真澄・塚原東吾「Ph. F. フォン・シーボルトの日本産鉱物・岩石および和漢薬などの調査」『化学史研究』第32号（1985）：157。
- 法政大学フォン・シーボルト研究会編『Ph. Fr. von Siebold 研究論集』法政大学（1985）。
- 宮永孝『阿蘭陀（おらんだ）商館物語』筑摩書房（1986）。
- 西武美術館ほか編『川原慶賀展：幕末の日本を伝えるシーボルトの絵師』西武美術館（1987）。
- 山口隆男『シーボルトと日本の博物学』（科研費成果報告書）（1987）。
- 板沢武雄『シーボルト』新装版，吉川弘文館（1988）。
- 京都国立博物館ほか編『シーボルトと日本：日本・オランダ修好380年記念』朝日新聞社（1988）。
- 布施昌一『シーボルトの日本史』木耳社（1988）。
- フランツ・シーボルト『シーボルト収集図書目録』科学書院（1988）。
- 久米康生『シーボルトと鳴滝塾：悲劇の展開』木耳社（1989）。
- 中西啓『シーボルト前後：長崎医学史ノート』長崎文献社（1989）。

- 長崎市教育委員会編集『シーボルト記念館資料目録』長崎市教育委員会（1989）。
- シーボルト・カウンシル編『ヨーロッパに眠る日本の宝：長崎出島からの旅：シーボルト・コレクション』文芸春秋（1990）。
- 水間直二『シーボルト事件と富山』桂書房（1990）。
- 大森實編『PH. FR. VON シーボルトと日本の近代化：法政大学第 11 回国際シンポジウム』法政大学（1992）。
- [シーボルト画]（木村陽二郎，大場秀章解説）『日本植物誌：シーボルト「フローラ・ヤポニカ」』八坂書房（1992）。
- 羽仁説子『シーボルトの娘たち』新日本出版社（1992）。
- 浜田けい子（依光隆絵）『日本ではじめての女医：楠本いね』岩崎書店（1992）。
- 山田重人「シーボルトと長崎の植物」『鳴滝紀要』第 2 号（1992）：44-54。
- 山口隆男「シーボルト収集の動物標本類を調査して」『学術月報』45(4)（1992.04）：331-337。
- ヴォルフガング・ゲンショレク（真岩啓子訳）『評伝シーボルト：日出づる国に魅せられて』講談社（1993）。
- 中西啓『長崎のオランダ医たち』岩波書店（1993）。
- 山口隆男編『シーボルトと日本の博物学：甲殻類』日本甲殻類学会（1993）。
- 吉村昭『ふぉん・しいほととの娘』上巻，下巻，新潮文庫（1993）。
- OAG・ドイツ東洋文化研究協会編『西洋人の描いた日本地図：ジパングからシーボルトまで』OAG・ドイツ東洋文化研究協会（1993）。
- 朝野雅文『伊能勘解由（忠敬）測量絵図：伊能図の果たした役割 主にシーボルト事件と英国測量船との掛け合い』北総史学研究所（1993）。
- シーボルト記念館『シーボルトのみたニッポン』シーボルト記念館（1994）。
- 片桐一男『オランダ商館長とシーボルトの江戸参府』シーボルト宅跡保存基金管理委員会（1994）。
- 山口隆男「シーボルトの日本の動物学への貢献」『化学史研究』第 21 巻（1994）：97-98。
- 宮坂正英「ブランデンシュタイン家文書に見られるシーボルトと桂川甫賢，宇田川榕庵との交流に関する記述資料について」『化学史研究』第 21 巻（1994）：99-100。
- Yojiro Kimura and Valerii I. Grubov (eds.), *Siebold's Florilegium of Japanese Plants = Florilegium plantarum Japonicarum Sieboldii*, 4 vols., Maruzen, 1993-1994.
- 大谷恒彦『シーボルト事件の背景と間宮林蔵：私論「林蔵は密告していない」』間宮林蔵顕彰会事務局（1995）。
- 保田孝一編著；高橋輝和，倉地克直，木之下忠敬共訳『文久元年の対露外交とシーボルト』岡山大学吉備洋学資料研究会（1995）。
- シーボルト記念館編集『シーボルト家の二百年展：シーボルト生誕 200 周年記念特別展』シーボルト記念館（1996）。
- P. F. B. フォン・シーボルト（大場秀章監修・解説；瀬倉正克訳）『シーボルト日本の植物』八坂書房（1996）。
- H・v・シーボルト（原田信男，H・スパンシチ，J・クライナー訳注）『小シーボルト蝦夷見聞記』平凡社東洋文庫（1996）。
- ドイツ-日本研究所，東京都江戸東京博物館，国立民族学博物館編『シーボルト父子のみた日本：生誕 200

- 年記念』ドイツ-日本研究所（1996）。
- 片野純恵『蘭方女医者事始：シーボルト・イネ』創栄出版（1996）。
- 成田睦子ほか編『シーボルト・日本を旅する：一外国人の見た日本の原風景』シーボルト・カウンシル（1996）。
- 山口隆男「シーボルトと日本の動物学」『鳴滝紀要』**6**（1996）：104-126。
- 石山禎一編著『シーボルトの日本研究』吉川弘文館（1997）。
- 大森実『知られざるシーボルト：日本植物標本をめぐる』光風社（1997）。
- 箭内健次；宮崎道生編『シーボルトと日本の開国・近代化』続群書類従完成会（1997）。
- 宮崎道生『シーボルトと鎖国・開国日本』思文閣出版（1997）。
- 山口隆男「シーボルトと日本の植物学」『Calanus 特別号 I』（1997）：1-410。
- 久米康生『シーボルトと鳴滝塾—悲劇の展開—』木耳社（1998）。
- ヨーゼフ・クライナー編著『黄昏のトクガワ・ジャパン：シーボルト父子の見た日本』日本放送出版協会（1998）。
- 日本思想史懇話会編集『季刊日本思想史 55 シーボルト：特集』ペリカン社（1999）。
- 加藤僖重「牧野標本館所蔵のシーボルト・コレクション」『横須賀市博物館研究報告 自然科学』**46**（1999.3）：23-32。
- シーボルト（木村陽二郎，大場秀章解説）『日本植物誌：シーボルト『フローラ・ヤポニカ』』新装版，八坂書房（2000）。
- シーボルト記念館編『シーボルトの江戸参府展：日蘭交流 400 周年記念・第 13 回特別展』シーボルト記念館（2000）。
- 石山禎一『シーボルト—日本の植物に賭けた生涯』里文出版（2000）。
- カウヴェンホーフェン，アルレッテ；フォラー，マティ著；フォラーくに子（佐藤悟訳）『シーボルトと日本—その生涯と仕事』八木書店（2000）。
- 大場秀章編『シーボルト日本植物コレクション』東京大学総合研究博物館，東京大学出版会（発売）（2000）。
- シーボルト記念館編『シーボルト旧蔵日本植物資料展：鳴滝に花開く植物図：第 12 回特別展』シーボルト記念館（2000）。
- 『工藤謙同・調査資料集：杵築出身の蘭方医（シーボルトの鳴滝塾で学んだ門人）：杵築蕃の医師・工藤蓬斎の次男』[久米忠臣]（2000）。
- Fukui Hidetoshi, Miyasaka Masahide and Tokunaga Hiroshi, *Siebold's Japan*, Siebold Memorial Museum, 2001.
- 大場秀章『花の男シーボルト』文藝春秋（2001）。
- シーボルト記念館編集『フォン・ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係文書マイクロフィルム目録』第 1 巻，第 2 巻，長崎市教育委員会（2001）。
- 高橋輝和『シーボルトと宇田川榕菴—江戸蘭学交遊記』平凡社（2002）。
- 『シーボルト・コレクション日本植物図譜展：日本のボタニカル・アートの原点』アート・ライフ（2002）。
- 石山禎一；沓沢宣賢；宮坂正英；向井晃編『新・シーボルト研究 I 自然科学・医学篇』八坂書房（2003）。
- 石山禎一；沓沢宣賢；宮坂正英；向井晃編『新・シーボルト研究 II 社会・文化・芸術篇』八坂書房（2003）。

- 加藤信重『牧野標本館所蔵のシーボルトコレクション』思文閣出版（2003）。
- 大場秀章編『シーボルトの21世紀』東京大学総合研究博物館，東京大学出版会（発売）（2003）。
- 兼重護『シーボルトと町絵師慶賀：日本画家が出会った西欧』長崎新聞社（2003）。
- 『シーボルト宅跡調査報告書』長崎市教育委員会（2004）。
- ねじめ正一『シーボルトの眼：出島絵師川原慶賀』集英社（2004）。
- 田賀井篤平（研究代表者）『シーボルト鉱物標本による江戸末期の日本での鉱物認識と鉱物学の実状についての研究』田賀井篤平（2004）。
- 石山禎一；牧幸一『シーボルト日記一再来日時幕末見聞記』八坂書房（2005）。
- 加藤信重ほか編『牧野標本館所蔵シーボルトコレクション』データベースCD-ROM版，東京都立大学出版会（2005）。
- 今村明生『歳月：シーボルトの生涯』新人物往来社（2006）。
- ヴェルナー・シーボルト（酒井幸子訳）『シーボルト，波瀾の生涯』どうぶつ社（2006）。

ツウンベリー（Thunberg）

- 日本学術会議，日本植物学会編纂『ツウンベリー研究資料』日本学術会議：日本植物学会（1953）。
- 岩生成一「ツウンベリイを繞る蘭学者」『図書』通号25（1951）：15-17。
- 波部忠重「貝類の学名の命名者列伝（2）：ツウンベリー Carl Peter Thunberg（1743-1828）」『ちりぼたん』3(3)（1964）：51-52。
- 芳賀徹「ケンペルからツウンベリーへー十八世紀後半の西欧世界と日本」『比較文化研究』通号8（1967）：1-36。
- 芳賀徹「徳川日本と西欧世界ーケンペルからツウンベリーへ」『自由』13(8)（1971.08）：177-191；13(9)（1971.09）：210-223。
- 木村陽二郎「植物学者ツウンベリーー来日200年記念事業にさいして」『自然』31(6)（1976.06）：48-53。
- 原寛「ツウンベリーが命名した日本植物の基準選定について」『植物研究雑誌』61(12)（1986.12）：353-363。
- 高橋文；川瀬清「C. P. ツウンベリーと日本-1-ツウンベリー来日の背景」『薬史学雑誌』22(1)（1987）：38-48。
- 高橋文「C. P. ツウンベリーと日本-2-来日前の医学研究について」『薬史学雑誌』26(2)（1991）：87-95。
- 高橋文「C. P. ツウンベリーと日本-3-来日前の医学論文について」『薬史学雑誌』26(2)（1991）：96-104。
- C・P・ツウンベリー（高橋文訳）『江戸参府随記』平凡社東洋文庫（1994）。
- 高橋文「C. P. ツウンベリーと日本-4-水銀水療法について」『薬史学雑誌』29(1)（1994）：47-54。
- 高橋文「C. P. ツウンベリーと日本-5-続水銀水療法について」『薬史学雑誌』29(1)（1994）：55-63。
- 高橋文「[C・P・ツウンベリーと日本] 第四報・第五報」『日本薬史学雑誌』29(1)（1994）：47-63。
- 高橋文「ツウンベリーと日本人との交流」『洋学史研究』11（1994）：42-61。
- Jonsell, Bengt「ツウンベリーとリンネおよびその伝統〔英文〕」『植物研究雑誌』69(5)（1994.10）：334-337。
- Nordenstam, R. B.「C. P. ツウンベリーの生涯，その旅行と科学的業績〔英文〕」『植物研究雑誌』69(5)（1994.10）：338-344。
- Wijnands, D. O.「ツウンベリーとオランダ，彼の旅行の背景と影響〔英文〕」『植物研究雑誌』69(5)

(1994.10) : 347-358.

金井弘夫「ツェンペリーと日本のアマチュア植物学〔英文〕」『植物研究雑誌』**69**(5) (1994.10) : 359-362.

高橋文「ツェンペリーの日本医療への貢献〔英文〕」『植物研究雑誌』**69**(5) (1994.10) : 363-371.

平林春樹「ツェンペリーによって命名された日本の植物」『桐朋学園大学研究紀要』**22** (1996) : 215-249.

石山洋「シーボルトがケンペル/ツェンペリー顕彰碑を建立した理由」『日本古書通信』**61**(2) (1996.02) : 2-4 ; **61**(3) (1996.03) : 8-10.

大場秀章「ツェンペリーと江戸時代の植物学」『日経サイエンス』**27**(2) (1997.02) : 104-111.

片桐一男「研究余滴 ツェンペリーに会いたい」『洋学史研究』通号 19 (2002) : 92-96.

澤崎博次「ツェンペリーとシーボルト」『ほすびたるらいぶらりあん』**30**(2) (2005.4) : 112-115.

加藤信重「ツェンペリーとツェンペリーの採集品—オランダ国立植物標本館ライデン大学分館の所蔵品を例に」『マテシス・ウニヴェルサリス』**8**(1) (2006.10) : 111-130.

ハラタマ (Gratama)

ハラタマ『理化新説』大阪理学校 (1870).

ハラタマ氏述『舎密局開講之説』明治文化研究会編明治文化全集 二十七, 4, 1967.

芝哲夫「ハラタマと日本の化学」『化学史研究』第 18 号 (1982) : 1-16.

芝哲夫「ハラタマの来日とその業績」『日蘭学会会誌』**9**(2) (1985) : 137-156.

石田純郎「医学近代化と外人たち—5-ウトレヒト陸軍軍医学校の同窓生たち—ハラタマ, レーウェン, ブッケマ, ロイトル」『臨床科学』**21**(8) (1985.08) : 1089-1094.

芝哲夫「オランダ化学者 K. W. ハラタマ博士と大阪における化学学校 舎密局」('Dutch Chemist Dr. K. W. Gratama and the School of Chemistry, Seimi Kyoku, in Osaka')『日蘭のかけ橋』(*Bridge Between Japan and Netherlands*), Vol. 6 (1986) : 191-198.

小出力「ハラタマ先生没後百年記念講演会：ハラタマと日本の化学」『化学と教育』**36**(2) (1988) : 209.

椎原庸「化学物語-1-日本に初めて近代化学を伝えた男ハラタマ」『化学』**43**(9) (1988.09) : 606-610.

椎原庸「化学物語-2-日本に初めて近代化学を伝えた男ハラタマ」『化学』**43**(10) (1988.10) : 678-682.

椎原庸「化学物語-3 完-日本に初めて近代化学を伝えた男ハラタマ」『化学』**43**(11) (1988.11) : 746-750.

椎原庸「ハラタマと大阪舎密局：ただ一人の蘭人理化学教師の来日」『化学と教育』**37**(5) (1989) : 472-476.

今村寿明「化学大家 357 Koenraad Wolter Gratama」『和光純薬時報』**59**(2) (1991) : 1-5.

芝哲夫「ハラタマ書簡について」『化学史研究』第 19 巻 (1992) : 228.

芝哲夫『オランダ人の見た幕末・明治の日本：化学者ハラタマ書簡集』菜根出版 (1993).

八耳俊文「芝哲夫『オランダ人の見た幕末・明治の日本—化学者ハラタマ書簡集—』」『化学史研究』第 23 巻 (1996) : 77-78.

芝哲夫「大阪舎密局とハラタマ」『化学と教育』**44**(1) (1996) : 16-17.

藤原鎮男「東京開成学校とハラタマ (上) (下) 東京大学理学部化学科のルーツ」『UP』**26**(7) (1997.07) : 15-20 ; **26**(8) (1997.08) : 26-32.

芝哲夫「長崎における K. W. ハラタマの舎密学講義録」『化学史研究』第 25 巻 (1998) : 26-40.

Hiemstra, Henk「シーボルトとハラタマ以来のオランダ—四百年の交流と日本の近代化」『化学』**53**(12) (1998.12) : 19-21.

芝哲夫「第18回化学会館化学史資料展示 舎密局とハラタマ」『化学と工業』**53**(3) (2000) : 298-300.

芝哲夫「日本の化学とオランダーハラタマと舎密局が遺したもの」『化学』**55**(4) (通号 587) (2000.04) : 27-32.

芝哲夫「日蘭交流 400 年記念ハラタマワークショップ報告」『化学史研究』第 27 卷 (2000) : 231-232.

芝哲夫「第 18 回化学会館化学史資料展示 (3 月 1 日~8 月中旬) 舎密局とハラタマ」『化学史研究』第 27 卷 (2000) : 77-79.

藤原鎮男「TASC フォーラム 金の化学から見た日本史の三つの夜明け (3) 馬関戦争の賠償金とハラタマ」『TASC monthly』**311** (2001.11) : 4-12.

芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち (5) ハラタマと舎密局」『化学と教育』**52**(2) (2004) : 127-129.

ボードウィン (Bauduin)

芝哲夫「長崎における A. F. ボードウィンの舎密学傳習講義録」『化学史研究』第 22 卷 (1995) : 239-251.

相川忠臣「ボードウィンの神経生理学講義録」『長崎醫學會雜誌』**72**(4) (1997) : 178-195.

上野賢一「Von Dem Grau Bis Zum Bunt (153) ベリベリ物語 (2) 惟準とボードウィンとハラタマ」『皮膚科の臨床』**48**(9) (2006.9) : 1151-1153.

ホルトルマン (Holterman)

板垣英治「オランダ人医師スロイスとホルトルマンによる最新化学の講義」『化学史研究』第 30 卷 (2003) : 122-4.

板垣英治「オランダ人医師 A. C. ホルトルマンの有機化学講義 1. 有機化学」『化学史研究』第 31 卷 (2004) : 1-13.

板垣英治「オランダ人医師 A. C. ホルトルマンの有機化学講義 2. 生化学, 発酵化学, タンパク化学」『化学史研究』第 31 卷 (2004) : 96-107.

板垣英治「ベンゼンの円型構造モデル: ホルトルマンの金沢病院医学所での有機化学講義から」『化学と教育』**52**(5) (2004) : 336-337.

板垣英治「水の系統的定性分析法 A. C. ホルトルマンの「実験化学」講義 藤本純吉筆記講義録から」『日本海域研究』**37** (2006) : 23-39.

ポ ン ペ

西洋医学教育発祥百年記念会編『ポンペ先生を中心とする医学史料展示会出品目録: 西洋医学教育発祥百年記念』西洋医学教育発祥百年記念会 (1957).

友永得郎ほか編『ポンペ略伝並びに長崎大学医学部沿革略』西洋医学教育発祥百年記念会事業部 (1957).

ポンペ (沼田次郎, 荒瀬進共訳)『ポンペ日本滞在看聞記: 日本における五年間』雄松堂書店 (1968).

渡辺保「ポンペ先生 (外国人と日本の歴史-5-)」『心』**23**(7) (1970) : 96-103.

神谷敏郎; 金沢英作「オランダ医官・ポンペが我が国にもたらした頭蓋骨の由来に関する調査」『日本医史学雑誌』**30**(4) (1984) : 413-424.

神谷敏郎; 金沢英作「ポンペが日本で採集した動物標本について」『日本医史学雑誌』**30**(4) (1984) : 432-442.

- 石田純郎；Beukers, Harm「ポンペの動物標本に関する書簡について」『日本医史学雑誌』**30**(4) (1984)：443-449.
- 宮永孝『ポンペ：日本近代医学の父』筑摩書房 (1985).
- ボイケルス,ハルム (石田純郎訳)「医学近代化と外人たち-3-ポンペと近代医学教育のあけぼの」『臨床科学』**21**(6) (1985)：805-810.
- ポンペ顕彰記念会編『ポンペ顕彰記念会記念誌』ポンペ顕彰記念会 (1991).
- 朝日ホームドクター社編『オランダからの刺激：ポンペにみる医療の親切』朝日ホームドクター (1991).
- 「ポンペ先生と弟子たち(残された未公開講演録 司馬遼太郎が語る日本)」『週刊朝日』**101**(55) (1996.11)：80-86.
- 山之内卯一「ポンペが松本良順に贈ったジッヘル著『眼病図譜』について」『大分県眼科医会報』**85** (1999)：3-10.
- 山之内卯一；千葉弥幸「ポンペが松本良順に贈ったジッヘル著『眼病図譜』について」『日本医史学雑誌』**45**(2) (1999)：200-201.
- 織田五二七「日本で初めて官医養生所をつくったポンペ」『日本医事新報』通号 3914 (1999)：58-60.
- 泉義雄「近代日本医学史を振り返る (下) ポンペの来日から“英雄”野口英世の事績まで」『望星』**30**(11) (1999.11)：79-84.
- 田崎哲郎「[史料紹介] 葛野経良訳『ポンペ種痘書』について」『愛大史学 日本史・アジア史・地理学』通号 9 (2000)：57-69.
- 森本岩太郎「ポンペ先生の医学教育に寄せて」『日本赤十字看護大学紀要』通号 14 (2000)：83-91.
- 芝哲夫「雲班図書中に発見されたポンペの化学講義録」『化学史研究』第 28 卷 (2001)：124.
- 八木正自「Bibliotheca Japonica (41) ポンペ・ファン・メールデルフォールト著『日本における五年間の成立とその周辺』『日本古書通信』**66**(5) (2001.5)：25.
- 芝哲夫「長崎におけるポンペの化学講義録『朋百舎密書』の原典について」『化学史研究』第 31 卷 (2004)：145.
- 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち (4) ポンペと上野彦馬」『化学と教育』**52**(1) (2004)：59-61.
- 相川忠臣「MEDICAL ESSAYS ルイス・デ・アルメイダとポンペ・ファン・メールデルフォールト」『日本医事新報』**4198** (2004.10)：39-43.
- ポンペ [述] (芝哲夫訳)『ポンペ化学書：日本最初の化学講義録』化学同人 (2005).
- 大島明秀「医学分館所蔵の出島版ポンペ著書について」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2005・06：33-35.
- 芝哲夫「化学の本だな 芝哲夫先生に聞く『ポンペ化学書』の出版秘話—日本最初の化学講義録を訳し終えて」『化学』**60**(8) (2005.8)：46-48.
- 大野誠「ポンペ (芝哲夫訳)『ポンペ化学書』」『化学史研究』第 33 卷 (2006)：180-182.
- 横田良介「明治初期の日本の医学に貢献した外国人：ポンペの遺した言葉と弟子たち」『柔道整復・接骨医学』**14**(3) (2006)：151.

スロイス (Sluys)

- 津田進三「スロイス, ホルトマンの時代の講義録から, 文献の中の先生」『金沢大学医学部百年史』金沢大学医学部創立百年記念会 (1972)：671-692.

- 津田進三「医学近代化と外人たち-8-スロイス, ホルトルマン」『臨床科学』**21**(12) (1985.12): 1685-1689.
- 寺畑喜朔「蘭医スロイスの日本到着」『北陸医史』**9**(1) (1988): 35-37.
- 板垣英治「P. J. スロイス, 近代化学のあけぼのをもたらした来日オランダ人医師」『化学史研究』第 29 卷 (2002): 172-183.
- 板垣英治「オランダ人医師スロイスとホルトルマンによる最新化学の講義」『化学史研究』第 30 卷 (2003): 122-4.
- 板垣英治「『舍密性現象ハ必ズ「モルキュレ」ノ「フォリウムレ」ヲ以テ徴スベシ』明治 4 年に金沢藩御雇 蘭人医師, P. J. スロイスが行った化学講義」『日本海域研究』**34** (2003): 1-15.
- 板垣英治「金沢藩御雇蘭人医師 P. J. A. スロイスの「究理学」講義: 特に「エレキ論」と「マク子ート論」から」『日本海域研究』**35** (2004): 1-20.
- 私魯以斬氏口述 (藤本純吉筆記)『舍密学』金沢大学資料館 (2005).

宇田川榕菴

- 島尾永康「Lavoisier 化学命名法の日本における確立」『科学史研究』通号 100 (1971.12): 213-224.
- 島尾永康「日本におけるラヴァアジェ化学の受容—宇田川榕菴手稿本にみる」『科学史研究』通号 99 (1971.9): 174-178.
- 島尾永康「宇田川榕菴とラホイシール『舍密原本』」『日本洋学史研究』創元社 (1972): 245-279.
- 道家達将「洋学史における宇田川榕菴」『季刊芸術』**7**(1) (1973.01): 88-106.
- Tatsumasa Doke, “Yoan Udagawa: A Pioneer Scientist of Early Century Feudalistic Japan,” *Japanese Studies in the History of Science*, **12** (1973): 99-120.
- Minoru Tanaka, “Rezeption chemischer Grundbegriffe bei dem ersten Chemiker Japans, Udagawa Yoan (1798-1846), in seinem Werk, Seimi Kaiso. Beiträge zur Geschichte der Chemie in Japan,” *Japanese Studies in the History of Science*, **15** (1976): 97-110.
- 矢部一郎『植学啓原—宇田川榕菴—復刻訳・注』講談社 (1980).
- 矢部一郎「宇田川榕菴と生化学」『化学史研究』第 33 号 (1985): 178-185.
- 大友信一「榕菴の『華音集要』と表記の実態」『洋学資料による日本文化史の研究』吉備洋学資料研究会, (1989): 27-44.
- 幸田正孝「宇田川榕菴の年譜 (上) (下)」『津山高専紀要』第 29 号 (1991): 179-220; 第 31 号 (1992): 50-82.
- 幸田正孝「宇田川榕菴著作類のリスト」『津山高専紀要』第 31 号 (1992): 83-112.
- 芝哲夫「化学大家 361 宇田川榕菴」『和光純薬時報』**60**(3) (1992): 2-3.
- 土井康弘「宇田川榕菴の薬物認識—音訳との関わりを通して—」『化学史研究』第 21 卷 (1994): 103-104.
- 塚原東吾「宇田川榕菴の舍密学研究」『化学史研究』第 25 卷 (1998): 57-58.
- 塚原康子「宇田川榕菴の楽律研究」『化学史研究』第 25 卷 (1998): 59-60.
- 幸田正孝「宇田川榕菴の伝記的研究史」『化学史研究』第 25 卷 (1998): 63-65.
- 芝哲夫「杏雨書屋宇田川榕菴資料 (I) 化学」『杏雨』創刊号 (1998): 55-102.
- 塚原東吾「化学と能吏: 宇田川榕菴」『化学』Vol. 53, No. 10 (1998.10): 14.
- 菅原国香「宇田川榕菴の造語「舍密加」「舍密」の出現と漢語・漢字の選択に関する一考察」『一滴』第 7 号 (1999): 26-44.

芝哲夫「杏雨書屋宇田川榕菴資料（II）自然科学一般」『杏雨』第3号（2000）：112-146.

Togo Tsukahara, "The Westernization of Chemistry from Different Angles: An Examination of Three Manuscripts by Contemporaries of Yoan Udagawa and His Seimi Kaiso," *Historia Scientiarum*, **9** (2000) : 191-214.

芝哲夫「杏雨書屋蔵書に見る宇田川榕菴の世界」『杏雨』第5号（2002）：117-128.

川 本 幸 民

小澤清躬『蘭学者川本幸民傳』洛北書房（1948）.

川本裕司；中谷一正『川本幸民伝：近世日本の化学の始祖』共立出版（1971）.

宗田一「川本幸民の理化学書一二，三の書誌学的考察一」『蘭学資料研究会報告』第248号（1971）：191-194.

宗田一「川本幸民の理化学書一二，三の書誌学的考察一」『日本医史学雑誌』**17**(3)（1971）：251-253.

緒方富雄「高橋由一筆 川本幸民蔵」『日本医史学雑誌』**17**(3)（1971）：247-248.

三田市郷土先哲顕彰会編『川本幸民百年祭記念誌』三田市郷土先哲顕彰会（1971）.

井上悌雄「『弁髦』ということばについて川本幸民の『化学新書』雑考」『蘭学資料研究会研究報告』**260**（1972）：233-235.

芝哲夫「舎密学から化学へー川本幸民」『化学と工業』**29**(6)（1976.06）：467-469.

小泉定弘「川本幸民に関する研究一本邦写真伝来史に於ける彼の業績」『日本大学芸術学部紀要』通号8（1978）：3-13.

阪上正信「川本幸民『化学新書』の源流 J. A.Stöckhardt」『化学史研究』第17巻（1990）：146.

阪上正信「『化学の学校』のながれーステックハルト・川本幸民・オストワルド」『化学と工業』**44**(12)（1991.12）：2093-2095.

今村寿明「化学大家 356 川本幸民」『和光純薬時報』**59**(1)（1991）：1-5.

阪上正信「兵庫県三田に生まれた川本幸民と化学新書」『化学と教育』**44**(1)（1996）：14-15.

菅原国香「『化学読本』（1875）の原書と基本的化学術語」『東洋大学工学部教養課程紀要』第32号（1996）：129-141.

阪上正信『蘭学者川本幸民の『化学新書』解説・実験の手引き』三田市郷土先哲顕彰会（1998）.

川本幸民『化学新書』（復刻），化学史学会・菜根出版・紀伊国屋書店（1998）.

川本幸民『兵家須読舎密真源』（復刻），化学史学会・菜根出版・紀伊国屋書店（1998）.

八耳俊文「川本幸民著作解説」『化学史研究』第25巻（1998）：41-54.

日本学士院図書室編『川本幸民文庫目録：日本学士院所蔵』日本学士院図書室（1998）.

柳田昭『黒船なににするものぞ：蘭学者・川本幸民』朝日ソノラマ（1998）.

八耳俊文「川本幸民とその足跡展 報告記」『化学史研究』第25巻（1998）：259-263.

日吉芳朗「川本幸民の『化学新書』—教科書としての意義と実験の教材化」『化学史研究』第27巻（2000）：210-217.

阪上正信「月例卓話 日本の実験化学教育事始—川本幸民と『化学新書』」『海洋化学研究』**14**(1)（2001.4）：4-8.

金子務「科学史の風雲児たち（8）川本幸民—化学とビールの始祖」『歴史読本』**48**(8)（通号765）（2003.8）：216-219.

- 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち (2) 川本幸民と化学新書」『化学と教育』**51**(11) (2003.11) : 707-710.
- 司亮一『蘭学者川本幸民：幕末の進取の息吹と共に』神戸新聞総合出版センター (2004).
- 八田明夫；八田英夫「江戸末期の理科書『氣海觀瀾廣義』について」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』**14** (2004) : 1-4, 5.
- 滝本喬「日本人のオリジナリティ探訪 日本で初めてビールを造った実践科学者—川本幸民」『Fujitsu 飛翔』**56** (2006.7) : 22-25.

上 野 彦 馬

- 上野彦馬抄訳『舎密局必携』(1862).
- 島田耕一「故上野彦馬君略歴」『藥學雜誌』**269** (1904) : 599-601.
- 菊地久吉編『上野彦馬翁傳』オリエンタル写真工業 (1951).
- 梅本貞雄「上野俊之丞と上野彦馬」『蘭研報告』**55** (1959).
- 『写真の開祖上野彦馬：写真にみる幕末・明治』産業能率短期大学出版部 (1975).
- 大岩正芳「上野彦馬の『舎密局必携』」『化学史研究』第4号 (1975) : 20-28.
- 大森実「上野彦馬『舎密局必携』の編述に使用した参考書について」『蘭学資料研究会研究報告』**23** (1975) : 302-304.
- 上野彦馬抄訳『舎密局必携 (復刻と解説)』産業能率短期大学出版部 (1976).
- 大森実, 小沢健志『舎密局必携 解説編』産業能率短期大学出版部 (1976).
- 八幡政男『上野彦馬：幕末のプロカメラマン』長崎書房, 白馬書房 (発売) (1976).
- 小沢健志「上野彦馬と写真 (日本の近代化学のあけぼの-15-)」『化学と工業』**30**(5) (1977.05) : 350-352.
- 桐敷真次郎「創建時大浦天主堂と上野彦馬のカメラ：建築歴史・建築意匠」『学術講演梗概集. 計画系』**57** (計画系) (1982) : 2339-2340.
- 八幡政男『写真術師上野彦馬』マルジュ社 (1986).
- 後藤和雄；松本逸也編『甦る幕末：写真集：ライデン大学写真コレクションより』朝日新聞社 (1987).
- 藤崎康夫作；小島直絵『時代をつかめこの手のなかに—日本初のプロ・カメラマン上野彦馬』PHP 研究所 (1988).
- 越中哲也「長崎文化と上野彦馬 (特別講演)」『写真測量とリモートセンシング』**31**(2) (1992.04) : 55-62.
- 八幡政男『評伝上野彦馬：日本最初のプロカメラマン』(1993).
- 芝哲夫「化学大家 366 上野彦馬」『和光純薬時報』**62**(2) (1994) : 2-4.
- 芝哲夫「化学会館展示上野彦馬—わが国写真化学の先覚者—」『化学史研究』第23巻 (1996) : 261-264.
- 芝哲夫「上野彦馬—わが国写真化学の先覚者」『化学と工業』**49**(8) (1996.08) : 1056-1058.
- 上野彦馬 [ほか撮影]『上野彦馬と幕末の写真家たち』岩波書店 (1997).
- 小沢健志編『幕末・明治の写真』筑摩書房 (1997).
- 阿蘇品保夫「富重写真所と上野彦馬」『日本歴史』通号 601 (1998.06) : 56-58.
- 上野一郎「グラビア まほろばの末裔 (4) 上野彦馬」『正論』通号 361 (2002.9) : 21-27.
- 金子務「科学史の風雲児たち (3) 上野彦馬—写真術開祖者」『歴史読本』**48**(3) (2003.3) : 222-225.
- 芝哲夫「日本化学会創立 125 周年記念企画 (10) 日本の化学を切り拓いた先駆者たち (4) ポンペと上野彦馬」『化学と教育』**52**(1) (2004) : 59-61.

長崎伝習所出島事始め塾編『上野彦馬の人物像：その業績とその後の長崎』出島事始め塾（2003）。
上野彦馬〔撮影〕；馬場章編『上野彦馬歴史写真集成』渡辺出版（2006）。

坪井 信道

坪井信道『遠西二十四方』（1831）。
坪井信道訳『製煉發蒙』。
中貞夫『坪井信道：洋学者』弘學社（1943）。
中野操「蘭学界の先覚者坪井信道」『日本及日本人』通号 1485（1970.05）：149-159。
青木一郎『年譜で見る坪井信道の生涯』杏林温故会（1971）。
青木一郎編著『坪井信道詩文及書翰集』岐阜県医師会（1975）。
坪井信道撰；青木一郎訳注『診候大概』岐阜県医師会（1978）。
蒲原宏「坪井日習堂塾門入録断簡」『医譚』通号 55（1987.05）：3426-3429。
斎藤祥男『蘭医家坪井の系譜と芳治』東京布井出版（1988）。
和田和代史「一坪井信道賛一川原慶賀のヒポクラテス画像」『日本医史学雑誌』44(2)（1998）：26-27。
幸田正孝「坪井信道の年譜の再検討一家訓と日習堂を中心に」『科学技術史』通号 2（1998）：84-105。
Cryns, Frederik「江戸後期における西洋発生理学思想の受容ーマルピーギの受精卵観察と坪井信道」
『Nichibunken Japan Review』17（2005）：55-89。

舎密開宗

宇田川榕菴『舎密開宗』（1837）。
坂口正男「『舎密開宗』における化学親和力の観念（1），（2）」『科学史研究』通号 67（1963）；通号 83（1967）：124-132。
向井晃「舎密開宗の影響」『法政史学』通号 16（1964）。
坂口正男「『舎密開宗』の研究-2・3-」『科学史研究』通号 72（1965）。
坂口正男「Adolphus Y pey の Chemie voor Beginnende Liefhebbers と『舎密開宗』」『科学史研究』通号 73（1965）。
坂口正男「ふたたび『舎密開宗』の原本について」『科学史研究』通号 80（1966）：171-178。
坂口正男「『舎密開宗』における化学命名法」『科学史研究』通号 85（1968）：10-21。
坂口正男「『舎密開宗』の薬学関係引用書について」『科学史研究』通号 86（1968）：49-56。
林良重「舎密開宗に学ぶ」『化学教育』21(4)（1973）：278-282。
D. ウィリアム・ヘンリー〔原著〕；宇田川榕菴〔訳著〕；田中実校注『舎密開宗：復刻と現代語訳・注』
〔正〕，〔別冊：坂口正男『舎密開宗の研究』〕，講談社（1975）。
田中実，坂口正男，道家達将，菊池俊彦『舎密開宗の研究』講談社（1975）。
林良重「舎密開宗（主に宇田川榕菴）の実験の再現とその教育的活用」『化学史研究』第 32 号（1985）：155。
千野光芳「『舎密開宗』漢字音訳化学名と中野柳園遺教『西音発微』」『化学史研究』第 36 号（1986）：137。
林良重「『舎密開宗』（主に宇田川榕菴）の実験を現代風にアレンジした演示実験」『化学史研究』第 36 号（1986）：114-120。
戸田一郎「高校理科から見た『舎密開宗』の実験」『化学史研究』第 40 号（1987）：130。
林良重；黒杭清治；村田吉彦「榕菴を感激させたジアナ樹を育てる：舎密開宗による銀樹の追試実験（デモ

- 実験虎の巻)』『化学と教育』**36**(1) (1988): 74-75.
- 林良重「『舎密開宗』による化学ハーモニカの再現」『化学と教育』**36**(3) (1988): 56-57.
- 林良重; 大井手幸夫; 亀谷進「『舎密開宗』による「舎密之楽音克譜 (化学ハーモニカ)」の再現 (デモ実験虎の巻)」『化学と教育』**36**(3) (1988): 284-285.
- 林良重「『舎密開宗』によるボルタ氏のコロムの再現」『化学と教育』**36**(4) (1988): 54-55.
- 林良重; 戸田一郎; 佐藤諦順「『舎密開宗』による「福爾答氏ノ格羅母」と「務爾斯的度氏ノ尾爾華尼機」の再現 (デモ実験虎の巻)」『化学と教育』**36**(4) (1988): 386-387.
- 林良重「『舎密開宗』と宇田川榕菴」『化学と教育』**37**(5) (1989): 462-466.
- 藤原鎮男; 岡本有子「舎密開宗における現代化学用語 (科学技術基本用語の研究) (II. 原報)」『年報'89 (神奈川大学)』(1990): 333-337.
- 林良重「『舎密開宗』の実験とその教材化」『化学史研究』第 19 卷 (1992): 230.
- 大沢眞澄・土井康弘「舎密開宗についての二、三の考察」『化学史研究』第 19 卷 (1992): 224.
- 林良重「『舎密開宗』の実験とその教材化」『科学史研究』第 II 期 **33** (1994): 88-91.
- 塚原東吾「化学史をめぐる西洋と日本分野の研究の対話の可能性—ヘンリーによる『舎密開宗』原本の書誌を例として—」『化学史研究』第 21 卷 (1994): 83.
- 土井康弘「宇田川榕菴の著『植学啓原』と『舎密開宗』をめぐる学術交流」『洋学』通号 3 (1995): 107-133.
- 林良重; 富永淳; 水島耕成「『舎密開宗』中の鉱物性カメレオン (マンガン酸カリウム) の教材化」『化学と教育』**44**(4) (1996): 240-241.
- 廣田鋼蔵・荒木恒夫「宇田川榕菴訳『舎密開宗』の題名についての考察—出版当時の榕菴の環境をめぐる—」『化学史研究』第 24 卷 (1997): 220-225.
- 芝哲夫「日本の化学を開いた『舎密開宗』」『化学』**53**(10) (1998): 21-24.
- 東徹「『舎密開宗』の参考文献『葛氏舎密』について」『化学史研究』第 25 卷 (1998): 61-62.
- 林良重「『舎密開宗』の実験を化学教材に」『化学』**53**(10) (1998): 25-27.
- 芝哲夫「宇田川榕菴『舎密開宗』未完部分の復元」『化学史研究』第 25 卷 (1998): 66-68.
- 芝哲夫「日本の化学を開いた『舎密開宗』」『化学』**53**(10) (1998.10): 21-24.
- 林良重「『舎密開宗』の実験を化学教材に」『化学』**53**(10) (1998.10): 25-27.
- 芝哲夫「宇田川榕菴の舎密開宗手沢本の頭注」『化学史研究』第 29 卷 (2002): 125.
- 菅原国香「『舎密開宗』の参考書『紐氏韻府』の原本とその引用をめぐる」『科学史研究』第 2 期 **42** (2003): 40-48.
- 菅原国香「ニューウェンホイス『学芸技術百科事典』の『舎密開宗』」『化学史研究』第 30 卷 (2003): 107.
- 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち (1) 宇田川榕菴と舎密開宗」『化学と教育』**51**(10) (2003.10): 638-640.

舎密便覧

- 河野禎造訳『舎密便覧』1956.
- 宗田一「河野禎造と『舎密便覧』」『蘭学資料研究会研究報告』**7**(113) (1962): 217-224.
- 宗田一「わが国最初の定性分析化学書『舎密便覧』」『薬事日報』**3121** (1962): 12-13.
- 千野光芳「『舎密便覧』について」『化学史研究』第 11 号 (1979): 36.

- 千野光芳「『舎密便覧』と『定量試礦撰要』について」『飯沼慾斎』（1984）：252-259.
- 北村二郎「『舎密便覧』と『草木図説』『ファルマシア』」**21**(8)（1985）：776-777.
- 芝哲夫「化学大家 364 河野禎造」『和光純薬時報』**61**(3)（1993）：2-4.
- 千野光芳「江戸時代の刷り物にみる日本の文化『舎密便覧』『季刊歴史海流』」**3**(2)（1997）：76-77.
- 菊池好行「河野禎造訳『舎密便覧』の原本—オランダにおける化学実験操作の図表化の背景」『化学史研究』第 27 卷（2000）：103.
- 菊池好行「『舎密便覧』の原著者ヘンドリック・クラメル・ホメス—オランダにおける化学実験操作の図表化の社会的背景—」『化学史研究』第 27 卷（2000）：129-155.
- 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（3）河野禎造と舎密便覧」『化学と教育』**51**(12)（2003.12）：797-799.

カステレイン（Kastelijn）

- 東徹「『舎密開宗』とカステレインの化学書」『化学史研究』第 30 卷（2003）：108.
- 東徹「宇田川榕菴の化学受容と『杏雨書屋資料』—カステレインの雑誌を中心として—」『化学史研究』第 33 卷（2006）：129-146.

本草/自然誌/博物学

- 清原重巨撰（遠藤正治編）『草木性譜・有毒草木図説』（1827）；八坂書房（1989）.
- 貝原益軒『大和本草綱目』二十三冊 宝永六年刊.
- 田中長三郎『泰西本草及び本草家』岩波講座生物学（1931）.
- 白井光太郎『支那及日本本草学の沿革及本草家の伝記（岩波講座生物学）』岩波書店（1930）.
- 白井光太郎『本草学論攷』4冊，春陽堂（1933）.
- 森銑三『おらんだ正月』富山房百科文庫（1938）.
- 上野益三『日本生物學の歴史』弘文堂書房（1939）.
- 小泉丹『日本科学史私攷 初輯 第一編初期本草学の考察～第四編家康と羅山』岩波書店（1943）.
- 上野益三『日本博物学史』星野書店（1948）.
- 日野巖『防長本草学及生物学史』同先生還暦記念会刊（1958）.
- 吉川芳秋『本草蘭医科学郷土史考』吉川芳秋（1971）.
- 杉本つとむ（解説）『物類品隲（生活の古典双書 2）』八坂書房（1972）.
- 上野益三『日本博物学史』平凡社（1973）；講談社学術文庫（1989）.
- 木村陽二郎『日本自然誌の成立』中央公論社（1974）.
- 松島博『近世伊勢における本草学者の研究』講談社（1974）.
- 難波恒雄『日本の本草』漢方文献（1976）.
- つかさ書房編『国立国会図書館支部上野図書館 本草関係図書目録 改訂増補』つかさ書房（1976）.
- 岡西為人『本草概説』創元社（1977）.
- 日野巖『防長本草学及生物学・農学年表』マツノ書店（1977）.
- （木村康一新註校定；鈴木真海訳）『新註校定国訳本草綱目』春陽堂書店（1979）.
- 上野益三『薩摩博物学史』島津出版会（1982）.
- 上野益三『博物学史論集』八坂書房（1984）.

- 白井光太郎（木村陽二郎編）『白井光太郎著作集第1巻 本草学・本草学史研究』科学書院（1985）。
- 北村四郎『本草の植物 北村四郎選集第2巻』保育社（1985）。
- 上野益三『博物学史論集』補訂版，平凡社（1986）。
- 北村四郎他『本草図譜総合解説』同朋舎（1986）。
- 上野益三『忘れられた博物学』八坂書房（1987）。
- 難波恒雄「本草のなかの化学」『化学史研究』第40号（1987）：126-127。
- 木村陽二郎『江戸期のナチュラリスト』朝日新聞社（1988）。
- 上野益三『年表 日本博物学史』八坂書房（1989）。
- 上野益三『博物学の愉しみ』八坂書房（1989）。
- 小西正泰「殿様生物学の系譜-12-「博覧会男爵」田中芳男」『科学朝日』49(12)（1989.12）：90-94。
- 上野益三『博物学の時代』八坂書房（1990）。
- 上野益三『博物学者列伝』八坂書房（1991）。
- 吉川芳秋（木村陽二郎，遠藤正治編）『医学・洋学・本草学者の研究：吉川芳秋著作集』八坂書房（1993）。
- 下中弘編『彩色 江戸博物学集成』平凡社（1994）。
- 根本曾代子『下山順一郎先生伝：草楽太平記』薬学部新館竣工記念事業委員会（1994）：復刻版，創英社，三省堂書店（2006）。
- 杉原正泰，天野宏『横浜のくすり文化：洋薬ことはじめ』有隣堂（1994）。
- 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』上・下，思文閣出版（1995）。
- 東京科学博物館編『幕末本草家交信録一畔田翠山・山本沈三郎文書一』名著刊行会（1996）。
- 杉本つとむ編『西洋本草書集』（早稲田大学蔵 資料影印叢書 洋学篇 第11巻）早稲田大学出版部（1996）。
- 山田慶兒『本草と夢と錬金術と：物質的想像力の現象学』朝日新聞社（1997）。
- 西村三郎『文明のなかの博物学：西欧と日本』上下，紀伊國屋書店（1999）。
- 磯野直秀『日本博物誌年表』平凡社（2002）。
- 小曾戸洋研究代表『江戸時代医学・本草学資料の整理と研究（科学研究費補助金特定領域研究（2）研究報告書；平成14-15年度，平成16-17年度。江戸のモノづくり）』北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所（2006）。

明治以降

蕃書調所

- 原平三「蕃書調所の科學及び技術部門に就て」『帝國學士院記事』2の3（1943）：437-471。
- 佐藤昌介「化学教育のはじまりー蕃書調所のばあい」『化学と工業』29(9)（1976.09）：761-763。
- 二見剛史「蕃書調所の成立事情」『日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要』通号10（1979.03）：15-56。
- 宮崎ふみ子「開成所に於ける慶応改革：開成所「学政改革」を中心として」『史學雜誌』89(3)（1980）：343-364，408-409。
- 二見剛史「近世と近代のかけ橋ー蕃書調所」『教育と医学』29(1)（1981.01）：85-93。
- 茂住実男「蕃書調所における英語教育」『英学史研究』通号16（1983）：103-116。
- 小松醇郎「蕃書調所数学教授黒沢弥五郎について」『数学史研究』通号110（1986.09）：13-16。
- 道家達将「幕末・明治初期の化学技術者，宇都宮三郎ゆかりの地を訪ねて」『化学と教育』39(1)（1991）：

54-58.

堀孝彦「蕃書調所と堀達之助一市川兼恭『浮天斎日記』および久坂玄瑞の入塾」『英学史研究』35（2002）：65-81.

石山洋「源流から辿る近代図書館（69）『蕃書調所書籍目録写』と『御書籍目録』『蛮書類』（上）」『日本古書通信』71(9)（2006.9）：17；71(10)（2006.10）：24；71(11)（2006.11）：21；71(12)（2006.12）：15.

お雇い外国人

梅溪昇『お雇い外国人：明治日本の脇役たち』日本経済新聞社（1965）.

友澤淳二「アトキンソンによる日本酒醸造の研究」『科学史研究』75巻（1965）：114-123.

石山洋「ジョン・ミルン（明治科学の恩人達1）」『科学技術文献サービス』第23号（1968）：54-55.

『お雇い外国人』17冊，鹿島研究所出版会-鹿島出版会（1968-1976）.

（1 概説/梅溪昇著；2 産業/吉田光邦著；3 自然科学/上野益三著；9 医学/石橋長英，小川鼎三著）

石山洋「クルト・ネットー（明治科学の恩人達8）」『科学技術文献サービス』第30号（1970）：44-45.

Noboru Umetani, *The Role of Foreign Employees in the Meiji Era in Japan*, Tokyo: Institute of Developing Economies, 1971.

鹿島卯女『ベルツ花—エルウィン フォン ベルツ夫人の生涯—』鹿島研究所出版会（1972）.

ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館（1975）.

渡辺正雄『お雇い米国人科学教師』講談社（1976）.

塩川久男「R. W. アトキンソン—生涯と彼による上水水質分析について—」『化学史研究』第6号（1977）：20-24.

J. MacLean, "The Significance of Jan Karel van den Broek (1814-1865) for the Introduction of Western Technology into Japan," *Japanese Studies in the History of Science*, 16（1977）：69-93.

北政巳『国際日本を拓いた人々：日本とスコットランドの絆』同文館出版（1984）.

『日本の近代化とフランスの工業技術：横須賀製鉄所・横浜製鉄所・生野鋳山・富岡製糸場』駿河台出版社（1986）.

嶋田正〔ほか〕編『ザ・ヤトイ：お雇い外国人の総合的研究』思文閣出版（1987）.

宗田一〔ほか〕編著『医学近代化と来日外国人』世界保健通信社（1988）.

石橋長英監修『ベルツ博士と私』日本新薬(株)（1988）.

アーダス・パークス編『近代化の推進者たち：留学生・お雇い外国人と明治』思文閣出版（1990）.

田中隆二『お雇いフランス人教師の教え子達（松江フランス学列士録）』たたら書房（1990）.

荒俣宏『開化異国（おつくに）助っ人奮戦記』小学館（1993）.

日本放送出版協会編『貢献した外国人たち』日本放送出版協会（1994）.

安井広『ベルツの生涯：近代医学導入の父』思文閣出版（1995）.

村松貞次郎『日本の近代化とお雇い外国人』日立製作所（1995）.

武内博編著『来日西洋人名事典・増補改訂普及版』日外アソシエーツ（1995）.

柿原泰「近代日本の工学教育における科学と実地の相克：工部大学校における電信工学」『年報 科学・技術・社会』Vol. 5（1996）：1-20.

オリーブ・チェックランド（杉山忠平，玉置紀夫訳）『明治日本とイギリス：出会い・技術移転・ネットワークの形成』法政大学出版局（1996）.

渡辺正雄『増訂 お雇い米国人科学教師』北泉社 (1996)。

東京大学附属図書館展示委員会編『お雇い外国人展：東京大学創立 120 周年記念展示：展示資料図録抜き刷り』東京大学附属図書館 (1997)。

柿原泰「お雇い外国人とイギリス帝国のエンジニア—新たなお雇い外国人研究にむけて」『東京大学史紀要』18 (2000)：33-44。

鈴木淳；柿原泰；神山恒雄 他「シンポジウム 工部省とその時代 (第九九回史学会大会報告記事)」『史学雑誌』110 (12) (2001.12)：2153-2156。

オリーヴ・チェックランド (加藤詔士；宮田学編訳)『日本の近代化とスコットランド』玉川大学出版部 (2004)。

梅溪昇『お雇い外国人：明治日本の脇役たち』講談社学術文庫 (2007)。

グリフィス (Griffis)

塩川久男「明治初期のお雇い外人教師たち—グリフィス、クラーク、ダイバーズ、アトキンソンのばあい—」『化学史研究』第 8 号 (1978)：34-35。

内田高峰・沖久也・目不二雄・伊佐公男・中田隆二「グリフィスの化学講義ノート」『化学史研究』第 34 号 (1986)：32-42。

山下英一『グリフィスと日本：明治の精神を問いつづけた米国人ジャパノロジスト』近代文藝社 (1995)。

蔵原三雪「明新館における W. E. グリフィスの化学授業」『武蔵丘短期大学紀要』第 3 巻 (1995)：1-10。

蔵原三雪「W. E. Griffis の理化学教養の形成：ラトガース大学科学教育の展開を通じて」『科学史研究』39 巻 (2000)：144-152。

コルショルト (Korschelt)

小野藤介編『酒類防腐新説問答：オスカル・コルシェルト氏伝方』第 1 編，第 2 編，宝栄堂 (1881-1883)。

コルシェルト「土壤分類ノ説」『地質調査所報文分析之部』15 年 2 (1882)：69-94。

コルシェルト「日本農業ノ目途」『地質調査所明治 15 年報』1 (1882)：103-143。

橋本謙一「オスカー・コルシェルトの業績」『化学と工業』23 (1970)：539-543。

石山洋「明治科学の恩人たち—26—オスカー・コルシェルト」『科学技術文献サービス』通号 48 (1977.12)：35-39。

鎌谷親善「高山甚太郎と工業試験所」『化学技術研究所八十年史：創立 80 周年記念出版』工業技術院化学技術研究所 (1980)，pp. 327-351。

鎌谷親善「地質調査所とコルシェルト」『化学史研究』通号 17 (1981)：19。

安藤厚「地質調査所における化学分析の歩み 100 年」『地質ニュース』337 (1982)：140-145。

藤原隆男「オスカー・コルシェルトの『酒の製造について』」『酒史研究』12 (1994)：1-28。

藤原隆男「オスカー・コルシェルトと開拓使—開拓使麦酒醸造所を中心として—」『岩手大学文化論叢』3 (1995)：95-110。

藤原隆男「オスカー・コルシェルトの大麦製日本酒の醸造について」『岩手大学文化論叢』5 (2002)：63-76。

藤原隆男「オスカー・コルシェルトのドイツ帰国後の活動とツィッタウでの化学工場の建設」『酒史研究』22 (2005)：13-20。

黒田和男「コルシエルトの東京府下用水分析報告—明治 15 年頃の飲料用地下水に関する調査と提案」『地下水技術』**48**(2) (2006.2) : 11-23.

ダイヴァース

埴和為昌「ダイバーズ先生の伝」『東京化学会誌』33 巻 (1912) : 1-26.

藤井清久「日本における近代化学の父 E. ダイヴァーズの墓を訪ねて」『化学史研究』通号 30 (1985) : 70-73.

島尾永康「化学大家 362 エドワード・ダイヴァース」『和光純薬時報』**60**(4) (1992) : 2-4.

ワグネル (Wagener)

植田豊橘編『ワグネル伝』博覧会出版協会 (1925).

梅田音五郎編『ワグネル先生追懷集』故ワグネル博士記念事業会 (1938).

山崎俊雄「近代日本窯業の祖ワグネル畧伝」『窯業協會誌』**71**(815) (1963) : C 561-C 562.

G. ワグネル (土屋喬雄編)『維新産業建設論策集成』北隆館 (1944) ; 原書房 (1976).

加藤誠軌「ワグネル先生記念碑の改修によせて」『セラミックス』**13**(6) (1978.06) : 486-489.

加藤誠軌 ; 菌田義雄「ワグネル—日本の近代窯業育ての親」『セラミックス』**18**(1) (1983.01) : 57-61.

寄田啓夫「明治期工業技術教育史上における G・ワグネルの活動と功績」『教育学研究』**50**(1) (1983.03) : 116-125.

村形明子「御雇い外国人と黎明期の文化財行政—ワグネル, キョソーネ, フェノロサ」『月刊文化財』通号 250 (1984.07) : 22-31.

佐藤節夫「ドクトル・ワグネルの生涯と明治初期の日本 (1)~(5)」『陶説』**421** (1988.04) : 58-67 ; **422** (1988.05) : 54-63 ; **423** (1988.06) : 52-59 ; **424**(1988.07) : 55-62 ; **425** (1988.10) : 54-58.

寄田啓夫「「ワグネル伝」考-1-生い立ちと来日前の経歴」『香川大学教育学部研究報告 第 1 部』通号 77 (1989.09) : 53-68.

寄田啓夫「「ワグネル伝」考-2-来日後の経歴」『香川大学教育学部研究報告 第 1 部』通号 78 (1990.01) : 1-25.

寄田啓夫「佐賀藩有田におけるワグネルの窯業技術指導とその意義」『香川大学教育学部研究報告 第 1 部』通号 83 (1991.09) : 1-20.

佐藤節夫「ワグネルの陶磁人脈 (1) ; (2)」『陶説』**478** (1993.01) : 55-60 ; **479** (1993.02) : 68-71.

寄田啓夫「ワグネルの産業教育観とその技術者養成教育」『香川大学教育学部研究報告 第 1 部』通号 87 (1993.01) : 43-67.

芝哲夫「化学大家 382 ゴットフリート・ワグネル」『和光純薬時報』**67**(3) (1999) : 2-4.

宗宮重行「近代日本のセラミックス産業と科学・技術の発展に尽力した偉人, 怪人, 異能, 努力の人々 (1) G. ワグネル博士」『マテリアルインテグレーション』**15**(5) (2002.5) : 88-92.

コッピング, アンドリュー (Cobbing, Andrew)「明治初期における有田焼の西洋技術の導入についての一考察」『九州大学留学生センター紀要』**13** (2003) : 113-123.

愛知県陶磁資料館学芸課編集『近代窯業の父ゴットフリート・ワグネルと万国博覧会』愛知県陶磁資料館 (2004).

三好信浩「明治日本における工芸教育の思想と実践—ワグネルとその人脈」『比治山大学現代文化学部紀要』

11 (2004) : 1-22.

佐藤一信「ゴットフリート・ワグネルと万国博覧会, そして旭焼の創始について」『陶説』 **615** (2004.6) : 62-68.

日本人化学者

池田 菊 苗

池田菊苗『化学教科書』上巻, 中巻, 下巻, 金港堂書籍 (1894).

池田菊苗『中學理化示教: 生徒用全』金港堂書籍 (1896).

池田菊苗『中學理化示教』金港堂 (1986).

池田菊苗; 和田猪三郎『化学新篇』訂正再版, 金港堂 (1900).

池田菊苗; 櫻井寅之助; 原田長松共編『理化示教』金港堂 (1900).

オストワルド原著; 池田菊苗譯註『近世無機化学』東京開成館 (1904).

本多光太郎; 池田菊苗述; 種村宗八編『理化講話』早稲田大学出版部 (1907).

『池田菊苗博士追憶録』池田菊苗博士追憶会 (1956).

池田兼六『味の素の発明者・池田菊苗』民主教育協会 (1969).

渡部英雄「池田菊苗の業績」『英学史研究』 **1** (1969.12) : 87-94.

田中実「教育に関する Wilhelm Ostwald 池田菊苗往復書簡〔含書簡訳文〕」『科学史研究』 **93** (1970.03) : 35-38.

内田俊一「池田菊苗博士の熱の貯蓄論, その他(連載随想-1-)」『化学工学』 **40**(4) (1976.04) : 172-175.

松井吉之助「『理化示教』の研究: 池田菊苗著『中学理化示教』から何を学ぶか」『化学教育』 **26**(2) (1978) : 179-183.

斎藤茂樹「池田菊苗と反応速度論」『科学史研究』第II期 **17** (通号 127) (1978.11) : 165-173.

広田鋼蔵「池田菊苗博士の晩年の研究活動」『触媒』 **21**(5) (1979.10) : 392-394.

広田鋼蔵; 山口達明「『味の素』の発明について」『化学史研究』 **14** (1980.10) : 18.

林太郎「池田菊苗先生の講義」『化学史研究』 **13** (1980.07) : 1-13.

広田鋼蔵「池田菊苗博士の“新調味料”の発明を巡って」『科学史研究』第II期 **20** (通号 137) (1981.04) : 36-44.

立花太郎「化学からみたエネルギー—課外授業-1-化学史とエネルギー-1-オストワルド歿後50年に際して(講座)」『化学』 **37**(1) (1982.01) : 65-70.

立花太郎「化学からみたエネルギー—課外授業-2 完-化学史とエネルギー-2-ソディと池田菊苗の場合(講座)」『化学』 **37**(2) (1982.02) : 144-150.

広田鋼蔵「池田菊苗博士の後半生の活動と思想」『化学史研究』 **19** (1982.05) : 49-58.

広田鋼蔵「池田菊苗の Royal Institution 滞在」『化学史研究』 **25** (1983.12) : 166-168.

広田鋼蔵「科学者をめぐる事件ノート-8-池田菊苗—味の素をめぐる特許紛争」『科学朝日』 **47**(8) (1987.08) : 82-87.

廣田鋼蔵『化学者池田菊苗—漱石・旨味・ドイツ—』東京化学同人 (1994).

小川鉄雄「広田〔鋼蔵〕氏著『化学者池田菊苗』を読む」『化学工業』 **45**(11) (1994.11) : 861-866.

菊地好行「池田菊苗の『唯エネルギー論』再考」『化学史研究』 **28**(2) (2001) : 125.

戸田準「コラム 温故知新一池田菊苗博士論文「新調味料に就て」を読む」『日本官能評価学会誌』 **6**(1)

(2002.3)：53-55.

芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（11）池田菊苗と味の素」『化学と教育』**52**(8)（2004）：567-569.

伊藤圭介

伊藤圭介『日本産物志前編』山城部上-信濃部下. 文部省（1873）.

伊藤圭介『日本植物圖説』草部 イ：初編. 花繞書屋（1874）.

梅村甚太郎編『植物學者伊藤圭介先生』梅村甚太郎（1927）.

伊藤圭介『泰西本草名疏』上, 下, 附録, 花繞書屋（1929）；影印, 井上書店（1976）.

吉川芳秋「医家として明治科学文化の大先達となった伊藤圭介翁」『医譚』通号12（1956.10）.

吉川芳秋『伊藤圭介翁：日本最初の理学博士尾張医科学文化の恩人』伊藤圭介先生顕彰会（1957）.

杉本勲『伊藤圭介』吉川弘文館（1960）.

杉本勲「伊藤圭介の実学の性格」『日本大学人文科学研究所研究紀要』通号2（1960.03）.

名古屋市東山植物園編『理学博士・男爵伊藤圭介翁遺品調査・鑑定報告書：伊藤圭介記念館建設資料』名古屋市東山植物園（1968）.

伊藤圭介『日本産物志』美濃部 上, 美濃部 下. 岐阜県郷土資料研究協議会（1976）.

吉田格「伊藤圭介蒐集の石器」『考古学雑誌』**62**(3)（1976.12）：185-195.

大森實「伊藤圭介からシーボルトに贈られた腊葉標本について」『シーボルト研究』**2**（1983）：43-111；**3**, **4**（1985）：35-91.

小西正泰「殿様生物学の系譜-8-水谷豊文と伊藤圭介-尾張嘗百社をめぐる人びと」『科学朝日』**49**(8)（1989.08）：90-94.

名古屋市東山植物園編『伊藤圭介記念室蔵書・藏品目録』名古屋市東山植物園（1992）.

圭介文書研究会編『瓊浦游紀（伊藤圭介日記 第1集）』名古屋市東山植物園（1995）.

圭介文書研究会編『伊藤圭介日記（第8集 文久2年3月～8月）』名古屋市東山植物園（1995）.

大森実「伊藤圭介とオランダ人 A. J. C. ヘールツの交遊」『日本歴史』通号573（1996.02）：79-89.

加藤僖重「牧野標本館にあるシーボルトコレクション（その1）伊藤圭介作成の標本」『洋学』通号6（1997）：233-261.

加藤僖重「伊藤圭介腊葉帖をめぐる」『日本の生物』**2**(1)（1998）：68-69.

延岡繁「伊藤圭介とスウェーデン」『言語文化研究：中部大学女子短期大学紀要』**9**（1998）：81-94.

土井康弘「尾張「洋学所」の成立と展開伊藤圭介関係文書を中心として」『日蘭学会会誌』**23**(1)（1998.10）：83-106.

佐藤達策「伊藤圭介著『日本産物誌』の構成と内容について」『一般教育紀要』**26**（2000）：52-58.

坪内淳仁「本草学者伊藤圭介日記中に散見される茶の湯」『齋田茶文化振興財団紀要』**4**（2000）：73-82.

名古屋大学附属図書館編『江戸から明治の自然科学を拓いた人：伊藤圭介没後100年記念シンポジウム』名古屋大学附属図書館（2001）.

名古屋市博物館編『伊藤圭介と尾張本草学：名古屋で生まれた近代植物学の父：没後100年：特別展』名古屋市博物館（2001）.

横山進「伊藤圭介没後100年記念イベントの取組について」『日本植物園協会誌』**36**（2001）：48-52.

田崎哲郎「（講演会記録）愛知の史料を欧州に求めてーシーボルト門人平井海蔵・伊藤圭介に関連して」『愛

知大学総合郷土研究所紀要』46 (2001): 151-160.

種田祐司「東京都立中央図書館所蔵 天保9年 伊藤圭介木曾出張関係資料について」『名古屋市博物館研究紀要』26 (2002): 29-52.

伊藤義人「図書館だより 伊藤圭介文庫」『学会会報』通号 837 (2002.10): 235-239.

幸田正孝; 岩崎鐵志; 遠藤正治; 河村典久; 岸野俊彦; 佐藤達策; 杉村啓治; 土井康弘; 山内一信「〈報告〉伊藤圭介日記: 没後百年記念・第八集」『豊田工業高等専門学校研究紀要』35 (2002).

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室編集『錦窠図譜の世界: 幕末・明治の博物誌: 伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会』名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室 (2003).

藤井伸二「シーボルト植物コレクション調査ノート2: 伊藤圭介標本帖について」『分類: 日本植物分類学会誌』3(1) (2003): 53-58.

加藤偉重「牧野標本館所蔵のシーボルトコレクション中にある伊藤圭介作成標本から大河内存真作成標本を分別する」『マテシス・ユニヴェルサリス』4(2) (2003.3): 17-36.

磯野直秀「伊藤圭介編著『植物図説雑纂』について」『参考書誌研究』59 (2003.10): 1-45.

土井康弘『日本初の理学博士伊藤圭介の研究』皓星社 (2005).

財部香枝「W. S. クラーク博士と伊藤圭介: 日米文化交流史の一断面」『貿易風: 中部大学国際関係学部論集』1 (2006): 206-220.

岡 田 家 武

岡田家武『地球化学』岩波書店 (1930).

小玉数信『岡田家武先生』私家版 (1981).

小玉数信『ぶんせき 別冊 一冊の本と無機定量分析の進歩及び岡田家武先生』(財)日本分析化学会 (1982).

田中泰夫「岡田家武さんの思い出」『化学史研究』第18巻 (1991): 19-20.

廣田鋼蔵「地球化学者岡田家武の思い出」『化学史研究』第25巻 (1998): 159.

大西寛「岡田家武の人と仕事に関する文献」『化学史研究』第26巻 (1999): 99-101.

山崎一雄「地球化学者岡田家武の生涯と研究」『化学史研究』第27巻 (2000): 105.

山崎一雄「地球化学者岡田家武の研究と生涯」『化学史研究』第28巻 (2001): 163-170.

加藤茂生「地球化学と帝国: 岡田家武, 合田史郎による微量元素—微量化合物の地球化学的研究を中心に」『化学史研究』第32巻 (2005): 124-125.

梶雅範「岡田家武—中国に消えた地球化学研究の先駆者」『科学技術ジャーナル』第7・6号 (1998.06): 42-43.

八耳俊文「岡田家武の江戸化学史への関心」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』14号 (2006): 55-76.

八耳俊文「地球化学を生きた人: 岡田家武」『サイエンスネット』30号 (2007): 6-9.

八耳俊文「岡田家武と日本の地球化学」『2007年度第4回化学史研修会資料別冊』(2007).

小 川 正 孝

小川正孝『中學實驗理化示教』同文館 (1897).

小川正孝『新撰化学教科書』訂正再版, 開成館 (1881).

吉原賢二「やはり新元素だったニッポニウム」『現代化学』通号 315 (1997): 14-18.

- 吉原賢二「小川正孝の栄光と挫折」『化学史研究』**24**(4) (1998) : 295-305.
- 吉原賢二「小川正孝のニッポニウム—晩年の苦闘—」『化学と工業』**52**(3) (1999) : 272-274.
- 吉原賢二「新元素を発見していた日本人」『エネルギーレビュー』**20**(1) (通号 228) (2000) : 50-52.
- H. Kenji Yoshihara, "Ogawa's Discovery of Nipponium and Its Re-evaluation," *Historia Scientiarum*, **9** (2000) : 257-269.
- 吉原賢二；中井泉；寺田靖子「小川正孝の遺品ルツボの分析」『化学史研究』**29**(2) (2002) : 129.
- 吉原賢二「日本人のオリジナリティ探訪「ニッポニウム」は幻の元素だったのか—小川正孝」『Fujitsu 飛翔』**46** (2002) : 28-31.
- 吉原賢二；中井泉；寺田靖子；梶雅範「小川正孝・英次郎父子のニッポニウム研究」『化学史研究』**29**(4) (2002) : 209-221.
- 吉原賢二「小川正孝ニッポニウム X 線スペクトル写真乾板の発見と解析および白金族研究の評価」『化学史研究』**30**(2) (2003) : 110.
- 吉原賢二「小川正孝とその弟子たち：白金族元素と X 線分光」『化学史研究』**30**(2) (2003) : 69-83.
- Masanori Kaji, "Ogawa's Discovery of a New Chemical Element" Nipponium: "The Emergence of Modern Chemistry Research in Japan and Its Social Background," *Historia Scientiarum*, **12** (2003) : 215-218.
- 吉原賢二「挫折から再生へ：大正・昭和の化学者たち (1) ニッポニウム発見—小川正孝・英次郎父子 通り過ぎたセレンディピティー」『現代化学』**398** (2004) : 36-41.
- 吉原賢二「化学大家 400 小川正孝」『和光純薬時報』**73**(3) (2005) : 25-27.
- H. Kenji Yoshihara, Teiji Kobayashi, and Masanori Kaji, "Ogawa Family and Their 'Nipponium' Research: Successful Separation of the Element 75 before Its Discovery by Noddacks," *Historia Scientiarum*, **15** (2005) : 177-190.
- 吉原賢二「東北仙台に化学を築いた人々 (1) 元素発見競争のなかの日本人—小川正孝」『化学史研究』**34** (4) (2007) : 153-159.

木村健二郎

- 木村健二郎「盤城石川産新鑛物（石川石）に就て」『地質學雜誌』**29**(347) (1922) : 316-320.
- 木村健二郎「石川石に就て」『地質學雜誌』**31**(371) (1924) : 275-277.
- 木村健二郎『稀土類元素』岩波書店 (1929).
- 木村健二郎「長野県山口村産褐簾石に就て」『岩石礦物礦床学』**4** (1930) : 165-168.
- 木村健二郎「本邦各地産チタン鉄鉱，モナズ石，イネス石，プロシヤン銅鉱，鋼玉石，錫石，フェルグソン石，コルンブ石，蒼鉛等の研究予報 (2)」『岩石礦物礦床学』**5** (1931) : 269-272.
- 木村健二郎「本邦各地産チタン鉄鉱，モナズ石，イネス石，プロシヤン銅鉱，鋼玉石，錫石，フェルグソン石，コルンブ石，蒼鉛等の研究予報」『岩石礦物礦床学』**5** (1931) : 211-216.
- 木村健二郎『含稀有元素鑛物』岩波書店 (1932).
- 木村健二郎「東洋産含希元素鉱石の化学的研究（其二十）長野県山口村産褐簾石に就いて」『日化』**54** (1933) : 9-11.
- 木村健二郎「ローリツェンを使用する新装置による天然水中のランドの定量」『日化誌』**69** (1948) : 33.
- 木村健二郎『稀元素の科学分析』山海堂 (1949).

- 木村健二郎「温泉の科学」『毎日情報』**6**(1) (1951.01) : 140-144.
- W. スタイルズ著 (木村健二郎ほか訳)『微量元素—その動植物体に及ぼす影響』朝倉書店 (1953).
- 木村健二郎「死の灰」『開拓者』**49**(1) (1954.09) : 12-16.
- 木村健二郎「ウランの誕生から死の灰まで」『改造』**35**(6) (1954.06) : 142-148.
- 木村健二郎「死の灰のことなど」『ニューエイジ』**6**(6) (1954.06) : 34-37.
- 木村健二郎; 齋藤信房『核分裂生成物の分離』岩波書店 (1956).
- 木村健二郎; 齋藤信房『超ウラン元素』岩波書店 (1956).
- 木村健二郎「長崎西山の土壤中に見出された人工放射性元素」『原子爆弾災害調査報告書』(1956) : 53-58.
- 木村健二郎; 齋藤信房『放射化学』岩波書店 (1957).
- 木村健二郎「ラジオ・アイソトープの工業への利用」『通商産業研究』**6**(9) (1958.07).
- 木村健二郎「微量成分の語るもの」『東京女子大学論集』**9**(1) (1958) : A 1-A 13.
- 木村健二郎「放射能と学校教育」『化学教育』**23**(3) (1975) : 175-176.
- 林良重; 木村健二郎「木村健二郎先生をお訪ねして」『化学教育』**24**(3) (1976) : 243-246.
- 木村健二郎「元素周期表回想」『東京女子大学紀要論集』**27**(2) (1977) : 6-10.
- 木村健二郎「ハフニウムの発見と X 線分光分析の創始」『化学史研究』第 6 号 (1977) : 1-5.
- 木村健二郎「元素の周期律」『化学教育』**28**(5) (1980) : 395-400.
- 「木村健二郎先生をしのぶ」『ぶんせき』**1988**(12) (1988.12) : 942-945.
- 田中信行; 村上悠紀雄; 原礼之助「木村健二郎先生のおもいで」『化学と工業』**42**(2) (1989.02) : 307-310.
- 鳥居鉄也「木村健二郎先生のご逝去を悼む」『温泉科学』**38**(4) (1988.10) : 巻頭 2 p.
- 木村健二郎先生記念誌編集委員会『遠き峯々—木村健二郎 その時代』(1990).
- 齋藤信房「放射化学領域における木村健二郎の業績」『化学史研究』第 23 卷 (1996) : 302-310.
- 佐野博敏「第 40 回放射化学討論会放射能発見 100 年記念・木村健二郎先生ご生誕 100 年記念印象記」『Isotope news』**512** (1997) : 30-31.
- 吉原賢二「挫折から再生へ:大正・昭和の化学者たち (3) 原子核分裂前後—木村健二郎 時代のうねりを越えて」『現代化学』**401** (2004.8) : 16-20.

久 原 躬 弦

- 藤井清久「久原躬弦のベックマン転移の研究」『化学史研究』第 2 号 (1974) : 11-15.
- 塚原徳道編『久原躬弦書簡集』津山洋学資料館 (1978).
- 後藤良造「久原躬弦の経歴と業績 (I)」『化学史研究』第 12 号 (1980) : 20-30.
- 後藤良造「久原躬弦の経歴と業績 (II)」『化学史研究』第 13 号 (1980) : 14-36.
- 島尾永康「化学大家 363 久原躬弦」『和光純薬時報』**62**(2) (1993) : 2-4.

黒 田 チ カ

- 黒田チカ「紅花の色素カーサミン」『日本化学会誌』**51** (1930) : 237-255.
- 黒田チカ「生物界におけるナフトキン誘導体研究の今昔」『化学と工業』**7** (1954) : 461-471.
- 黒田チカ「化学の道に生きて」『婦人の友』**3** (1957).
- 黒田チカ「ウニ類の色素群」『実験化学講座』**22** (1958) : 219-231.
- 黒田チカ「植物色素研究に親しんだ道筋」『日本薬剤協会誌』**11** (1959) : 26.

- 黒田チカ「化学に親しむ悦びと感謝(I)～(V)」『化学教育』**13**(2) (1965)：168-172；**13**(3) (1965)：316-318；**13**(4) (1965)：461-464；**14**(1) (1966)：82-86；**14**(4) (1966)：434-438.
- 犬山國博；豊増幸子『森永太郎・黒田チカ』佐賀県青少年育成県民会議 (1978).
- 前田侯子「黒田チカ先生の生涯と研究」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』**7** (1986).
- 前田侯子「黒田チカ—天然色素研究における業績とわが国初の女性化学者としての生涯」『化学史研究』第22巻 (1995)：226-238.
- 都河明子；嘉ノ海暁子『拓(ひら)く：日本の女性科学者の軌跡』ドメス出版 (1996).
- 堀勇治「化学会館化学史資料展示第17回 黒田チカ」『化学史研究』第26巻 (1999)：113-118.
- 堀勇治「化学会館化学史資料展示第17回 日本初の女性化学者 黒田チカ博士」『化学と工業』**52**(8) (1999)：1002-1005.
- 前田侯子；松田久子目録作成・執筆；原ひろこ [ほか] 編『黒田チカ資料目録』お茶の水女子大学ジェンダー研究センター (2000).
- 吉原賢二「大正・昭和の化学者たち (8) 紅花の女性化学者—黒田チカ 天然色素にかけた生涯」『現代化学』**407** (2005.2)：14-18.
- 西條敏美「探訪 科学者の史跡 (第10回) 紅花の色素の構造を決定した 黒田チカ」『S&T ジャーナル』**15**(1) (2006.1)：54-56.

桜井 錠二

- 櫻井錠二「化学授業法」『大日本教育會雑誌』**6** (1884)：19-30.
- 櫻井錠二「理学者の快樂」『東洋学芸雑誌』**5** (1888)：437-442.
- 櫻井錠二「化学教育上の意見」『東洋学芸雑誌』**7** (1890)：103.
- 櫻井錠二「化学教育上の意見」『東洋学芸雑誌』**7** (1890)：177-178.
- 櫻井錠二「国家ト理学」『東京学士会院雑誌』**21**(1) (1899)：1-20.
- 櫻井錠二「欧米巡回雜記」『東洋学芸雑誌』**19** (1902)：218-221, 270-275, 313-318, 356-362, 408-413, 458-462.
- 櫻井錠二「本邦科学の国際化」『東洋学芸雑誌』**520** (1926)：467-469.
- Y. Osaka, "Obituary Note, Baron Joji Sakurai," *Proceedings of the Imperial Academy of Japan*, **15** (1939)：7-10.
- K. Matsubara, "Baron Joji Sakurai, DSc, LLD," *The Report of the National Research Council of Japan*, **2** (1939)：677-697.
- 小竹無二雄「桜井先生と長井先生」『化学史研究』第4号 (1975)：1-4.
- 阪上正信「桜井錠二博士とその関係諸資料について」『化学史研究』第11号 (1979)：3-13.
- 『桜井錠二博士のあゆみ』桜井錠二博士顕彰会 (1981).
- 村田淳「桜井錠二と英学」『英学史研究』通号16 (1983)：173-183.
- 小山慶太「ロンドンの漱石と二人の化学者」『早稲田人文自然科学研究』通号27 (1985.03)：71-88.
- 本浄高治；中西孝『兼六園とサイエンス；金沢城の鉛瓦と蛇の寝御座；金沢城址散策ミニガイド；高峰讓吉と桜井錠二の生い立ちの地めぐり』[化学同人]，[1985-1986].
- 廣田鋼蔵「明治期の日本国民の化学観—桜井錠二を巡る東京化学会の諸事件—」『化学史研究』第37号 (1986)：145-158.

- 廣田鋼藏『明治の化学者：その抗争と苦渋』東京化学同人（1988）。
- 田中泰夫「櫻井錠二先生から聞いたことなど」『化学史研究』第18巻（1991）：232-234。
- 島尾永康「化学大家 360 櫻井錠二」『和光純薬時報』60(2)（1992）：2-4。
- 今井一良『オーズボン紀行一侍の娘と結ばれた英人一家を追って』北陸新聞社（1994）。
- 阪上正信「櫻井錠二・わが国化学いしずえの若き軌跡」『化学と教育』43(8)（1995.08）：542-544。
- 阪上正信「櫻井錠二 我が国化学いしずえの若き軌跡」『化学と工業』48(8)（1995.08）：953-955。
- 石川化学教育研究会編『科学風土記：加賀・能登のサイエンス』裳華房（1997）。
- 『櫻井錠二：日本近代化学の父』金沢市立ふるさと偉人館（1997）。
- 阪上正信「西洋近代科学の移植・育成者・櫻井錠二」『化学史研究』第24巻（1997）：157-168。
- 菊池好行「櫻井錠二と日本の物理化学」『化学史研究』第25巻（1998）：82。
- Yoshiyuki Kikuchi, “Redefining Academic Chemistry: Joji Sakurai and the Introduction of Physical Chemistry into Meiji Japan,” *Historia Scientiarum*, 9 (2000) : 215-256.
- 上山明博「日本人のオリジナリティ探訪 日本近代化学の父—櫻井錠二」『Fujitsu 飛翔』50（2003.11）：22-25。
- 菊池好行「櫻井錠二とイギリス化学者ネットワーク」『化学史研究』第30巻（2003）：111。
- 菊池好行「櫻井錠二とイギリス人化学者コネクション」『化学史研究』第31巻（2004）：239-267。

桜 田 一 郎

- 櫻田一郎『繊維化学教室より』文理書院（1943）。
- 櫻田一郎『高分子化学概論』高分子化学協会（1948）。
- 櫻田一郎『繊維の科学』三共出版社（1948）。
- 櫻田一郎「素描 繊維と高分子の科学」『高分子』1(3)（1952）：3-5。
- 櫻田一郎；小西行雄『繊維物語』3版版，理工出版社（1953）。
- 櫻田一郎『高分子化学』小峰工業出版（1953）。
- 櫻田一郎「ビニロンの話—合成一号が生まれるまで—」『化学』8巻（1953）：38-42。
- 櫻田一郎『第三の繊維』高分子化学刊行会（1955）。
- 櫻田一郎；小西行雄；辻和一郎『繊維物語』新版版，槇書店（1959）。
- 櫻田一郎『繊維・放射線・高分子』高分子化学刊行会（1961）。
- 櫻田一郎；祖父江寛；久志宗成『合成繊維』朝倉書店（1964）。
- 櫻田一郎「高分子化学はいつごろ生まれたか」『高分子』13巻（1964）：591-593。
- 「座談会 高分子科学のおいたちとその行方」（桜田一郎，祖父江寛，呉祐吉，荒井溪吉，矢沢将英，星野孝平，岩倉義男，昭和40年7月7日繊維会館にて）『高分子』14巻，163号（1965）：1038-1057。
- 櫻田一郎「今日と明日をつなぐ糸—ビニロンの回顧—（その1〜その3）」『化学工業』19巻（1968），その1：103-111；その2：209-217；その3：313-320。
- 櫻田一郎『高分子化学とともに』紀伊国屋書店（1969）。
- 櫻田一郎「研究回顧」『化学』27巻（1972）：「(1) 私の卒業論文」第1号，12-17；「(2) Wo. Ostwald 教授の下に学ぶ」第2号，170-177；「(3) ダーレムのカイゼル・ウィルヘルム研究所」第3号，284-291；「(4) 高分子のX線図の研究法を習う」第4号，393-398；「(5) セルロースの化学反応をX線で調べる」第5号，478-483；「(6) 合成繊維の先駆者ナイロン」第6号，571-577；「(7) ビニロンの発明」第7号，

- 657-663；「(8) 合成繊維に対する関心」第8号，758-764；「(9) 高分子溶液の粘度と分子量」第9号，867-873；「(10) 共重合」第10号，974-979.
- 櫻田一郎「ビニロンの研究から工業化へ」『化学教育』26巻（1978）：443-448.
- 桜田一郎『化学の小径』学生社（1978）.
- 櫻田一郎『化学の道草』高分子刊行会（1979）.
- 櫻田一郎「高分子の研究はいつ頃始まったか？」『高分子加工』28巻（1979）：378-380.
- 櫻田一郎「高分子科学あれこれ」『高分子加工』28巻（1979）：434-436.
- 「新春放談 桜田一郎先生を囲んで」（桜田一郎，中島章夫，松本恒隆，三枝武夫，讃井浩平，1979年8月21日 京都市岡崎・千嘉にて）『高分子』29巻1月号（1980）：20-27.
- 櫻田一郎「高分子科学を築いた人びと 桜田一郎」『高分子』31巻（1982）：「第1回 高分子化学への道」72-75；「第2回 高分子化学の夜明け」138-141；「第3回 ビニロンの誕生」242-245.
- 櫻田一郎「Staudinger との論争などの思い出」『高分子加工』32巻（1983）：506-508.
- 桜田一郎「高分子化学研究室から-275-合成パルプとフラッシュ紡糸」『高分子加工』34(4)（1985.04）：158-160.
- 岡田誠三；井本稔「桜田一郎先生のご逝去を悼む」『化学』41(9)（1986.09）：590-593，巻頭2p.
- 中島章夫；岡田紀夫；中保治郎「桜田一郎先生のおもいで」『化学と工業』39(9)（1986.09）：692-694.
- 桑原利秀「国際語エスペラントの先達としての桜田一郎先生」『ポパール会』第90回（1987）：50-55.
- 岡村誠三「高分子化学—ビニロンを独創開発した桜田一郎」『日本の「創造力」—近代，現代を開花させた四七〇人—14 復興と繁栄への軌跡—』日本放送出版協会（1993），pp. 250-259.
- 桜田洋「ビニロンを開発した高分子化学の先覚者」『日本の「創造力」—近代，現代を開花させた四七〇人—14 復興と繁栄への軌跡—』日本放送出版協会（1993），pp. 260-262.
- 辻和一郎「繊維・高分子科学界の巨峰 桜田一郎先生」『繊維学会誌』52(6)（1996）：253-257.
- 辻和一郎「繊維・高分子化学における桜田一郎先生の業績点描」『化学史研究』第24巻（1997）：205-217.
- 長井栄一；稲垣寛；松本恒隆；中村尚史；土井幸夫；筏義人；梶慶輔；三枝武夫「弟子から見た桜田一郎先生 SAKURADA Ichiro」『高分子』47（1998）：28.
- 岡村誠三「1. 高分子科学 事始めと展開 1）桜田一郎先生と日本の高分子化学—科学研究史の一つの見方—」『高分子』47（1998）：58.
- 北丸竜三「ビニロン：桜田一郎」『高分子』51(9)（2002）：751-752.
- 上山明博「日本人のオリジナリティ探訪 “第三の繊維” ビニロンの発明者—桜田一郎」『Fujitsu 飛翔』48（2003.3）：28-31.
- 吉原賢二「挫折から再生へ：大正・昭和の化学者たち（12）ビニロンは日本が育てた繊維—桜田一郎 高分子の星」『現代化学』411（2005.6）：16-21.
- 北原文雄「戦前の日本人留学生と巨大分子論争：桜田一郎，野津龍三郎，落合英二について」『化学史研究』第33巻（2006）：161-171.

鮫島実三郎

- 立花太郎「鮫島実三郎の業績目録とその解説-1-研究業績」『化学史研究』通号9（1979）：23-36.
- 立花太郎「鮫島実三郎の業績目録とその解説-2-学会活動 著書 教育」『化学史研究』通号10（1979）：39-47

立花太郎「鮫島実三郎とその流れ—ある実験的伝統の精神史—」『化学と工業』**51**(10) (1998) : 1595-1597.

柴田 承 桂

柴田承桂訳編『衛生概論』上篇, 中篇, 下篇, 島村利助: 丸屋善七 (1879-1882).

柴田承桂譯『扶氏藥劑學』1-4, 文部省 (1881).

伊藤謙撰; 柴田承桂, 村井純之助校補『藥品名彙』増訂, 島村利助: 丸屋善七 (1883).

[エリスマン著]; 丹波敬三, 柴田承桂譯; 押田俊三鈔訂『簡明衛生論』丹波敬三 (1883).

草野元養纂譯; 柴田承桂校正『製劑捷覽』増補, 第3版, 草野元養 (1883).

丹波敬三, 柴田承桂原譯『普通衛生學』後編, 第2版, 島村利助, 丸屋善七 (1884).

勝山忠雄譯補; 柴田承桂校閱『調劑要術』改正第3版, 勝山忠雄 (1887).

高橋秀松, 柴田承桂編『飲料水』島村利助 (1887).

樫村清徳, 伊勢錠五郎編纂; 柴田承桂補輯『日本藥局方随伴』上卷, 下卷, 樫村清徳 (1887).

角田文衛「柴田承桂博士と古物学」『古代学』**10**(1) (1961.11) : 38-44.

柴田承二「祖父柴田承桂」『ファルマシア』**16**(1) (1980) : 65-68.

安江政一「柴田承桂と長井長義—先覚者たちの薬学振興論をめぐって」『薬史学雑誌』**21**(1) (1986.06) : 33-40.

徳永重元「百科全書『地質学』と柴田承桂」『地質学史懇話会会報』第14号 (2000) : 10-12.

根本曾代子『東京大学薬学初代教授柴田承桂先生傳』私製.

柴田 雄 次

柴田雄次「金属錯塩」『物理学及び化学』岩波書店 (1929).

道家達将「柴田雄次と日本の化学」『自然』1964年12月号 : 109-116.

田中実『日本の化学と柴田雄次』大日本図書 (1975).

山崎一雄「柴田雄次先生 (柴田雄次先生と日本の化学 <特集>)」『化学の領域』**34**(8) (1980) : 591-594.

斉藤喜彦; 山崎一雄「金属錯体の研究 (柴田雄次先生と日本の化学 <特集>)」『化学の領域』**34**(8) (1980) : 594-598.

山崎一雄「柴田雄次先生の業績とその解説 (第一部)」『化学史研究』第19号 (1982) : 81-87.

山崎一雄「柴田雄次先生の業績とその解説 (第二部)」『化学史研究』第20号 (1982) : 97-103.

山崎一雄「続 日本の化学と柴田雄次 (11)」『高校理科研究』1983年12月号.

田中泰夫等編『柴田雄次先生の遺稿「アルフレッド・ウェルナーと錯塩化学」; 「分光化学の進歩」』東京柴門会 (1989).

山崎一雄「柴田桂太・柴田雄次の均一系錯体触媒の発見」『化学史研究』第18巻 (1991) : 112.

芝哲夫「化学大家 406 柴田雄次」『和光純薬時報』**75**(3) (2007) : 31-33.

鈴木梅太郎

鈴木梅太郎『植物生理化学』成美堂書店 (1911).

鈴木梅太郎「白米の食品的价值並に動物の脚気様疾病に就いて (第二報)」『東京科学会誌』**32** (1911) : 114.

鈴木梅太郎「飲食品の化学」『醫科器械學雑誌』**1**(3) (1923) : 192-195.

- 鈴木梅太郎「醗酵化学の進歩」『醸造學雜誌』**3**(8) (1926)：776-789.
- 鈴木梅太郎述『人口問題と化学』食養研究会 (1926).
- 鈴木梅太郎；加藤正二「理研酒に就て」『醸造學雜誌』**5**(5) (1927)：359-367.
- 鈴木梅太郎『ヴィタミン』岩波書店 (1930).
- 『鈴木梅太郎博士金井眞澄博士：講演速記録』滿洲特産中央會 (1935).
- 鈴木梅太郎述『大陸發展と科學．新大陸政策の根本問題/田村教育司長 [述]』滿洲帝國教育會 (1939).
- 鈴木梅太郎『研究の回顧』輝文堂書房 (1943).
- 高野三郎『鈴木梅太郎：ビタミン B の発見者』ポプラ社 (1954).
- 鈴木梅太郎博士顕彰会；鈴木梅太郎先生伝刊行会編『鈴木梅太郎先生伝』鈴木梅太郎博士顕彰会：鈴木梅太郎先生伝刊行会 (1967).
- 武居三吉「恩師・鈴木梅太郎先生（師を語る-3 完-）」『化学』**31**(3) (1976.03)：186-190.
- 齋藤實正『オリザニンの発見：鈴木梅太郎伝』共立出版 (1977).
- 『盛岡高等農林学校と鈴木梅太郎・宮沢賢治』岩手大学農学部農芸化学科内記念碑を建てる会 (1984).
- 上山昭則「脚気（ビタミン B1 欠乏症）に対する森林太郎軍医と鈴木梅太郎教授との考え方の比較」『研究論集（関西外国語大学，関西外国語大学短期大学部編/関西外国語大学/関西外国語大学）』**44** (1986)：103-111.
- 有山恒；川上行蔵；江本栄「鈴木梅太郎先生を語る」『日本農芸化学会誌』臨時増刊 (1987.02)：45-51.
- 加藤八千代『人間風景：激動期の理化学研究所：鈴木梅太郎と薮田貞治郎』共立出版 (1987).
- 江本栄「旧理化学研究所の沿革と鈴木梅太郎博士について」『日本農芸化学会誌』臨時増刊 (1987.02)：222-224.
- 中野浩「鈴木梅太郎の盛岡高等農林学校における講演「過去 1 年間の我化学界の趨勢」について」『生物学史研究』通号 53 (1990)：9-19.
- 鬼頭秀一「鈴木梅太郎とノーベル賞」『化学史研究』第 17 卷 (1990)：100.
- 力丸光雄「高任・将翁/賢治・梅太郎：岩手の化学風土記」『化学と教育』**39**(2) (1991)：185-189.
- 中野浩「鈴木梅太郎の盛岡高等農林学校における講演-2-講演活動一覧」『生物学史研究』通号 54 (1991)：1-10.
- 島尾永康「化学大家 367 鈴木梅太郎」『和光純薬時報』**62**(3) (1994)：2-4.
- 鈴木梅太郎『研究の回顧：伝記・鈴木梅太郎』大空社 (1998).
- 中野浩「大正期盛岡高等農林学校における農芸化学教育—鈴木梅太郎の意図の実現」『生物学史研究』通号 62 (1999)：21-27.
- 岡本拓司「ノーベル賞文書からみた日本の科学，1901 年-1948 年—北里柴三郎から山極勝三郎まで」『科学技術史』**4** (2000.7)：1-65.
- 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち (12) 鈴木梅太郎とビタミン」『化学と教育』**52**(9) (2004)：647-649.
- 岩城耕一郎「ビタミン発見と鈴木梅太郎博士」『日本臨床栄養学会雑誌』**25**(4) (2004)：313-314.
- 曾根博；夕田光治；東伸好；妹尾春樹「日本の天然ビタミン A 産業開拓の歴史」『ビタミン』**79**(2) (2005)：97-112.
- 吉原賢二「大正・昭和の化学者たち (10) 第五の栄養素ビタミンの発見—鈴木梅太郎と弟子たち 理研を支えた実学的化学者」『現代化学』**409** (2005.4)：16-21.

高 松 豊 吉

T. Takamatsu, *On Japanese Pigments*, Tokyo: The Department of Science, Tokio Daigaku, 1878.

高松豊吉, 桜井錠二編『化学語彙』内田老鶴園 (1900).

高松博士祝賀伝記刊行会編『工学博士高松豊吉伝』化学工業時報社 (1932).

芝哲夫「化学大家 397 高松豊吉」『和光純薬時報』72(3) (2004): 24-27.

高 峰 譲 吉

高峰譲吉談筆「麴の発明」『醸造雑誌』(1902).

高峰譲吉談筆「日本の醸造業に就き」『醸海』2 (1902).

高峰譲吉談筆「酒精の新醸造法」『醸海』3 (1902).

高峰譲吉「酒類醸造に日本の醸造法の応用」『醸造協会誌』17(8) (1922).

高峰譲吉「酒精醸造に日本の醸造法応用」『醸協』17(8) (1922): 2-8.

鹽原又策編輯『高峰博士』鹽原又策 (1926).

橋爪恵編『巨人高峰博士』三共 (1931).

中村禎雄『日米親善と高峰博士』高峰譲吉博士顕彰会 (1941).

三浦孝次『高峰譲吉博士のかがやく偉業』高峰譲吉博士顕彰会 (1943).

池田宣政『高峰譲吉 (世界伝記全集)』講談社 (1944).

沢田謙『高峰譲吉 (偉人物語文庫)』偕成社 (1944).

橋爪恵『野口・高峰・北里: 日本醫藥學の三星』弘學社 (1949).

橋爪檳榔子「世界に誇るわれらがケミスト「高峰譲吉」」『伝記』3(4) (1949.05): 84-89.

木村毅「日本実業家列伝-9-高峰譲吉」『実業の日本』55(9) (1952): 86-88.

関川護, 池田宣政『高峰譲吉』大日本雄弁会講談社 (1954).

高峰譲吉博士顕彰会『高峰譲吉博士の面影』(1961).

久保喬『高峰譲吉—医学の世界に新しい時代をひらいた学者』偕成社; 改訂新版版 (1971).

池田宣政『高峰譲吉』ポプラ社; 改訂版 (1976).

スタジオ・ネコマンマ, 新津英夫, 藤本彰漫画・制作; インタラクティブ編『北里柴三郎/高峰譲吉: 国際舞台への登場』ほるぷ出版 (1992) (漫画人物科学の歴史; 日本編; 16).

飯沼信子『高峰譲吉とその妻』新人物往来社 (1993).

木村昌人「高峰譲吉と日米民間経済外交」『同志社アメリカ研究』別冊 14 (1995): 4-13.

斎藤恵子「歴史は人生の教科書である—幕末に生まれたアメリカン・ドリーム初の体現者, 高峰譲吉」『Agora 日本航空機内誌』6(12) (1996): 36-39.

塩原又策『高峰博士—伝記・高峰譲吉』大空社 (1998) (1926 年塩原又策刊の復刻).

真鍋繁樹『堂々たる夢—世界に日本人を認めさせた化学者・高峰譲吉の生涯』講談社 (1999).

アグネス・デ・ミル『高峰譲吉伝—松楓殿の回想』山下愛子訳・出版 (2000).

飯沼和正・菅野富夫『高峰譲吉の生涯—アドレナリン発見の真実—』朝日新聞社 (2000).

山嶋哲盛『日本科学の先駆者 高峰譲吉—アドレナリン発見物語』岩波新書 (2001).

芝哲夫「化学大家 388 高峰譲吉」『和光純薬時報』69(3) (2001): 2-4.

飯沼和正「アドレナリン発見物語—100 年を経て再評価される高峰譲吉の業績」『化学』56(10) (2001.10): 12-17.

- 梶雅範「飯沼和正・菅野富夫『高峰譲吉の生涯』」『化学史研究』第29巻（2002）：108-110.
- 竹内均編『化学の大発見物語：ラボアジエ，ブラウン，高峰譲吉』ニュートンプレス（2002）.
- 菅野富夫「高峰譲吉—アドレナリン発見」『医学のあゆみ』**207**(2)（2003.10）：121-125.
- 山本紳「高峰譲吉先生に思うこと」『日本醸造協会誌』**98**(10)（2003）：689.
- 松原純一「高安右人と高峰譲吉：金沢発，世界に名を残した2人の学者」『日本血管外科学会雑誌』**12**(6)（2003）：563-569.
- 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（9）高峰譲吉とアドレナリン」『化学と教育』**52**(6)（2004）：422-424.
- 秋山裕一「高峰譲吉博士の醸造試験所設立の提言」『日本醸造協会誌』**99**(2)（2004）：112-116.
- 佐藤正明「ザ・ハウス・オブ・トヨタ（26）高峰譲吉の教訓」『文芸春秋』**82**(11)（2004.8）：392-402.
- 秋山裕一「蛇管式火入器は高峰譲吉博士が発明」『日本醸造協会誌』**99**(12)（2004）：857-863.
- 秋山裕一「高峰譲吉博士の火入器の製作発売者」『日本醸造協会誌』**100**(4)（2005）：269.
- 山嶋哲盛「アドレナリンを発見した高峰譲吉博士の生涯」『日本救急医学会雑誌』**16**(8)（2005）：323.

田丸節郎

- 田丸節郎「ハーバー先生を悼む」『科学』**305**（1934）.
- 田丸節郎「欧州大戦に活躍せる学者の面影と思出」『科学』**8**（1938），185-189.
- 田丸謙二「父田丸節郎とハーバー」『化学史研究』第22巻（1995）：76-77.
- 田丸謙二「田丸節郎」『化学史研究』第27巻（2000）：16-22.

手島精一

- 手嶋精一，鈴木純一郎編『日本工業史要』[書写資料][製作者不明]，[18--].
- 手島精一「実業教育論」『大日本教育会雑誌』**36**（1886）：1-12；**37**（1886）：9-21.
- 手島精一「理学ヲ振興スルノ説」『東洋学芸雑誌』**59**（1886）：646-649.
- 手島精一「手工科普及の一方法」『手工研究』第1，7（1907）；第1，8（1907）.
- 手島工業教育資金團著『手島精一先生傳』手島工業教育資金團（1929）.
- 大日本工業學會編『手島精一先生遺稿』大日本工業學會（1940）.
- 小林巧「手島精一と工場法制定」『経済集志』**31**(6)（1962.02）.
- 安達龍作「手島精一伝：工業教育の慈父」化学工業技術同友会（1962）；手島工業教育資金団（1981）.
- 上野一「手島精一と図書館」『図書館学会年報』**24**(1)（1978.03）：37-44.
- 三浦豊彦「労働衛生学史序説-21-明治の下層階級と労働者の生活，労働条件を伝える調査報告，佐久間貞一と手島精一」『労働科学』**54**(9)（1978.09）：459-473.
- 手島精一述『青年自助論』日本図書センター（1990）.
- 三好信浩「手島精一の工業補習学校論—日本における工業補習学校普及の可能性」『研究論叢 第3部 芸術・体育・教育・心理（山口大学教育学部図書委員会編）』通号46（1996.12）：91-100.
- 佐藤優香「手島精一—教育博物館経営—文部省の博物館政策との関係を中心にして」『日本教育政策学会年報』通号5（1998）：149-166.
- 佐藤優香「教育博物館における教育機能の拡張—手島精一と棚橋源太郎による西洋教育情報の受容」『博物館学雑誌』**23**(2)（1998.03）：51-64.

三好信浩『手島精一と日本工業教育発達史』風間書房（1999）。

石山洋「源流から辿る近代図書館（10）手島精一と東京図書館」『日本古書通信』**66**(10)（2001.10）：13。

倉知典弘「手島精一の「社会教育」論の検討：実業教育と社会教育の関連に関して」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』**2**（2003/3）：39-58。

長 井 長 義

長井長義「欧州薬学史」『薬学雑誌』**38**（1885）：139-145。

長井長義「會頭長井長義君就任ノ演説」『薬學雜誌』**62**（1887）：127-129。

長井長義「薬業ノ性質」『薬學雜誌』**74**（1888）：148-154。

長井長義「食鹽ノ話」『薬學雜誌』**185**（1897）：637-654。

長井長義「大阪衛生試験所ノ新築」『薬學雜誌』**212**（1899）：992-992a。

長井長義「吊故福原有信君」『薬學雜誌』**506**（1924）：i。

「長井長義先生明治四年欧米見聞書翰」『薬局』**6・7**（1955）：769-774。

金尾清造『長井長義伝』日本薬学会（1960）。

根本曾代子『長井長義先生傳』私製。

山下愛子「長井長義についての一考察（補遺）—エフェドリンの発見を1885年とする根拠について」『科学史研究』通号79（1966.09）：49-150。

山下愛子「長井長義について一考察—そのエフェドリン研究について」『科学史研究』通号76（1966.02）：156-163。

石田行雄「長井長義先生と徳島大学」『ファルマシア』**16**(2)（1980）：149-150。

安江政一「長井長義をめぐって—帰国当初の研究業績と地位の変転—」『化学史研究』第22号（1983）：1-8。

安江政一「過渡期の人長井長義—わが国への有機化学導入の経緯—」『化学史研究』第28号（1984）：VII。

安江政一「化学者長井長義の業績再吟味—伝説的人物評を批判する—」『化学史研究』第37号（1986）：159-168。

安江政一「柴田承桂と長井長義—先覚者たちの薬学振興論をめぐって」『薬史学雑誌』**21**(1)（1986.06）：33-40。

安江政一「『長井長義伝』における業績表の検討」『化学史研究』第44号（1988）：148。

今村寿明「化学大家359 長井長義」『和光純薬時報』**60**(1)（1992）：2-4。

荒井富夫「サムライたちの化学—ホフマンに学んだ留学生たち—」『化学と工業』**49**(12)（1996）：1646-1648。

藤崎千代子「『長井長義先生明治四年欧米見聞録書翰』とその現代文訳」『薬史学雑誌』**32**(2)（1997）：217-229。

芝哲夫「長井長義の化学志向の時期について」『化学史研究』第25巻（1998）：293。

長井長義（徳島大学薬学部長井長義資料委員会編）『長井長義長崎日記』徳島大学薬友会出版部（2002）。

長井長義（徳島大学薬学部長井長義資料委員会編）『長井長義長崎日記』改訂版，徳島大学薬友会出版部（2003）。

飯沼信子『長井長義とテレーゼ：日本薬学の開祖』日本薬学会（2003）。

芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（8）：長井長義と日本の薬学」『化学と教育』**52**(5)（2004）：

346-348.

徳島大学薬学部長井長義資料委員会編『長井長義博士関係資料一覧』徳島大学薬学部長井長義資料委員会（2005）.

長井長義（徳島大学薬学部長井長義資料委員会編）『長井長義長崎日記』原本解説版，徳島大学薬友会出版部（2006）.

長 与 専 斎

長与専斎「米國各州衛生事務章程梗概」『内務省衛生局雑誌』**19**（1878）：1-30.

長与専斎「衛生誤解ノ弁」『大日本私立衛生会雑誌』**2**（1883）：27-33.

長与専斎「衛生と自治の關係」『大日本私立衛生会雑誌』**59**（1888）：261-268.

長与専斎「伝染病研究所の創立」『大日本私立衛生学雑誌』**114**（1892）：1-21.

長與専斎『松香私志』長與衛生文庫（1902）.

長與専斎（長與又郎編）『松香遺稿』長與又郎（1934）.

長與専斎（山崎佐校訂解説）『松香私志』醫齒藥出版（1958）.

大島蘭三郎「わが国「医制」を確立した長与専斎」『日本及日本人』通号 1513（1972.09）：142-150.

山下喜明「明治六年文部省医務局設置月日並に長与専斎の局長就任月日について」『医譚』通号 49（1977.04）：2917-2922.

三浦豊彦「労働衛生学史序説-18-明治初期の衛生行政官と職業衛生（相良知安，長与専斎と後藤新平，長谷川泰）」『労働科学』**54**(1)（1978.01）：1-10.

本田一二「長与専斎と公衆衛生学」『専修商学論集』通号 28（1979.11）：239-270.

（小川鼎三，酒井シツ校注）『松本順自伝・長与専斎自伝』平凡社東洋文庫（1980）.

山本俊一「長与専斎（1831-1902 年）（人と業績-8-）」『公衆衛生』**45**(2)（1981.02）：168-169.

伴忠康『適塾と長与専斎：衛生学と松香私志』創元社（1987）.

笠原英彦「近代日本における衛生行政論の展開—長与専斎と後藤新平—」『法學研究』**69**(1)（1996）：87-110.

長与健夫「医学教育制度の変革・漢方から洋学へ 浅井国幹と長与専斎の相剋を中心にして」『日本医史学雑誌』**43**(4)（1997）：503-518.

笠原英彦『日本の医療行政：その歴史と課題』慶應義塾大学出版会（1999）.

乾修然「近代衛生行政を築いた人達（1）近代衛生行政に開眼した第二代衛生局長 長與専斎」『産業医学ジャーナル』**22**(6)（1999.11）：68-71.

長与健夫「ファミリーツリー 医学者 長与専斎とその一族」『歴史と旅』**27**(6)（2000.04）：246-257.

笠原英彦「長与専斎の医療改革とアメリカ衛生行政」『法學研究』**74**(10)（2001）：1-26.

上林茂暢「公衆衛生の確立における日本と英国：長与専斎と E・チャドウィックの果たした役割」『日本医史学雑誌』**47**(4)（2001）：665-696.

外山幹夫『医療福祉の祖長与専斎』思文閣出版（2002）.

笠原英彦「長与専斎の「衛生意見」とアメリカ衛生行政」『法政論叢』**38**(2)（2002）：40-48，8 i-9 i.

笠原英彦「長与専斎と「衛生意見」の意義」『日本医史学雑誌』**50**(1)（2004）：112-113.

山内慶太「書簡に見る福澤人物誌（第 21 回）長与専斎・北里柴三郎—福澤諭吉と「医友」」『三田評論』**1087**（2006.2）：62-67.

仁 田 勇

- 仁田勇『流れの中に：一科学者の回想』東京化学同人（1973）.
仁田勇「研究と時代」『高分子』**25**(11)（1976.11）：727.
「X線結晶学むかし話」『日本結晶学会誌』**19**(5)（1977.09）：269-276.
仁田勇「日本結晶学会創立30周年を迎えて」『日本結晶学会誌』**23**(2)（1981.02）：55-57.
田所宏行「人物・プラスチック技術史-2-X線結晶学から高分子へー仁田勇」『工業材料』**30**(2)（1982.02）：69-74.
仁田勇「旧理研・研究室の修業時代」『高分子』**31**(5)（1982.05）：448-450.
仁田勇「化学史周辺雑感」『化学史研究』通号25（1983.12）：123-126.
赤堀四郎「（講演）故仁田勇会員追悼の辞」『日本学士院紀要』**40**(1)（1984.10）：69-73.
関集三「仁田勇先生と結晶化学の確立」『科学』**54**(5)（1984.05）：308-310.
斎藤喜彦ほか「仁田勇先生のおもいで」『化学と工業』**37**(4)（1984.04）：254-256.
仁田勇「化学史周辺雑想」『化学』**39**(2)（1984.02）：78-84.
晶華会編『化学のいろいろな横顔：仁田勇先生遺稿』晶華会（1985）.
茶谷陽三「仁田勇先生 NITTA Isamu—20世紀の科学とともに—」『高分子』**47**（1998）：36.
関集三「仁田勇先生と結晶化学」『化学史研究』**25**(4)（1999）：241-255.

野 口 遵

- 野口遵『工業上より見たる空中窒素固定法』工業之日本社（1914）.
野口遵述；安藤徳器編『事業談・懐舊談』生活社（1938）.
片桐竜吉『半島の事業王野口遵』東海出版社（1939）.
嶋居悠『野口遵：人間と事業』東晃社（1943）.
久保田豊；伊藤忠兵衛「偉大なりし野口遵（対談）」『ダイヤモンド』**39**(10)（1951）：36-39.
高梨光司編『野口遵翁追懷録』野口遵翁追懷録編纂会（1952）.
木村毅「日本実業家列伝-12-野口遵」『実業の日本』**55**(12)（1952.06）：86-88.
藤原銀次郎「野口遵氏のこと」『実業の日本』**55**(14)（1952.07）：13-15.
金田栄太郎「野口遵さん」『経済人』**6**(8)（1952.08）：50-53.
「野口遵と旭化成—上—」『東洋経済新報』通号2588（1953）：578-579.
吉岡喜一『野口遵』フジ・インターナショナル・コンサルタント出版部（1962）.
福本邦雄編『野口遵は生きている：事業スピリットとその展開』フジ・インターナショナル・コンサルタント出版部（1964）.
星野芳郎「野口遵と技術の革新」『中央公論』**80**(2)（1965.02）.
白石宗城他「黎明期の化学工業と野口遵（インタビュー）」『別冊中央公論，経営問題』**4**(4)（1965.12）.
宗像英二「野口遵の指導した石炭液化技術」『野口研究所時報』通号23（1980）：6-15.
柴村羊五『起業の人野口遵伝：電力・化学工業のパイオニア』有斐閣（1981）.
鈴木明「アントルプルヌール野口遵翁を偲び野口研究所のアイデンティティを想う」『野口研究所時報』通号27（1984）：45-53.
市山幸作『創魂：野口遵』市山幸作（1993）.
宗像英二「日本窒素野口遵社長の発想になる内熱高圧反応筒による石炭液化の実現を望んで」『化学工業』

49(2) (1998.02) : 146-151.

大塩武「黎明期日本の化学工業と野口遵」『化学史研究』29(2) (2002) : 122-124.

清本英男「『野口遵 顕彰会』の活動紹介」『野口研究所時報』通号 46 (2003) : 14-16.

大塩武「野口遵の戦略構想」『明治学院論叢』688 (2003.2) : 95-102.

野 副 鉄 男

野副鉄男「化学を志して 40 年」『化学と薬学の教室』10 (1966) : 33 ; 11 (1966) : 38 ; 12 (1966) : 22 ; 13 (1966) : 34.

野副鉄男教授御退官記念会『野副鉄男教授論文目録集 (1926-1966)』廣川書店 (1966).

野副鉄男「研究回顧—トロポノイド化学のおいたち—」『化学史研究』第 5 号 (1976) : 1-11.

野副鉄男「私と精油研究」『香料』通号 119 (1977.08) : 55-58.

野副鉄男「ヒノキ油の研究からトロポノイドの化学へ」『ニューフレーバー』11 (1977) : 25.

野副鉄男「ヒノキ油の研究からトロポノイドの化学へ」『ニューフレーバー』12 (1978) : 12.

野副鉄男「ヒノキチオールが発見からトロポノイドの化学へ」『化学教育』26(6) (1978) : 422-433.

野副鉄男「トロポノイド化学の育つまで (私の転機)」『化学と生物』22(9) (1984.09) : 610-616.

座談会 野副鉄男他「日本の合成化学発展の源流を探る」『有機合成化学協会誌』44(9) (1986.09) : 790-805.

菊地重秋「野副鉄男氏の初期ヒノキチオール研究—芳香族 7 員環の基本構造問題への寄与」『東京工業大学人文論叢』通号 15 (1989) : 125-135.

野副鉄男「トロポノイドからアズレノイドへ—60 年の研究の思い出の中から」『有機合成化学協会誌』48 (10) (1990.10) : 929-935.

野副鉄男「眞島先生と私のトロポノイド化学」『眞島記念有機化学シンポジウム記念講演集』(1995) : 41-68.

村瀬雅之「生涯現役：野副鉄男先生にきく」『ファルマシア』31(8) (1995) : 857-860.

浅尾豊信「故野副鉄男先生の業績と人となり」『有機合成化学協会誌』54(12) (1996.12) : 1085-1090.

伊東徹「名誉会員 野副鉄男先生を偲んで」『ファルマシア』32(7) (1996) : 850.

北川勲「名誉会員 野副鉄男先生の死を悼む」『ファルマシア』32(7) (1996) : 850.

松井正直「野副鉄男先生を悼む」『日本農芸化学会誌』70(7) (1996.07) : 巻頭 1-2.

野副鉄男先生追悼事業会『ひとすじの道—追憶・野副鉄男先生』廣川書店 (1997).

「非ベンゼン系芳香族化合物の基礎研究に生き抜いた野副鉄男教授」『現代化学』通号 321 (1997.12) : 22-24.

野副鉄男先生追悼事業会『野副鉄男先生研究論文・著作目録』(1999).

浅尾豊信「野副鉄男 非ベンゼン系芳香族化学の開拓者」『化学史研究』第 27 巻 (2000) : 23-41.

吉原賢二「挫折から再生へ：大正・昭和の化学者たち (9) 七員環の芳香族有機化合物の発見—野副鉄男 ひとすじの道」『現代化学』408 (2005.3) : 16-21.

福 井 謙 一

長倉三郎；福井謙一；吉田善一共編『有機量子化学』化学同人 (1966).

福井謙一『化学反応と電子の軌道』丸善 (1976).

福井謙一；江崎玲於奈『科学と人間を語る』共同通信社 (1982).

- 福井謙一；山邊時雄編『化学と私：ノーベル賞科学者福井謙一』化学同人（1982）。
- 日本化学会編『福井謙一とフロンティア軌道理論』学会出版センター（1983）。
- 福井謙一『学問の創造』佼成出版社（1984）。
- 福井謙一『教育への直言』パンリサーチインスティテュート（1985）。
- 福井謙一「わが研究を顧みて」『化学史研究』第18巻（1991）：51-63。
- James Bertholomew, “Perspectives on Science and Technology in Japan: The Career of Fukui Kenichi,” *Historia Scientiarum*, 4 (1994) : 47-54.
- 伊藤裕夫「福井謙一の科学思想・思想について」『相模女子大学紀要』通号 60 A（1996）：113-118。
- 米澤貞次郎「福井謙一先生を偲んで」『化学史研究』第24巻（1997）：314-315。
- 田中一義；立明知；山下晃一 他「(座談会) 若手化学者 師を語る」『化学』53(4) (1998.04) : 18-26。
- 福井謙一博士記念行事実行委員会編『福井謙一博士記念行事記録集』福井謙一博士記念行事実行委員会（1998）。
- 福井謙一「基礎研究の歴史的意義の変化」『学術月報』51(2) (1998.02) : 94-96。
- 山邊時雄「福井謙一先生を悼む」『日本物理學會誌』53(4) (1998) : 288。
- 山邊時雄「福井謙一先生を偲んで」『ファルマシア』34(4) (1998) : 383。
- 福田英臣「名誉会員 福井謙一先生のご逝去を悼む」『ファルマシア』34(4) (1998) : 383。
- 田中一義「思い出の福井研究室」『化学』53(4) (1998.04) : 27-29。
- 「追悼特集 福井謙一博士が遺したもの」『化学』53(4) (1998.04) : 14-39。
- 中本一男「福井謙一さんと Nobel 化学賞」『化学と工業』52(3) (1999) : 278-280。
- 米澤貞次郎；永田親義『ノーベル賞の周辺：福井謙一博士と京都大学の自由な学風』化学同人（1999）。
- 川端真一『福井謙一博士の死：大学回り記者哀歓記』ミネルヴァ書房（1999）。
- 赤木和夫「ポリアセチレンとフロンティア軌道理論—白川英樹博士と福井謙一博士」『現代化学』358 (2001.1) : 38-41。
- 山邊時雄「福井謙一博士の人とその学問」『学術月報』55(3) (2002.3) : 261-263。
- 早野美智代文『ノーベル賞を受賞した日本人：人類の発展につくした日本人』ポプラ社（2003）。
- 米澤貞次郎「化学反応論—福井謙一」『数理科学』42(5) (2004.5) : 35-42。
- 吉原賢二「大正・昭和の化学者たち (6) 京都が育んだ量子化学の賢人—福井謙一 ノーベル賞への道」『現代化学』405 (2004.12) : 14-19。
- 福井友栄『ひたすら』講談社（2007）。

福 原 有 信

- 福原有信「衛生上醫藥分業の必要」『藥劑誌』5 (1889)。
- 長井長義「吊故福原有信君」『藥學雜誌』506 (1924) : i。
- 永井保『福原有信伝』資生堂（1966）。
- 池田年穂；濱本幸宏「福原有信と揺籃期の近代薬事制度」『共立薬科大学研究年報』42 (1997) : 21-46。
- 天野宏；尾花良枝；杉原正泰「福原有信の医薬分業論」『薬史学雑誌』32(2) (1997) : 125-129。
- 真鍋繁樹「この人を見よ 福原有信：「美」を文明開化させた男」『ニューリーダー』14(3) (2001.3) : 48-51；14(4) (2001.4) : 40-43；14(5) (2001.5) : 64-67；14(6) (2001.6) : 48-51；14(7) (2001.7) : 48-52；14(8) (2001.8) : 38-41；14(9) (2001.9) : 38-42；14(10) (2001.10) : 68-72；14(11) (2001.11) :

46-50；**14**(12) (2001.12)：74-78；**15**(1) (2002.1)：66-70；**15**(2) (2002.2)：80-84；**15**(3) (2002.3)：78-82；**15**(4) (2002.4)：46-50；**15**(5) (2002.5)：72-75；**15**(6) (2002.6)：76-80；**15**(7) (2002.7)：76-80；**15**(8) (2002.8)：46-50；**15**(9) (2002.9)：68-72；**15**(10) (2002.10)：68-72；**15**(11) (2002.11)：78-82；**15**(12) (2002.12)：76-80；**16**(1) (2003.1)：76-80；**16**(2) (2003.2)：76-80；**16**(3) (2003.3)：76-80；**16**(4) (2003.4)：112-116；**16**(5) (2003.5)：96-99；**16**(6) (2003.6)：82-86。
加来耕三「近代日本の創業者たち (11) 資生堂の創業者 福原有信」『道経塾』**3**(5) (2002.2)：30-33。
杉田勲「トップの闘い 資生堂創始者一族/福原有信氏 文化創造企業の創始者理念貫く一文明開化の時代を先駆けたソフト戦略」『月刊公論』**36**(4) (2003.4)：26-30。
山口昌男「経営者の精神史(23)薬学と化粧品品の導入者 福原有信」『週刊ダイヤモンド』**91**(24) (2003.6)：122-123。

真島利行

真島利行「〔田中館愛橘先生〕一先生とその筆のあと」『ローマ字世界』**42** (特号) (1952/09)：32-33。
真島利行「我生涯の回顧」『化学の領域』**8**(1) (1954)：1-11；**8**(3) (1954)：137-146。
「真島利行博士米寿記念」『化学の領域』**15** (1961)：891。
田中実「真島利行と漆の研究」『中央公論』**80**(7) (1965.06)。
小竹無二雄「真島利行先生」『染料と薬品』**5** (1970)。
真島利行『真島利行先生：遺稿と追憶』真島利行先生遺稿集刊行委員会 (1970)。
小竹無二雄「真島利行先生と私 (師を語る-2-)」『化学』**31**(2) (1976.02)：98-103。
久保田尚志「真島利行先生一あるころの老師とおさない弟子たち」『化学と工業』**33**(10) (1980.10)：649-651。
芝哲夫「真島利行日記抄一昭和五年～昭和十九年一」『大阪大学史紀要』第4号 (1987)：72-122。
久保田尚志「わが国有機化学の開拓者一真島利行一」『化学と工業』**45**(8) (1992)：1397-1398。
池上雄作「真島利行先生生誕120年」『化学と工業』**47**(3) (1994)：234-235。
池上雄作「日本の有機化学4世代一真島先生生誕120年を記念して (真島記念有機化学シンポジウム)〔含肖像〕(1994年の化学-4-)」『化学』**49**(4) (1994.04)：292-293。
芝哲夫「大阪大学歴代総長餘芳 第三代総長真島利行」『阪大 Now』**14** (1999)：10-12。
久保田尚志「日本の有機化学の開拓者真島利行 (第1回)～(第4回)」『化学史研究』第30巻 (2003)：36-51；93-105；159-176；231-255。
久保田尚志『日本の有機化学の開拓者真島利行』久保田一郎 (2005)。
吉原賢二「大正・昭和の化学者たち (7) うるしこそ日本の象徴一真島利行 天然物有機化学の開拓」『現代化学』**406** (2005.1)：14-20。
芝哲夫「化学大家 403 真島利行」『和光純薬時報』**74**(3) (2006)：29-31。

水島三一郎

水島三一郎；島内武彦『蛋白質の構造 (化学叢書 3)』学術図書出版社 (1949)。
水島三一郎『赤外線吸収とラマン効果』共立出版 (1958)。
The Scientific Papers of Professor S. Mizushima : A Collection Presented by His Friends and Pupils on the Occasion of the Celebration of the Completion of His Thirty-Sixth Year as a Member of the

Faculty of the University of Tokyo, Tokyo: University of Tokyo, 1959.

水島三一郎「原子量の新しい基準」『化学教育』**10**(1) (1962): 27.

水島三一郎; 永井彰一郎「昨年亡なられた主な化学者」『化学教育』**10**(1) (1962): 109.

水島三一郎「化学教育と実験」『化学教育』**10**(2) (1962): 125-126.

水島三一郎「機械工業材料を原子のレベルで考える」『日本機械学会誌』**71**(594) (1968): 940-948.

水島三一郎「分子科学 (構造化学) の始まった頃」『化学史研究』第3号 (1975): 1-3 0

水島三一郎「文献にのっていなかった文献」『化学と工業』**29**(1) (1976/01): 48-50; **29**(3) (1976/03): 233-235; **29**(10) (1976/10): 841-843.

水島三一郎「小供のとき行なった実験と中学・高校時代によんだ本」『化学教育』**24**(3) (1976): 197-198.

水島三一郎「転機のとし 1912 年」『蛋白質核酸酵素』**21**(10) (1976.10): 769-775.

水島三一郎「変換期の科学者たち—日本の高度工業化の背景にあるもの」『化学と工業』**35**(3) (1982.03): 159-161.

森野米三「水島三一郎先生と構造化学」『科学』**53**(10) (1983.10): 666-667.

坪井正道他「水島三一郎先生のおもいで」『化学と工業』**36**(10) (1983.10): 729-732.

水島三一郎『水島三一郎 物質の世界』講談社 (1983).

東健一「水島三一郎先生のご逝去を悼(いた)む」『化学教育』**31**(5) (1983): 393.

「水島三一郎博士 (追悼)」『蛋白質核酸酵素』**28**(12) (1983.11): 1281-1291.

馬場宏明ほか編『回想の水島研究室: 科学昭和史の一断面』共立出版 (1990).

坪井正道「水島三一郎先生の研究足跡」『化学史研究』第22巻 (1995): 142-151.

今堀和友「水島三一郎先生 MIZUSHIMA San-ichiro—回転異性体からコンホメーションへ—」『高分子』**47** (1998): 49.

吉原賢二「挫折から再生へ: 大正・昭和の化学者たち (5) 回転異性体の発見—水島三一郎 世界をめぐるゴーシュの反響」『現代化学』**403** (2004.10): 14-19.

湯 浅 年 子

湯浅年子『科学への道』日本学藝社 (1947).

湯浅年子『フランスに思ふ: もんかいえあんでい—む』月曜書房 (1948).

湯浅年子「ジョリオ・キュリー先生」『日本評論』**23**(11) (1948.11): 49-53.

湯浅年子「女子教育家の自覚について」『教育女性』**1**(1) (1949.04): 3-10.

湯浅年子「ジョリオ・キュリー—再びわが師を語る」『日本評論』**25**(7) (1950.07): 58-67.

湯浅年子『パリ随想: 1950 年』弘文堂 (1950).

湯浅年子『放射性同位元素とその生物学医学への応用』培風館 (1951).

湯浅年子「Frederic JOLIOT 教授を偲んで」『日本物理学会誌』**13**(11) (1958): 751-752.

湯浅年子『ら・みぜーる・ど・りゅっくす』みすず書房 (1973).

湯浅年子「『同時性の放棄』に寄せて—ピエール・ノイズ博士の論文」『自然』**30**(11) (1975.11): 61-65.

湯浅年子「コレジ・ド・フランスに拠る科学者像—1-アントワンヌ・ラカサニユ教授」『自然』**31**(10) (1976.10): 52-58.

笹川辰弥; 尾立晋祥; 湯浅年子「原子核と素粒子における少数粒子問題」『日本物理学会誌』**31**(12) (1976): 994-996.

- 湯浅年子「コレジ・ド・フランスに拠る科学者像-2-アントワヌ・ラカサニユ教授」『自然』**32**(4) (1977.04)：68-80.
- 湯浅年子『る・れいよん・うゑーる』みすず書房 (1977).
- 湯浅年子「理論と実験の物理学における役割」『自然』**33**(2) (1978.02)：38-43.
- 湯浅年子「稀少現象を探って来た道を振り返って」『日本物理學會誌』**34**(4) (1979)：273-284.
- 湯浅年子『むすか・のわーる』みすず書房 (1980).
- 湯浅年子「コレジ・ド・フランスに拠る科学者像-3-ポール・ランジュヴァン教授」『自然』**35**(5) (1980.05)：64-73.
- 坂井光夫「鎮魂 湯浅年子先生—“巴里に死す”」『自然』**35**(5) (1980.05)：58-63.
- 坂井光夫「湯浅年子氏を悼む」『日本物理學會誌』**35**(7) (1980)：618-619.
- 湯浅年子『一すぢの葦：女性原子核物理学者湯浅年子姉のパリ便り』東京女子高等師範学校理科昭和6年卒業生一同 (1981).
- 松田久子「湯浅年子(1909～1980)資料整理の歩み」『お茶の水女子大学女性文化センター年報』**2** (1988)：97-118.
- 坂本吉之「湯浅年子先生の思い出」『世界の窓：京都産業大学世界問題研究所所報』**4** (1988)：25-29.
- 坂本吉之「湯浅年子博士のこと」『京都産業大学世界問題研究所紀要』**8** (1988)：188-195.
- 阿部裕子「湯浅年子資料—資料整理の状況と遺品管理の方針について—」『物理学史ノート』(1991)：13-17.
- お茶の水女子大学女性文化研究センター編『湯浅年子資料目録』お茶の水女子大学女性文化研究センター (1993).
- 松田久子「日本女性最初の物理学者 湯浅年子」『学鑑』(1994)：16-19.
- 松田久子「科学史入門：湯浅年子資料」『科学史研究』第II期 **34** (1995)：181-183.
- 湯浅年子(山崎美和恵編)『湯浅年子パリに生きて』みすず書房 (1995).
- 都河明子；嘉ノ海暁子『拓(ひら)く：日本の女性科学者の軌跡』ドメス出版 (1996).
- ジョリオ, エレーヌ・ランジュヴァン(中村弓子訳)「思い出の湯浅年子先生」『みすず』**40**(11) (1998.11)：41-48.
- 山崎美和恵「湯浅年子博士の科学と人生—パリに生き、真実を求め続けた物理学者の軌跡〔含 湯浅年子年譜・著作リスト〕」『ジェンダー研究』通号21 (2001.3)：95-122.
- 山崎美和恵『パリに生きた科学者湯浅年子』岩波書店 (2002).

組織・制度

- 東京工業試験所編『東京工業試験所五十年史』東京工業試験所 (1951).
- Chikayoshi Kamatani, “The History of Research Organization in Japan,” *Japanese Studies in the History of Science*, **2** (1963)：1-79.
- 鎌谷親善「日本における硫酸工業のはじまり—造幣寮硫酸製造所—」『化学史研究』第1号 (1974)：11-22.
- 亀山哲也・鎌谷親善「臨時窒素研究所について—日本最初の大規模プロジェクトはいかにして完成されたか—」『化学史研究』第8号 (1978)：37.
- 亀山哲也・鎌谷親善「臨時窒素研究所—設立の背景—」『化学史研究』第10号 (1979)：15-26.
- 鎌谷親善「国立化学系試験研究機関と国家政策」『化学史研究』第11号 (1979)：34.

工業技術院化学技術研究所編『化学技術研究所八十年史：創立 80 周年記念出版』工業技術院化学技術研究所 (1980)。

安藤厚「地質分析所とぶんせき」『ぶんせき』1981 No.4: 261-265.

鎌谷親善「造幣局硫酸製造所における事業の展開—明治 8~18 年—」『化学史研究』第 16 号 (1981): 8-21.

亀山哲也・鎌谷親善「臨時窒素研究所におけるアンモニア合成研究の展開」『化学史研究』第 17 号 (1981): 20.

今井功・鎌谷親善「創立期の地質調査所」『地質ニュース』330 (1982): 6-15.

鎌谷親善「工業試験所の起源—地質調査所の設立に至る過程—」『化学史研究』第 19 号 (1982): 59-80.

鎌谷親善「京都市陶磁器試験場—その創立から国立移管まで—」『化学史研究』第 32 号 (1985): 153.

亀山哲也「化学技術研究所の歴史的記念物—わが国化学工業の近代化のあけぼのを物語る—」『化学史研究』第 31 号 (1985): 108-110.

葉賀七三男「技術政策史話-10-工政会の誕生—工務省設置運動の展開」『工業技術』27(10) (1986.10): 24-27.

鎌谷親善「第 1 次大戦と科学技術動員—化学工業調査会を中心として」『化学史研究』第 36 号 (1986): 134.

佐藤博之「恒藤規隆と肥料鉱物調査所百年史の一こま (5)」『地質ニュース』378 (1986): 34-45.

鎌谷親善「京都市陶磁器試験場—明治 29 年~大正 9 年-1-」『化学史研究』通号 40 (1987): 97-115.

鎌谷親善「京都市陶磁器試験場—明治 29 年~大正 9 年-2-」『化学史研究』通号 41 (1987): 147-163.

鎌谷親善「第一次世界大戦と研究体制の整備：化学工業調査会を中心に」『経営論集 (東洋大学経営学部/東洋大学)』28 (1987): 155-209.

鎌谷親善「大阪帝国大学の形成—理学部と産業科研究所—」『大阪大学史紀要』4 (1987): 25-66.

『尚古集成館』尚古集成館 (1987)。

鎌谷親善『技術大国百年の計—日本の近代化と国立研究機関—』平凡社 (1988)。

工業技術院化学技術研究所編『化学技術研究所九十年史：筑波 10 年の歩み』工業技術院化学技術研究所 (1990)。

鎌谷親善「京都大学附置化学研究所と燃料研究」『化学史研究』第 19 卷 (1992): 145-146.

石川文三「殖産協会の系譜と人脈—日本石油誕生の背景—」『化学史研究』第 19 卷 (1992): 152-153.

「化学会館展示 日本における化学工業の近代化と東京工業試験所」『化学史研究』第 21 卷 (1994): 80-81.

鎌谷親善「肥料礦物調査所—その設立・事業・廃止」『化学史研究』20 (1993): 65-92.

鎌谷親善「京都帝国大学附置化学研究所—創立期」『化学史研究』21 (1994): 1-37.

鎌谷親善「京都帝国大学附置化学研究所—戦時期」『化学史研究』21 (1994): 109-151.

鎌谷親善「東北大学附属鉄鋼研究所—その設立と事業—」『化学史研究』23 (1996): 205-234.

立花太郎「旧「日本化学会」および「工業化学会」の歴代会長の生没年月日」『化学史研究』23(3) (1996): 265-268.

鎌谷親善「東北大学附置金属材料研究所—設立から体制の整備まで—」『化学史研究』24 (1997): 1-32.

鎌谷親善「伝染病研究所—最初の帝国大学附置研究所—」『化学史研究』24 (1997): 105-147.

鎌谷親善「創始期における電気試験所」『科学技術史』通号 2 (1998): 1-52.

菊池好行「化学者共同体発展の数量的把握を巡る諸問題—明治・大正期日本の場合—」『化学史研究』第 25 卷 (1998): 294.

- 菊池好行「東京(帝国)大学化学科卒業生の初職一覧(1877-1926)」『化学史研究』第26巻(1999)：102-112.
- 菊池好行「日本の応用物理化学と電気化学協会」『化学史研究』第29巻(2002)：130.
- 鈴木淳編『工部省とその時代』山川出版社(2002).
- 尾崎利彦、亀山哲也「産業王国愛知を支えた国立工業試験所 I. 設立の経緯」『化学史研究』第29巻(2002)：132.
- 尾崎利彦・亀山哲也「中部に設立された国立工業試験所の果たした役割：(2) 戦時研究」『化学史研究』第30巻(2003)：116.
- 尾崎利彦・亀山哲也「中部に設立された国立工業試験所の果たした役割 I. 機械試験所及び東京工業試験所の名古屋両支所設立の経緯(第1回)(第2回)」『化学史研究』第30巻(2003)：11-25；141-158.

大学・研究機関史

- 『東京帝国大学五十年史』上、下、東京帝国大学(1932).
- 東京工業大学『東京工業大学六十年史』東京工業大学(1940).
- 『東京帝国大学学術大観：理学部、東京天文台、地震研究所』東京帝国大学(1942).
- 大久保利謙『日本の大学』創元社(1943).
- 『東京帝国大学学術大観：工学部、航空研究所』東京帝国大学(1944).
- 『日本化学会創立75周年記念誌』日本化学会(1954).
- 『大阪大学二十五年誌』(1956).
- 『慈大医化学開講五十周年記念抄史』東京慈恵会医科大学医化学教室(1963).
- 京都大学『京都大学七十年史』京都大学(1967).
- 作道好男・江藤武人編『大阪大学工学部七十五年史』財界評論新社(1973).
- 中村馨「同志社波理須理化学学校一明治中期一化学系私立学校の歩み」『化学史研究』第4号(1975)：16-19.
- 『創立五十周年記念資料集 日本化学総覧のあゆみ』日本化学研究会(1977).
- 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史』全10巻、東京大学出版会(1977-1987).
- 旧工部大学校史料編纂会『旧工部大学校史料・同附録』青史社(1978).
- 中山茂『帝国大学の誕生一国際比較の中での東大』中央公論社(1978).
- 作道好男・作道克彦『京都大学工学部八十年史』教育文化出版教育科学研究所(1980).
- 『東京農工大学百年の歩み』東京農工大学創立記念事業会(1981).
- 化学工学教室四十年史編纂委員会編集『京都大学工学部化学工学教室四十年史』京都大学工学部化学工学教室洛窓会(1983).
- 京大理学部化学・日本の基礎化学研究会編『日本の基礎化学の歴史的背景：関西における基礎化学の発展を中心に』京大理学部化学・日本の基礎化学研究会(1984).
- 『大阪大学五十年史：通史』部局史(1983) 通史(1985).
- 『東京工業大学百年史』通史・部局史全二巻(1985).
- 潮木守一『京都帝国大学の挑戦』講談社(1984).
- [群馬大学工学部化学工学科] 創立25周年史編集委員会編『群馬大学工学部化学工学科25周年史』群馬大学化学工学科(1987).
- 『繊維高分子材料研究所最近十年の歩み 創立七十周年記念』通商産業省工業技術院繊維高分子材料研究所

(1989).

高木徳二「触媒学会の歴史—原点から現在までの歩み—」『化学史研究』第18巻(1991):101-102.

延与三知夫「触媒化学研究センターの歴史」『化学史研究』第18巻(1991):104-105.

燃料化学・石油化学教室五十年史編纂委員会編『京都大学工学部燃料化学・石油化学教室五十年史』京都大学工学部燃料化学・石油化学教室同窓会準備会(1991).

東北化学同窓会編『東北化学同窓会報:化学教室創立八十周年記念号』東北化学同窓会(1992).

石館守三編『写真で見る東大薬品分析化学教室五十年史』廣川節男(1992).

電気化学協会60年史編纂委員会編『電気化学協会60年史』電気化学協会(1993).

『大阪大学工学部創始百年史』(1997).

京都大学理学部化学教室・創立百周年記念事業会編『京都大学理学部化学教室百年のあゆみ』京都大学理学部化学教室・創立百周年記念事業会(1997).

京都大学工学部化学系百周年記念事業実行委員会『伝統の形成と継承:京都大学工学部化学系百年史』京都大学工学部化学系百周年記念事業実行委員会(1998).

『銅:21世紀へ向けて:日本伸銅協会五十年史』日本伸銅協会(1998).

中野実『東京大学物語:まだ君が若かった頃』吉川弘文館(1999).

武蔵野化学研究所社史編纂室編『武蔵野化学研究所50年史:1949-1999』武蔵野化学研究所(1999).

寺崎昌男『日本における大学自治制度の成立 増補版』評論社(2000).

『日本アイソトープ協会50年史』日本アイソトープ協会(2001).

中野実『近代日本大学制度の成立』吉川弘文館(2003).

『東北大学百年史』全11巻,第8巻(2003),第4巻(2003),第5巻(2004),第6巻(2005),第7巻(2006)-.

The Chemical Society of Japan ed., *The Chemical Society of Japan: A 125-Year Quest for Excellence, 1878-2003*, The Chemical Society of Japan (2003).

『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会(2004).

岡田大士『東京工業大学における戦後大学改革に関する歴史的研究』東京工業大学博士論文(2005).

東京大学理学系研究科・理学部化学教室雑誌会編『東京大学理学部化学教室の歩み:創設期から戦後までの記録』東京大学大学院理学系研究科・理学部化学教室雑誌会(2007).

舎 密 局

芝哲夫「舎密局について」『生産と技術』第9号(1964):1.

芝哲夫「舎密局」『化学と工業』19(1)(1966):82-85.

芝哲夫「大阪舎密局の跡をもとめて」『自然』1975年6月号:74-81.

芝哲夫「化学実験教育の始まり—長崎分析研究所と大阪舎密局—」『化学と教育』29(10)(1976):844-846.

芝哲夫「大阪舎密局史」『大阪大学史紀要』第1号(1981):33-47.

藤田英夫「大坂舎密局の遺産に関する化学史的調査」『化学史研究』第24号(1983):VII.

藤田英夫「大阪舎密局の化学史的遺産に関する一考察」『化学史研究』第29号(1984):134-145.

藤田英夫「京都舎密局の表札をめぐる化学史的調査過程」『化学史研究』第17巻(1990):145.

藤田英夫『大阪舎密局の史的展開—京都大学の源流—』思文閣出版(1995).

鎌谷親善「藤田英夫著『大阪舎密局の史的展開—京都大学の源流—』」『化学史研究』第22巻(1995):255.

芝哲夫「舎密局—大阪の科学の伝統」『Soft』第20巻(1996):28-31.

芝哲夫「第18回化学会館化学史資料展示（3月1日～8月中旬）舎密局とハラタマ」『化学史研究』第27巻（2000）：77-79.

Tetsuo Shiba, “Dutch Chemist Gratama and Chemistry in Japan”, *Historia Scientiarum*, **9** (2000) : 181-190.

芝哲夫「日本の化学とオランダーハラタマと舎密局が遺したもの」『化学』**55**(4) (2000) : 27-32.

芝哲夫「舎密局とハラタマ」『近畿化学工業界』第573号 (2001).

理化学研究所

理化学研究所旧鈴木梅研究室有志『鈴木梅太郎博士論文集〈第1巻〉植物生理の研究（1948年）』北光書房（1948）.

「特集：理化学研究の60年のあゆみ」『自然』1978年12月増刊号.

『理化学研究所六十年の記録（1980年）』理化学研究所（1980）.

宮田親平『科学者たちの自由な楽園—栄光の理化学研究所』文藝春秋（1983）.

芝哲夫「塩見理化学研究所小史」『大阪大学史紀要』第3号（1983）：31-43.

加藤八千代『激動期の理化学研究所 人間風景—鈴木梅太郎と薮田貞治郎』共立出版（1987）.

斎藤憲『新興コンツェルン理研の研究：大河内正敏と理研産業団』時潮社（1987）.

宮田親平「『科学者の楽園』をつくった男—大河内正敏と理化学研究所」日本経済新聞社（2001）.

中根良平，仁科浩二郎，江沢洋，仁科雄一郎『仁科芳雄往復書簡集〈1〉現代物理学の開拓 コペンハーゲン時代と理化学研究所・初期1919-1935』みすず書房（2006）.

科学技術教育

鈴木清四郎『二十五年記念工手学校一覧』工手学校（1913）.

大町桂月，猪狩史山『杉浦重剛先生』政教社（1924）.

『早稲田大學附屬早稲田工手學校機械科卒業記念』赤誠堂寫真工藝出版部（製）（1932）.

大八木義彦；饗庭三泰「近代におけるわが国の初等化学教育の歴史（I）」『化学教育』**11**(1)（1963）：114-119.

三井澄雄「永海佐一郎と中等化学教科書」『科学史集刊』通号5（1967）：29-39.

三好信浩『日本工業教育成立史の研究—近代日本の工業化と教育』風間書房（1979）.

明治教育史研究会編『杉浦重剛全集』全6巻，杉浦重剛全集刊行会（1982）.

三好信浩『明治のエンジニア教育—日本とイギリスのちがひ』中央公論社新書（1983）.

井上久雄編『明治維新教育史』吉川弘文館（1984）.

（座談会）山田武康他「早稲田工手学校—勤労と向学と」『早稲田大学史記要』通号17（1985）：180-198.

三好信浩『日本教育の開国：外国教師と近代日本』福村出版（1986）.

大町桂月・猪狩史山『杉浦重剛先生』杉浦重剛先生顕彰会（1986）.

三好信浩『ダイアールの日本』福村出版（1989）.

三好信浩『近代日本産業啓蒙書の研究』風間書房（1992）.

三好信浩『近代日本産業啓蒙家の研究』風間書房（1995）.

三井澄雄『科学教育史研究ノート』同時代社（1999）.

茅原健『工手学校人物誌』朝日書林（1999）.

渡辺一雄『明治の教育者 杉浦重剛の生涯』毎日新聞社 (2003).
三好信浩『日本工業教育発達史の研究』風間書房 (2006).
茅原健『工手学校：旧幕臣たちの技術者教育』中公新書ラクレ (2007).

植民地科学

泉靖一「舊植民地大学考〔京城，台北帝大を中心に〕」『中央公論』第85巻第7号 (1970.07)：146-155.
隈部智雄・原正敏「戦時下，技術員・技能工養成の諸局面 (II)―日満技術工養成所から秋田日満工業高校へ―」『千葉大学教育学部研究紀要』第38巻第2部 (1990)：79-121.
姜雄「『格致彙編』と『大朝鮮独立協会会報』に依拠した独立協会の啓蒙運動」『(東京工業大学) 人文論叢』第17号 (1991)：11-20.
隈部智雄・原正敏「戦時下，技術員・技能工養成の諸局面 (III)―九州日満鉱業技術員養成所から九州日満工業学校へ―」『千葉大学教育学部研究紀要』第39巻第2部 (1991)：175-209.
姜雄「朝鮮総督府燃料選鉱研究所に関する研究」『(東京工業大学) 人文論叢』第18号 (1992)：73-84.
隈部智雄・原正敏「戦時下，技術員・技能工養成の諸局面 (IV)―酒田日満技術工養成所から酒田日満工業学校へ―」『千葉大学教育学部研究紀要』第40巻第2部 (1992)：121-167.
田中泰夫「工業化学会満洲支部と『満洲』における化学工業 I, II」『化学史研究』第19巻 (1992.12)：282-289；第20巻 (1993.04)：25-36.
鍾清漢『日本植民地下における台湾教育史』多賀出版 (1993).
加藤茂生「序論：植民地科学の展開」『科学史・科学哲学』No.11 (1993)：48-57.
隈部智雄・原正敏「戦時下，技術員・技能工養成の諸局面 (V)―立命館日満高等工科学学校―」『千葉大学教育学部研究紀要』第41巻第2部 (1993)：127-191.
慎蒼健「植民地朝鮮と科学 (I)―恩賜記念科学館の戦略―」『科学史・科学哲学』No.11 (1993).
坂野徹「清野健次の日本人種論―大東亜共栄圏と人類学―」『科学史・科学哲学』No.11 (1993).
原正敏・隈部智雄「戦時下，技術員・技能工養成の諸局面 (VI)―満洲鉱工青少年技術生訓練所―」『千葉大学教育学部研究紀要』第41巻第2部 (1993)：193-226.
姜雄「植民地期朝鮮における送電技術」『(東京工業大学) 人文論叢』第20号 (1994)：157-169.
隈部智雄・原正敏「戦時下，技術員・技能工養成の諸局面 (VII)―満洲帝国交通部委託土木技術員養成所―」『千葉大学教育学部研究紀要』第42巻第2部 (1994)：113-132.
原正敏・隈部智雄「“満洲国”における技術員・技術工養成 (I)―満洲鉱工業技術員協会と「鉱工技能者養成令」―」『千葉大学教育学部研究紀要』第42巻第2部 (1994)：189-220.
原正敏・隈部智雄「“満洲国”における技術員・技術工養成 (II)―在満企業の企業内養成施設―」『千葉大学教育学部研究紀要』第43巻，II. 人文・社会科学編 (1994)：117-142.
原正敏・隈部智雄「“満洲国”における技術員・技術工養成 (III)―国民高等学校工科と職業学校―」『千葉大学教育学部研究紀要』第43巻，II. 人文・社会科学編 (1994)：143-160.
中生勝美「植民地の民族学―満州民族学会の活動―」『へるめす』第52号 (1994.11)：135-143.
Togo Tukahara, “The Dutch Commitment in its Search for Asian Mineral Resources and the Introduction of Geological Sciences as a Consequence.” in *The Transfer of Science and Technology between Europe and Asia, 1780-1880*, International Research Center for Japanese Studies. 1994.
坂野徹「パラオ熱帯生物研究所」『化学史研究』第22巻 (1995)：180-196.

- 所澤潤・張寛敏「聴取り調査：外地の進学体験（II）：台湾一師附小，台北高校，台北帝大医学部を経て，台湾大学医学院卒業」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編，第44巻（1995）：139-187.
- 塚原東吾・篠田真理子・伊藤憲二・松村紀明・綾部広則・柿原泰・本間栄男・杉山滋郎「科学史の側面から再検討したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの科学的活動：植民地科学，ペーコニアン科学，フンボルティアン科学とシーボルトの科学的活動との関係についての試論」『鳴滝紀要』第6号（1996）：201-244.
- 慎蒼健「植民地を生きた科学者・技術者—植民地期朝鮮科学運動の論理とナショナリズム」『現代思想』24（6）（1996.05）：225-235.
- 姜雄「京城高等工業学校と植民地期朝鮮の技術者養成」『科学史研究』第35巻（1996）.
- 姜雄「日本窒素肥料興南肥料工場の化学技術体系の分析」『科学技術時代』第18巻第1号（1996）：42-47.
- 所澤潤・陳漢升「聴取り調査：外地の進学体験（III）：抵抗の地・龍潭から，基隆中学校，台北高校を経て，長崎医科大学卒業」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編，第45巻（1996）：97-163.
- 富山一郎「熱帯科学と植民地主義—『島民』をめぐる差異の分析学—」酒井直樹ほか編『ナショナリティの脱構築』柏書房（1996），57-80.
- 姜雄「朝鮮総督府の発送電計画に基づく1930年代初期の朝室のアルミナ製造計画と朝室の技術体系」『科学史研究』第36巻（1997）：193-200.
- 所澤潤・陳定堯「聴取り調査：外地の進学体験（IV）：樺山小から，台北三中，台北帝大豫科，台北帝大医学部を経て，台湾大学医学院卒業」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編，第46巻（1997）：121-180.
- 加藤茂生「植民地における科学技術の歴史叙述について」『科学史・科学哲学』No. 14（1998）：38-46.
- 加藤茂生「近代都市空間と公衆衛生—後藤新平の衛生思想」『10+1』12（1998）：156-167.
- 坂野徹「人類学者と近代日本—回顧と展望：近代日本人類学史—」『科学史・科学哲学』No. 14（1998）.
- 所澤潤・呂耀枢「聴取り調査：外地の進学体験（5）：石光公学校から，台北高校尋常科，同高等科，台北高級中学を経て，台湾大学医学院卒業」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編，第47巻（1998）：183-266.
- 慎蒼健「覇道に抗する王道としての医学：1930年代朝鮮における東西医学論争から」『思想』905（1999）：65-92.
- 所澤潤・陳清桂「聴取り調査：外地の進学体験（6）：台南州の農村から長老教中学，内地の荏原中学校を経て，日本歯科医学専門学校及び東京医学歯学専門学校医学科を卒業（付・5までの補遺）」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編，第48巻（1999）：127-166.
- 姜雄「植民地期朝鮮における金鉱業の発達とその技術的特徴」『技術史』第1号（2000）：1-17.
- 所澤潤・翁曾愛経「聴取り調査：外地の進学体験（7）：景尾公学校を卒業し，迎病院看護婦見習いを経て，台北陸軍病院の看護婦へ」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編，第49巻（2000）：107-137.
- 中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社（2000）.
- 山口直樹「日本の科学教育と帝国主義：満州国国立中央博物館の活動をめぐって」日本科学教育学会『年会論文集』Vol. 24（2000）：271-272.
- 加藤茂生「科学の外延—植民地科学の視点から—」『現代思想』29/10（2001）：176-185.
- 塚原東吾「「科学と帝国主義」が開く地平」『現代思想』29/10（2001）：156-175.
- 山口直樹「満州帝国国立中央博物館の構想の再検討：藤山一雄の博物館論をめぐって」日本科学教育学会

- 『年会論文集』Vol. 25 (2001) : 375.
- 財城真寿美・塚原東吾・三上岳彦・Gunther P. Konnen「出島(長崎)における19世紀の気象観測記録」『地理学評論』第75巻第14号(2002.12) : 901-912.
- 所澤潤「『台湾医界論』(張寛敏著・昭和18年)―日本統治下台湾における台湾人医師の意識を論じた資料―」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編, 第51巻(2002) : 85-101.
- 姜雄「三菱製鉄兼二浦製鉄所に関する技術史的検討」『技術史』第4号(2003) : 1-20.
- 松田京子『帝国の視線 博覧会と異文化表象』吉川弘文館(2003).
- 阿部洋「『対支文化事業』の研究―戦前期日中教育文化交流の展開と挫折―」汲古書院(2004).
- 全京秀(太田心平訳)「日本の植民地/戦争人類学はいま―台北帝大と京城帝大の人脈と活動を中心に」『思想』第957号(2004.01) : 73-91.
- 李吉魯「日本統治下朝鮮における高等工業教育の成立と展開―京城工業専門学校を中心に―」『アジア教育史研究』No. 13(2004.07) : 87-104.
- 所澤潤・高峯一愚「聴取り調査:外地の進学体験(9) 特別篇 台北帝国大学学生主事補, 台北高等学校教授の体験を中心に」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編, 第53巻(2004) : 59-85.
- 飯島渉『マリアと帝国 植民地医学と東アジアの広域秩序』東京大学出版会(2005).
- 上杉允彦「植民地科学史試論―台湾を例として―」『高千穂論叢』第40巻第2号(2005.11) : 15-40.
- 坂野徹『帝国日本と人類学者―一八八四―一九五二年』勁草書房(2005).
- 木本忠昭「ヨーロッパ帝国主義とアジア諸国への技術移転」『科学史研究』第45巻(2006) : 191-194.
- 竹腰秀邦「台北帝国大学と京都大学における初期の加速器開発と原子核物理学研究(前編)」『加速器』第3巻第4号(2006) : 384-390.
- 張明国「植民地時代における技術移転と文化摩擦」『科学史研究』第45巻(2006) : 196-198.
- 塚原東吾編著『科学と帝国主義: 日本植民地の帝国大学の科学史』皓星社(2006).
- 山口直樹「満州国の科学技術動員体制の構造」『科学史研究』第45巻(2006) : 107-108.
- 梁波「中国における日本の『植民地科学』(一)―範囲・時代・史料・問題意識―」『技術文化論叢』第9号(2006) : 28-37.
- 河口充勇「旧台湾総督府天然瓦斯研究所と新竹ガラス工業の形成」『化学史研究』第34巻(2007) : 65-78.

京城帝国大学

- 『京城帝國大學一覽』京城帝國大學(1931).
- 阿部洋「日本統治下朝鮮の高等教育―京城帝国大学と民立大学設立運動をめぐって」『思想』通号565(1971.07) : 56-77.
- 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会『紺碧遙かに―京城帝国大学創立五十周年記念誌』耕文社(1974).
- 李忠雨『京城帝国大学』多楽園(1980).
- 京城帝国大学理工学部開剖四十五周年記念誌編集委員会『遙かなり佛岩山―京城帝国理工学部開剖四十五周年記念誌』京城帝国大学理工学部開剖四十五周年記念事業実行委員会(1988).
- 馬越徹「回想の京城帝国大学―松月秀雄氏の教授生活(インタビュー記録)(戦前日本のアジアへの教育関与)」『国立教育研究所紀要』通号121(1992.03) : 147-164.
- 岡本拓司「京城帝国大学と科学」『科学史・科学哲学』No. 11(1993).

- 鄭圭永『京城帝国大学に見る戦前日本の高等教育と国家』鄭圭永（1995）。
- サトウタツヤ・車載浩「京城帝国大学における心理学研究の展開—特にソウル大学所蔵「初期実験心理学機器」と「実験実習レポート」を手がかりに一」『心理学史・心理学論』第4号（2002.11）：11-19。
- 片桐芳雄「京城帝国大学」『教育学年報』通号10（2004.3）：530-532。
- 李吉魯「植民地朝鮮の高等工業教育に関する一考察—京城帝国大学理工学部の成立過程を中心に」『教育学雑誌』40（2005）：15-32。
- 金根培（古座優子訳）「京成帝国大学・理工学部と科学技術研究」（塚原東吾編著）『科学と帝国主義』（皓星社，2006），pp. 147-198。

台北帝国大学

- 平坂〔恭介〕「臺北帝國大學理農學部生物學科の開設」『動物学雑誌』40(475)（1928）：217。
- 『台北帝国大学一覧』台北帝国大学（1936）。
- 『台北帝国大学理農学部創立六十年記念』台北帝大理農学部同窓会（1988）。
- 五十周年記念誌編集委員会編『鐘韻：臺北帝國大學工學部の五十年』台北帝大工学部の会（1993）。
- 『芝蘭：台北帝国大学予科創立五十周年記念誌』台北帝国大学予科五十周年記念誌編集委員会（1994）。
- 山路勝彦「『梁山泊』の人類学，それとも？：台北帝国大学土俗人類学研究室」『関西学院大学社会学部紀要』第83号（1999.11）：73-89。
- 所澤潤「国立台湾大学医学院の成立と組織の継承：台北帝国大学医学部からの連続性を探る」『東洋文化研究』2（2000）：243-288。
- 劉書彦「台北帝国大学理農学部における台湾の高等農業教育」『日本の教育史学』44（2001）：114-132。
- 橋本秀雄；早野保；奥村勇「台湾大学(旧台北帝国大学)所蔵「金生山化石標本」の調査報告」『化石』70（2001）：37-42。
- 森岡ゆかり「台北帝国大学の女子学生—大森政寿，山根敏子を中心に」『大学史研究』17（2001.11）：91-110。
- 劉書彦「台北帝国大学附属農林専門部における高等農業教育の展開」『アジア文化研究』9（2002.6）：58-71。
- 顔滄波（鄭文哲訳）「遺稿 台北帝國大学及び台陽礦業時代の思い出(1)(2)」『骨材資源』36(142)（2004）：115-122；36(143)（2004）：183-186。
- 陳瑜「日本統治下の台北帝国大学について（上）(下)」『東洋史訪』10（2004.3）：66-79；11（2005.3）：80-106。
- 呉密察，黄英哲，垂水千恵編『記憶する台湾：帝国との相剋』東京大学出版会（2005）。
- 劉書彦『台湾総督府における農業教育とその研究の「適地化」展開過程：台北帝国大学理農学部を中心に』富士ゼロックス小林節太郎記念基金（2005）。
- 劉広定（塚原東吾訳）「日本占領期の台湾の化学研究の始まりを探る」（塚原東吾編著）『科学と帝国主義』（皓星社，2006）：226-242。
- 李恒全「台北帝国大学成立史に関する一考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』第14巻第1号（2006.10）：45-54。
- 祝平一（阿部賢介訳）「周縁における格闘：野副鉄男と台湾における植民地科学」（塚原東吾編著）『科学と帝国主義』（皓星社，2006）：247-266。

陳瑜「台北帝国大学設立構想に関する研究」『教育実践学論集』第8号(2007.03):113-124.

旅順工科大学

『旅順工科大学一覽』旅順工科大学(1927).

掉尾会文集編集委員編『掉尾を飾る:最後の旅順工科大学予科生の記録』掉尾会(1990).

旅順工科大学同窓会編『平和の鐘:旅順工科大学開学九十周年記念誌』旅順工科大学同窓会本部(2000).

石田文彦「旅順工科大学と南満州鉄道株式会社」『技術史教育学会誌』5(1・2)(2004.3):12-18.

満鉄

広瀬信衛「満鉄はいかに解体したか—ソ連・中央・中共軍の治下にあって」『経済往来』3(10)(1951.10):52-55.

野中時雄「私の満鉄での調査の跡」『兵庫農科大学農業経済』3(1958):99-124.

伊藤武雄「黄竜と東風—満鉄調査局の回想-2, 3, 4-」『世界経済評論』通号55(1959);56(1959);57(1959).

安藤実「満鉄会社の創立について-1, 2-」『歴史評論』通号117(1960);通号118(1960).

児玉大三「満鉄調査部一秘録」『中央公論』75(13)(1960.12).

安藤彦太郎他「近代中国研究と満鉄調査部」『歴史学研究』通号270(1962.11).

野間清「満鉄経済調査会設置前後」『歴史評論』通号169(1964.09).

伊藤武雄『満鉄に生きて』勁草書房(1964).

枝吉勇「満鉄調査部その40年の歩み」『図書館雑誌』59(8)(1965.08).

安藤彦太郎編『満鉄—日本帝国主義と中国』御茶の水書房(1965).

山田豪一『満鉄調査部:栄光と挫折の四十年』日本経済新聞社(1977).

丸沢常哉『新中国建設と満鉄中央試験所』二月社(1979).

草柳大蔵『実録満鉄調査部』上, 下. 朝日新聞社(1979).

原田勝正『満鉄』岩波新書(1981).

野間清ほか編『満鉄調査部総合調査報告集』亜紀書房(1982).

原覚天『現代アジア研究成立史論:満鉄調査部・東亜研究所・IPRの研究』勁草書房(1984).

『満鉄に生きて:南満洲鉄道株式会社鉄友会懐顧録』満鉄鉄友会(1986).

石堂清倫;野間清;野々村一雄;小林庄一『十五年戦争と満鉄調査部』原書房(1986).

野々村一雄『回想 満鉄調査部』勁草書房(1986).

森川清(報告)・原覚天ほか(質問)「満鉄調査関係者に聞く-22-満鉄中央試験所と満洲の資源開発〔含 森川清氏略歴・主要著作(満鉄中央試験所関係)〕」『アジア経済』第29巻第2号(1988.02):74-94.

杉田望『満鉄中央試験所:大陸に夢を賭けた男たち』講談社(1990).

廣田鋼藏『満鉄の終焉とその後:ある中央試験所員の報告』青玄社(1990).

杉田望『満鉄中央試験所』徳間書店徳間文庫(1995).

小林英夫『満鉄:「知の集団」の誕生と死』吉川弘文館(1996).

井村哲郎編『満鉄調査部:関係者の証言』アジア経済研究所(1996).

蘇崇民『満鉄史』葦書房(1997).

小林英夫編『近代日本と満鉄』吉川弘文館(2000).

- 梁波「植民地科学と満鉄中央試験所」『東瀛求索』通号 12（2001.12）：32-44。
『環 10 小特集 満鉄の研究』藤原書店（2002）。
鈴木一郎『満鉄調査部：満鉄調査部入社的前後』丸善仙台出版サービスセンター（2002）。
小林英夫；福井紳一『満鉄調査部事件の真相：新発見史料が語る「知の集団」の見果てぬ夢』小学館（2004）。
小林英夫；加藤聖文；南郷みどり編『満鉄経済調査会と南郷龍音：満洲国通貨金融政策史料』社会評論社（2004）。
山口直樹「満鉄中央試験所はどのように受け継がれたのか」『化学史研究』第 31 卷（2004）：146。
小林英夫『満鉄調査部：「元祖シンクタンク」の誕生と崩壊』平凡社（2005）。

大陸科学院

- 『大陸科学院要覧』満洲帝国大陸科学院（1939）。
『地質調査所三十一年史』[満洲帝国] 國務院大陸科学院地質調査所（1940）。
河原宏「ファシズムの「実験」—「大陸科学院」と「技術の公開」」『社会科学討究』（早稲田大学アジア太平洋研究センター）22(2)（1976.12）：241-264。
前田敏男・加藤渉・河東義之「満洲国大陸科学院（わが回想，失われた昭和 10 年代）」『建築雑誌』第 100 集第 1229 号（1985.01）：38-41。
川上行藏「（資料）満洲国大陸科学院」『化学史研究』第 21 卷（1994）：358-361。
河村豊「大陸科学院設立に関する覚え書き—日本の科学技術政策の起源を考える—」『サジアトール』第 30 号（2001）：132-139。

上海自然科学研究所

- 『上海自然科学研究所要覧』上海自然科学研究所（1936）。
東亜研究所，上海自然科学研究所 地質学科（編）『中国鉱産地一覽〈第 1 卷〉』東亜研究所（1940）。
上海自然科学研究所『四川省ノ石炭』参謀本部（1941）。
東亜研究所，上海自然科学研究所地質学科（編）『中国鉱産地一覽〈第 2 卷 上〉』東亜研究所（1941）。
『上海自然科学研究所十周年紀念誌』上海自然科学研究所（1942）。
尾崎金右衛門『中国地質地理文献目録』海自然科学研究所（1944）。
小宮義孝『新中国風土記—上海自然科学研究所のことども』メヂカルフレンド社（1958）。
山根幸夫「上海自然科学研究所について：対華文化事業の一考察」『東京女子大学紀要論集』30(1)（1979）：1-38。
加藤茂生「佐伯修『上海自然科学研究所』」『化学史研究』第 23 卷（1996）：195-196。
佐伯修『上海自然科学研究所—科学者たちの日中戦争』宝島社（1995）。
加藤茂生「上海自然科学研究所の設立構想」『科学・技術・社会』6（1997）：1-34。
加藤茂生「上海自然科学研究所における研究と科学者の行動規範」『歴史学研究』781（増刊，2003.10）：95-103。

戦争と科学

- 野田経済研究所編『戦時下の我が化学工業』野田経済研究所出版部（1939）。

- 廣重徹編『日本資本主義と科学技術』三一書房（1962）。
- 廣重徹『科学と歴史』みすず書房（1965）。
- 防衛庁防衛研修所戦史室（のち戦史部）『戦史叢書』全102巻（1966-80）。
- 廣重徹『科学の社会史—近代日本の科学体制—』中央公論社（1973）；新版、『科学の社会史（上）—戦争と科学—』『科学の社会史（下）—経済成長と科学—』岩波現代文庫（2002-03）。
- 石川準吉『国家総動員史』全13巻，国家総動員史刊行会（1975-86）。
- 大谷良一著，星野芳郎責任編集『戦争と技術』雄渾社（1975）。
- 日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』図書出版社（1977）。
- 鎌谷親善「第一次世界大戦と工業技術の振興策」『化学史研究』第15号（1981）：13-28。
- Kei-ichi Tsuneishi, “C. Koizumi: as a Promoter of the Ministry of Health and Welfare and an Originator of the BCW Research Program,” *Historia Scientiarum*, **26** (1984) : 95-113.
- 「相模海軍工廠」刊行会編『相模海軍工廠』『相模海軍工廠』刊行会（1984）。
- 「相模海軍工廠」刊行会編『相模海軍工廠—追想—』『相模海軍工廠』刊行会（1984）。
- 粟屋憲太郎「東京裁判への道—新資料発掘-2-化学戦・細菌戦を追及する目」『朝日ジャーナル』第26巻第43号（1984.10.19）：40-43。
- 粟屋憲太郎「東京裁判への道—新資料発掘-3-立証可能だった日本の化学戦」『朝日ジャーナル』第26巻第44号（1984.10.26）：40-43。
- 粟屋憲太郎「東京裁判への道—新資料発掘-4-免責されたABC兵器の使用」『朝日ジャーナル』第26巻第45号（1984.11.02）：33-36。
- 粟屋憲太郎「戦前日本における化学兵器の研究・開発について」神戸大学近代発行会『近代』第61号（1985.03）：171-193。
- 粟屋憲太郎・吉見義明「毒ガス作戦の真実—最新の資料から—」『世界』第479号（1985.09）：68-84。
- 荻野茂「幻の陸軍習志野学校—昭和戦史秘話—」『潮』第312号（1985.04）：152-163。
- 竹前栄治「やはり毒ガス・細菌兵器は使われていた—中国側からの告発—」『世界』第479号（1985.09）：85-92。
- 常石敬一「科学・科学者と国家・全体主義・戦争とに関する文献リスト」『思想の科学』第62号（1985.05）：65-72。
- 常石敬一「科学者と戦争—秘密研究は効率的か—」『世界』第479号（1985.09）：93-102。
- Kei-ichi Tsuneishi, “The Research Guided by Ministry Secrecy: The Isolation of the E. H.F. Virus in Japanese Biological Warfare Unit,” *Historia Scientiarum*, **30** (1986) : 79-92.
- 斎藤充功『謀略戦—ドキュメント陸軍登戸研究所—』時事通信社（1987）。
- 武田英子『地図から消された島—大久野島毒ガス工場—』ドメス出版（1987）。
- 三輪宗弘「対英米蘭開戦と人造石油製造計画の挫折—「臥薪嘗胆」論の背景—」『日本歴史』第465号（1987.02）：61-78。
- 三輪宗弘「海軍燃料廠の石炭液化研究—戦前日本の技術開発—」『化学史研究』第41号（1987.12）：164-175。
- 陸軍習志野学校史編纂委員会編『陸軍習志野学校』陸軍習志野学校史編纂委員会（1987）。
- 常石敬一「科学者をめぐる事件ノート-15-小泉親彦—毒ガス中毒事件—」『科学朝日』第48巻第3号（1988.03）：83-87。

- 吉見義明「化学戦覚書—中国における日本軍の毒ガス使用—」『中央大学論集』第9号（1988.03）：49-61.
- 吉見義明「米英で新資料—旧日本軍は毒ガスを使っていた！—」『朝日ジャーナル』第30巻第53号（1988.12.16）：94-97.
- 栗屋憲太郎「戦前日本における化学兵器の研究・開発について」栗屋憲太郎『東京裁判論』大月書店（1989）：243-267.
- 栗屋憲太郎・吉見義明編・解説『毒ガス戦関係資料』十五年戦争極秘資料集第18集，不二出版（1989）.
- 大淀昇一『宮本武之輔と科学技術政策』東海大学出版会（1989）.
- 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた—謀略秘密基地登戸研究所の謎を追う—』教育史料出版会（1989）.
- 三宅宏司『大阪砲兵工廠』第一法規出版（1989）.
- 石田亮一『石油液化物語』中央出版印刷（1990）.
- 栗屋憲太郎「旧日本軍の毒ガス戦（講演記録〔含 質疑応答〕）」神奈川大学人文学会『人文研究』第108号（1990.12）：145-158.
- 赤穂高校平和ゼミナール・法政二校平和研究会編『高校生が追う陸軍登戸研究所』教育史料出版会（1991）.
- 栗屋憲太郎「いま，未決の戦争責任とは—謝罪・補償要求と細菌・毒ガス戦問題を中心に—」『世界』第558号（1991.09）：51-62.
- 石井正紀『石油人たちの太平洋戦争—戦争は石油に始まり石油に終わった—』光人社（1991）.
- 沢井実「日中戦争期の科学技術政策」近代日本研究会編『年報・近代日本研究 13 経済政策と産業』山川出版社（1991）：175-197.
- 沢井実「科学技術新体制構想の展開と技術院の誕生」『大阪大学経済学』第41巻第2・3号（1991.12）：367-395.
- 清水勝嘉『生物化学・毒素兵器の歴史と現状』不二出版（1991）.
- 田中明・松村高夫編『七三一部隊作成資料』十五年戦争極秘資料集第29集，不二出版（1991）.
- 森正孝・高橋正博・糟川良谷・大石恒雄編『日本の中国侵略—中国側資料—』明石書店（1991）.
- 三輪宗弘「人造石油と対米開戦経緯」『化学史研究』第19巻（1992）：144.
- 辰已知司『隠されてきた「ヒロシマ」—毒ガス島からの告発—』日本評論社（1993）.
- 三宅宏司『大阪砲兵工廠の研究』思文閣出版（1993）.
- 尾崎祈美子「毒ガス戦の果てに—旧日本軍が中国に遺棄した化学兵器—」『戦争責任研究』第4号（1994.06）：23-31.
- 吉見義明「日本軍はどのくらい毒ガスを生産したか—アメリカ軍の新資料をめぐる—」『戦争責任研究』第5号（1994.09）：2-10.
- 伊香俊哉「（資料紹介）『決戦兵器考案—関スル作戦上ノ要望—』」『戦争責任研究』第6号（1994.12）：80-83.
- 木下健蔵『消された秘密戦研究所』信濃毎日新聞社（1994）.
- 沢井実「太平洋戦争期科学技術政策の一齣—科学技術審議会の設置とその活動—」『大阪大学経済学』第44巻第2号（1994.10）：1-23.
- 常石敬一・尾崎祈美子「日本軍の毒ガスの墓場を見た」『世界』第597号（1994.07）：254-263.
- 山崎正勝「わが国における第2次世界大戦期科学技術動員—井上匡四郎文書に基づく技術院の展開過程の分析—」『東京工業大学人文論叢』第20号（1994）：171-182.
- 笹本征男；若松征男「731部隊“細菌戦”の戦後処理に日本政府がかかわっていた」『エコノミスト』72

- (36) (1994.08) : 122-125.
- 鎌谷親善「第一次大戦と研究体制—新たな COE としての大学附置研—」吉本秀之ほか『科学と国家と宗教』平凡社 (1995) : 218-251.
- 坂本雅子「財閥企業の戦争責任 アヘンと毒ガス—三井物産と三井鉱山」『戦争責任研究』第 8 号 (1995.06) : 38-46.
- Minoru Sawai, "Policies for the Promotion of Science and Technology in Wartime Japan," *The Journal of Business Studies, Ryukoku University* (龍谷大学経営学論集), Vol. 35, No. 1 (1995) : 44-64.
- 歩平 (山辺悠喜子・宮崎教四郎監訳)『日本の中国侵略と毒ガス兵器』明石書店 (1995).
- Masakatsu Yamazaki, "The Mobilization of Science and Technology during the Second World War in Japan: A Historical Study of the Activities of the Technology Board Based upon the Files of Tadashi Inoue," *Historia Scientiarum*, 5 (1995) : 167-181.
- 一戸富士雄「帝国大学の戦争協力体制と戦時研究—東北帝大の場合を例として—(1)~(3)」『宮城歴史科学研究』第 41 号 (1996) : 1-12; 第 42 号 (1997) : 11-28; 第 43・44 合併号 (1997) : 22-35.
- 王義傑・王仁学・陳延生 (上野真紀訳)「中国侵略日本軍が敦化に遺棄した毒弾およびその処理」『戦争責任研究』第 12 号 (1996.06) : 61, 62-64.
- 紀学仁主編 (村田忠禧訳)『日本軍の化学戦—中国戦場における毒ガス作戦—』大月書店 (1996).
- 中国新聞「毒ガスの島」取材班『毒ガスの島—大久野島 悪夢の傷跡—』中国新聞社 (1996).
- 常石敬一「遺棄化学兵器の処理—中国に残る「70 万発」など—」『軍縮問題資料』第 190 号 (1996.09) : 42-45.
- 毒ガス島歴史研究所編『記録にない島—毒ガス島歴史研究所会報—』第 1 号~第 12 号, 毒ガス島歴史研究所 (1996-2007).
- 内藤裕史編・解説『毒ガス戦教育関係資料』十五年戦争極秘資料集補巻 1, 不二出版 (1996).
- 松野誠也「(資料紹介) 日本軍における化学兵器補給量と使用量の一端—日中戦争期の毒ガス戦に関する新資料—」『戦争責任研究』第 13 号 (1996.09) : 70-73.
- 吉見義明「日本軍遺棄毒ガス問題」『戦争責任研究』第 12 号 (1996.06) : 56-61.
- 吉見義明「中国遺棄毒ガス調査について」『記録にない島』第 2 号 (1996.08) : 18-35.
- 大淀昇一『技術官僚の政治参画—日本の科学技術行政の幕開き—』中公新書 (1997).
- 小原博人・新井利男・山辺悠喜子・岡田久雄『日本軍の毒ガス戦—迫られる遺棄弾処理—』日中出版 (1997).
- 常石敬一「旧日本軍の遺棄化学兵器処理—その意義と困難—」『世界』第 637 号 (1997.07) : 140-149.
- 永野宏・佐納康治「学術研究会議第 1 部の戦時研究班」『科学史研究』第 36 巻 (1997) : 162-167.
- 松野誠也「『毒ガス展』—化学兵器の歴史と廃絶への道—のご紹介」『中国研究月報』Vol. 51, No. 1 (1997.01) : 33-35.
- 吉見義明・松野誠也編・解説『毒ガス戦関係資料 II』十五年戦争極秘資料集補巻 2, 不二出版 (1997).
- 石井正紀『石油技術者たちの太平洋戦争—戦争は石油に始まり石油に終わった—』光人社 NF 文庫 (1998).
- 河村豊; 山崎正勝「物理懇談会と旧日本海軍における核および強力マグネトロン開発」『科学史研究』第 37 巻 (1998).
- 大西比呂志「敗戦時における化学兵器処理問題—米第八軍化学戦局資料を通して—」『戦争責任研究』第 26 号 (1999.12) : 8-14.

- 川崎要之助「贋造紙幣と化学兵器(毒物)について—旧陸軍登戸研究所—」『あゆたか』第37号(1999):12-18.
- 河村豊「動員型研究開発についての考察—戦時下日本陸海軍の電波兵器開発を事例にして—」『サジアトーレ』第28号(1999):25-34.
- 田中浩朗「『科学技術動員』の概念について」『福岡教育大学紀要』第48号第2分冊(1999):71-84.
- 吉見義明「戦争犯罪と免責—アメリカはなぜ日本の毒ガス戦追求を中止したか—」『戦争責任研究』第26号(1999.12):2-7, 14.
- 川崎要之助「旧陸軍科学研究所と登戸研究所の関係」『あゆたか』第38号(2000):21-24.
- 河村豊「総動員試験研究令についての考察—軍部による科学技術動員との関わりで—」『サジアトーレ』第29号(2000):1-14.
- 河村豊「日本の化学兵器開発と科学者動員—科学技術動員形態の視点から—」『サジアトーレ』第29号(2000):72-82.
- 河村豊「旧日本海軍における科学技術動員の特徴—第2次大戦期のレーダー研究開発を事例に—」『科学史研究』第39巻(2000):88-98.
- 日本地学史編纂委員会「日本地学の展開(大正13年~昭和20年)〈その1〉〈その2〉〈その3〉〈その4〉〈その5〉〈その6〉」『地学雑誌』第109巻(2000):719-745;第110巻(2001):362-392;第112巻(2003):131-160;第113巻(2004):383-408, 848-860;第115巻(2006):96-109.
- 畑野勇「戦時体制期日本の『政治と技術』をめぐる問題—軍人総長平賀讓研究の意義—」『東京大学史紀要』第18号(2000):45-59.
- 松野誠也「日本陸軍による化学兵器の人体実験」『駿台史学』第110号(2000):1-39.
- 河村豊「旧日本海軍における戦時技術対策の特徴—第2次大戦期の実用レーダーを事例に—」『科学史研究』第40巻(2001):75-86.
- 田中浩朗「化学兵器研究体制史の構想(上)(中)(下)」『サジアトーレ』第30号(2001):64-75;第31号(2002):13-18;第32号(2003):1-12.
- 常石敬一「戦争と化学」『化学史研究』第28巻(2001.06):139-141.
- 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』芙蓉書房出版(2001).
- 吉見義明「日本軍の毒ガス戦:シベリア戦争から徐州会戦・安慶作戦まで」中央大学『商學論纂』第42巻第6号(2001.03):189-226.
- 和田一夫「陸軍登戸研究所」『中帰連』第17号(2001.夏):44-62.
- 大淀昇一「戦時下『科学技術新体制確立要綱』閣議決定への道程」『東洋大学大学院紀要』39(文学(哲学・仏教))(2002):464-452.
- 河村豊「第2次大戦期日本の科学技術動員に関する分析—旧日本海軍の電波兵器開発過程を事例とした—」『技術文化論叢』第5号(2002):77-90.
- 河村豊「旧海軍技術研究所にみる研究開発体制の特徴」『技術史』第2号(2002):18-30.
- 河村豊「北京研究会—戦時期日本の技術動員体制の特徴と科学技術政策の起源」『サジアトーレ』第31号(2002):41-43.
- 内藤裕史編・解説『毒ガス戦教育関係資料2』十五年戦争極秘資料集補巻17, 不二出版(2002).
- 松野誠也「日本軍の化学戦」『季刊中国』第70号(2002.秋季):63-69.
- 三宅宏司「科学研究者(甲表)及び研究嘱託名簿—第二次世界大戦における陸軍の科学技術に関与した研究者

- 一覧』『技術と文明』第13巻第1号(2002):33-84.
- 山口直樹「満州帝国立中央博物館の活動をめぐって」『地質学史懇話会会報』第18号(2002):14-18.
- 西里扶甬子『生物戦部隊731:アメリカが免罪した日本軍の戦争犯罪』草の根出版会(2002).
- ピーター・ウィリアムズ・デヴィッド・ウォーレス(西里扶甬子訳)『七三一部隊の生物兵器とアメリカ:バイオテロの系譜』かもがわ出版(2003).
- 青木洋・平本厚「科学技術動員と研究隣組—第二次大戦下日本の共同研究—」『社会経済史学』第68巻第5号(2003.01):501-522.
- 石井正紀『陸軍燃料廠—太平洋戦争を支えた石油技術者たちの戦い』光人社NF文庫(2003).
- 海野福寿・山田朗・渡辺賢二編『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発—』青木書店(2003).
- 河村豊「戦時下日本における基礎研究振興論—文部省科学研究費成立過程をめぐって—」『サジアトール』第32号(2003):116-128.
- 瀬戸口明久「殺虫剤と化学兵器—日本の場合, 1918-1945—」『化学史研究』第30巻(2003):1-10.
- 「戦争と科学を考える」実行委員会編『戦争と科学を考える』京都大学人文科学研究所藤原研究室(2003).
- 常石敬一『化学兵器犯罪』講談社現代新書(2003).
- 近藤昭二編『CD-ROM版 731部隊・細菌戦資料集成』柏書房(2003).
- 常石敬一「毒ガス・細菌兵器—毒ガス・細菌兵器は実用化されたのか—」『諸君』第35巻第7号(2003.07):199-203.
- 松野誠也「国内の日本軍毒ガス兵器問題を考える」『世界』第717号(2003.08):280-287.
- 三宅宏司「砲兵工廠と大阪」『戦争と平和』12(2003):17-32.
- 吉見義明「日本軍の毒ガス戦とアメリカ—アメリカ国立公文書館の資料から—」『戦争責任研究』第40号(2003.06):4-11, 21.
- 吉見義明「(資料紹介) 1973年の「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告(案)」等について」『戦争責任研究』第42号(2003.12):42-53.
- 吉見義明「日本軍の毒ガス戦:イペリット・ルイサイトの使用 1939-1941」中央大学『商學論纂』第44巻第6号(2003.06):285-321.
- 青木洋「第二次大戦中の研究隣組活動—研究隣組趣旨及組員名簿による実証分析—」『科学技術史』第7号(2004.12):1-40.
- 青木洋「研究隣組組員名簿」『科学技術史』第7号(2004.12):107-135.
- 上杉聰「遺棄毒ガスによる国内被害と神栖問題(特集 旧日本軍遺棄毒ガス—国内被害問題)」『戦争責任研究』第44号(2004.06):2-4.
- 大淀昇一「『科学技術新体制確立要綱』から技術院創設へ—美濃部洋次文書をたどりつつ—」明治大学経営学研究所『経営論集』51(3)(通号168)(2004.03):71-89.
- 川田文子「六〇年近く経って顕れた毒ガス兵器被害—次城県神栖町木崎の被害者を訪ねる—(特集 旧日本軍遺棄毒ガス—国内被害問題)」『戦争責任研究』第44号(2004.06):5-9, 63.
- 坂巻幸雄「神栖町のヒ素汚染と地下水調査(特集 旧日本軍遺棄毒ガス—国内被害問題)」『戦争責任研究』第44号(2004.06):28-34, 73.
- 沢井実「戦争と技術発展—総力戦を支えた技術—」山室建徳編『日本の時代史 第25巻 大日本帝国の崩壊』吉川弘文館(2004):225-258.
- 沢井実「戦時期日本の研究開発体制—科学技術動員と共同研究の深化—」『大阪大学経済学』第54巻第3号

- (2004.12)：383-409.
- 永江太郎「日本軍の化学兵器の研究開発と支那事変初期の運用に関する軍事的考察」金沢工業大学日本学研究所編『日本学研究』第7号(2004.06)：201-249.
- 日本の戦争責任資料センター研究事務局「(資料紹介) 化学室担当者ノート『戦後における旧日本軍毒ガス弾等の処理の状況(14・6)(特集 旧日本軍遺棄毒ガス—国内被害問題)』『戦争責任研究』第44号(2004.06)：14-27.
- 畑野勇「科学技術における『軍産学複合体』の歴史的考察—海軍造船官平賀譲を中心として—」『思想』第968号(2004.12)：122-142.
- 松野誠也「日本陸軍における化学兵器の研究・開発についての一考察—青酸ガス兵器を事例にして—」『年報・日本現代史』第9号(2004)：201-244.
- 三輪宗弘『太平洋戦争と石油—戦略物資の軍事と経済—』日本経済評論社(2004).
- 吉見義明『毒ガス戦と日本軍』岩波書店(2004).
- 吉見義明「毒ガス問題と資料公開—恒久平和調査局設置の必要性との関連で—(特集 旧日本軍遺棄毒ガス—国内被害問題)』『戦争責任研究』第44号(2004.06)：10-13.
- 河村豊・田中浩朗・矢島道子・常石敬一・加藤茂生・山崎正勝「シンポジウム：日本戦時科学史の現状と課題—2003年度年会報告—」『科学史研究』第43巻(2004.春)：45-56.
- 河村豊「戦争初期における文部省の戦時科学政策—有光次郎日記をめぐって—」『サジアトール』第34号(2005)：121-132.
- 畑野勇『近代日本の軍産学複合体—海軍・重工業界・大学—』創文社(2005).
- 松野誠也『日本軍の毒ガス兵器』凱風社(2005).
- 末永恵子『戦時医学の実態：旧満州医科大学の研究』樹花舎(2005).
- 青木洋「第二次世界大戦中の科学動員と学術研究会議の研究班」『社会経済史学』第72巻第3号(2006.09)：63-85.
- 青木洋「学術研究会議と共同研究の歴史—戦前から戦中へ—」『科学技術史』第9号(2006.10)：37-65.
- 市川浩・山崎正勝・広島大学総合科学部編『“戦争と科学”の諸相—原爆と科学者をめぐる2つのシンポジウムの記録—』丸善(2006).
- 河村豊「戦時後期における文部省の戦時科学政策—企画院(技術院)と文部省の二度目の対立—」『サジアトール』第35号(2006)：33-46.
- 里深文彦「戦争と科学」『科学史研究』第45巻(2006)：105-107.
- Hiroaki Tanaka, “The Science and Technology Mobilization System in Imperial Japan”, *Historia Scientiarum*, **15** (2006)：213-221.
- 矢島道子「日本の戦時地質学—中国東北部を例として—」『科学史研究』第45巻(2006)：68-69.
- 矢島道子「資料：戦時中のウラン探鉱」『科学史研究』第45巻(2006)：96-98.
- 末永恵子「生体実験を拒否した生理学者 横山正松」『日本医史学雑誌』**52**(1)(2006)：122-123.
- 山口直樹「満州国の科学技術動員体制の構造」『科学史研究』第45巻(2006)：107-108.
- 水沢光「太平洋戦争期の旧日本陸軍の航空研究戦略—応用研究の推進から基礎研究の奨励へ—」『科学史研究』第45巻(2006)：126-128.
- 木本忠昭「ヨーロッパ帝国主義とアジア諸国への技術移転」『科学史研究』第45巻(2006)：191-194.
- 張明国「植民地時代における技術移転と文化摩擦」『科学史研究』第45巻(2006)：196-198.

公害/環境問題

- 庄司光・宮本憲一『恐るべき公害』岩波新書（1964）。
- 大河内一男ほか『公害（東京大学公開講座7）』東京大学出版会（1966）。
- 宇井純『公害の政治学：水俣病を追って』三省堂（1968）。
- 石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』講談社（1969）。
- 『イタイイタイ病：三井金属を裁く』富山県イタイイタイ病対策会議（1969）。
- 吉岡金市『イタイイタイ病研究：カドミウム農業鉋害から人間公害（イタイイタイ病）への追究：公害の科学』たたら書房（1970）。
- 宇井純；宮本憲一；宮脇昭『公害-原点からの告発』講談社（1971）。
- 宇井純『公害原論』1, 2, 3, 亜紀書房（1971）。
- 原田正純『水俣病』岩波新書（1972）。
- 宇井純『公害列島 70 年代』亜紀書房（1972）。
- 宇井純編『現代社会と公害』勁草書房（1972）。
- 宇井純『公害と行政』亜紀書房（1974）。
- 宇井純『公害住民運動』亜紀書房（1974）。
- 宇井純『公害自主講座運動』亜紀書房（1974）。
- 有吉佐和子『複合汚染』新潮社（1975）。
- 飯島伸子編著『公害・労災・職業病年表』公害対策技術同友会（1977）；改訂版（1979）。
- 有馬澄雄編『水俣病 20 年の研究と今日の課題』青林舎（1979）。
- 千野光芳「本木昌造『秘事新書』と河野禎造『農家備要』—幕末明治初期の環境化学—」『化学史研究』第 24 号（1983）：V。
- 原田正純『水俣病にまなぶ旅：水俣病の前に水俣病はなかった』日本評論社（1985）。
- 原田正純『水俣病は終わっていない』岩波新書（1985）。
- 宇井純編『技術と産業公害』国際連合大学（1985）。
- 神岡浪子『日本の公害史』世界書院（1987）。
- 小山仁示『西淀川公害—大気汚染の被害と歴史—』東方出版（1988）。
- 河野通博・加藤邦興編著『阪神工業地帯—過去・現在・未来—』法律文化社（1988）。
- 原田正純『水俣が映す世界』日本評論社（1989）。
- 原田正純『胎児からのメッセージ』槇書房（1989）。
- 吉田文和『ハイテク汚染』岩波新書（1989）。
- 岡本達明；松崎次夫編『聞書水俣民衆史』草風館（1989-90）。
- （1 明治の村；2 村に工場が来た；3 村の崩壊；4 合成化学工場と職工；5 植民地は天国だった）
- 富永健；立川涼；NHK 取材班編『私たちの住む星地球が汚されている：NHK 地球汚染フォト・ドキュメント』日本放送出版協会（1989）。
- 岡本達明「合成化学労働の初期形態について」『化学史研究』第 17 卷（1990）：8-29。
- 宇井純『公害自主講座 15 年』亜紀書房（1991）。
- 原田正純『水俣の視図：弱者のための環境社会学』立風書房（1992）。
- 原田正純『慢性水俣病・何が病像論なのか』実教出版（1994）。
- 米本昌平『地球環境問題とは何か』岩波新書（1994）。

- 原田正純『水俣病と世界の水銀汚染』実教出版（1995）。
- 立川涼『環境化学と私：道後平野から世界へ』創風社出版（1995）。
- 大場健吉・武井玲子「環境問題からみた合成洗剤の技術開発史」『化学史研究』第22巻（1995）：127-141。
- 上仲博「1-アミノアントラキノンの無公害型製法の開発とそれをめぐる研究者たち」『化学史研究』第22巻（1995）：81-82。
- 上仲博「1-アミノアントラキノン製造法の変遷—日本における無公害型製造法の開発—」『化学史研究』第22巻（1995）：288-299。
- 水俣病研究会編『水俣病事件資料集：1926-1968』上巻 下巻，葦書房（1996）。
- 亀井修「「性能」と「環境」の視点から見る自動車用ガソリンの変遷」『化学史研究』第23巻（1996）：86。
- 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』ちくま新書（1996）。
- 環境庁リスク対策検討会監修『環境ホルモン：外因性内分泌攪乱化学物質問題に関する研究班中間報告書』環境新聞社（1997）。
- 畑明郎『金属産業の技術と公害』アグネ技術センター（1997）。
- 芝崎勲「ヨウ素系環境殺菌剤の話題」『化学史研究』第24巻（1997）：74-75。
- 井上尚之『科学技術の発達と環境問題：科学技術の発展が人類にもたらした光と影』東京書籍（1998）。
- 立川涼；ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議編『提言ダイオキシン緊急対策』かもがわ出版（1999）。
- 高木仁三郎『市民科学者として生きる』岩波新書（1999）。
- 栗原彬『証言水俣病』岩波新書（2000）。
- 大気環境学会史料整理研究委員会責任編集『日本の大気汚染の歴史』全3巻，ラテイス（出版）丸善（発売）（2000）。
- 立川涼『みんなですすめるダイオキシン対策：ゴミ減量や食の対応など』芽ばえ社（2000）。
- 立川涼編『わたしたちの食べものは安全か？：汚染物質がからだをむしばむ』ポプラ社（2000）。
- 立川涼編『ダイオキシンの恐怖：汚染物質がからだをむしばむ』ポプラ社（2000）。
- 小栗一太・赤峰昭文・古江増隆編『油症研究 30年の歩み』九州大学出版会（2000）。
- 吉田文和『IT 汚染』岩波新書（2001）。
- 中島貴子「化学と環境問題—レギュラトリーサイエンスの視点から—」『化学史研究』第28巻（2001）：142-3。
- 西村肇；岡本達明『水俣病の科学』日本評論社（2001）；増補版，日本評論社（2006）。
- 原田正純『環境と人体：公害論』世界書院（2002）。
- 原田正純『いのちの旅：「水俣学」への軌跡』東京新聞出版局（2002）。
- 原田正純『金と水銀：私の水俣学ノート』講談社（2002）。
- 下川耿史編『環境史年表 1868-1926 明治-大正編』河出書房新社（2003）。
- 下川耿史編『環境史年表 昭和・平成編』河出書房新社（2004）。
- 原田正純；花田昌宣編『水俣学研究序説』藤原書店（2004）。
- 原田正純『水俣学講義』[第1集]，第2集，第3集，日本評論社（2004-2007）。
- 宮本真樹「日本の塩化ビニル樹脂工業の歴史と環境技術」『化学史研究』第32巻（2005）：128-129。
- 上仲博「無・低公害型有機合成化学工業の展開と問題点」『化学史研究』第32巻（2005）：130-131。
- 寺西俊一監修；文献情報研究会編著『公害文献大事典 1947(昭和22)年～2005(平成17)年』日本図書センター（2006）。

川本輝夫『水俣病誌』世織書房 (2006)。

立川涼「BHC, PCB, ダイオキシンそして環境ホルモンー環境化学研究私史ー」『化学史研究』第 33 卷 (2006) : 106-7。

原田正純「胎児性水俣病の教訓」『化学史研究』第 33 卷 (2006) : 108-10。

原宏「大気汚染と化学と化学者と」『化学史研究』第 33 卷 (2006) : 111-3。

立川涼「BHC, PCB, ダイオキシンそして環境ホルモン」『化学史研究』第 34 卷 (2007) : 2-8。

原宏「大気汚染と化学と化学者と」『化学史研究』第 34 卷 (2007) : 9-18。

社 史

河村九淵『大日本人造肥料株式會社創業三十年記念誌』大日本人造肥料 (1917)。

日本窒素肥料, 朝鮮窒素肥料 [編]『事業概要』日本窒素肥料 (1930)。

小林商店 [現 ライオン]『齒磨の歴史』(1935)。

大日本人造肥料 [現 日産化学工業]『大日本人造肥料株式會社五十年史』(1936)。

日本染料製造 [現 住友化学工業]『日染廿年史』(1936)。

日本窒素肥料株式会社編『事業大観：創立三十周年記念』日本窒素肥料株式会社 (1937)。

ラサ工業『社業大観』(1938)。

小林商店 [現 ライオン]『口腔衛生二十五年』(1938)。

日本樟腦 [現 日本精化]『精製樟腦史』(1938)。

日本窒素肥料 [現 チッソ]『日本窒素肥料事業概要』(1938)。

『第一工業製薬株式会社三十年史』(1938)。

『花王石鹼五十年史』(1940)。

花王石鹼『初代長瀬富郎伝』(1940)。

『日本ペイント小史』(1941)。

『日本ペイント株式会社四十年史』(1941)。

日本窒素肥料 [現 チッソ]『日本窒素』(1942)。

『東洋染色十年史』(1947)。

『黄金の花：日本製油株式会社沿革史』新潮社 (1948)。

『創立三十周年記念 當社の沿革と化學纖維工業の概観』帝國人造絹絲株式会社調査課 (1949)。

『日本ペイント株式会社五十年史』(1949)。

『日本碍子株式會社三十年史』(1949)。

『オリエンタル寫眞工業株式会社三十年史』(1950)。

『味の素沿革史』味の素 (1951)。

『電気化学工業株式会社三十五年史』(1952)。

大日本セルロイド [現 ダイセル化学工業]『大日本セルロイド株式会社史』(1952)。

『旭化成三十年の歩み』(1953)。

『東洋紡績七十年史』(1953)。

『富士写真フイルム株式会社二十年史』1-20 (1954)。

東北肥料 [現 コープケミカル]『東肥十五年史』(1954)。

旭化成工業・延岡工場『薬品部 30 年史』(1954)。

- 『東洋レーヨン社史』（1954）.
『旭化成の歩み』（1955）.
宇部時報社編『宇部興産六十年の歩み』（1956）.
石原産業『創業三十五を回顧して』（1956）.
『資生堂社史：資生堂と銀座のあゆみ八十五年』（1957）.
旭電化工業『社史』（1958）.
『日本合成化学工業株式会社三十年史』（1958）.
『日本カーバイド工業株式会社 20 年史』（1958）.
『第一工業製薬株式会社五十年史』（1958）.
東洋酸素 [現 大陽東洋酸素]『40 年の歩み』（1959）.
『大日本インキ製造株式会社 50 周年略史』（1959）.
鐘淵化学工業『鐘化拾年』（1959）.
『味の素五十年史稿』味の素（1960）.
関東タール製品『タール工業史：東京瓦斯を中心とした』（1960）.
『花王石鹼七十年史』（1960）.
『ミヨシ油脂株式会社史』（1960）.
『富士写真フイルム』（1960）.
『社史 日本農薬株式会社』（1960）.
『創立 10 周年を迎えた日本ゼオン株式会社』（1960）.
東洋曹達工業『25 年の歩み』（1960）.
電気化学工業『45 年の歩み』（1960）.
『東亜ペイント 45 年史』（1961）.
山陽色素『創業 30 周年に当って』（1961）.
『庵原農薬史 創業 30 年の歩み』（1961）.
『片倉チッカリン株式会社四拾年誌』（1961）.
『日本ペイント株式会社 80 年史』（1961）.
鉄興社 [現 東ソー]『鉄興社 35 年史』（1961）.
『東洋レーヨン 35 年の歩み』（1962）.
『ラサ工業 50 年の歩み』（1962）.
『積水 15 年の歩み 創立 15 周年特集号』（1962）.
『三洋化成 15 年のあゆみ』（1964）.
『旭化成火薬 30 年史』（1964）.
『旭化成工業・レーヨン工場』（1964）.
『共栄社油脂化学工業六十年史』（1964）.
電気化学工業『デンカの歩み 50 年』（1965）.
大阪曹達 [現 ダイソー]『50 年を迎えて』（1965）.
『大陽酸素 20 年のあゆみ』（1966）.
ダイヤモンド社編『大阪酸素工業と鈴木彦次郎』（1966）.
旭化成工業・技術研究所『技研十年史』（1966）.

- 『健康と美のファミリー製品メーカー：ライオン歯磨』(1966).
幸書房編『ミヨシ油脂株式会社社史』(1966).
加藤恭亮『日本瓦斯化学工業株式会社創立十五年史』(1966).
『日本酸素五十年史』(1966).
『東亜合成化学工業』(1966).
曾田政治『香料とともに六十年』曾田香料 (1967).
スガイ化学工業『40 年のあゆみ』(1967).
小西六写真工業〔コニカ〕『写真とともに百年：小西六写真工業株式会社史要』(1967).
広栄化学工業『50 年のあゆみ』(1967).
東亜農薬〔現 クミアイ化学工業〕『二十五年史』(1967).
『日本油脂三十年史』(1967).
日本化薬『火薬から化薬まで：原安三郎と日本化薬の 50 年』(1967).
『ソーダ：徳山曹達』(1967).
『印刷インキの歩み：東洋インキ六十年史』(1967).
『興国化学 20 年史』(1967).
福島克之『道をひらく一帝人 50 年の歩み』(1968).
福島克之『帝人の歩み』全 11 巻 (1968-1977).
松田輝雄『資生堂経営学：あるチーム・ワークの物語』日本経営出版会 (1968).
『日本合成ゴム株式会社十年史』(1968).
『サンケイ化学株式会社』(1968).
『社史：旭電化工業株式会社：50 年史』(1968).
ダイヤモンド社『合成繊維「旭化成工業」』(1968).
日本カーバイド工業『30 年史』(1968).
新田ゼラチン『創業五十年の回顧』(1968).
『ニチバン 50 年史』(1968).
『大東化学 30 年の歩み』(1968).
『イハラ農薬史：庵原農薬よりクミアイ化学工業への 20 年の歩み』(1969).
『日本特殊塗料株式会社四十年史』(1969).
日産化学工業『八十年史』(1969).
田島ルーフィング『わが国建材の 100 年と三星の 50 年』(1969).
ダイヤモンド社編『大日本塗料の四十年』(1969).
『大日本インキ化学工業六十年史』(1969).
日鉄化学工業〔現 新日鐵化学〕『日鉄化学 30 年史』(1969).
『変革と創造：鐘淵化学 20 年史』(1970).
石原産業『八十年の思い出』(1970).
ダイヤモンド社編『フィルムプロセッシング：東洋現像所』(1970).
ダイヤモンド社編『白石工業：ミクロの世界へ挑む』(1970).
ダイヤモンド社編『化学工業の発展を支える黒瀬工作所』(1970).
味の素株式会社社史編纂室編『味の素株式会社社史』1, 2, 味の素 (1971).

- 花王石鹼『日本清浄文化史』（1971）.
『花王石鹼八十年史』（1971）.
山陽色素『その後の十五年小史：四十周年を迎えて』（1971）.
『日本ゼオン二十年史』（1972）.
『セントラル硝子三十五年史』（1972）.
『資生堂百年史』（1972）.
『高砂香料 50 年史』（1973）.
小西六写真工業『写真とともに百年』（1973）.
『関東タール製品株式会社 25 年の歩み』（1973）.
『ライオン歯磨八十年史』（1973）.
『日本化学陶業株式会社六〇年史』（1973）.
ダイヤモンド社編『炭酸の魅惑：昭和炭酸 30 年の歩み』（1974）.
協和醸酵工業『日本のアルコールの歴史：その事業と技術』（1974）.
『東洋化学 25 年史』（1974）.
日本パーカライジング『パーカライジングと兵器』（1975）.
『日本化薬のあゆみ：この 10 年を中心にして』（1976）.
製鉄化学工業〔現 住友精化〕『製鉄化学三十年の歩み』（1976）.
『東レ 50 年史』（1977）.
『日本バルカー工業 50 年史』（1977）.
日産化学工業・富山工場『富山工場五十年史』（1977）.
『デンカ 60 年史：電気化学工業株式会社』（1977）.
日本窒素肥料『日本窒素史への証言 第一集・第二集』（1977）.
『30 年の歩み：積水化学工業株式会社』（1977）.
『昭和電工五十年史』（1977）.
荒川林産化学工業『荒川林産百年史：松脂と共に』（1977）.
『富士写真フイルム四十年略史 創業二十五年の歩み追録』（1977）.
『興国化学三十年史』（1977）.
『社史四十年東洋曹達』（1978）.
『日本窒素史への証言 第三集～第五集』（1978）.
『三井石油化学工業 20 年史：1955-1975』（1978）.
筒中プラスチック工業『筒中 50 年の歩み』（1979）.
『日本窒素史への証言 第六集～第八集』（1979）.
『日本合成ゴム株式会社二十年史』（1979）.
クミアイ化学工業『クミカ 30 年史：1949-1979』（1979）.
『明日を彩る：関西ペイント 60 年のあゆみ』（1979）.
『ライオン油脂六十年史』（1979）.
『明日へ翔く：日本特殊塗料 50 年のあゆみ』（1979）.
『三共八十年史』（1979）.
『日本窒素史への証言 第九集～第十一集』（1980）.

- 企業研究総合機構編『資生堂』(1980).
『年表・花王 90 年のあゆみ』(1980).
『四〇〇〇人の軌跡：花王石鹼 90 周年記念出版』(1980).
アロン化成『アロンパイプ 30 年史』(1980).
企業研究総合機構編『富士写真フイルム』(1980).
日本肥糧『三十年史』(1980).
『日本合成化学工業株式会社五十年史』(1980).
東洋プライウッド『Toyoplywood 創立 30 周年記念』(1980).
『帝国化工六十年史』(1980).
『二村化学三十年史』(1980).
『住友化学工業株式会社史』(1981).
『昭和電工石油化学発展史：昭和油化の設立から合併まで』(1981).
朝日新聞社字部支局編『字部石炭史話：すみをいかしたひとたち』朝日文化センター (1981).
ユニ・チャーム『ノーラ&ドーラの世界』(1981).
『三菱化成社史』(1981).
北興化学工業『ホクコー 30 年史』(1981).
日本農薬『五十年史』(1981).
帝国酸素[現 日本エア・リキード]『帝国酸素の歩み：原点から未来をみつめて』(1981).
『日本窒素史への証言 第十二集～第十四集』(1981).
『ダイセル化学工業 60 年史』(1981).
共同酸素『アルゴンとともに：創立 20 周年記念』(1982).
『イビデン 70 年史』(1982).
荒川長太郎合名会社『荒川百三十年』(1982).
『三菱モンサント化成 30 年史』(1982).
『日立化成工業社史』(1982).
『新日曹化工株式会社 30 年史』(1982).
『日本ペイント百年史』(1982).
日本ペイント『回顧録』(1982).
中国塗料『創立 65 年のあゆみ』(1982).
『日本窒素史への証言 第十五集～第十七集』(1982).
『住友スリーエム 20 年史：1960-1980』(1982).
明和グラビヤ化学『30 年のあゆみ：限りなき前進』(1983).
東レ・モノフィラメント株式会社社史編纂委員会編『東レ・モノフィラメント 20 年史』東レ・モノフィラメント株式会社 (1983).
『日本窒素史への証言 第十八集～第二十集』(1983).
『クラブコスメックス 80 年史：創業中山太陽堂』(1983).
上村工業『135 年のあゆみ：金属表面技術の発展とともに』(1983).
『富士フイルム 50 年のあゆみ』(1984).
『日本窒素史への証言 第二十一集～第二十三集』(1984).

- 田岡化学工業『会社史：創業 65 年ならびに創立 50 年のあゆみ』（1984）.
『昭和電工アルミニウム五十年史』（1984）.
『薔薇は薔薇：協和発酵 35 年史』（1984）.
『日鉄化学社史』（1984）.
『米山化学工業六十五年史』（1984）.
『日本窒素史への証言 第二十四集～第二十六集』（1985）.
『多木化学百年史』（1985）.
『共和レザー 50 年のあゆみ：創立 50 周年記念誌 年表』（1985）.
『小野田化学工業三十年史』（1985）.
貴志真典『美人は夜つくられる：桃谷順天館物語』潮流出版（1985）.
『宮川化成 50 年のあゆみ：創業 50 周年』（1985）.
『長谷川香料八十年史』（1985）.
日本新聞インキ『新聞とともに四十年』（1985）.
日本化薬『明日への挑戦』（1985）.
『住友ベークライト社史』（1986）.
『日本窒素史への証言 第二十七集～第二十九集』（1986）.
大阪曹達〔現 ダイソー〕『大曹 70 年のあゆみ』（1986）.
『住友ノーガタック二十年史』（1986）.
信越化学工業『未来への軌跡：昭和とともに 60 年』（1986）.
イハラケミカル工業『おかげさまで二〇年』（1986）.
ライオン・家庭科学研究所『CLEAN LIFE：ライオン家庭科学研究所設立 50 年記念資料集』（1986）.
『日本酸素七十五年史』（1986）.
『富山化学五十年史』（1986）.
『日本窒素史への証言 第三十集』（1987）.
『日本窒素史への証言 続巻第一集』（1987）.
『とびらをひらく 積水化学この 10 年』（1987）.
昭和電工・秩父工場『昭和電工秩父工場六十年史』（1987）.
『大阪酸素工業半世紀の歩み』（1987）.
『アトム化学塗料五〇年のあゆみ』（1987）.
『アイカ工業五十年史』（1987）.
日本化成『50 年史』（1987）.
『富士化学四十年史』（1987）.
『日本窒素史への証言 続巻第二集・第三集』（1988）.
鐘紡株式会社社史編纂室編集『鐘紡百年史』鐘紡（1988）.
大東化学工業所『50 年の歩み』（1988）.
昭和高分子『昭和高分子五十年史』（1988）.
恒和化学工業『翔：ダイヤ 40 年のあゆみ』（1988）.
『日本油脂 50 年史』（1988）.
『徳山曹達 70 年史 道標はるかに』（1988）.

- 『東洋インキ 80 年史』(1988).
- 『日本窒素史への証言 続巻第四集～第六集』(1989).
- 『夢をふくらませて：積水化成品 30 年の歩み』(1989).
- 『旭電化七十年史』(1989).
- 旭化成工業『旭化成 FIT セミナー 20 年のあゆみ：20 周年記念出版』(1989).
- 『日曹油化工業 25 年史』(1989).
- 『筒中プラスチック工業 60 年史』(1989).
- 『日本窒素史への証言 続巻第七集～第十一集』(1990).
- 『第一工業製薬八十年史』(1990).
- 『昭和電工のあゆみ』(1990).
- 『日本合成ゴム株式会社三十年史』(1990).
- 『堺化学工業七十年史』(1990).
- 高圧ガス工業『おかげさまで 30 年』(1990).
- 鐘淵化学工業『化学を超えて：カネカ 40 年の技術水脈』(1990).
- 大垣化成工業『30 年のあゆみ』(1990).
- 『世界へ・未来へ 日本特殊塗料創立 60 周年記念誌』(1990).
- 『日本化学工業社史』(1990).
- 東洋リノリウム『人・生活・空間 東リ 70 年のあゆみ』(1990).
- 『帝国化学産業 50 年史』(1990).
- 『明日へおくる風：関東高圧化学 50 年史』(1990).
- 『味をたがやす：味の素八十年史』味の素 (1990).
- 『新日本理化 70 年史』(1991).
- 『昭和化学工業 30 年史』(1991).
- 伊勢半『紅の花：初代・澤田半右衛門生誕 200 年伊勢半創業 165 年史』(1991).
- 『日本触媒化学工業 50 年のあゆみ』(1991).
- 『日華化学創業 50 周年記念誌：次代に向かって』(1991).
- 『日本窒素史への証言 続巻第十二集～第十四集』(1991).
- 60 周年企画委員会編『東レ・ファインケミカル株式会社 60 年史』東レ・ファインケミカル (1992).
- 『信越化学工業社史』(1992).
- 『資生堂宣伝史 総合篇・TV・CM 篇・セルジュ・ルトンス篇』(1992).
- 『いつも暮らしの中に LION ライオン 100 年史』(1992).
- 『日本曹達 70 年史』(1992).
- 『日本ペイント 110 年史』(1992).
- ナリス化粧品『企業と化粧を考える』(1992).
- ナリス化粧品『化粧品をつくっている者の考えること』(1992).
- 『日本窒素史への証言 続巻第十五集』(1992).
- タキロン『タキロンの歩み 1：セルロイドの時代』(1992).
- 『青空とともに：共同酸素株式会社 30 年史』(1993).
- 『花王史 100 年 (1890 年-1990 年)』(1993).

- 今中『才覚と算用：創業 112 年創立 45 周年記念誌』（1993）.
安達新産業グループ『技術に挑んで 75 年』（1993）.
『富士通化成四十年史』（1993）.
日本化工塗料『波濤を越えて：社史』（1993）.
新田ゼラチン『創業 75 周年記念誌：『新樹』特別号近 25 年史：75th Anniversary』（1993）.
クラブコスメチックス『CLUB COSMETICS：1983-1992』（1993）.
『シアテック社史：住友化学の土木・建築技術の継承と発揮』（1994）.
『三井東圧化学社史』（1994）.
『昭和炭酸 50 年史』（1994）.
『コニシ 120 年のあゆみ』（1994）.
東レ・デュポン株式会社編纂『東レ・デュポン 30 年史』東レ・デュポン（1995）.
『技術で包む藤森工業 80 年のあゆみ』（1995）.
『呉羽化学五十年史』（1995）.
『2001 年へ向けて：ビジョンある戦い』（1995）.
日本経営史研究所編『東レ 70 年史：1926～1996』[本編]，資料編：資料・年表，東レ（1997）.
『荒川化学百二十年史』（1997）.
『川研ファインケミカル 50 年史：未来を見つめ夢を化学する』（1997）.
『朝日化学工業社史：創立 50 周年記念』（1998）.
『東レ・ダウコーニング・シリコン 30 年史：1966-1996』東レ・ダウコーニング・シリコン（1998）.
『日本製鉄株式会社史』ゆまに書房（1998）.
『山田化学五十年史』（1998）.
『大東化学 50 年史』（2000）.
『高純度を目指して：多摩化学工業 50 年史』（2000）.
『コーキン化学株式会社 50 年史』（2002）.
『共栄社化学 100 年史』（2004）.
電気化学工業株式会社編『90 年抄史：先人たちの足跡：電気化学工業株式会社創立 90 周年記念』電気化学工業（2006）.

科学と文学/芸術

夏目漱石

- 鎌谷親善「廣田鋼蔵著・刊『旨味の発見とその背景—漱石の知友・池田菊苗伝—』『化学史研究』第 28 号（1984）：106.
廣田鋼蔵「池田菊苗博士のお墓と彼の知友・漱石のお墓」『化学史研究』第 27 号（1984）：75-76.
立花太郎「夏目漱石の『文学論』のなかの科学観について」『化学史研究』第 33 号（1985）：167-177.
立花太郎「原子説論争に関する Rucker 教授の講演（1901）—「夏目漱石の『文学論』のなかの科学観」補記—」『化学史研究』第 45 号（1988）：155-162.

宮沢賢治

- 島原健三「私説・化学者と芸術」『化学と教育』34(3)（1986）：189.

- 力丸光雄「「多相系」宮澤賢治：科学と宗教と芸術」『化学教育』**34**(3) (1986)：197-201.
- 板谷英紀『宮澤賢治と化学』裳華房 (1988).
- 田口昭典「賢治と自然科学(農芸化学・地質学・星など)」『国文学 解釈と教材の研究』**34**(14) (1989.12)：56-57.
- 力丸光雄「実験室と宇宙を結ぶエロソーある放談—物理・化学」『科学朝日』**50**(4) (1990.04)：23-28.
- 力丸光雄「高任・将翁/賢治・梅太郎：岩手の化学風土記」『化学と教育』**39**(2) (1991)：185-189.
- 柴田まどか「『化学本論』二相系の構図—」『賢治研究』(宮澤賢治研究会) 通号 78 (1999.4)：164-170.
- 大塚常樹「宮澤賢治からのメッセージその文学と化学とのかかわり」『現代化学』通号 306 (1996.09)：60-62.
- 藤村安芸子「仏国土「イーハトヴ」における化学反応」『季刊日本思想史』(日本思想史懇話会編/ベリカン社) 通号 50 (1997.05)：80-92.
- 力丸光雄「宮澤賢治と科学・化学」『化学史研究』第 24 巻 (1997)：185-186.
- 山口達明「宮澤賢治の卒業論文-明治大正期の腐植質研究」『草炭研究会報』**25** (1997)：5-7.
- 吉田文憲「賢治への新たな接近 (11)「明滅」と化学式」『現代詩手帖』(思潮社) **43**(4) (2000.04)：151-157.
- 柴田まどか「『化学本論』二相系のファンタジー」『宮澤賢治』(洋々社) **16**(2001)：164-170.
- 高木仁三郎『人間の顔をした科学』七つ森書館 (2001).
- 渡辺宏「宮澤賢治と肥料」『肥料』通号 105 (2006.10)：8-10.